

銃は地球人類が生み出した最高の文明の利器である

ジャーマンポテト in 納豆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

唐突な現代兵器×異世界ファンタジー。

がち設定上等。

タグは随時更新します。

目次

序章 防衛戦

1 話	1
出撃、偵察、そして陣地構築	11
戦闘、防衛、そして危機	50
再びの偵察、戦闘準備	81
夜襲、そして戦闘終結	121
後日譚	166
領主からの報酬	173
王都へ	186
設定集 1	219
模擬戦	226
下賜式	254

オール大森林調査編

国王からの依頼	285
オール大森林調査 準備期間	304
地図作成	325
空戦、そしてエルフ族との邂逅	347
エルフ族の村	384
村長との話 戦闘準備	427
防衛戦 エルフ族の村	467
防衛戦 土竜戦	496
防衛戦 その後	524
裂け目	563
山の正体	590

序章 防衛戦

1話

覚えている事なんて少ない。

精々が名前ぐらい。それが前世の記憶。

そもそも前世と言う呼び方もあやふやだ。気が付けばその場にポツンと立っていた。

輪廻転生というよりは転移だろうか。そんなことを考えもしたがどうにかなるわけでもなく、仕方無しに道と思わしき物をたどって街に向かった。そこからは大変だった。言葉は分かるし字も書ける。だがこの世界に元々存在しない存在が居るのだから。

戸籍も無ければ自分を証明する物も無い。

挙句の果てには神話やファンタジー小説、それに連なる映画でしか見た事も聞いたことも無い存在すらある始末。魔法に始まり多種多様な種族。

この世界で上げるとすれば人間は勿論の事、エルフやらドワーフやら。

といってもエルフにドワーフは森や山と言った所の奥地に住んでいるからそんなに

であつたりすることは無い。

以前偶々工芸品か何かを売りに来ていたエルフに出会つたことがあるくらいだ。

本当に神話の世界か何かに迷い込んだのではないかと錯覚する世界。前世であつた車や飛行機なんてものは勿論有る筈も無く、代わりに馬車が走っているし、戦場になれば剣を振り回して銃弾の代わりに魔法が飛び交う始末。

更には魔物やら魔獣やら訳の分からない生物までその辺を跋扈している。

そんな風に驚いていたのが約二か月前。

早い物で気が付けばこれだけの時間が経つていた。

その中で色々知つたことがある。

一つ目は勿論、この世界は元居た世界とは全くの別物であるという事。

二つ目。魔法とか言う超常現象を人為的に引き起こす術があるという事。

三つ目。文明のレベルは中世と同レベル、もしくはそれよりも低い程度。

四つ目。魔法の存在のお陰で科学技術と言つた物は全くと言っていいほど発展して
いない。

五つ目。ここはでっかい大陸の一部だという事。

六つ目。今俺が居る国はロンバルティア王国という中国家のリーヴオリと言う街だ
という事。

他にもいろいろあるが大体はこんなもんだらう。

説明するとするならば一つ目に関しては文字通り。

二つ目は本当に魔法らしいものがある。らしいと言うのはどうにも地球の魔術とか言われていた物と何が違うのか全く分からない。そもそも魔術も想像の物だからしようがないが。これには相性があるらしく、属性と言った物もあるらしい。

三つ目。

文明レベルが中世かそれよりも前と断定した理由は街を偶に歩く騎士みtainのがまんま騎士だったしこのぐらいの大きさの街ならばそれなりに高い建物があってもいいのだがそれが見られないという事。聞いたりした結果、電力などの概念が存在しないことなど数多くの事があげられるがそれらを考慮した結果だ。

四つ目。

三つ目の時と同じだがどうにも魔法に頼りきりで科学という概念が全く無い。

少なくとも小学校で習うレベルの事も存在しないし法則なんかもつての外。医療技術に関して言えば治療魔法があるからどうにかなっているが千切れた手足を繋げたりなんてことは勿論できない。精々が小さめの外傷を消すことぐらい。それ以上は傷口は塞がるがそれ以外はどうにもならない。細菌やウイルスという概念も無ければ消毒

と言う物も存在しない。

五つ目。

でっかい大陸と言うのはトランプブルク大陸という。

国に関してはロンバルディア王国と言って中規模な国家だ。君主制国家で国王は善人らしく、無駄な税をかけることも無い。貴族も存在し、領地を与えられている場合とそうでない場合がある。簡単に言うと、領地を与えられている貴族に関してはその与えられた領地の防衛を主任務として税を納めさせる。というのが主な仕事。税率に関してはその土地その土地によって違うらしく、農作物の場合もあれば、工業製品と言ったものの場合もある。町や村の特産物が主なんだそうさ。

税金の方は地球で言う所の累進課税制度と似たような仕組みで納めさせている。俺もすっかり納めている。この土地に住んでいる限りは。

詳しいことはよく分からないが国王に多くの権限が与えられているらしい。

六つ目。

この今現在俺が拠点としているこの町の名前はリーヴオリ。

この町は大きい方らしい。それもそのはず、この辺り一帯の領地を治めている領主のお膝元だからだ。治安に関しては良い方。と言ってもこの世界基準だが。地球基準で言えば良くないと言われること間違いないだろうな。

領主の名前はレイフオード・リーヴオリ。ありがちな長つたらしい名前ではなく短いことには驚いた。

代々この領地と町を治めて居る。と言ったことぐらいだろうか。直接見た事も話したことも無いからよくは知らないが。

さて、説明としては大体こんなものだろう。

そして俺は今何をしているのかと言うと、森や平原等で魔獣を討伐したりして生計を立てている。

と言うのも説明しなかったが、魔物や魔獣の素材、そう言った物の買取をしているギルドなる組織がある。

そこに売ってそれで得た金銭で生活しているという物だ。

そこでなぜ非力な俺がそんな事をして死んでいないのか、なんて疑問も湧いてくるだろう。というかそれしか出てこない。

この世界には固有魔法なるよく分からない物があるらしい。というのもこれまた存

在していたのがどうにも何百年も前の時代で文献にしか載っていない産物だそうだ。

一応それだと考えているがどうにもそれとも違う物のような気がするのだがまあ詳しい事はよく分からない。

その固有魔法？の内容は正直な所、不思議でしょうがないのだが何故か地球に存在していた物を条件や制約があるがそれを扱えるなんて言うものだ。

本当に何なんだこれ。最初は何が何だか分からない。

今じゃもう諦めて使っている訳だが。

この能力については制限があるらしく、個人で扱う事の出来る物に限られているらしい。

能力の名前は「等価交換」と書いてあっただけ。

ただ複数人で行動している場合はその人数に応じて制限が解除されるらしい。と言うのも試したことが無く、メニューみたいなものでそれについて読んだだけだ。

扱えるものに関しては地球の兵器一択らしい。

それにプラスして食料（と言ってもレトルトみたいなものだが）が十数種類と何故か複数の調味料。正直これは有難かった。この世界の食事は余程の金持ちでもなければ薄味だし、そのレトルト食品も飽きて来るのが必然だった。だから胡椒や塩などをかけて食べられるだけで随分と活力が湧いてくるのは本当に有難かった。

そしてこの能力は先程も言った通り名前は「等価交換」という。

どうにもこの呼び出しと言えぱいいのか分からないが、に關しても制限があり等価交換、つまりは金銭等の交換できるものが無ければ呼び出せない。

そしてその呼び出す為には呼び出す物相応の価値があるものと交換しなければいけない。金銭や価値のあるもの、という感じで、それとは別に魔物や魔獸の討伐によつて得られるポイントの様なものでも交換できる。

呼び出しに必要な金銭の値に關しては、その呼び出すものが沢山作られた、あるいは量産された物であればあるほど価格は低くなつていく。要は沢山作られたものの方が安いという事だ。

例えばAK-47。こいつはびつくりするほど安かつた。

銀貨数枚で交換する事が出来る。

しかし車両なんかは物凄く高い。

交換するのに一番手つ取り早いのは金銭で、その他にも希少な魔物、魔獸の素材でも交換できる。

と言つた能力だ。交換するものに関しては何で選択が可能。

一度呼び出したものはその後、対価を払わなくても呼び出せる。

ただ食料と調味料、弾薬等は別で、呼び出すたびに対価を支払わなければいけない。調味料は瓶一本使いきるまでは払わなくてもいいが、使い切ったら対価を支払って呼び出す。

と言つても銃本体なんかには比べれば遥かに安い。

感覚としては品物の種類が極端に少ないスーパーやコンビニみたいなものだ。ただ、兵器が売つていると言う違いがあるが。

説明はこれぐらいにしておいて今現在の俺が何をしているのか。先程も言った通りギルドと言う所に素材やらを売つて生計を立てている。

勿論これだけでは生きていけないから、ギルドで依頼を受けてその報酬もあるからこそ生きていける。

その依頼と言うのは数多く、家畜を魔物から守つて欲しい、畑を荒らす魔物を駆除して欲しい、なんて感じで魔物や魔獣関連が殆どだ。

このギルドと言う物は、特に何かしら特別な事や決まりごとがあるわけでは無く悪さをしない事、年間銀貨3枚相当の金銭を治めることを守っていれば大丈夫なのだ。

会員、として所属しなければ依頼を受ける事が出来ない為、それでは素材を売る事では金を手に入れられないので所属することにした。

デメリットとしては、何かしらの緊急事態の場合は強制的に任務に就かせられること。

あとは悪さをすれば一発でアウト、ぐらいか。

メリットは、コミュニティが各国にまたがっている為に情報が入りやすく、身分の保証がされていてギルドカードなるものを渡されるのでそれが身分証の代わりという事だ。偽造なんかは出来ないので盗んでも無駄。

そして今も農作物を荒らす魔獣の駆除の依頼を済ませて町に戻って来た所だ。

「一郎です。依頼から戻ってきました」

「おう、イチローか。あいよ」

ギルドでギルドカードを見せながら挨拶をする。

依頼主からの依頼終了の証をみせて報酬を受け取り、素材を売る。

これで終わり。あとは何時も宿泊している宿で食事を摂って水浴びをして、依頼で消費したものを補充して寝るだけ。

「さて、今回消費したのは……」

弾薬が60発に食料三日分、調味料はまだ残っているから良いとして。

「今回は群れで来るタイプだったから思いの外弾薬の消費量が多かったからな。まさか手持ちの三分の一を使うとは思っても居なかった」

そうして独り言を喋りながら補充していく。

それが終わったら寝る。これが今の俺の生活だ。

出撃、偵察、そして陣地構築

この世界に来てから早数か月。ギルドで依頼を受けて、金を稼いで宿に帰って補給をして飯を食って水を浴びて寝る。風呂なんてものは無いから水を浴びるだけ。そんな毎日を過ごしているが中々どうして悪くないと感じている。

ああ、俺の固有魔法？に関して。

どうやら俺の扱える固有魔法は「等価交換」だけではないらしい。

改めて確認してみると「地図作成」と「探知」という物があった。

「地図作成」の説明するとどうやら俺自身が歩いたりした場所、地形が地図になるらしい。ただ歩かなくても目的地と現在地の距離と大まかなものの地図は最初から記載されている。ただ細かく、それこそ地球の地図と同レベルにするには実際にはその場所に行かなければならぬらしい。この数か月で依頼関連で訪れた場所の地図がすでに出来上がっていて驚いたものだ。作成範囲に関しては自身を中心に半径十五キロ。

それを知ってからは可能な限り歩き回って地図の作成を行っている。

「探知」はレーダーの様な物だ。どうやら探知できるものは生物やそれに準じた物、という事らしい。この生物に準じた物と言うのは全く分からなかった。

幽霊とかも探知できるのか？と思ったが確かめる方法が無い。ゾンビみたいなものも存在するらしいしあながち間違いではないのかもしれない。

あと、俺には治癒魔法が使えるらしい。極めれば四肢欠損も余裕で治す事が出来ると書いてあったが今は軽い傷を治すのが精一杯だ。

後はもう一つ分かった事がある。

等価交換についてなんだがどうやら予め交換する物を入れておけると言う事が分かった。少し違うような気もするが、銀行にお金を入れておいて、クレジットとかで買物をするような感覚と思ってくればいい。

そういう事が出来るのは有難い。態々魔獣や魔物を討伐しに行く時に金を持って行かなくていい。という事は予め入れておいた金が底を突くまでは買物が出るという事だ。

これを知ってからは最低限の宿代を残して金は全て入れておいてある。

この世界の銀行は金持ちぐらいしか使わないしな。

そして今日も今日とて依頼を受けるためにギルドに向かおうと宿を出ると何処か騒がしい。それも良い方じゃない意味でなんだが何かあったのだろうか？

そんなことを考えていてもしょうがないのでギルドに向かう。

そしてドアを開けると町中以上に騒がしいと言うか騒然としている。

カウンタ―に依頼を受けるために向かう。ついでに何かあったのか聞いてみるか。

「おはようございます。依頼を受けたいのですが」

「おはようございます。イチローさん。依頼ですか？その、すいませんが緊急招集が掛かる予定ですので依頼を受ける事が出来ないんです」

「え？どういう事ですか？」

依頼を受けようとしたのだが受けられないと言われてしまった。どういう事だ？この騒ぎと何か関係あるんだろうか？

「それが、東にあるオール大森林にゴブリンが大量繁殖しているらしいんです」

「ゴブリンが大量繁殖？」

ゴブリン？あの言っでは悪いが強さで言えば最下級レベルの？俺自身何度も戦った事があるがお世辞にも強いとは言えない。寧ろ弱いと思う。まあ普通の人間からしたら脅威ではあるが最低限戦う術を持っている人間からすればカモぐらいなのだが。

「はい。異常なぐらいの数で、数日前に偵察隊を送ったのですが先程帰還したんですが、その、十人送り込んで帰還できたのがたったの二人でして。それなりに手練れのメンバーを送ったのですが……」

「え？ゴブリン相手に、ですか？」

「そうなんです。強さと数が尋常じゃないんだそうで……」

「強さと数？」

「なんでも確認出来ただけで数千はくだらない、との事で」

「それは……確かに普通じゃないですね」

確かにそれは普通じゃない。ゴブリンなんて集まっても20〜40程度。しかもその殆どがボロボロのどこで手に入れたか分からないような武器と鎧を身に着けている。

しかも40とかいう数は偶々どころか滅多に無い数だ。平均的に見ても十数が精々。それが数千？しかも普通よりも遙かに強いと？

「恐らくは何らかの変異種が出てきたのかそれとも何か別の理由があるのか詳しくは分からないのですが」

「それでこれからどうするんですか？」

「恐らくは国に要請しての討伐になると思われますが、討伐隊が到着するまでが問題なんです」

「でもこの町が領主様が住んでいる町ですよ？何も問題は無いのでは？」

「それが、領で保有している兵士の数は多くないんです。多くても250ぐらいかと。騎士団もあるにはありますが50騎程ですし後は殆どが歩兵ですから」

「それは無理がありますね……どうするんですか？」

「ギルドの緊急招集とします。ですがそれでも数は全然足りません」

「そんな事だろうと思っていた。どう考えても招集案件だろうし規約にもある。でもこの領全体から掻き集めても……と言った所だろうか。」

「流石に領民を掻き集めるわけにもいけませんから領軍とギルドの緊急招集で何とかするしかないのです」

「という事は依頼どころではないと？」

「そうですね。領軍の準備が整い次第出発となります。恐らくは明朝辺りになるかと」

「そうですか……分かりました。教えてくださってありがとうございます」

「いえ、仕事ですから」

その後は宿に戻って取り敢えず準備をすることに。

といつても何をすればいいのだ？正直な所、数で優る相手なのだから俺はそれなりに弾をばら撒ける銃でなければならぬのだがそんなものは残念ながら持っていないのだ。威力があるとすれば精々が手榴弾ぐらい。

どうすればいいのだろうか？アサルトライフルはM4を使っているがそれでは心許無い。そもそも数千、いや、一万なんて数にも上る可能性も高い気がする。それを考えれば高威力広範囲の武器が望ましいが残念ながらそう言った武器は基本的に数人がかり出ないと動かせない物ばかりだ。

残念ながら俺は一人で行動している為に制限のせいで扱えないのだ。いや、高威力ならば爆薬なんかもあるのだが取り扱いが面倒だ。使うとしても相当な量を用意しなければならぬしそもそも爆薬はミサイルなんかみたいに好きな場所に好きな時に打ち込めないのだ。予め設置しておく必要があるし爆破するタイミングもある。そんなものホイホイ扱える訳無いのだ。

それを考えるとやはり機関銃なんかが妥当な所なんだろう。ただ一人で扱える武器にはなっているのだが、重量等を考えるとどうしても一人では無理がある。ただやはり機関銃が妥当な所なんだろうか？

……幸いな事に今までの依頼でかなり金は溜まっているから何とかなるだろう。

本当ならば新しい物だと慣れていないからあまり使いたくは無いんだがそうも言つてられない状況なのは明らかだろうし。此処は致し方ない。

本当なら車は要らないんだが馬車での移動はもう勘弁してほしい。アレ、尻が物凄く痛いのだ。慣れたとはいえ乗らなくていいのならば乗りたくない。

という事で車両の呼び出しもおこう。

車両移動となると当然他人の目に触れることになる。余り人の目に付かない方がいいのは確かだがそんなことを言っているのはこの世界は残念ながら生きていける程優しくは無いのだ。そこは諦めよう。いざとなったら逃げてしまえばいいのだ。

機関銃と軍用車両を呼び出せば何とかかなる筈。いや、一応爆薬も幾らか呼び出しておこう。

機関銃の方はブローニングM2重機関銃を呼び出そう。説明欄に書いてあったがなんと第二次世界大戦中だけで200万挺以上生産されているらしい。正直200万? っとなつたがその辺は置いておこう。威力も12.7ミリと十分だし最大射程も6000メートルはある。有効射程は2000メートルほどだがまあゴブリンクラスで

あればもつと遠距離からの射撃でも大丈夫だろう。

何故この機関銃を選んだのか。どうやらこれを搭載できる車はかなり多いらしい。昔の車から現代の車に至るまでだ。まあどれがいいとか全く分からないしこのハンヴィーというやつにしておこう。こいつも機関銃を搭載する事が出来るのだ。

爆薬に関してはどれがいいんだ……

オクタニトロキユバン？なんだそれは聞いたことも無いぞ……

は!?金と同価値!?爆薬ってそんなもんなのか……

あー、このC-4というやつでいいのか？世界中で使われているらしいし起爆装置か雷管を使わなければ爆発する事も無いのか。一応燃えたりするが何てことは無いレベルらしい。いや、爆薬が燃えたりとか普通に怖いんだが。

は？火に放り込んでも爆発しない？なんだそれは意味が分からないぞ。

まあいい。それだけ安全という事だろう。

爆薬本体と導火線式雷管一式でいいか。それを呼び出す。

メニユー欄でそれらを購入する。そしてハンヴィーにM2を搭載する。

ん？これそのままじゃ搭載出来ないのか？M35車載銃架も無いと駄目なのか。

まあしょうがない、これも必要経費だ。

その後、流石に当日にいきなり操作、という訳には行かないので町を出て郊外の方で

3つを呼び出して、操作と射撃それと、爆薬の起爆の練習を行う。

ふむ、M2の操作方法はフィードカバー？を押し上げる？それなら一発目を給弾口に差し入れて、コッキングレバー……ああ、このハンドルみたいなのか。を引く。うお、結構力居るんだな。え？カバー開けなくても装填できる？でもコッキングレバーを二回引かなきゃならないのか。

まあこれはどちらでもいいだろう。取り敢えずフィードカバーを開ける方法で慣れておこう。

車体の方はまあ特段これと言ったことは無い。操縦も問題無いし。

C-4爆薬の方は起爆装置を爆薬本体に挿して導火線を伸ばしていつて、安全な所まで伸ばしたら点火装置で点火する。結構簡単なのか？他との違いが分からないから何とも言えないな。

これは事前に設置しておかないと意味が無いからな……扱い結構面倒だな。

明朝に出発してそれから準備となると時間が無いな。しかもどこで戦うとかそういう情報すらも無いのは不味いな。まあその辺は何とかするしかないな。

今日中にある程度M2の操作に慣れておこう。手間取ったりしたら目も当てられない。

と、その前に車内に可能な限りの弾薬と手榴弾を予め呼び出しておこう。流石に戦闘になつたら一々メニユーを開いて、何てことはやっていられない。

しかし、弾がベルトで110発しかないのか。まあこれはしょうがない。

取り敢えず車内に普段使用しているM4用の5.56ミリ弾とM2用の12.7ミリ弾、それと手榴弾を満載しておく。後は食料類だがこれはいいだろう。そんなものを載せるスペースは無い。流石に戦闘と休憩は区別させてくれ。

一応現段階で載せられるだけは載せた。勿論自分が行動できないとかそんな馬鹿みにたいに積み込んだのではなくちゃんと余裕を持つてだが。

「等価交換」に金を入れてあるとはいえ態々メニユーを開いたりなんて余裕があるとは思えない。だから最初からハンヴィーに載せておく。

ただ予想される消費量を考えるとやはり弾薬代がかなりかかるな。ここは出来るだけM2の弾薬に絞つてM4の弾薬は可能な限り減らそう。

しかも忘れていたのだが車を動かすのに必要な燃料も呼び出さなければならぬのだ。こちらも金が掛かる。

一応、燃料も予備を積んでおく。万が一途中で動けなくなったりか恐ろしすぎる。

そんなこんなで準備は完了。金の方もアホみたいに生産されていたM2とそれなりに生産されていたハンヴィーのお陰で車も銃もそこまで値が張ることは無かった。ただやはり弾薬の方はどうしても金が掛かるな。これだけの量となるとな……

予め言っておくとM2は車内ではなく車外に取り付ける形になっている。

その後はハンヴィーとそれに搭載されたM2、そして車載した弾薬、C-4を格納して町に帰った。そして町に戻ってすぐにギルドからの緊急招集が掛かった。

連絡事項としてはこんな感じだ。

領軍との合同となる事。

出発は明日の明朝となる事。

集合は町の東門外だという事。

長期間の行動になるだろうから各自食料、水をしっかり持ってくる事。

食料、水の方は領でも用意するらしいがそこまで量を用意できる訳では無いらしい。それもそうだ。今はまだ収穫期ではないらしく領の蓄えも少ないのだそうだ。

それから宿に戻って飯を食べて水を浴びて寝る。明朝には出発と言っていたから早めに寝た方がいいだろう。明日からどれだけ休息を取れるのかもわからないからな。

次の日、漸く日が昇り始めた頃に集合場所である東門外に向かった。

するとそこには既に寮軍が既に待機していた。しかしやはり200人程しか居ないな。ギルドからの緊急招集で集まったのも70人くらいしか居ない。それもそうか。他の依頼で出ている人間もいるからな。

それはそれとして俺もハンヴィーを出そう。

見られて何かあつたら、その時はその時だ。

そう思いながらハンヴィーを出す。周りが騒めいているのが分かる。それもそうだろう。いきなり目の前にこんな物が現れたら誰だつて驚く。俺だつて驚く。

多分領軍の指揮官であろう人が声を掛けて来る。

「すまない、少し話をさせて貰つていいかな？」

明らかに騎士つて感じの様な奴だな。

多分このハンヴィーの事だろう。他の人もこつちを物凄く見ているし。

というか改めて見たけど兵士の中に女性も居るのか。しかもそれなりの人数居るぞ。

どういう事だ？

まあ話に関しては断る事でもない。断つたとしても怪しまれそうだし、最低限の情報でいいか。

「ええ、いいですよ。何か御用ですか？」

「その、巨大な物はなんだ？見た所鉄で出来ているように見えるが……それにいきなりそれは現れたな。どういう事だ？」

「ああ、これは車という物です。馬よりも早く移動したり沢山の物を積むことも出来ます。それといきなり現れたのは、私もよく分からないので説明しろと言われても困ります」

「そうか……それはどの様な物なのだ？どれぐらいの距離をどれほど早く走れる？」

そりや聞いてくるよな。この世界には馬より早く移動できる手段なんて残念ながら存在しない。俺が知らないだけであるのかもしれないが少なくともこの領軍がそれらしき物を持つていない事を考えても領軍と言った領主直属の組織ですら持てないのは確実だろう。王族クラスか、はたまた王族の中でも大国でなければ無理、とかそんな感じだろうか？でも情報収集の時にそう言った事は一切耳に入つてこなかったから無いんだろう、と思う。

「どういう物、ですか……鉄で出来ていて速度に関してでは馬よりも早い、としか言えませぬね。距離は出す速さによつて変わるので断言はしかねます」

最高時速は120キロを超えられるがそんなことを態々教える必要も無い。はぐらかしておく。

「そうなのか……それではあの上についている箱と筒がくっ付いている物は？」

まあそうだろうな。どう考えても目に付くし聞かれるに決まっている。一応まだ弾を装填する前で良かった。まあ後々知られるんだから遅いか早いかの違いしかないんだが。

「あれは私が扱う武器ですよ。ゴブリンとの戦闘になれば嫌でも見るようになりますので今説明するほどの物でも無いです」

「ふむ。君が首からぶら下げているものも同じか？」

「ええ。そうですよ」

一応の護身用としてスリングを取り付けて首から下げているM4にも目を付けていた。？9の方には気が付いていない？いや、気が付いているとみておいた方がいいな。

「そうか……それともう一ついいか？」

「どうぞ」

「あの、車とやらに私達の食料を載せることは出来るか？出来れば馬の負担を軽くしたいのだが」

それは予想外だな。まあさつき沢山の物を載せられるって言ったからなんだろうけど残念だがそんな余裕は無い。万が一載せる事が出来たとしてもお断りだ。下手に乗せて破損とかあったら何を言われるか分からない。最悪ハンヴィーを寄せとこれからの戦闘で威力を見るM2とかを寄せ、と言って来たら兎に角面倒だ。

「残念ですが無理ですね。私自身が扱う物を数多く積んでいるので余裕は無いんです。これ以上載せることになるのと色々と不都合が起きてしまいますから」

「そうだったのか。それならば仕方が無い。凶々しい事を聞いてしまったな。聞きたいことはこれで終わりだ。それでは出発まで待機していてくれ」

「はい」

そして何処かに行ってしまった。

それから暫くするとさっきの人が前に立った。

あ、そう言えば自己紹介とかしてなかったけどまあいいか。

「今日はこの様な非常事態に集まっていただけ感謝する。私はクレイドル・ラウナー。今回指揮を取らせて頂く」

「色々と説明はしておきたいのだが残念ながら時間が無い。何時オール大森林からゴブリンがこちらに向かって来るか分からない。今すぐ出発をする。それでは出発だ」

その一言で全体が前に進み始めた。

俺は車に乗って一番前を進む。残念ながら急がなければならぬのは分かっているが荷馬車もあるし歩兵も居るしギルドの人間は歩きだから速度が出せない。

出した瞬間に歩兵と騎兵で完全に戦力が分かれてしまう事になる。

これじゃあ車の意味が無いな。まあ楽だからいいんだけど。

騎兵で全部固めればよかったのではないかと思つたが俺が口出しするような事じゃ

ない。

なんて考えながらアクセルを踏んでいると後ろから馬が走って来る。

何かあったのだろうか？そう思っただバックミラーを見ると馬に跨っているのはまさかの女性だった。金髪美人だが目付きが鋭いキツそうな人だ。

「おい」

「はい？」

「チツ……前方を偵察して来い。それだけだ。とつとと行け」

そう言うに戻って行ってしまった。何だあれ。舌打ちした挙句、俺の意見は無視って事か。少なくともクレイドルさんだっけ？あの人の方は結構ちゃんとしてそうだったが。上司がそれでも部下はそうじゃないって事か。

まあしょうがない。言われた通りに偵察に行ってくださいか。

————— side コルネー・エルフラント —————

今私は、私達は、オール大森林に向かって足を進めていた。

理由はオール大森林でゴブリンが異常繁殖している為。其れの討伐が主任務だが、万が一リーヴオリやオール大森林に近い村に向かうような事があればそれを阻止する事。ただ私達領軍は討伐隊の一部でしかなく本隊は国から派遣された部隊だ。私達は本隊が到着するまでの時間稼ぎ。

領軍の指揮を執るのはクレイドル・ラウナー団長。この領を治めて居るリーヴオリ家の騎士団の団長兼領軍の最高指揮官だ。

副団長はリーヴオリを万が一の時防衛する為に町に残っている。

馬に乗って移動していると声を掛けられた。

「エルフラント、伝令を頼む」

「はっ」

団長だった。

「戦闘で走っているあの鉄の塊に乗っている者に偵察を頼んで来て欲しい」

「了解しました」

私はその命令に従い鉄の塊に向かって馬を走らせる。

直ぐに追いついた。

そして命令を伝える。

「おい」

「はい？」

「チツ……前方を偵察して来い。それだけだ。とつとと行け」

思わずキツイ言い方になった。

しかしそれも仕方が無い。そもそも今回のこの作戦は私には気に入らない。

何故私達領軍がギルドに所属しているようなゴロツキ共と行動を一緒にしなければならぬのか。

ギルドの偵察ではゴブリンを数千も確認したと言っていたがそんなものは混乱して数え間違えたに決まってる。

もしそれだけの数が居たとしても私達に掛かれば知能の低い畜生程度簡単に蹴散らせる。

そして元居た場所に戻ろうとした時、後ろから大きな音が聞こえた。唸るような低い音。

思わず振り向くと先程までそこに居た筈のあの鉄の塊がもの数秒で遠くまで行ってしまった。呆然として見ていればどんどん速度を上げて見えなくなってしまった。

後に残ったのは鉄の塊の真つすぐ進む蛇の様な足跡と砂煙が少しだけだった。

l l l l l
s i d e o u t

さて、車を走らせてもう少して双眼鏡でオール大森林が見えると言う位置。

ああ、町からオール大森林までの距離は約46km程。出発してから凡そ10km辺りで偵察の為にハンヴィーのエンジンを全開にしたから完全に他の人達を置き去りにしてきてしまった。今数千のオークに出くわしたら死ぬな。

この辺でいいか。

取り敢えず此処で一回双眼鏡を覗いてみる。ここは一応小高い丘になっている。平

原を見渡すには好都合な場所だ。

オール大森林。この大森林は文字通りデカイ。それも半端じゃないぐらいに面積がデカイ。どれくらいかと言うと最大で端から端まで百キロ程。山でもなければ何でもない所にこんなデカイ森林がドーンと存在するのだ。だから外周だけでも半端じゃない。

そして双眼鏡で見ていると遙か前方の方に黒い何かが蠢いていた。

何だあれ？なんか嫌な予感がする。

よく見るためにM2の銃座に座る。それと万が一の時に何時でも攻撃が出来るように。

目を凝らして見ると、それはゴブリンの大群だった。

ツ!?何だあれ!?数千だと？ふぎけるなよ、あれは数千なんて数じゃもんじゃない。一万なんて数じゃないぞ……多分二万は居るんじゃないか？下手すると多分もつと居るぞ……

急いで戻って報告しないと。

幸いな事に数が多いからか移動はかなり遅い。

そして運転席に戻ってアクセル全開にする。

……それにしてもおかしいな。あれだけの大群ならば俺と同じ様に偵察が居て途中で遭遇していても良い筈なのに。

考えられるのは俺が通って来た最短距離のルートではなく、全く別のルートだった、後は俺の知らない方法があつてそれによつて気が付かなかつた、とかもあるが今はそれどころじゃないな。

早急に知らせないと。こういう時に無線とかがあれば良いんだがな。でも簡単に渡せるものでも無いから考え物だ。しかしこうして出し惜しみしていてこれなんだからどうしようもない。

大急ぎでハンヴィーを走らせて本隊に到着した。

クレイドルさんの乗っている馬の横に車を付ける。

「クレイドルさん!!」

「おお、君か。どうかしたのか?それに偵察はどうした?」

「オール大森林の淵付近でゴブリンの大軍を見つけました!数は凡そ二万!今後も増える可能性が高いです!」

驚いたクレイドルさんは停止命令を出した。

そして俺の話をしつかり聞く姿勢に。

「なっ!?二万だと!?報告じゃ数千だと言っていたらどう!?」

「はい。恐らくこれからも増えるかと思えます。

いえ、確認出来ただけでという事なので増える可能性はあります!ですが幾ら何でも多すぎます。どうしますか!」

「ここで引き返しても結局は町に押し寄せるのは間違い無い。何とかして迎え撃つしかない。偵察に出ていた、えー、名前はなんだ?」

「二郎です」

「そうか。イチロー、偵察していて陣を作るのに適している場所はあったか?」

「……本気で戦うんですか?」

「ああ、何とかして討伐隊本隊が到着するまで時間を稼がなければならぬ。町に戻って防衛してもまともな防御設備なんて無いからな。民間人に犠牲者が出るのが必至だ。

ならば我々で奴らを引きつけるしかないのだ。一応応援を寄こせるかレイフオード様に連絡を送ってみるが流石に無理だろう……」

「それはどうしてですか？」

「そもそも我が領の正規兵は350程なんだ。多くても400程だ。こちらに割いた兵力は250。だから向こうに1000名程しか居ないんだ。しかも今は戦時ではないから徴兵として戦力を集めるわけにもいかない」

「それは……緊急事態として何とかならないんですか？」

「いや、殆どの人間が戦争ですらないのに徴兵されなければならないのか、と反発するだろう。それにゴブリンが2万だと言っても高がゴブリン程度、で片付ける人が殆どだからな」

確かここから20km程行った所に高めの丘があった。

そこなら距離もカバー出来る。

「分かりました。もつと先の方に、大体20km程行った所に高い丘があります。そこならかなりの距離を見通せるかと。陣地を置くのにも適していると思います」

「20kmか……距離があるな」

「ゴブリンの方も私が偵察をした時に出発したようなので十分とは言いませんが何とか間に合うでしょう。しかも大軍なので行動がかなり遅い。それを考えて行動すれば間

に合うはずですよ」

「よし、分かった。君を含めた騎兵のみで先行してくれ。私と他に10騎の騎兵は歩兵と共に後から続く。先行する隊の指揮はエルフロントに任せる。それとイチローに関しては必要に応じて部下を貸し出すように」

「はあ!?この男に従えと!?!」

「何も従えと言っているわけではない。必要に応じて部下を貸してやれと言っているだけだ」

「くっ……!分かりました……!」

「それではイチロー、エルフロント、頼んだぞ」

「はッ!!」

「分かりました。私は先に行かせていただきます。それでは」

しかし態々騎兵に会わせる必要は無い。さつきと同じようにエンジンを全開にして丘に向かう。

急いで丘に向かって色々と準備をしたい。C-4で丘の周りを一部分残して吹き飛ばせば簡単に溝を作れる。そうすれば最低限の防御は可能になる筈だ。

テルモピュライの戦いを真似るのだ。

あの戦いは300のスパルタ兵がアケメネス朝ペルシアの数十万とも言われる軍を

押しとどめた戦いだ。

狭い場所で迎え撃つことによって大軍としての利を生かせないようにすると言う物だ。あの時は山と海に挟まれた狭い街道での戦いで回り込めるようなものが無かったから、と言うのもあるが今回はそんなものは無い。

だが無ければ作ってしまえばいいのだ。C—4で一部分を残して地面を吹き飛ばしてでつかい溝を作る。そうすればその残った箇所からしかゴブリン共は入って来る事が出来ない。そこに俺のM2や他の人達が持っている弓で一斉に射撃を叩き込んでやればいい。ただ本隊が到着するまで耐えればいいのだ。

こんな時に予め金を入れておいて良かった。多分弾薬爆薬共に消費が激しいだろうと簡単に予想できる。

燃料はまあ、盛大に奴らを燃やす時ぐらいだな。早々使わなさそうだが。

そして丘に到着した。

すぐに準備に取り掛かる。まずは丘の頂点から半径200メートル程にC—4で爆破して溝を構築する。

流石に歩いてだと効率が悪いからハンヴィーで移動しながら行う。

導火線式雷管だから纏めて設置して纏めて吹き飛ばす。

ハンヴィーに載せてきていた分じや明らかに足りない。「等価交換」で追加で呼び出す。

一番最初に基点として四方向を爆破する。約10キロずつ置いて行く。

流石に地面に直接置いてもあまり効果は見込め無さそうだから1m程地面を掘ってそこに挿れて爆破する。

残す部分には適当な目印でも立てて置けばいい。

ああそうだ。耳栓しないと。鼓膜吹き飛ぶ。

丘の頂上に戻って点火装置を持つ。

3、2、1、点火。

ドオオオオン
!!!!

点火と同時に土砂を巻き上げる。

遅れて大きな爆発音が響き渡る。

丘の頂上に居なくてよかったかもしれない。いたら衝撃波で鼓膜とハンヴィーの窓

どころか車体まで吹き飛んでいたかもしれない。

丘の周りを砂煙が覆う。少しして砂煙が収まった。見てみるとしっかりと溝が出来ていたがやはり深さが足りない。現時点で三メートルあるか？そのぐらいだとまだ足りないな。

もう一度か二度で足りるだろう。

溝の底の部分にもう一度爆薬を仕掛けようとしていた時、そこに遅れて騎兵の連中がやつて来た。多分40騎ぐらいだな。

それと同時に大きな声でこちらを怒鳴つて来る。

それもそうか。いきなり目に見えていた丘が爆発したと見える様な光景が何の知らせも無く起こったのだから。まあ今はそんな事を気にしている暇はない。

「おいーこれはなんだ!? どういう事だ!？」

俺に怒鳴つて来たのはあのキツそうな金髪美人だった。

「お前の言っていた丘を指摘していたらいきなり丘が、こんな……! こんなになっていく!? どういう事だ!? 説明しろ!!」

「申し訳ありません。時間が無いのでこちらで勝手に戦う準備を進めさせて頂きました」

「何故一言も無い!？」

「何故って貴方達を待つていたら時間がどんどん無くなってしまいますから。それでは作業に戻らさせて頂きます」

「ッ……の……！」

他にも言いたそうだったがこれ以上は時間の無駄にしなければならない。急いで深くしな
いと。

あ、それならあの人達にも手伝って貰おう。穴を掘るだけなら出来るだろうし。
「すいません、人手を借りたいんですがいいですか？」

「くッ……何人だ？」

俺が頼むと何か言いたそうな顔をするが予めクレイドルさんからの何かあったら部下を貸してやれと言う命令があつたから苦々しそうな顔をしながらも了承してくれた。

人数に関してはそうだな……20人も居ればいいか。

「20人程お願いできますか？」

「そんなにか!?……まあいい分かった……レナード!ノーマン!」

「はい!」

金髪さんが名前を呼ぶとこちらに来たのはまだ若い青年だった。多分20歳ぐらい
だろうか?もしかするとそれ以下かもしれない。

「お前達の分隊で手伝ってやれ。今後はその男の指示に従うように」

「了解しました！」

レナード、ノーマンと呼ばれた青年2人は元氣良く答え、俺の方を向いて自己紹介をして来た。

「レナード・ハンツです！これより指揮下に入らせていただきます！」

「ノーマン・ケイルです！同じく指揮下に入ります！」

「二郎です。よろしくお願いします。早速ですが部下の方々を集めて貰えますか？集まったらあそこに来てください。あ、それとなるべく身軽な格好で来てください」

「了解です」

そう言うのと走って行ってしまった。

爆破せずに残しておいた場所に来てくれ、という事と身軽な格好で来ることをお願いした。多分鎧の中じゃ軽い方なんだろうけどそれでも溝に降りて登るとなると無理がある。でも何の疑いも無く行ってしまった。

頼んでおいてあれだが素直過ぎやしないか？

数分で部下の人を連れて来た。早いな。しかもちゃんと言った通りに鎧を脱いで来ている。うん、これならいい。

「部下を連れてきました。これから何をするんですか？」

はこの袋に土を詰めて運び出してください。それを溝の外の離れた位置に運び出してください。他に何か質問はありますか？」

何か質問はあるか再度聞くと特に無さそうだったので仕事に取り掛かる。

「それでは仕事に掛かってください。もし何か質問があれば私の所に来てください。それではお願いします」

さて、俺は爆薬を底に運ぶとしよう。俺もやることが多い。

結構な量が必要だから何往復もする必要がある。

爆薬を底に運んで導火線式雷管を取り付ける準備をする。まずは導火線をハンヴィーから伸ばしていく。

それから爆薬本体の方の準備をする。穴が出来たらすぐに爆薬を設置できるように。

それをまずは10セット作る。

「すいませーん！掘終わりましたー！」

「はーい！今行きまーす！」

呼ばれたので爆薬を持ってそちらに向かう。

そして呼ばれたところに向かうと1mほど掘り下げた穴があった。

うん、こんなものでもいいか。シャベルだけだとこれぐらいが限界だろうし。俺もそ

うだった。

「そしたら溝の底に沿って一番端の人から10 m程離れてまた掘ってください。終わったらまた呼んでください」

「了解です」

そう言つてまた別の穴を掘るように言うと言つた。

さて、この穴に準備し終わった爆薬を挿し込む。そして引つ張つて来ておいた導火線式雷管をセットする。よし、これでいい。

その準備が終わつた瞬間に次々と俺を呼ぶ声が出て来た。

そして俺はその呼ばれた所に走り回る。そして爆薬を設置していく。

また別の穴を掘り始めていた人達もコツを掴んだのか、ペースが速い。

そして全体に堀終わり爆薬の設置も終了したのを確認して穴掘りをしていた人達を退避させる。

「エルフラントさん、ですよね?」

「ん? ああお前か。なんだ」

「ちよつとあの溝に近い所で作業してる人を離れさせてください。丘から出来るだけ離れてください。馬も一緒にお願ひします」

「はあ? お前何を言っているんだ? そつちに人を貸しているせいで作業の進捗状況が良

くないんだ」

「いいですけど、死ぬか耳が一生聞こえなくなるかの二択なんです。それでもいいと言
うのならば」

「チツ……分かった。どれぐらい離ればいいのだ」

「大体100mよりも遠く」

「はあ!?!お前馬鹿なんじゃ……いやいい従おう……」

「あ、それと口を開けて置いてください。じゃないと暫く耳が聞こえなくなるので」

「分かった分かった……」

俺がそう言うとうざげけるなど言いたそうな顔をするが死ぬか耳が一生聞こえなくな
るか、なんてどちらも選びたくない選択肢を迫られたらそれは離れた方が良いと判断し
たのだろう。騎兵の人達と馬を連れて丘から離れて行く。それに耳が暫く聞こえなく
なると言うのは戦場において致命的だからな。

そして離れたのを見届けるとハンヴィーの中に入って耳栓を突っ込んで口を開ける。
点火装置を持って点火する。

ドオオオオン!!!

その瞬間再び爆音と衝撃波が俺と、騎兵の人達を襲う。それと一緒に土砂も巻き上げていく。

収まってから覗いてみると先程よりも倍ぐらい深くなっていた。うん、これならあと一回やればいいかな。

騎兵達の方を見てみると人も馬も大混乱になっていた。まあいいか。向こうは向こうで何とかするだろう。

その後同じことをもう一度やってしつかりと深さを取った。そして運び出した土で土嚢を作りそれを溝の内側にと、斜面を平行にするために積んでいく。やはり今考えたが俺だけしか銃火器が無いのはキツイ。

付け焼刃になりそうだが無いよりはマシだ。だから土嚢を使って斜面に幾つか平らかな場所を作る。そしてそこに軽機関銃でも置けば多少なりともマシになる筈だ。

扱いは俺が教えればいい。

その諸々の準備が終わってから即座に追加で銃を呼び出す。同じM2でいいか。あ

れなら生産数訳分らないぐらい多くて安いし。

用意したのは5挺。俺を入れて6挺になる。これだけあれば十分だろう。

射手と弾薬運搬係。これで合計10人になる。レナードさんの分隊にこれをお願いした。

その操作方法を教えて射撃練習を行ってひたすら反復練習。

射手に關しては装填と射撃の練習。

短連射で弾薬を無駄遣いしない事を言い聞かせておいた。一応呼び出せるとは言えそれも無限じゃない。しかもC—4で結構金を使ってしまった。今まで溜めに溜めておいてよかった。

本当はクレイモア地雷とかも呼び出しても良かったが流石に弾薬の補給に問題が出たら不味い。

弾薬運搬係は只管迅速に弾を運ぶ練習。これが意外とかなり重労働なのだ。弾薬箱一つだけでもまあまあ重い。それを一回だけならいざ知らず、だがそれが何十回となると滅茶苦茶辛い。

俺は丘の頂点に陣取って全方位見渡せるししかも銃座が回転するからいいが他はそうとはいかない。

一応、固定さえしなければ銃身の向きは自由だがそれも限度がある。だから相互支援が重要だ。取り敢えず弾切れを起こさないようにしなければならぬ。

何処かが装填をしていたらそれをカバーする。そうすれば近づけさせなくて済む。

それと練習をしている時、エルフロントさんはこっちを凄く睨んでいたけどまあしようがない。そりや自分の部下を使って訳の分からない事をしているのだから。

まあいい。

しかし全員物覚えが良いのかすっかり使いこなしていた。

練習が終わってから俺はガソリンを使って松明を作っていた。まあそれもレナードさんとノーマンさん、それと部下の人にも手伝って貰った。レナードさんとノーマンさん、それに部下の人達とは結構仲良くなった。

夜襲も考えると松明は必要だ。接近に気が付けないし何より接近されたら弱いのはこちらだ。数で明らかに負けているのだから。

その諸々の準備が終わってそれから暫くしてクレイドルさん達が到着した。
そして後は戦うだけとなった。

ただ奴らが正面から向かって来ることを前提としたこの陣地と場所だ。迂回でもされたら全て水の泡になる。

だがそんな心配は杞憂に終わった。そして別の心配と不安をすることになる。

「おい！早く弾持つてこい！！残り少ない！！」

「クソクソクソ！何だこの数！？多すぎる！！」

「畜生！弾切れだ！！早く持つてこいよ！」

「おい！また十数匹突破したぞ！」

「俺がやる！！他を突破させるな！！」

「分かっている！でも数が多すぎるんだよ!!」

ゴブリン共はその圧倒的とも言える数だ。そしてその数に任せて突撃をしてくる。そして数の暴力によって準備した防衛体制は早くも崩れそうになっていた。

戦闘、防衛、そして危機

l l l l s i d e
???

命令を受けて仲間達と共に偵察をしていた。

すると遠くに明かりが見えた。村かと思つて近づいてみると、どうやらそれは村ではなく人間の陣の様な物だった。

丘の上に出てきている。ここからじゃよく分からなかったがこれ以上寄ると見つかりそう。

それよりも報告しなくては。

結局報告して、また朝に偵察を俺達がやることになった。

クソ、毎回こういう役割ばかりだ。あいつが来てから何故か群れがどんどん大きくなっていったって人間の町を襲うと言ひ出した。最初は何を言っているのか分からなかつ

たが考えてみれば人間の食料や雌が手に入ると考えれば悪くないと思つた。

この森にもエルフの村があるがあそこに行くのは無理だ。死ぬ。

それは知っていたのかあいつもエルフの村を襲おうなんて言わなかつた。

まあいい。取り敢えず朝からの偵察に向けて休んでおこう。

朝起きて仲間達と偵察に向かつた。

そしてあの丘に向かつたのだが昼間だから良く見えた。だからもつとよく見ようと
して近づいたら丘が何箇所か光つたと思つたらぶつつりと意識が途切れた。

————— side out —————

クレイドルさん達が丘に到着したのは日が暮れてからだだった。

それから総出で、大急ぎで天幕を張った。張った場所は銃座を設置した斜面の反対側。俺のハンヴィーが丘の頂点に陣取っているのと下手に適当に天幕を張られると射撃に不利になるから。射界が開けていければいい。その点ここは丘の上で周りは見渡す限り平原だから申し分ない。

一応クレイドルさんに後からだがその辺の許可を求めたらあっさり降りた。

結局その日はゴブリンと接触はせず陣地を構築して終わった。ついでに言うとなードさんとノーマンさんの分隊が正式に俺の指揮下に入った。どうやらこの丘の陣地構築をしたのが俺とレナードさんノーマンさんの分隊で俺達だと知った時ならばそのまま組ませてしまおう、という事だった。

昼間に準備していた松明を溝、いやもう堀、と言った方が良いな。堀の周りに立てて明かりを確保した。松明と言ってもM2の弾薬を使い切った弾薬箱の中にガソリンを入れて火をつけた程度なんだが。

それでも十分明るい。そして騎兵を中心に歩哨を立てて警戒をしていた。

歩兵の殆どは疲れていて休息が必要だったのでクレイドルさんの指示により歩兵は休息、騎兵は歩哨といった役割分担をした。

そして俺も歩哨としてハンヴィーの銃座から辺りを見渡す。と言っても暗闇だからそこまで見える範囲は無かったのだが。ただもし偵察が来ていた場合、向こうから俺達の事はさぞかし良く見えた事だろう。

しかし大部分の人間がその日はしつかりと休む事が出来たのは幸いだろう。

かなり無理のある行軍をして来たようだし休める事が出来て良かった。

俺はハンヴィーの座席で寝た。

そして朝になった。

日の出と共に弾薬箱松明を回収する。俺達はすぐさまに起きたが、やはり昨日の強行軍の疲れが残っていたのだろう、歩兵の多くはまだ寝入っていた。それでも起きて来る歩兵は多少居たが。

そして俺は双眼鏡を取り出して辺りを警戒していた時だった。恐らく偵察と思われるゴブリンたちが丘に接近した。

取り敢えず数なんかは置いておいて、クレイドルさんに報告すると偵察だから情報を持ち帰らせないように殺せと言われた。勿論そのつもりだったが。

それを各銃座に報告して射撃準備を取らせる。

全員が流れるように安全装置を解除してすぐに照準を付けていた。

早いな。まあ俺も負けていないんだけど。

双眼鏡で覗いているとM2の最大射程に入った。しかもまだどんどん近づいてくる。馬にも乗っていない。数は17か。槍と剣が13に弓が4。

編成を見ていると有効射程範囲の2000mに入った。

その瞬間に俺は号令を出した。

「目標ゴブリン偵察部隊。撃て！」

ドドドドドドドドオオオオン
!!!!

一斉に響き渡る銃声。

そしてゴブリンの偵察部隊は一瞬にして吹き飛んだ。

取り敢えず仕事は終わり。それぞれの銃座では消費した弾薬の補充を行い更に銃身等に不具合が無いか確認と言った作業を行う。

するとそこにクレイドルさん達が慌てふためいて飛び込んできた。あ、エルフロントさんまで居る。昨日の爆破と射撃練習で慣れたと思っただが。

「い、今の音はなんだ!?! 攻撃か!?!」

「ああ、申し訳ありません。大丈夫です、ゴブリンの偵察は仕留めましたから」

「ああそうかなら良かった……ではない!今の音はなんだ!?!とんでもない音量だったぞ!?!」

「ああ今のは私が扱う武器の攻撃音ですよ」

「そ、そうか……我々からなら良いんだが」

そう言うのと天幕に戻って行った。

まだ疲れているだろう。

そしてレナードさんとノーマンさんの部隊は弾薬補充作業と確認作業が終り次第銃座に着く人間を残して再び寝始めてしまった。しかも銃座の土囊の上で。そこでもいい

のかと思って聞いてみたが特に問題は無いらしい。本人達がそこで寝て問題が無いのならいいか。

そうして俺も一度丘を降りて手榴弾でトラップでも作るとするか。

安全ピンにワイヤーを括りつけて両方を固定すればいいだけだ。どうせこれが何なのか分からないから避けて進むなんてしないだろうし。まあ通じるのは最初だけだろうけど。それでも少しでも削れればいい。手榴弾なんか丘の上からだど投げても届かないからな。手元にある分ありつただけ使ってしまったおう。

暫くして、即席のブービートラップが爆破せずに残っていた場所の正面にかなりの数が仕掛けられていた。うん、これで一回ぐらいなら攻勢の先頭を吹っ飛ばせそうさ。欲張ってしまったえば迫撃砲とかもあれば良かったんだが照準の付け方とか難しそうだし何よりも複数人でないと扱えないものだし、よしんば複数人居たとしても扱えるようになるだけの訓練をする時間が無い。だから今回は見送られた。

そして今日も準備をして一息付いていると、前方から再び少数のゴブリンが接近してきていると報告が入った。

俺も双眼鏡で見ると先程仕留めた偵察部隊と同じような感じだった。クレイドルさんに殺つていいと言われてるから先程と同じ距離に近づいたら射撃をするように言った。

そしてその命令？通りに射撃が始まりゴブリンは挽肉になった。その様な偵察がその後何度か一定間隔で繰り返された。

そう言えば今の俺には言った通りレナードさんとノーマンさんの部隊が正式に部下として付いている。

今はレナードさんの部隊は射手と弾薬運搬係を担当していて、ノーマンさんの部隊と交代で射手と弾薬運搬係を行う。射手と弾薬運搬係で無い時は休息。

そう言えば伝令が居なくてどうするかとなったがノーマンさんの提案により弾薬運搬係と兼務させることになった。まあ確かにハンヴィーと銃座を往復するんだからそれが妥当か。

全員射手も弾薬運搬係も熟せる様になっているから心配は要らない。まあやはり人手不足は否めないが俺一人よりは遥かにいいだろう。

そして一定間隔の偵察が来ないと思つて安心していた。その時偶々俺がハンヴィーの上で双眼鏡を覗いているとかなり遠くに黒い塊が動いていた。

それはゴブリンだった。

ゴブリンだと分かつた瞬間に大声で言い放つた。

「ゴブリンの大部隊が接近中!!」

瞬間にあちこちで寝ていた兵士達が飛び起きた。そして大急ぎで準備を行う。

クレイドルさん達は鎧を着込む。

俺とレナードさんとノーマンさんの部隊は銃座に付く。そして安全装置を解除して何時でも撃てるようにしておく。

そして俺は双眼鏡を覗いてどれほどの規模、数なのかを確認した。

ん？明らかに2万じゃないな。少ない……？何故だ？どう見ても1000ぐらいしか居ない。いや、1500は居るかもしれないな。でもそちらにしろ少ないな。まあいい報告しよう。

一応他の方向も確認してみたが何もいない。

ハンヴィーの近くに来ているクレイドルさんにその旨を伝える。

「クレイドルさん、ゴブリンの数は1000〜1500程。明らかに少ないです」

「どういう事だ？」

「分かりません。一応、他の方向も確認しましたが何も見えませんでした。陽動の可能性は低いかと」

「分かった。そっちの攻撃範囲に入ったら攻撃を開始して構わないぞ」

「了解です。念の為他方位を警戒していて貰えますか？」

「勿論だとも。集中してくれて構わない」

「ありがとうございます」

許可を貰ったので各銃座に大声で伝える。今はそこまで混乱していないから俺から大声を出すだけで大丈夫だ。

そして各銃座は既に射撃が出来る状態で待機している。

どうやらゴ布林達も偵察をしい行った連中が戻ってこない事を不審に思っているのか足取りはゆつくりとしたもので辺りを警戒しながら進んでいる。

まだ撃たない。偵察ゴ布林達の肉片に差し掛かるまで。あそこが大体2000mなのであのあたりから射撃が可能になる。恐らくそれよりも遠くても十分に威力は発揮できるだろうがやはり銃座の数が6箇所と少なく尚且つ2000mも離れている所

に撃ち込むのだから数が少なければ問題は無いが多くなると不味い。流石に抑えきれなくなる。

ただ2000mもあればどれだけ全速力で走ったとしても普通の成人男性でも数分は余裕で掛かる。下手をすると10分必要かもしれない。ましてやゴブリン共はお粗末とは言え装備も身に着けてその分重くなっているから足が遅くなるのは必然。

此処に辿り着く前に片付けければ良し。出来なくても侵入するには一か所しかないしその一か所も手榴弾製のブービートラップだらけ。

それも突破したとしても待つているのはM2による一点集中射撃だ。俺だったら絶対に突撃なんてしたくない。御免だ。

そして遂に肉片に差し掛かった。

その瞬間、俺は覗いていた双眼鏡から目を離して大声で言った。

「撃てェ!!」

号令と共に放たれる12。7ミリ弾。

の俺の号令を皮切りに一齐に12.7ミリ弾が撃ち放たれた。俺も遅れて撃ち出す。最大で毎分635発。それが×6で3810発。

確実に一発一発が別目標に当たるとすれば半分程度の時間で殲滅できる数だ。それを2km先からバラ撒かれるのだからゴ布林達に同情しなくもない。

通常弾しか使っていないのにこの有様だ。これで徹甲弾や焼夷弾を使ったら大変なことになるだろうな。

それでもこちらに向かって進んでくるのだ。

その意気はいいが1500mを切る前に全てのゴ布林が片付けられた。

一応ハンヴィーに乗って俺が確認に向かったが生き残りは一匹として居なかった。

そのついでにガソリンを撒いて火を点ける。偵察ゴ布林の時もやったがこうすることですら伝染病や不死者化を防ぐのだ。今回は数が多いから手間だった。

結局その日はこれ以上ゴ布林共が来る事は無かった。

l l l l l
s i d e
???

偵察しに行つた連中が戻つてこない。それも一度や2度のみならず何度も何度も。しびれを切らしたのかアイツは数を送り込むことにしたようだ。どのくらいかは詳しく知らないが1500ぐらいだと聞いた。

まあ俺達は何万も居るからこれぐらい問題は無いのだろう。流石にこれだけ送り込めば問題無いだろうと皆が思つていた。

だけど誰も戻つてこなかった。

夕方になつても戻つて来ないから夜暗くなつてから少ない数で偵察することになつた。

それに俺が選ばれてしまった。

嫌だつたが行かないとアイツに殺される。だつたら行くしかない。だから行つた。そこで見たのは殺されて焼かれた仲間だつた。

どれもこれも五体満足なのは一つも無かつた。足や手、頭が千切れていたり身体の半分が無いのも沢山あつた。

そして向こうの方に明かりが見える。多分あれがやったんだろう。今が夜でよかつたと思つた。そして帰つて報告した。

そうしたら朝になったら全員で攻撃することになった。

そこから地獄の始まりだとは誰も知らなかつた。

—————
side
???

昨日、合計で1600程のゴブリンを殺した。と言うのも1500程が来てそれを殲滅してからピタリと来なくなつたのだ。

変だ、とは誰もが思ったが誰もが休息を取った。まあ俺達しか戦ってないんだがそれでもだ。休める時に休んでおかないとイザという時に疲労で動けなくては困る。

流星に2万なんて大軍が押し寄せてきたら抑えられなくなるだろうし。

そうしている時、町に応援を要請しに行つた伝令が此処に辿り着いた。

返答は応援を送ることは出来ない、という物だった。

誰もがしようがないと思ひながらも何故だと心のどこかで思っていた。

そして今日、再びゴブリン共が現れた。

2万どころかその数倍の数で。

目を疑つた。何故？ どうして？ 2万じゃないのか？

頭の中でその様な事がグルグルと駆け回る。
見えるだけでも6、7万は居るだろうか？

その全てがこの丘の陣地を目指して向かって来ていた。

「総員戦闘準備!!ゴブリンの大軍が来たぞオオ!!」

考えながらも大声で言い放った。そして寝ている人間も、話していた人間も一斉に立ち上がり戦う準備をし始めた。

そして準備が終わってゴブリンの大軍を見て全員が言葉を失った。

「なんなんだよあの数……」

誰かが小さな声でそう言った。本当に小さな声だったにも関わらず、誰もか聞こえた。それぐらい俺達は黙りこくっていた。

「有り得ねえ……」

そう、有り得ないのだ。そもそも2万という数でゴブリン集まっているのがまずおかしいのだ。それが数倍にも膨れ上がって現れたのだから誰だって言葉を失うのはしょうがないとも言えた。誰もが呆然としていて立ち尽くす事しか出来なかった。でもそれを許される状況では無いのは明白だった。

「お前達!!今自分のやるべきことを思い出せ!!そしてそれをやれ!!いいか!」

クレイドルさんが大きな声でそう言つて皆が漸く身体を動かし始めた。大急ぎで態勢を整えて迎え撃つ準備をする。

少ない時間だが作戦会議をすることになった。そしてそこには俺も出席することになった。

今までの戦いで全てのゴブリンを倒してきていた俺達。だから参加することになった。

「さて、正直今の状況は絶望的だ。当初2万と予想されていたゴブリンの数が数倍に膨

れ上がっている。これは確認できているだけでだ。恐らくもつと増える可能性がある。しかし退く訳には行かない。だからここで奴らを食い止める。何かいい案があるものはいるか？」

その言葉を皮切りに色々と意見は出て来るがどれも意味のない物ばかりであった。

そこで俺は手を挙げる。

「はい」

「イチロー」

「当初私が想定していた方法で戦いましょう」

「それはどんなものだ？」

「まずこの丘に陣取っているので高低差の有利はこちらにあります。そして丘の周りに一部分を残して掘を作っております。なのでそこからしか侵入は出来ないのはご存知ですね？」

「ああ。それで？」

「ゴブリンが向かって来る方向に向けて私の武器をいくつか配置してあります。威力や射程はご存知の通りですのでそれを生かして攻撃します。可能な限りこちらで倒しませんがすり抜けてきたゴブリンをあの

残した場所で迎え撃って欲しいのです。というか残したところだと言わずらいです

ね……テルモピュライとしましょう。我々も攻撃しますがそれでも距離の関係上、困難な事ですから」

正直な所かなり無茶であるとは思いますがそれでもやるしかないのならばやるしかない。

この当初想定していた戦い方もどれほど持つか……

でもこれ以外にあの大軍を相手をする事が出来る方法は無い。

クレイドルさんもエルフラントさんもそれしかないと分かっているから領いてくれた。

「ふむ……まあそれしかないだろうな。よし、それでいこう」

「あ、それともう一つ。テルモピュライの向こう側には絶対に行かないで下さい。もし向こうに行った場合、私が仕掛けた罠に引っかかる可能性があります。それに向こうに出て行っても数で磨り潰されてしまいますから」

「了解した。徹底させよう」

「ありがとうございます」

「よし、それでは諸君！行動に掛かってくれ！」

「「了解!!」」

「ああそれとイチロー、あの武器の攻撃のタイミングや指示は全て君に一任する」

「分かりました」

そして準備、と言ってもそれぞれの持ち場に着くぐらいだがそれも終わり、あとは攻撃するだけとなった。

しかし俺達銃座は予備の弾薬を運んだりと意外と忙しかった。それと今まで簡単な戦闘ばかりで忘れていたのだがM2は銃身の交換が出来るようになっていた。長期戦が予想されるために急遽用意した。

それと付け焼刃ではあるが取り換えの練習も行いなんとか態勢を整える事が出来た。クソ、こんなことならしっかりと確認するなりしておけばよかった。

そしてあの2000mラインに差し掛かった時、号令を待たずにそれぞれのM2が射撃を開始した。

最初から2000mラインにゴブリン共が入ったら号令を待たずに撃つていいと言っておいたのだ。

その射撃音を皮切りに先頭が開始された。

「伝令!! 2、4、6番銃座は2000mラインを突破したのを狙えと伝えろ!!」

「了解!!」

射撃音もあつて声を張り上げる。

弾薬を取りに来た弾薬運搬係兼伝令にそう伝えて送り出す。今はノーマンさんの分隊が射手とかを担当してレナードさんの分隊は休息を取って貰っている。

しかし伝令に言った通り2000mラインをどんどん突破され始めていた。

途中、加熱した銃身を交換したりするが、それもかなり速いペースだ。

既に戦闘が始まってから10分程。

たったこの10分でどんどん2000mラインを突破されている。

数に任せて突撃してくるゴブリン共は勢いが全く衰えずそれどころか増しているようにさえ見えた。気のせいだと思いたいが気のせいではないのだろう。休む暇なく射撃をしているのに向に減らない。

それから一時間後。

既にテルモピュライの約200m程の地点まで押し寄せてきていた。

もう2000mラインへの射撃はせずにゴブリンの最前線への射撃に切り替えていく。しかしそれでも勢いを留める事は出来ず徐々に押されていく。

そして俺が仕掛けた無数のブービートラップにまで到達された。

ドオン！ドドオン！！

仕掛けておいた場所で爆発が連続して起きる。纏めて何匹も吹き飛ばすがそれでもゴ布林への損害は小さい。

それでも射撃を続けてる。俺も皆も。

遂に丘を包囲された。だが堀があるお陰で損害は無く、テルモピュライへの攻撃しかない。

矢を放ってきたりもするが飛距離の関係上こちらが丘を下るか、もしくは堀とテルモピュライを突破されない限りは届くことはまずありえない。

それを分かったのかテルモピュライへの攻撃へ全力を注ぎ込んでくるゴ布林共。唯一の救いだ。そこに持てる火力を全てぶつけているが状況は悪い。

今、テルモピュライのすぐ前まで前進された。

俺がいる場所からゴブリンの最前列まで距離は凡そ200m。堀を丘の頂点から200mで作ったからだ。道幅がたった15m程しかないテルモピュライに殺到するゴ布林共。しかしそれはM2の一斉射撃によって未だに突破はされていない。

狭い範囲に多くの火力を集中すればするほど効果は上がる。

今がそれだ。しかも遮蔽物は無く、殺されたゴブリンの死体は生きている仲間のゴブリンの進む足を遅らせる。

そんな動きが鈍ったところに弾をばら撒いていく。通常弾とは言えゴブリンの身体を貫通してその後ろにいるゴ布林までも巻き込んで進んでいく弾。

足元に転がっている仲間の死体が邪魔だと分かったのか奴らは死体を引きずって後ろに下げ始めた。その瞬間に攻勢の手が休んだ。

しかし俺達は引き金を引く手を休める事は無い。

既に銃身は赤くなっている。銃身交換が間に合わなくなってきていたのだ。何とかして交互に銃身交換をしているがそんな事よりも撃たなければ突破されてしまうので今じゃ本当に必要最低限でしか交換していない。

今この時も弾薬運搬係の人達がハンヴィーと各銃座を必死になって往復している。

「いくら往復しても直ぐに撃ち切っちゃおう!!」

「もうそろそろ俺達も限界だぞ!」

「イチローさん!!もう弾薬補給が追い付かないです!人数を増やしてください!」

度重なる弾薬補給の往復で既に疲れ切って足取りも重い。それでも必死になって運んでいるが効率が悪いのだ。あれから何度も交代で休息を取っているがそれでも疲労はたまる一方。

俺はハンヴィーに居るから弾薬を運んだりなんて必要は無いからそこまで疲労は無いから問題は無い。でもレナードさんもノーマンさん達はそうはいかない。伝令と弾薬運搬の兼務、そこに射手まで入って来るのだから疲労は計り知れない。

しょうがない。休息をとっているノーマンさんの分隊も総動員でやるしかないか。

「ノーマンさんの分隊も今すぐに参加させてください!!」

「了解!!」

この際休息だなんだ言っていられない。

15人が必死になつて弾薬を運んでいく。それでも消費の方が多い。まだハンヴィーに積んでいた分と追加で呼び出した弾薬で事足りている。

俺もちよくちよく弾薬を呼び出してハンヴィーの車内に補充している。まだ金に関しては余裕があるし問題は無くは無いが大丈夫だ。あくまでも現時点では、という事では無い。それも長くは持たないだろうと予想出来る。

そしてそれから戦闘開始から4時間後、ゴブリン共は撤退を開始。ゴブリン側の損害は凡そ3万。当初予想されていた総数を軽く超える数であつた。

しかし何故今このタイミングで撤退した?このまま攻め続けていればその内に、物量に耐えきれなくなつた俺達を磨り潰せただろうに。何故今になつて撤退を?訳が分からなさすぎる。それでも考えている暇は無い。

怪我人が居るのならばその治療を、そして俺達は弾薬の補充、M2を一度格納する。どういふ原理だか知らないが一度格納すると元の完璧な状態に戻るのだ。まあその辺

は良く知らんがまあ有難いぐらいにしか考えてないのだが。だってどうやって確かめろと言うのだ？ 少なくとも確かめる手段が思い付かない。

格納して暫くしてからもう一度銃座に置く。今回は交換用の銃身を多めに用意しておいた。まあそれでも意味がなくなるんだろうが無いよりはマシって事だ。

銃座には交換用の銃身、弾薬を先程よりも多く置いてある。

これで何時攻められても攻勢の初めの方ならば押しとどめる事が出来るだろう。

そして今の内に食事を済ませて少しばかりの休息を取った。そして再び始まるであろう大規模攻勢を待ち構えたのだが何も来なかった。

おかしいにも程がある。普通これだけ攻撃したのだから撤退したとしても間髪入れずに再攻勢を仕掛けてくる筈なのだが。何がしたいのだ？ もしこの丘を迂回するのなら不味いな。一応偵察した方が良いのか？

するとそこにエルフロントさんがこちらに来た。

「おい、団長が呼んでいる。来い」

「あ、分かりました」

どうやらクレイドルさんに呼び出されたらしい。相変わらずエルフロントさんは態

度キツイな。物凄く睨んで来てるし相変わらず嫌われているのか。

「クレイドルさん、一郎です」

「おお、来てくれたか。そこに座ってくれ」

クレイドルさんの天幕に向かい、声を掛けると指示を出していたクレイドルさんが中に案内してくれた。

言われた通りに椅子に座る。

「さて、急に呼び出して申し訳ない。幾つか聞きたいことがあつてな」

「聞きたい事？」

「ゴブリンの行動がな。あそこまで攻めてきておいて撤退したのが気になるのだ。一応他の面々に聞いてみたのだが「我々に臆して撤退した」、とかそんなものばかりでな。そもそも戦ったのは君達だけなのだがな」

「そうですか。それと私を呼んだのと何の関係が？」

「君の意見も一応聞いてみようかと思つてな」

「まあ確かにあそこで撤退と言うのはおかしいです。何を企んでいるのか分かりませんが何かあるのは間違い無いですね」

「迂回して町を目指すか、それとも夜襲を仕掛けて来るのか。他に何か目的があるのか。どちらにせよ何かあるのは間違い無い」

「どうしますか？偵察をした方がいいと思いますか？」

「偵察をした方が良くと言うのは賛成だ。しかしそれを行うとなると当然危険度が比
じやなくなる。イチローや私の部下の騎兵ならば足の速さで偵察を行うことは出来る
だろう。しかしギルドの人間は馬を持っていない。流石に徒歩で偵察をさせるわけに
もいくまい。それにそんな場所に部下も君も送り込むわけには行かない」

「いえ、私ならば問題無いです」

「しかし君は既に今までの戦闘で指揮を執りながら自身も戦い続けていただろうか？」

「私は他の皆さんと違って運んだりするのに駆け回ってはいけませんから体力的にはまだ
十分です」

「しかし君は今後も予想される戦闘で指揮を執って貰わなければならない。今此処で君
の体力を消耗させるわけには行かない。それに今は一人の損失でも避けたいのだ。こ
の通り我々の戦力は限られているし君の方も限界はあるのだろうか？」

「それはそうですが、私は直接動いたりしていたわけでは無いですし、偵察すると言つて
も馬に乗ったりするわけでは無いですから。どうか私にやらせて頂けませんか？」

「しかし………分かった。だが条件がある」

「条件？」

「君一人で送り込むわけには行かない。2人必ず連れて行く事だ」

「……断るといふ事は出来ませんか？」

「駄目だ。先程も言ったが君を今ここで失うわけには行かない。本来ならば偵察に行かせることも却下したいぐらいだが、確実に偵察を成功させる事が出来て尚且つゴブリンに見つかつても逃げ切れるとなると君しかないからな。しようがなくて」

「分かりました。付いてくる人はこちらで指名しても？」

「1人はこちらで指名させてもらおう。もう1人は好きにすると良い」

少しばかり手間取つたが何とか俺が偵察する事が出来るようになった。問題は誰を連れていくかだが、レナードさんでいいか。この人にはM2の射手をやつて貰おう。

もう1人は助手席に座つてもらうしかないな。

というか誰が来るんだろうか？

「レナードさん、偵察に行く事に成つたのですが一緒についてきてもらう事は出来ますか？」

「偵察ですか？ええ、いいですよ」

「ありがとうございます。準備をするので少し待っていてください」

「いえ、私もお手伝いさせていただきます」

「ありがとうございます」

レナードさんに関しては二つ返事で了承してくれた。

そしてノーマンさんにはもしゴブリンが攻めてきた場合は代理で指揮を執ってもらう事にした。

そして準備していると声を掛けられた。

「おい、偵察に行くのなら早くしろ」

「エルフロントさん？どうして此処に？」

「団長の命令でお前の偵察に付いて行く事になったんだ。全く、なんで私が……」

まさかのエルフロントさんが同行者の一人だった。まあ別に良いんだが大丈夫だろうか？

取り敢えずエルフロントさんには助手席に座っていて貰い、俺とレナードさんは準備を進める。万が一俺が帰ってくる前に攻勢が再開された時の為に弾薬を可能な限り多く呼び出しておく。

後はハンヴィーのガソリンを満タンにしておく。

準備で大体30分程使ってしまったがまだ時間的には昼頃だ。多分1時ぐらいだろ

うか？

再度、問題が無いか確認をして運転席に座る。

「レナードさん、射手をお願いします」

「お任せください！」

「エルフロントさん、気を付けますが大きく揺れたりするかもしれないのでお気を付け下さい」

「ふんッ」

相変わらずエルフロントさんは俺の事が嫌いらしい。レナードさんは既に初弾を装填して何時でも撃てる状態で銃座に付いている。

それじゃ、出発しよう。楽しい楽しい偵察行動の始まりだ。

再びの偵察、戦闘準備

今走っているのはゴブリン共の死体の山の中。

そりやそうだ。俺達があればM2をぶっ放して殺しまくったんだから。

異臭が漂うがそれをどうにか出来る訳でも無い。これだけの死体の山を埋めるにしても、どう考えても重機が必要だ。人力ともなればどれだけの日数が掛かる事か。

それに燃やすとしても俺で言えばガソリンだが、所謂油の必要量も半端じゃない。

俺がガソリンで燃やすとしたら一体どれだけのコストが掛かる事やら。

それに付随して本当に死んでいるのか、という問題も出て来る。12.7ミリ弾でミーンチにされているとは言っても万が一生きていたら大事だ。それだけで奇襲が成立してしまうし最悪人命に関わる。1匹1匹確実に確かめなければならぬ。そうなる銃弾換算で凡そ3万発を消費することになる。そんな銃弾は何処にも存在しない。あるんだったら俺達がゴブリン共に向けてぶっ放すに決まってる。

しかし今はゴブリンの動向を探る為にハンヴィーを走らせる。

しかしそこまで速度は出さない。今回は偵察なので敵に気付かれてはならない、と言う事が求められる。だから丘に陣を張る前の偵察は正直見つかつてても本隊との距離もあつたし何より戦闘が始まってすらいなかつたからそこまで気を付ける必要性は無かつた。

しかし今現在はゴブリンとの戦闘が開始しているのに加えてもしゴブリン共が丘を避けて迂回するような行動を取っている場合だと話が大きい違って来る。

もし迂回をするのなら俺達は何が何でもそれを突き止めなければならぬし、ゴブリン達は何が何でも見つからないようにしなければならぬ。

しかも迂回をするという行動を偵察に見られたのならば、その偵察を何が何でも捕縛、もしくは排除しなければならない。

速度を出すと砂煙等が生じるがなるべくゆっくりと走る事で出来るだけ目立たないようにしているのだ。ここが森の中だったのならば枝葉を付けるなりして偽装も出来るのだが平原のド真ん中じゃ木も無いし意味が無い。しかも今は緑の草しかない時期

で付ければ暫くは問題無いだろうが窺って暫くたつと草の色は勿論変わる。だから今回は敢えてつけないことにしている。見つかるか見つからないかは距離と運による。遮蔽物も無ければ偽装を施しているわけでも無いのだから。

だがゴ布林共の血肉でハンヴィーが汚れていくのは確かだ。

前方約2kmに渡って死体の山が出来ているのだ。そこを通らなければどちらにしろ偵察など出来る訳も無い。

2000mラインを超えてもまだ死体の山は続いている。

恐らくこの辺りを狙っていた時に、跳弾したり狙いが外れた弾が当たったりしたんだろう。

100m先から25cmのコンクリートを貫通するだけの威力がある。唯の生物に對して撃てばどうなるかは明白だ。

そしてそれを過ぎて漸くまともな、死体が転がってない草原が見えて来る。

さて、ここからはより注意しなければならぬ。何処から現れるのか分からないし。

平原と言つても小さい起伏はそこら中にある。

俺達が陣取っている丘はこの平原でもかなり高い部類に入るらしい。なので他が低

い分見渡せる範囲が広い。双眼鏡も使えばより見渡せるようになるが残念ながらその範囲にはゴ布林共は居なかった。

だからこうしてハンヴィーで偵察をしているという訳である。

残念ながら俺の探知には引っかけりそうにない。

隣には最初から不機嫌そうだったが、ゴブリンの死体の山のド真ん中を突っ切ってきたせいで余計に不機嫌そうになっているエルフラントさん。エルフラントさんには双眼鏡を渡して警戒してもらっているが起伏がある為そこまで遠くまで見渡せない。

そして銃座にはレナードさんが。一応防循（射手を守るための盾と思ってくれればよい）

で困っている為、その内側に弾薬を置けるように柵の様な物を設置してある。そこに予備の弾薬を置いたりしていたがそれも終わって双眼鏡を覗きながら辺りを警戒している。

そして暫く行くと、レナードさんが声を上げた。

「イチローさん、ゴ布林共が見えました」

「了解。詳しく見ることは出来ますか？」

「……………すみません、この距離だと厳しいです。臍気にしか分かりません」
探知でも発見できない距離。結構遠いな。

丘から大体10 kmか？いや、もつと離れてるな。恐らく15 km程。オール大森林まで5 kmつて所か。

「分かりました。前進するので全体を確認出来るようになったらもう一度声を掛けてください」

「分かりました」

そしてハンヴィーをゆっくりと、時速8キロ程で前進させる。

「イチローさん、見えました」

「了解です。そのまま周囲の警戒をお願いします。私もそちらに登ります」

ハンヴィーからゴブリンの大軍まで概ね4 kmと言った所か。

「了解」

「エルフラントさんは此处で待っていてください。もし何かを見つけたら私に言ってください」

「ふん、分かっている」

屋根に上って双眼鏡を覗く。

その先にはゴブリンの大軍が蠢いていた。

そしてどんな動きをしているのかをしつかりと観察する。

「……!!?ゴ布林共、どっからあれだけの数が湧いて出て来るんだ……」

レナードさんがそう漏らした。

それも領ける。先程の戦闘で約3万ものゴ布林を殺したというのに、目の前に居るのは5、6万もの大軍だ。今更だがこれ以上の可能性も十分に有り得る。

本当にどこからあれだけの数が……?

しかし、どうして移動準備を一切行っていないんだ?あれだけの損害を受けたのなら普通は迂回を考えるはず。

「……イチローさん、奴ら撤退と言った移動準備をしていませんね」

「ええ。そもそも迂回するんだつたらとつくにこの場所には居ない筈ですし」

「確かに。そうするとやはり……」

「我々への再攻撃、でしょう。この時間帯に攻めてきていないのであれば恐らくは……」

「夜襲、ですか」

「でしょう。ん?……!!レナードさん、あの奥の方に居るデカイ奴、見えますか?」

「奥の方……?!?!?!?!?!なんだあいつ……ゴ布林、なのか?」

「あれを見た事や聞いた事は?」

「いえ、ありません。恐らく変異種かと。でもオークでもないのになんで……」

あのゴブリンの集団の奥の方、一番安全な場所に居る他のゴブリンとは明らかに違う存在。

さて、ここで変異種について説明しておこう。

先ず変異種と言うのは文字通り、元々の魔物や魔獣が何らかの影響によつて変異した存在だ。

様々な種類が確認されているが早々起こる様な事では無い。

ゴブリンとは別種族のオークは変異種であるオークロード、オークジェネラル、オーククイーン、オークウオーリア、オークメイジ等が確認されている。

まあ何十年も昔の話だが。それでもオークの変異種は他の変異種に比べると頻繁に出現するらしい。最後に出現したのは何と言ったか、何処かの帝国領内で10年程前の事らしい。その時はオークの何倍もの兵力でゴリ押しして殲滅したのだとか。

で、何故オークの話をしたのかと言うとオークロード等が出現した時と今回の騒動が酷似しているのだ。

オークロードと言うのはそのままの意味でオークの王だ。

その特性として強靱な肉体と高い知性を誇る。強靱な肉体と言うのは体高が3mに達したり、

知性の方は並の人間程度だそうだが。

そしてもう2つ。

大規模な数の群れを率いる事と、配下にあるオークを強化する、という物がある。

大規模と言うのは数万規模で、出現した地域等で変わって来るのだがその辺は割愛しよう。

そして支配下のオークの強化は身体能力を引き上げる事だ。まれにオークメイジが出現するがそれが配下に居る場合、扱える魔法の威力と種類が増える。

そして今回の状況は殆どこれなのだ。殺した数を含めると約10万。そして近接戦闘をしたわけでは無いから分からないが報告にあつた異常なほど強いという事。

それを考えるとどう考えても今まで未確認だったゴブリンにもロード級の変異種が現れたのは明らか。いや、もしかするとその上を行くかもしれない。

「分かりません。ですが、今回の一連の騒動の黒幕はあれで間違い無さそうですね」「なら急いで戻って報告しないと……」

「いえ、もう少しだけ観察しましょう。もし報告するのならば詳細な情報が必要になり

ますから」

「分かりました」

「レナードさんは警戒をお願いしても宜しいですか？流石にあの変異種が無能だとは考えにくい」

「了解です」

よし、こうなれば正確な規模と、本当に夜襲を仕掛けて来るのか、仕掛けて来るのならばどれだけの規模で、いつなのか。

そして何よりも重要なのは変異種について。

体長、体高、見た目その他諸々。

それをしっかりと記録しなければならぬ。

メニューを開いて紙とペンを呼び出す。

そして双眼鏡を覗きながら書き記していく。

20分程して漸く書き記し終わった。

夜襲を仕掛けて来るのは確実。間違いない。恐らく松明と思われる物の準備もしていたし、俺達で言う所の天幕の様な物の存在も確認できた。

迂回をするならば既にそれらの作製はしていないし、天幕なんてとつくに引き払っている。

そして仕掛けて来るのは恐らく今日ではない。あれほどの規模の全てに対して夜襲の準備をさせていると思われる。最悪今日の夜だとしてもまだ時間はある。

そして変異種についてだが、取り敢えず見た目や行動、周りのゴブリンの反応を片っ端から書きまくった。

研究者じゃないからどうすればいいのか分からない。

本当はカメラで写真を撮っても良いんだがカメラを呼び出す金が惜しい。

今はこれで我慢しよう。

「……よし、レナードさん、終わりました。出発しましょう」

「了解です」

そして運転席へ戻る。するとエルフラントさんが少し赤い顔で俺に言って来た。

「……おい、その、ちよつと待ってくれ……」

「どうかしたんですか?」

「その……」

よく見ると股を抑えてもじもじしている。

まさか……

「排泄、ですか？」

「つ!!……（コクン）」

俺が気まずそうに言うのとエルフロントさんは顔を真っ赤にして頷いた。

「まじか……」

そう言ってしまったのは許してほしい。

出来るだけ時間を無駄にしたくないし、何よりも此処は敵地のド真ん中と言ってもおかしくはない場所なのだ。

そこでトイレをしないと言われても、その、物凄く困る。

「頼む……もう限界なんだ……」

恥ずかしそうにそう言う彼女に不覚にもドキッとしてしまった。

出会ってから態度を考えればしょうがないのだ。

でも限界か……ハンヴィーの中でされるよりはいいか……

仕方が無い。

「分かりました……いいですよ」

「ほ、本当か!？」

「ええ。ですが私も付いていきます。ここは敵地のド真ん中ですから。一人で行かせる

わけには行きません」

「くっ……わかった……頼む……」

M4を取り出してマガジンの確認を行う。

マガジンポーチに30発入りが6本、M4に挿し込んだある物を入れて7本、計210発。

それとハンドガンのM9本体に挿し込んだある15発入り1本と他マガジン2本、45発。

よし、大丈夫だ。

M4のコッキングレバーを引いて装填。安全装置は掛けておく。

M9の方もスライドを引き装填しておく。

車内ならM2が銃座にあるし何より俺が運転していて撃てないから別に装填していたりする必要は無いのだが。

「レナードさん、少し周りの様子も偵察してきます。エルフロントさんに付いて来て貰うので此処で待っていて貰えますか？」

「?了解です」

「すみません、ありがとうございます。エルフロントさん、行きましょう」

そして出発する。

と言つてもレナードさんから見えない距離で遮蔽物がある場所なだけけど。でもここでトイレは本当にタイミング悪すぎじゃないか？まあいいんだけどさ。エルフラントさんと共に歩いて行く。だがエルフラントさんはかなり我慢しているのか足取りは遅い。

これじゃかなりのタイムロスになつてしまふぞ。

「エルフラントさん、少し急ぎましょう」

「う……」

そして何とかレナードさんから見えない場所にやつて来る。正直な所奴らの歩哨が巡回している事もあるだろうから出来るだけ短時間で済ませて欲しいのだが流石にそれを求めるのは無理がある。

何故ならエルフラントさん鎧を着込んでいるし、見た感じ脱がないと無理そうなんだけどあれどうするんだろうか？

まあその辺は色々あるんだろうから聞かないでおこう。

「この辺で良いでしょう。それでは手早くお願いしますね。私は向こうを向いていますので何かあつたら読んで下さい」

そして見えないように別の方を向くと、後ろから服を引っ張られる。

「ん？どうかしましたか？」

「その、鎧を脱ぐのを手伝って欲しい……」

「え？それ一人で脱げないんですか？」

「何時もは……従者が、手伝ってくれるから……」

余計に顔を赤くしながら俯いて言うエルフラントさん。

エルフラントさんの鎧は所謂、全身を覆うタイプで脱ぐのに一人では無理があるやつなんだそう。

確かに間接以外はしっかりと覆われている。これじゃ背中とかに手を回したりするのは無理がありそう。

と考えて思った。

……これも手伝うしかないじゃん。

これ脱がしたら下着でしたとか止めて欲しい。

「分かりました……鎧の脱がし方なんて分からないので出来れば指示が欲しいんですが」

そして初めて鎧に触って手間取ったが何とかして脱がすことに成功した。

と言っても上半身だけでこれから腰回りとかを脱がさなければいけないんだけど、何とかして腰回りの鎧を脱がせることに成功。

あとは足だけとなったが、後ろにある留め金を外して終わり。

足の鎧を脱いだその瞬間、エルフラントさんは少し離れた1m程土が盛り上がったところに行つてしゃがみ込む。流石に直接見えないとは言つても、俺は顔を背けて出来るだけ何事も無かつたかのようにしておく。

勢い良く流れているであろう水音なんて聞こえない。聞こえていない。

しかし鎧の下がいきなり下着じゃなくて心底良かった。

考えてみればそうだ。レナードさん達もそうだったし。

すれたりするのだろう、薄手の長ズボンと長袖のTシャツのようなものを着ていた。

というか鎧以外の姿のエルフラントさん初めて見たぞ。鎧を着ていなければ普通の女性の様な感じなんだな。かなり胸も大きか……つとこういう事を考えるんは止めておこう。

だが恐らくEかFぐらいか。

今更だがこの世界の人達は総じて、あくまで俺視点だが、美男美女が多い気がする。

何時も寝泊まりしている宿の女将さんも今は恰幅が良いというか、まあそんな感じだが昔はかなりの美形だったのだろうと思われる。

ついでに言つておくとエルフラントさんはその中でもかなりの美人だ。

なんてこんな死ぬかもしれない状況なのに場違いな事を考えていると、

「きやあああ!!」

悲鳴が聞こえてきた。

何事かと思つて駆けつけると、四匹のゴブリンとその内の一匹のゴブリンに担がれているエルフラントさんが居た。

必死に抵抗しているが、どう考えても力関係が圧倒的に負けている。

間近で見ると明らかに普通のゴブリンとは違つてデカイ。普通のゴブリンは大体1、5 mぐらいだが、2 mは間違いなくあるな。

エルフラントさんがゴブリンを必死に殴つたり蹴つたりするが全く聞いていない。

それどころかゴブリン4匹は下衆びた笑みを浮かべている。

どうせ獲物が手に入った、雌が手に入ったと喜んでいるんだろう。

オークとゴブリンは魔物の中でもずば抜けて繁殖力が高い。しかしそれ故に同種族の雌だけでは足りなくなることがよくある。その時に奴らがどうするのかと言うと他種族の雌を攫つて来るのだ。

オークもゴブリンも他種族の雌でも孕ませる事が出来る。

だからだろう。

必死になつてエルフラントさんは抵抗するがどうにもならない。

M4を構えてダットサイト越しに狙いを付ける。しかし担がれて暴れているからか頭に狙いを付けるも上手く狙えない。

クソツ!!このまま撃てばエルフラントさんに当たる可能性が高い!

「はな、離せ!この……!」

「エルフラントさん!頭を隠して!暴れないで!」

「ツ!!」

咄嗟に俺がそう叫ぶと、エルフラントさんは指示に従つて頭を腕で隠して暴れるのを止めた。

その瞬間、狙いを付けていた頭に向かって引き金を引いた。

ビシュ!

そしてエルフラントさんを担いでいたゴブリンが一瞬で絶命する。

幾ら強化されていて身体もデカくなっているとは言つても急所の頭をブチ抜かれたら死ぬに決まつてる。

しかし俺が大声を出したからかゴブリン3匹はこちらを向いて仲間を殺した俺に向かって抜刀しながら向かつて来る。

幸いな事にいざ戦闘になつても良い様に消音機を付けていたから本隊の方には気が

付かかっていないはず。M2に関しては別問題だ。

ぶっ放しても大丈夫だろう。距離もある。そう簡単に銃声が届くことはない筈だ。

ビシユビシユビシユ!!!

ゴブリン共は斬りかかって来るが残念ながらそっちの剣が俺を切る前に俺が撃ち放った弾丸の方が先に到着する。

続けざまに三連射するが2匹には命中。

しかし1匹には当らず弾は逸れた。

しかしまだ距離はある。

頭に狙いを定めて撃つ。

ビシユ!

その弾丸は狙い通りゴブリンの頭を撃ち抜いた。

ドサリ、と音を立てて人間の倍はある横幅を持ったゴブリンが倒れた。

他にゴブリンが居ないかしつかりと周りの確認を行う。

そしてエルフラントさんの下に向かう。

「大丈夫ですか!?!」

「足が、抜けない……!」

駆け寄ると下半身がゴブリンに押し潰されていた。

急いで引つ張り出だす。

幸いな事に怪我などしていないようだ。

あちこちにゴブリンの血が付いている。エルフラントさんの血ではないな。

擦り傷があるがこれぐらいなら俺の治療魔法と呼び出せる医療キットで何とでもなる。

そして抱き起す。流石にあんな事があつたからか身体に力が入っていない。

抱き起して立たせた後に離すとふらついてしまい咄嗟に支えた。

震えている。

それもそうか。俺が助けることが出来なければ間違ひ無くエルフラントさんはゴブリンに犯されていたのだから。

下手をすれば何万もの数に。孕んでも飽きること無く。残念ながらそうなった人の末路は大抵は精神が壊れても尚犯され続ける。文字通り死ぬまで。下手をすれば死んでも犯されるのだ。その後は食料として食われる。

何度かそう言ったのを見た事があるが良い気分じゃないのは確かだ。

そんなエルフラントさんを支えるが、排尿している時に襲われたからかズボンを履い

ていなかった。勿論下着もだ。

丸見え状態な訳だ。

「その、こんな時で申し訳ないんですが、ズボン、一人で履けますか？」

「え？……ッ！」

俺が行ってから思い出したのか少しポカンとした後に思いつ切り首の方まで真っ赤にして局部を手で隠した。

「……………」

無言でこつちを睨んでくるがそれは俺のせいじゃないので勘弁して欲しい。

しかしまだ足は震えていて立っているのもやつとなのか、ズボンを履こうとしない。

あー、これはもしかして俺が履かせないといけないのか……？

その考えは的中したらしく、今までのどの時よりも顔を赤くしながら、

「その、ズボンを履かせてもらえないか……？頼む……」

小さな声で言った。

そんな時俺は、

今日だけでエルフロントさんの赤面を何度見たんだろう？

なんて場違いな事を考えてしまったのだった。

————— side コルネー・エルフラント

突然、尿意が私を襲った。

それは偵察であの男の鉄の箱の中に居た時だった。

流石に我慢できるぐらいだったし別段問題は無かったのだが、そのまま偵察を続けている内にどんどん大きくなっていく尿意。

こんな所で止まらせるわけには行かないから我慢していたが、止まって男が屋根で何かしている時にはもう限界だった。

だから男が屋根から戻って来た時に恥を忍んで言った。

我慢の限界だから頼んだ。

流石に排尿したいから行かせてくれなんて恥ずかしくて言えないが態度で察してくれた。

まあその後に言葉で言った時は殺してやろうかと思っただが。

その後、流石に一人で行かせるわけには、という事で男が付いてきたのだが。

レナードから見えない位置に着いた時、この鎧を外すのには1人では出来ない事を思
い出した。

だから男に手伝って貰って鎧を脱いだ。

鎧の下にはズボンと長袖のTシャツを着ているから、この男からも見えない所に行つ
たらズボンと下着を途中まで脱いでしゃがんだ。

そして出し切つて戻ろうとした時に、いきなりゴブリンが現れたのだ。

数は4匹。普通ならば素手でも殺せるが、明らかに普通のゴブリンじゃない。

本能が勝てないと訴えてきていた。

その瞬間に私は情けないことに悲鳴を上げてしまった。

立ち上がつて逃げようとするがズボンと下着が引つかかつて転んでしまう。

そしてゴブリンが私を軽々と担ぎ上げて連れて行こうとした。

ゴブリンはオークと並んで一番人間に忌み嫌われている魔物だ。

理由はその高すぎる繁殖力にある。

他種族でも孕ませる事が出来る程の繁殖力を持ち、群れの中の雌が孕むと人間やエル
フ、ドワーフと言つた人型の生物を襲つて、女を攫う。男は殺されて食われる。攫われ
た女は孕んでも犯され続けひたすらに侵され続ける。死んでも犯される時もある。し
んだら食料として食われる。

私はそんな未来を想像してしまった。

だから必死に暴れたが全く聞かない。汚い声で笑うゴブリン。

村娘の様に必死に暴れて、このままこいつらに犯されるのかと思っていたが私の悲鳴を聞いてあの男が助けに来てくれた。

暴れていた私に向かって暴れずに頭を隠せと指示して来た。咄嗟に頭を隠して動くのを止める。

するとゴブリンが頭から血を流して倒れた。そして後からビシユツ！という音が響いてきた。

その後に連続してさっきの音が3回、あとからもう1回聞こえてきた。

私は倒れたゴブリンの下に足が行ってしまったが周りを見ると既にゴブリンは全部死んでいた。

そして男が周りを見渡して他に危険が無いかを確認すると私の下に駆け寄って来て下敷きになった足を引つ張り出してくれた。

怪我が無いかを確認すると倒れた時にゴブリンの血で汚れた私を抱き起してくれた。

そして一人で立とうとするとふらついてしまった。

見てみると足が震えているのに気が付いた。

はは……情けないな。騎士として訓練して来たのに、いざゴブリンに犯されそうにな

れば私も女という事か。

男に寄り掛かって支えて貰っている、男が気まずそうに言った。

「その、こんな時で申し訳ないんですが、ズボン、一人で履けますか？」

何を言っているのか分からず呆けてしまったが、言葉の意味を理解した。

そうだ、私はズボンも下着も履いていない!?

分かった瞬間、手で股を隠す。

しかし一人で立てないのにそんな事をしたものだから男に更に身を任せてしまう事になる。

睨んだが男が悪いわけでは無いので単なる八つ当たりだ。

死ぬほど恥ずかしいがこのまま戻る訳にも行かない。

男にズボンと下着を履かせてもらうのを頼んだ。

その時に出した声は自分でも驚くほど小さく弱々しい声だった。

履かせてもらう時に、男が私から離れてしゃがんだ時、局部を顔面に押し当ててしまった。

手は邪魔だろうとどけていたのが仇になったか……!

顔を叩こうとしたが命の恩人にそんな事出来る訳も無い。

気が付いているだろうな……！

だって顔を真っ赤にしているのだから……ッ！

その後、履かせて貰っている時に本人は目を瞑っていたがもうこうなつては見たも同然だ。

まあしかし後で礼を言わなければな。

ギルドの連中は嫌いだが恩知らずではない。私の命と貞操を守ってくれたのだ。

礼の一つ言うのが普通だ。なんならこれからの戦闘で色々と手伝ってもいいかもしれない。

しかしそれとこれとは別だ。私の局部をガッツリ見たのだからその責任はしっかりと取ってもらわねばな。

あんな場所で女性のズボンと下着を履かせていた人間がよく言うなんて言わないで欲しい。好きでやったわけじゃない。

そして丘に戻って来た。

時間にして1時間程だったが物凄く長く感じた。

それからは一応今夜は夜襲が無いだろうとは言え先程の事で偵察していた事が気が付かれている可能性が高い。そうなると準備期間を与えないという意味合いですぐさま攻勢に出てくる可能性がある。

正直、あれだけの数なのだから4匹居なくなつたぐらいでは問題無いと思うが、これが地球レベルの連絡手段を有していたのなら完全にアウトだ。

しかし、そう言う所は結構雑然としているだろうと想像出来る。
備えあれば憂い無し、と言う事だ。

M2の銃座に再度弾薬を運び込んで警戒態勢の状態で待機させておく。
そして俺はクレイドルさんの所にエルフラントさんと共に報告に行く。

「——以上です」

「……………そうか」

クレイドルさんは重々しく口を開いた。

それもそうだ。約3万もの数を削ったのにも関わらず未だに6、7万の数が残っているのだから誰だってそうなる。

しかも夜襲と来たのだから余計だ。昼戦ですらあの状況だったのに夜戦ともなれば普通なら皆殺しにされていてもおかしくはない。

そうやって来ると取り急ぎ夜間での視界の確保が必要になって来る。

照明弾とかがあるがそれを使うとなるとどうしても最低限、迫撃砲クラスが必要になる。しかし迫撃砲を呼び出して照明弾のみとなるとかなり勿体無い。勿論金銭的な意味合いを含めてだ。口径にもよるが迫撃砲って言うのは榴弾なども撃つ事が出来る。となるとM2だけの火力不足を補えることは間違い無いのだが、M2の弾薬だけでもかなりの消費量なのだからそこに加えて迫撃砲の砲弾まで加わる事になると弾薬補給の方で色々と不安が出て来る。

しかも1門だけでは意味が無いのだ。

別に1門でも良いのだがこれだと命中精度の方で不安が残る。

まあ数が多いのでどこに撃ち込んでも確実に命中するので問題は無いのだがどうすればいいのだろうか。

残念ながら既に6挺のM2の弾薬消費量の関係でこれ以上M2銃座を増設する事も出来無い。これ以上増やすと、今でさえ先程の戦闘で補給が途切れかけたのだ。いや、何度か弾薬が届かずに射撃が出来なくなることが度々あった。

そんな状況なのにこれ以上増やすとなると補給が行き渡らなくなるのはどう考えても必然となつて来る。

火力の増強と夜間の照明の確保はしないといけない。

だがこれ以上銃座を増やせば戦う事すら怪しくなってくる。しかもM2じゃ夜間照明の確保は出来ない。

曳光弾が5発に1発の間隔で入っているが夜間等の、視界が不十分な時に自分の撃っている弾がどんな弾道を通っているのかを見るための物であつて残念ながら夜間照明には成りえない。

取り急ぎの処置としては有り余ったM2の使用済み弾薬箱にガソリンを入れて置いておくか、クレイドルさん達が持つて来たバケツを幾つか拝借して簡易的なライトの様な物を作るか。

弾薬箱松明は明るいとは言つても照らせる範囲に限りがある。

しかし流石に只でさえ少ない物資を貸してくれるとは思えない。

そこは交渉するなりすればいいのだが……

……よし、今夜中に夜襲が無かったら迫撃砲を呼び出そう。

金銭的不安が残るとは言っても流石に夜間照明が松明モドキじゃ不安どころではない。弾があつたたらガソリンが漏れたりして火の海だ。

それじゃ何の役にもならない。焼き払うという意味では良いのだろうがそれでもだ。砲弾にも幾つか種類があるが榴弾と照明弾のみに絞っておけば問題は無い筈。

と言つても他の砲弾が化学兵器弾や戦術核砲弾なんていう物騒過ぎる物ばかりだ。

まあ扱う予定の迫撃砲はL16 81mm迫撃砲なのでそう言う特殊弾頭は使う事が出来ないのだが。

本当ならば大口径の榴弾砲を扱いたい気持ちもあるのだがこいつは迫撃砲に比べると値段も高いし、場所も取るし、運用コストも高い。何より扱いが難しい。

かなりの訓練をしなければしつかりと扱う事も出来ないしそんな状態で使用したら事故が起こるのが必須だし効果的な砲撃が出来ないだろうと思われる。

しかも射程が長いので5km以上先は残念ながら直接照準射撃が行えない。

それ以上の距離になると照準方法が間接照準射撃になるのだがこれがまた難しい。

今此処で説明をすると様々な機器の説明から始めなければならぬので割愛する。

そしてそれが出来ないという事は長射程を生かせないのだ。それでは意味が無い。

場所の関係もある。

この丘は頂点から半径200mで円を描いて堀がある。その中にM2銃座とハンヴィー、それに天幕を入れるとスペースが無いのだ。

堀の外に設置すればあつけなくゴブリン共に蹂躪されるのは間違い無いしそもそも人員の問題もある。

動かすのに約10人ほどが必要になって来る。全てを考えた上で榴弾砲を扱うのは無理である。

それに比べて迫撃砲は3人も居れば扱える。

しかも最大で毎分20発も撃つ事が出来る。持続して撃つのであれば10発程になるがそれでも十分だ。

榴弾砲の3倍は撃つ事が出来る。

まあある程度の訓練は必要になって来るが射程が5km程度なのでその範囲に限れば調節照準射撃でも全然通用する。

まあ本当に呼び出して使うかどうかは今夜次第、という事になるだろう。

今呼び出して、もし今夜夜襲があつた場合、物凄く不利になる。

最悪、訓練と実戦を同時に行えばいいのだが。そうすれば砲弾の無駄遣いにはならな

い。

それよりも何とかして各銃座への弾薬運搬を何とかしないとイケない。

今の人数を射手を抜きにして総動員してもアウト側のギリギリ。

なんとか他に人員を確保できないものか。

しかしそれだとクレイドルさん達が大変になってしまふ。

迫撃砲を呼び出すにしても1門じゃやはり意味が無い。最低2、3門は欲しい。

3人で動かすから射撃するのに最低9人の人間と、砲弾を運ぶ人間を各門1人だと無理があるから砲弾運搬だけで各門2人は欲しい。

そうすると3門で計算すると15人。だけど休憩無しにすると事故が起こる可能性があるから20人は欲しい。

現時点で20人借りている。そこから更に20人も借りる事になるとクレイドルさんも良い顔はしないだろう。

何だったらエルフラントさんに怒られそうだな。

……やはり迫撃砲を扱うのは無理があるか。

物の試しに相談しておこう。

弾薬運搬に関してはもう頑張つて貰うしかない。
今はそれに関して解決策を見つける時間が無い。

諸々の事に関してひとしきり頭を悩ませた。

本当にやらなければならない事、解決しなければならぬ事が多すぎる。

それからクレイドルさんに相談したり色々とやっているところ2時間が経っていた。

バケツに関しても4つ借りる事が出来た。これで4方向を照らす事が出来る。

あっさりとも人もバケツも貸してくれる事になった。しかも人間に関してはエルフラントさんの部隊だった。

どうやら歩兵とギルドの人間ならまだしも騎兵なんてこの狭い場所では全くの役立たずにはかならないので寧ろどんどん使ってくれ、との事だった。

確かにその通りだ。

直径400mしかない堀に囲まれている丘の斜面で何をどうやって騎兵を使えと言うのか。

確かに平原ならば騎兵が大活躍するところであったのだろう。

しかし俺の提案した戦い方と、圧倒的な数的不利も相まって今回全くと言っていいぐらい何も出来ていなかった。

恐らく歩兵の人達に關してはこれからの戦闘でテルモピュライを突破して来たゴブリンを相手してもらおう事になっている。出来る限り俺達で防がなければならぬ。

理由としてはゴブリンの強さが通常よりも遥かに上回っているから。さっきの4匹は頭を1発で撃ち抜いて仕留めたからあまり分からなかったがよくよく考えてみると確かに今まで討伐したことのあるゴブリンとはやはり違っている。

それと肉弾戦となると犠牲は必須だろう。

出来るだけ犠牲を出さないようにしないとこれからが辛くなる。

死者が0、と言うのが理想だがあくまでも理想に過ぎないのだ。

それから数時間後。

警戒していた夜襲は起きなかった。

そして夜が明けると同時に即座に行動に移すことにした。

まず最初に81mm迫撃砲を呼び出す。まず俺自身が扱えないと意味が無いのでその扱い方を説明欄等を読んで扱えるようにしておく。

その間にエルフラントさんの部隊には81mmを設置するための場所に穴を掘ってその土で土嚢を作って貰っている。

今更なのだが驚いたことにエルフラントさんの部隊20人中20人が女性なのだ。

申し訳ないと思いつながらにも穴掘りをやって貰っている。

まあレナードさんノーマンさんの両分隊も射撃の反動で弱くなっていたりする土嚢で作った銃座を補強したりしていたりとやって貰わなければならない事があるので手伝いに割く事が出来ないのだ。

因みに迫撃砲陣地はハンヴィーの近くに置いてある。

81mmと言っても砲弾は砲弾だ。重いことに変わりはない。重い砲弾の運搬をすることを考えると出来るだけ近い方が良いに決まっている。

M2はまあ射撃の関係上近距離に設置出来ないのだ。

それでも81mmの間隔は3mは離れているのだが。

陣地は2m四方で、四方を土嚢で囲っているものだ。

深さは50cm程掘り下げである。

うん、ちゃんと指示した通りに出来ている。これなら問題無いか。

……よし、これで直接照準射撃の方は問題無いな。間接照準射撃は無理だがこれならば行けるだろう。

そもそも射程が5600m程なのだ。十分に直接照準射撃で事足りる。これが120mとかになったら間接照準射撃でないと狙えなくなってしまうのだが、まあその辺はいいだろう。

「皆さんにはこれを扱ってもらいます」

集めた人達に説明していく。目の前の迫撃砲を見て何だこれは、という顔をしている。

そりやそうか。自分達もM2を扱うのだと思っていたのだろうとは予想できる。

そんなことを気にしていても前に進まないのが早速エルフラントさんの部隊に迫撃砲の扱い方、注意する事等を教えていった。

と言うのも、操作方法に関しては問題無いのだが、射撃の方に問題があるのだ。

簡単に言えば射撃をしていくと砲身が過熱する。

これはM2にも言える事なのだが、81mmはM2の様に砲身交換が出来る訳ではないのだ。そして先程も行ったが最大で毎分20発の射撃が可能なのだが継続しての射撃になると半分の毎分10発になる。

まあそこは数、と言っても4門しかないのであれだが。

戦闘中ともなると焦ったり、もつと多くの砲弾を撃ち込まなければいけない、と無意識に考えてしまう訳だ。そうなると過熱した砲身の冷却をしなければならなくなる。これだと時間の無駄になってしまう。

装填したらすぐさましゃがみ込むこと等を徹底させておく。

こうしないと発射時に砲口から放出されるガスを浴びてしまうのだ。

これ、かなり危険な物で口径が大きくなると吹き飛ばされる可能性すらある。しかもガス壊疽と言つてこのガスを浴びた部分が腐つていく症状も出て来る。そうなると切断するしか無くなって来るのだ。

これは全ての銃火器に共通して言えることなのだが。

そうならないように肌はしっかりと覆わせて、射撃の練習を行つて貰う。

と言つても1000m単位での射撃練習を各距離1回ずつの射撃のみ。あとは照準練習などに限つている。

即座に正確な照準を付けられるようにひたすら反復練習。

いきなりでも出来るようにしておく。M2は2000mライン、(今となつてはゴブリンの死体の山がゴロゴロとしている為によく分からなくなつていますがおおよその目印となる小さな丘を基準にしている)に照準を合わせて、装填をすれば完了。

まあでも今回の戦いに関しては射程内で、尚且つオール大森林に向かつての方向であればどこに撃ち込んでも当たると思われるのだが。

それと今更だが迫撃砲に関する人員の配置はこうだ。

今回用意した81mmは4門で操作するのに1門辺り3人が必要になつて来る。

すると合計で12人。エルフラントさんの部隊は20人なので残りは8人。その8人に関しては砲弾運搬係として働いてもらう事になった。

エルフラントさん本人には適宜俺の指示を伝える、分隊指揮官の役割を担ってもらう事にした。正直な話、俺から指示を直接出すよりはエルフラントさんからの指示の方が言う事を聞いてもらえるだろう、という考えだ。

指示の伝達が面倒だがしつかりとした指示を通して不満を持たれずにする事を優先すればこれが一番だ。

今考えると俺が一番忙しいのでは？

M2銃座5箇所それぞれ指示を出して、迫撃砲への指示もある。そして俺自身もM2の引き金を引かなければならないのだ。

やはり忙しいな。

まあ別に良いのだが。今更文句を言う必要は無いし。

そしておおよそやらなければならぬ事はやった。

あとはゴブリンが押し寄せて来るのを待つだけだ。

流石にここまで来て迂回されたら今までの戦いと準備が全て水の泡になってしまう。訳が分からないとは思いつながらもゴブリン共がここを襲う事を願うばかりだ。

夜襲、そして戦闘終結

偵察から帰還後、丘に迫撃砲陣地を追加してエルフロントさんの部隊20人に計4門の迫撃砲を扱って貰う為にその取扱訓練を行い、照準、装填、砲撃、等の訓練を行った。

そして、今現在は1回目の偵察の次の日の昼だが残念ながらゴブリン側からの攻勢は無い。

此処までくれば殆ど決まったような物だろう。

夜襲を仕掛けて来るつもりだ。

まあまだ迂回、と言う手段も考えられる為、つい先程も偵察した結果、一切の移動準備をしていなかったのに加えて、松明と言った夜間照明等の夜襲の準備を進めていたのが決定的だ。

それにしても、何故迂回という手段を取らないのだろうか？こちらの方が確實だし、間違いないくりーヴオリの町や他の村を簡単に襲う事が出来る筈だ。

まともな防御施設なんかが無い街ならば一瞬で数に飲み込まれて終わりだ。

それに比べるとりーヴオリの町は3m程と低いとは言っても城壁があるから防衛となれば最低限戦う事が出来るだろう。やり方によつてはかなり善戦出来る。しかし工業施設しか無いので食料とその工業施設を動かして武器を作る為の燃料と原料の調達が出来ないのだからそう長くは持たないだろう。

それを考えればやはりこの丘で食い止める事が出来ているのは最良、と言えるのかも
しれない。

別に全てのゴブリンを殺さなくていいのだ。援軍が来るまででいい。しかしその援軍も未だに到着する事が無い。王都からの距離を考えれば、歩兵と騎兵、荷馬車で行動しているのだからそれなりに日数が掛かって当然だ。それに派遣される規模によつて準備と移動の日数が変わって来る。

あの時、ゴブリンが発見された時に報告した数は数千〜1万程度。

とするならば同数かもしくはその倍の兵力で掛かるべきなのは当然だろう。

早馬で報告しに行つても数日は掛かる距離だ。

もしかすると戦闘が始まる前にこちらから町に送った伝令からの情報を得て送り込

む兵力を増やしているのかもしれないが、やはりこの考えは憶測と希望的観測でしかないのだ。最悪、送られる兵力は1万に届けば良い方か。

そして夜襲が始まると思われる日没まで、出来る事をやらなければならぬ。

そこでクレイドルさんに提案したのは、テルモピュライの内側、つまりは陣地側に堀から取った土で土嚢を作り簡易的な壁を作成しよう、という物だ。

厚さを確保して、高さもある程度あれば両側には深さ約9mの堀だ。そこを突破しなければ直接、M2や迫撃砲を潰す事が出来ない。

しかし今の今まで無かったが堀を埋めに来られるとお手上げだ。

ガソリンを撒いて燃やせば火の壁にはなるだろうか？

そうならない様に戦うしかないか。

その俺が提案した土嚢の壁を今は総出で作成している。そのついでに堀の中に転がっているゴブリンの死体を片付けておく。

可能な限り、可能な限り出来る事を、最善を尽くす。その時が来るまで。

土を運び出し、袋に詰めて土嚢にして、積み上げる。それを繰り返して皆で行う。

見張り以外の人間は全員、この壁作りを行う。

「よし！20分の休憩だ！」

その号令で全員休憩を始める。

水を飲んだり、腰を下ろして雑談をしたり。

各々が思い思いの休憩方法で休む。

それから数時間後、厚さ1.5m、高さ2.5mの土嚢の壁が完成した。

この高さならゴブリンの身長よりも高く上から槍で刺すことも出来る。前回何とか防げたのはテルモピュライの狭さのお陰だ。

狭いために大軍の利を生かす事が出来ないからだ。しかしそのテルモピュライですら危うかったのだから対策を講じて然るべきだ。しかしそのテルモピュライです

この壁は、大きさは先程言った通り、それに加えてテルモピュライだけでなく、そこから堀に沿って左右5mずつ土嚢で壁を作り、箱型の様にした。と言うのも弓矢を放つてくるのは目に見えている。だから左右を丸裸にすれば言的にしかない。それから守る為に追加で設置した。そして上から降って来る矢を防ぐ為に、馬車の荷台の板を使って屋根も応急的にだが設置した。これには結構押し問答があつたが矢に曝され

るよりは遙かにマシだ、という事で馬車をバラバラにして木材を作り出した。

どうせ馬車も二度と使えなくなるかもしれないのだから有効活用したただけだ。

まあ土囊の壁のお陰でそう易々と突破される事は無いだろう。

それから再び数時間が経った。

太陽が段々と傾いて行ってもうあと数分で沈むだろう。

太陽が沈んだ。まだ幾分か太陽の光が空を茜色に染めていた。

しかしそんな光景に見とれている暇は、俺達には無かった。

少しづつ、少しづつ何か音が聞こえて来る。

それが、足音だと分かるのにそう時間は掛からなかった。

凡そ5000m先に、動く何かが近付いて来るのが誰の目にも映った。

「おいおいおいおい………何なんだよあの数………あんだだけ殺したのにまだこれだけ残ってるのかよ………」

誰かが言った。

その言葉はここに居る全員の言葉を表しているものだった。

いくら偵察してその結果が報告されて教えられているとしても、直接見るのでは話が全くの別物だ。

まさかこんな日が沈んで直ぐに攻めてくるとは思ってたなかった。

もつと暗くなつてからだどこつちが勝手に思い込んでいただけなのだが。

こうなつてはバケツライトの出番は無さそうか？

いや、攻めてきている方とは別の方向を警戒させておこう。

完全に正面からしか来ないとは限らないのだから。

「……エルフラントさん！部隊を迫撃砲の準備に移らせてください！照準は距離5000で合わせておいて下さい！射撃は私の合図を待ってください！」

「ツ!?了解した！お前達、行くぞ！」

俺の放った指示を聞いてエルフラントさんと、その部下の人達が迫撃砲に飛びつく。そして砲弾の準備、照準をしていく。

それを見て誰もが慌ただしく動き出した。

「急げえ!!歩兵は槍を持って壁の付近で待機しろ!!」

「予備の槍と剣を準備しておけ！時間が無いぞ！」

土囊の内側に置いておく予備の槍と剣を置いておく。

俺達は自分達の準備を進める。

「イチロー！準備が出来たぞ！」

「了解です！合図したら一斉射撃を行ってください！」

「分かった！」

迫撃砲の準備が出来た。

双眼鏡を覗けば既に最前列は迫撃砲の射程である5000mの中に入っていた。

「エルフラントさん！砲撃を開始してください！試射は無し！あれだけの数ですから何処に撃ち込んでも当たります！」

「了解した！射撃開始！」

ドドドドン!!!

4門の迫撃砲が一斉に火を噴いた。

続け様に砲撃が続く。

数十秒後、最初の砲弾が敵のド真ん中に落下した。

そしてゴブリン共の血肉をまき散らしながら弾ける。

81mmとは言っても十分な程の破壊力がある。

それを敵が密集する、正にド真ん中に落ちればどうなるかは想像が簡単に付く。

それが毎分10発のペースで叩き込まれるのだから堪った物ではない。

そのまま最初の砲弾が炸裂してから次々に叩き込まれる砲弾。

それを喰らったゴ布林共は大混乱に陥った。
それはそうだろう。

2000mからしか攻撃が始まらないと思っていたのにその倍以上の距離からいきなり攻撃を受けたのだ。しかも空から。

誰だつて知らない、未知の攻撃を喰らったら混乱するに決まっている。

ゴ布林共は大混乱に陥って右往左往するばかり。

しかしそれも長くは続かない。

混乱しながらも丘に向かってゆつくりと進んでくる。しかし動きが遅いうえに固まっているから1発でかなりの数が吹き飛ぶ。

よし、迫撃砲の方はこのままで大丈夫そうだ。

「各銃座！2000mラインを奴らが超えたら指示を待たずに射撃を開始！」
「「了解!!」」

銃座にも指示を出しておく。

どちらにしろこの数を相手にするのだから混乱するのは間違い無い。

伝令を使っても忙しさ故に指示が通るかどうかも怪しい。

その間もゴ布林共に向けて降り注ぐ砲弾。

「エルフランドさん！そのまま射撃を続けてください！距離の変更はそちらで任せます！ただし先頭集団だけは狙わない様に！それと照明弾を随時打ち上げてください！」

「了解した！」

迫撃砲にも指示を出しておく。

戦闘中で俺が指示を出せるとは思えない。M2だけでも精一杯なのだから。

正直な話、迫撃砲はド真ん中に叩き込んだ方が効果的だ。

先頭集団に撃ち込んでも良いのだがこれは砲弾が潤沢にある場合に限る。

今はそんな余裕は無い。それを考えれば一番効果があるのは敵の密集した場所だ。

そしてまた暫くすると、慣れたというよりは前に進まざるを得ない状況なのかひたすらこちらに向かって進んできた。

そして2000mラインを超えた瞬間、（と言ってもゴブリンの死体の山でよく分かんなくなっているが凡その目印の小さな丘だが）M2銃座が一斉に射撃を始めた。

6本の銃弾の線がゴ布林に向けて伸びていく。

空には照明弾が打ち上げられて光を放っている。本当に、なんの灯りも無ければ真っ

暗闇なのだが、照明弾のお陰で昼間の様だ。そしてそれに照らされて浮かび上がるのはゴブリンの大軍。

見れば見る程なんでこんな数が居るんだよ。おかしいにも程があるんじゃないか？もしかすると世界中のゴブリンが居てもおかしくは無いのだろうか？

「何処でもいい！撃てば当たる！真っ暗闇だろうが何だろうがゴブリンしか居ねえんだ！構うな！弾をばら撒き続けろお!!」

「クツソつたれ!!死ね死ね死ね死ね!!ウジみたいに湧き出てきやがって！クソが!」

「ザマア見やがれ!馬鹿みたいに突撃しかして来ねえ!良いのだ!」

「足も遅い!このまま撃ち続けろ!」

なんとか迫撃砲の働きもあってか昼間よりも丘に向かって来る速度は遅い。

しかも足元にはゴブリンの死体がゴロゴロと転がっていて邪魔をするのか更に遅く
なっている。

ただでさえ狙い易いのに今回は余計だ。

ここに来てゴブリンの死体を片付けておかなかつた事が効いてきた。

3時間後、ゴブリンの先頭集団がテルモピュライに到達した。

それからは土囊壁の向こう側から矢が時折降つて来るが銃座からの射撃と夜間だという事もあつてか散発的だ。

その土囊壁の後ろから、槍を突き出してゴブリンを刺し殺す歩兵。その後ろには交代の歩兵が待機している。

「殺せ！刺し殺せ！ここを何としても守り抜けエエ!!」

「オラア！どうだ畜生共!!槍の味は美味いか!？」

「おい！替えの槍を寄こせ！早くしろ！」

土囊壁の付近でも激闘が繰り広げられていた。

槍を突き出して刺し殺しては引き抜き、再び突き出す。

替えの槍を要求して受け渡し、受け取って再び突き出す。

「がああ!!」

「くっせー！やられた！」

「そいつを下げる！交代だ！」

怪我をした人間を後ろに下げて代わりの人間がその場所に入る。

ただ土嚢壁があるからか負傷者の数は少なく、死者は出ていない。

しかしそれが何時まで持つのかは分からない。

「弾を寄こせ！」

「おい！さっさと持って来い！」

「装填！」

「弾を持って来たぞ！」

「そこに置いとけ！さっさと次に行け！」

M2銃座は土嚢壁付近のゴブリンを歩兵が相手しているからそちらに火力を向けずに済む。

代わりにその向こう側の密集した敵に弾丸の嵐を降らせている。

迫撃砲もエルフラントさんの指示に従い砲撃を続ける。

その合間合間に照明弾も打ち上げる。

凡そ2500mから3000mの間で砲撃をしている。

確かにこの距離は合理的だ。M2の最大射程は6000mだが実際に効果があるのは2000m程度。まともな装備が無いという事を考えれば+2〜300mはあるだろうか。

しかしそれを実際に射撃を行うのは2000mラインまでだ。

まあ跳弾したり貫通したりしているのだが。

だが今はM2の射撃は500m程度の所を狙って撃っている。

しかし何度も言っているがこれだけの数が居ればどこに砲弾を落しても効果は変わらないのだ。

毎分10発なのだが残念ながら2発は照明弾を撃ち上げているので毎分8発になっている。それでも毎分32発を撃ち込んでいるのだから現状では十分だと言えるだろう。

俺はM2での射撃を続けながらも砲弾と弾薬を呼び出しては伝令兼弾薬運搬係に渡していく。

あれからかなりの時間が経った。

どれぐらいかは分からないが2時間は確実だ。

とつくの昔に日は完全に落ち切っている。照明弾が無ければ暗闇の中でバケツライトの僅かな光だけで戦う事になるところだった。

迫撃砲を出しておいて正解だ。

この数ならば迫撃砲の攻撃力と照明弾が無ければ今頃は押しつぶされていたかもしれない。

| | | | | side
| | | | | ???

夜襲を仕掛けることになっていた。

昼間の攻撃で、目前まで迫ったのにあれだけ仲間が殺されたのにアイツはまだあの丘

を攻め落とすことを考えているらしい。

でも夜襲になれば敵から俺達が見える訳が無い。見える距離に近づいたらその時はもう奴らは終わりだ。

そう思っていた。

昼間の戦いであの丘から2000mぐらいの所からしか攻撃してこないと分かっていた。だから夜襲と言えども日没直前、太陽がまだほんの少しだけ辺りを照らしている間に丘の目の前の5000mぐらいに仲間全員が集まっていた。

そうしたらいきなり空からヒュルル、という音が聞こえてきて空を見上げた瞬間に近くの仲間が一気に吹き飛んだ。

それが4か所同時に。

訳が分からなかった。空からの攻撃だなんて聞いた事も無い！見た事も無い！

その4か所の仲間が一齐に吹き飛んだ事を皮切りに空からあのヒュルル、という音と共に空からの攻撃が降り注ぎ始めた。

しかもこれが真つ暗闇になっていたらまだ良かった。

暗くなつてこれじゃ当たらないなんて思つて喜んだら、空が急に明るくなった。

何だこれは!?! どうして空があんなに明るくなる!?

太陽が戻って来たのか!?

空を見上げれば4つの光がゆっくりと降って来ていた。

それに照らされて丘が良く見えた。という事は丘から俺達も丸見えという事なのだろう。

一定の間隔で空を照らす何かはゆっくりと降って来る。

それと共に弾ける何かはどんどん降って来る。

もう仲間全てが混乱状態だ。

先頭の仲間は皆がこの攻撃に混乱して丘へ向かう足取りが止まって右往左往するばかり。後ろから来ている仲間はその俺達によって前に進めず、混乱が伝わって余計だ。その間もどんどん降って来る何かは仲間をどんどん殺していった。

しかしそんな事をアイツが許す筈も無く、無理矢理前に進むしかなかった。

l l l l l
s i d e o u t
|

それから更に数時間後、俺達は劣勢だった。

と言うのも土囊壁に向けて迫って来るゴブリンの数がやはり圧倒的で最初の内は耐えていたがそれもやはり数で押され始めていた。

土囊壁を突破されるという訳ではないが人間の数が足りない。

怪我をして交代して入る。しかしその数も無限ではなくこの状況では補充なんて望める筈も無く、土囊壁を守る兵士のその数は減っていくばかり。

これでは何時突破されてもおかしくは無い。

「おい！早く交代の人間を連れて来い！」

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!腕があ”あ”あ”!?!?」

「おいこいつを引きずって行け！腕を斬り落とされた！」

「暴れるな！おい！止血をするから包帯を持って来い！」

「槍が折れた！替えを寄せ！」

「クソツタレ！殺せ！何でもいいから殺せ！」

「壁の向こうに居るのはゴブリンだろ!?普通のとは桁違いにしぶといぞー！」

土囊壁では必死の抵抗をするも数の暴力の前では意味が無い。

このままじゃ本当に突破される！何か手を打たないと本当に今回ばかりは皆死んじまうぞ……

「ノーマンさんは!?!」

「今は弾薬運搬を行っています！」

「呼んで来ててください！」

「了解！」

幾分か考え、ノーマンさんと呼んだ。

ハンヴィーの銃座に付いてもらうためだ。こうすれば6箇所の銃座はそのまま機能出来る。

俺は土囊壁の方に応援に向かう。でないと本気で不味い。

土囊壁の突破を許したらそれこそ本当の意味でこの戦いは負ける。

あそこさえ何とか守り切って迫撃砲とM2の攻撃で敵の数を減らす事が出来れば勝てる。

増援が到着するまで何とか凌がないと……

しかし期待している増援の数には不安が残るがまあ無いよりはマシ、だろうか。

射撃を続けながら弾薬と砲弾をありったけ呼び出す。

「イチローさん！ノーマンです！何でしょうか!?!」

「このM2をお願いします！私は壁の方に応援に向かう！」

「了解しました！ご武運を！」

「弾薬はこちらに置いておきます！自分の弾薬が尽きたら取りに戻るのですその時に纏めて」

「お渡します!!」

「了解！」

ノーマンさんにハンヴィーの銃座に付いてもらい、自分は土囊壁の方に走り出す。

装備しているのはM4とそのマガジン7本、M9とそのマガジン3本、それに手榴弾2つ。

手榴弾を取り出し、安全ピンを引き抜いて壁の近くに来た瞬間に壁の向こうに投げつける。それと同時に安全レバーが外れて信管に点火される。

数秒遅れで壁の向こう側から爆発音が響く。

続けて2発目を投げる。

そしてまた爆発音が響く。

手榴弾はM67破片手榴弾、と呼ばれるもので内部に硬質鉄線が入っており殺傷能力が非常に高い物だ。

投げる人間にもよるが凡そ40mまで投擲が可能で信管に点火後約5秒で爆発する。

まあ約五秒で爆発してしまうのでそこまで遠くに投げると空中で爆発する事になってしまうのだが。

威力は5m範囲内の人間には確実に致命傷を受け、さらに15m範囲であれば殺傷能力のある硬質鉄線や破片が飛び散る。

テルモピュライの幅は約15m程度。手榴弾1つで完全にカバーできるのだ。

さてこれを人型のゴブリンに向けて、しかも密集している状態で投げつければどうなるのか。

答えは簡単だ。多くのゴブリンを巻き込んで吹き飛ばす。

「ギイイイ!!」

現に向こう側からはゴブリンの悲鳴らしきものが複数聞こえて来る。

それが2回続く。

流石にこれ以上の手榴弾は無い為にM4に持ち替える。

土囊の上に設置した板の上に登ってマガジンポーチからマガジンを取り出し傍に置く。そして伏せる。

土囊で板を抑えていたおかげか障害物となつて伏せ撃ちがやり易い。

バイポットでも取り付けておけば良かったような気がするが、今回ばかりはフォアグリップしか取り付けていなかったのもその辺は後々だ。

ダットサイトを覗いてみればゴブリン共の気色の悪い顔が映る。

その顔に引き金を1回引いて弾を叩き込む。

その撃ち抜いたゴブリンは即座に倒れた。

よし、このまま255発分のゴブリンを殺すでしょう。

あれから数分。

半分近くの弾を1発1発丁寧に叩き込んで殺して行った。

本当はフルオートでばら撒きたい気持ちもあるがそれでは数発が同じ目標に飛んで行ってしまう。

軽機関銃とかなら良いんだが。

セミオートで1発1発殺して行く。

そして遂にアサルトライフルの弾が尽きた。

M9に持ち替え、45発分のゴブリンを殺してから一度ハンヴィーに戻る。

M2と迫撃砲の砲弾銃弾の方が心配だ。

まあ未だに射撃が続いているのでまだ弾薬は残っているのだろうがどちらにしる此処で戻って一旦補充しに行かなければならない。

自分も向こうも。

「すみません！一旦ここを離れます！」

「おう！ありがとよ！」

一言入れてから走り出す。

マガジンは格納しておく。葉莢の事もしつかりと回収。下手に持ち帰られると技術的に再現は不可能だと思うが下手に勘繰られるよりはいい。

まあ此処まで派手にやっておいて今更だとは思うが。

「戻りました!!」

「イチローさん! 怪我は?」

「問題ありません! 今弾薬と砲弾を用意します!!」

ハンヴィーに戻って12.7mm弾と迫撃砲弾を大量に呼び出す。

しかし、ここに来て流石に突っ込んでおいた金の方に不安が出てきたぞ。

まだまだ戦えるレベルとは言っても流石にこれ以上長引けば、不味い。

あとどれほどこの戦いは続くのだろうか。

かれこれ数日だ。疲労も溜まって来ているし、負傷者も出ている。

この現状を見るに、戦闘出来るのは1、2回。

弾薬の心配ではなく、人的損失の問題だ。このペースでの消耗が続けば、というだけ

だ。これ以上攻勢が強まると今回は耐える事が出来たとしても、次の戦いは無理……だろう。

ハンヴィーの横で一度双眼鏡を覗く。

………まだまだいるな。本当に何処からこれだけの数が湧いて出て来るんだ……

日没から戦い続けてもうとつくに日を跨いだ。

これだけの時間戦い続けて恐らく前回の攻勢の倍は仕留めた筈なんだがそれでも勢いは止まらない。

偵察時に確認した数は、一度目が凡そ6万。2度目の偵察ではさらに数が膨れ上がって8万ないしは9万、との結論が出た。

これは正確な数の特定が難しいと判断した俺が、どうすれば正確に判断できるのかをクレイドルさんに聞いてみた所、驚いたことに焚火や調理で上がる煙の数で判断できる、との事だった。

調理時に平均的な焚火であれば最大で5〜60人程度だという。

そして2度目の偵察時にそれを使って検証した。

その結果、どう考えても6万では少なく軽く見積もっても8万はいるだろう、との事

だった。

もしかすると10万、という数が居るかもしれないと言われたときは、これが絶望なのか、と思ってしまうほどの衝撃を受けたのは俺だけでは無かった筈だ。

この数字、俺自身が計算したわけでは無く、一緒に付いて来たエルフラントさんが計算してくれたものだ。可能な限り正確な数を割り出さなければならぬ為、俺ではなくエルフラントさんに頼んだのだ。

そして今、俺達の目の前に居るのはそのゴブリンの大軍勢だ。

幾ら撃つても撃つても数に物を言わせた突撃が絶える事がない。

あとどれほどの時間戦えば終わるのだろうか。

さらに数時間後。

既に空が明るくなり始めていた。

一晩中撃ち続けているのにも関わらず、一向にその勢いが収まりそうに無い。

この夜だけで既に5万は確実に殺しているはずなのだ。

なのにも関わらず最初に2万程殺した時の様に撤退するような素振りは一切見え無い。それどころか攻勢の勢いが強くなってきた感じがする。

密集度が多くなり始めているのだ。

まあお陰で1発1発の獲物が増えて弾の無駄遣いにはならない。

しかし問題なのは疲労だ。かれこれ13時間は戦い続けている。

13時間もぶつ通しで戦い続けているのにも関わらず、銃座と迫撃砲から脱落者は誰も居なかった。流石に休憩無しでは不味いのでちよくちよく休憩させてはいるのだがそれも高が知れている。

休めたとしても一回に付き1分程度。

それなのに砲弾銃弾を運び続けて、引き金を引き続けている。

銃身交換も恐ろしい間隔で行われ、その交換速度も驚くほど速い。

なぜここまでして皆戦い続けるのか。

それは誰もが分かっていたから。

今此処で負けてしまえば、共に戦っている女性兵士は誰一人残らずゴブリン共に犯される。そして彼女達だけではない。町に居る、自分達を家で見送ってくれた家族、親しい友人、愛する人が殺されてしまう。ゴブリンの手によって。

それは誰もが信じていたから。

隣にいる仲間を。戦友を。援軍が来ることを。これだけの数を殺して今まで耐えてきているのだからこの先も勝てない道理は無い。

殺せ！ 殺せ！ 殺せ！

槍を突き刺せ！剣で斬れ！銃弾を叩き込め！砲弾を撃ち出せ！

誰もが同じことを考えて戦う。

ただ守るために、勝つために。

それから数時間後、空が完全に明るくなった。

これで照明弾を撃つ必要は無い。毎分10発の火力を叩き込めるのだ。

そして俺はハンヴィーの銃座に戻っていた。

と言うのも、M2の火力をテルモピュライへ向けた方が遥かに効率が良いのだ。

M2と迫撃砲に加えてM4とM9の弾薬も呼び出しているのは完全に無駄だ。

2回ほどやって気が付いたのだが。

完全にM2と迫撃砲がフル稼働している。

流石に引き金を引きっぱなし、という訳にも行かず短連射を心掛けて撃ちまくっていい

る。

それにしても距離が近いからか1発で何体も貫通していく。
テルモピュライにM2を向けてからは土囊壁での戦闘は散発的だ。
突破できる数も少なく、槍で突き殺されている。

どれほど殺したのだろうか？

もうゴブリンの死体で山になっている。

面白いことに包囲しても堀があるから手が出せないと分かってからは完全にテルモピュライにしか突撃をして来なくなった。

槍の様にテルモピュライを直指してくるものだからそこにだけ死体が集中する。
足を取られたゴ布林が転んで仲間に踏み殺されるといふ事もしょっちゅうだ。
足が遅いから狙い易い。

漸くゴブリンの攻勢に陰りが見え始めた。

残りももう少ないのだろう。

そして、とうとう痺れを切らしたのかあの周りよりも遥かにデカい今回の元凶と思われるゴブリンが出て来た。やはりデカいな。双眼鏡で覗いてだが。

「ッ!!!」

俺は弾かれたように奴を殺せと指示を出そうとして、留まった。

今、銃座をアイツに向けることは出来ない。アレに向けて一斉に射撃をすれば確かに仕留められるだろう。だが他のゴブリンは? どうやって殺す?

射撃が一瞬でも止まってしまえば奴らにチャンスを与えるだけだ。そうなつては今までの戦いが無駄になってしまう。

距離は3000m程。

結構近い距離だな。

そいつが現れてから衰えていた勢いが再び爆発した。

ゴブリンの顔が必死の形相になり、テルモピュライに殺到し始めた。

元凶のゴ布林もこちらへ向かって来る。

その足の速さは死体で埋め尽くされてその上を走っていると言うのに驚きの物だ。

………あいつを今ここで仕留めないとまた態勢を立て直されるかもしれない。

そう思った俺は、どうすればいいのか考えた。

アイツのせいで勢いは戻るところか更に強くなっている。M2をアイツに向けた瞬間に土嚢壁は突破されてしまう。

どうすればいい？

もう一度双眼鏡を覗いてみると思ったよりも長く考えていたのか2000mラインに近い所まで来ていた。

この距離なら、狙撃が可能なのではないか？

いや、でも普通の狙撃銃だと難しい。

普段使っているドラグノフやM700、L96だと不安だ。

………確かM2と同じ12.7mm弾を使っていた狙撃銃があったな。

そう思つてメニューを開き探すと見つかった。

バレットM82対物狙撃銃。

命中精度は折紙付き、あのM2と同じ12.7mm弾を使用している為に2000m程度の距離ならば当たれば即死、1500mだと身体が吹き飛ぶ。

よし、こいつにしよう。製造数は10万を超えているからまあ高いつちや高いがそこ

までもない。

M2の弾薬運搬をしていた人呼び止めてハンヴィーの銃座に付いてもらう。

ハンヴィーから降りてM82を即座に呼び出して、マガジンを2つ呼び出してそれぞれに10発詰める。

そしてマガジンを銃本体に挿し込んでコッキングレバーを思いっきり引く。

M82にスコープとバイポットを取り付けて地面に伏せる。

直ぐにアイツを見つける事が出来た。

あれだけデカくて動きが早ければ当然だ。

炸裂弾だから命中しなくても爆発しただけで怪我を負わせる事は出来る。

しかしそれでも一撃で仕留めなければ何が起こるか分からない。

スコープ越しにアイツを見る。

クソ、動きが早いし足元の死体も一番安定している場所を選んで走っているからこちらに進んで来てはいるが予測するのが難しい。

既に1500mを切った。

そんな事を言つて居たらあつという間に土囊壁に到達されてしまう。炸裂弾なのだから適当に撃つても近くに着弾すれば問題は無い筈だ。いや、貫通してしまうか。

取り敢えずスコープ越しに狙いを付けて、一度引き金を引く。

ドオン!!

発射と共に爆音が響く。

しかし予想通り弾は当たらない。

代わりに周りに居たゴブリンを纏めて数体貫通していく。

やはり動きを予想しないと駄目か。

幸いな事にM82はセミオート方式なので初弾以外はコッキングする必要が無い。

続けざまにしっかりと狙つて撃つ。が、当たらない。

しかし狙われている事に警戒してなのか足が遅くなる。

M2で撃たれているように弾丸が雨の如く降り注いでくるわけでも無いし、迫撃砲の砲弾の様に威力が高いわけでも無い。

しかし同じような物で狙われている。だから警戒しよう。

それは当然とも言える動きだった。

だがお陰で物凄く狙いやすくなったのは確かだ。

走って向かって来ているがそれでも先程とは格段に遅い。

今なら仕留められる！

スコープを覗いている俺の目にはしっかりとゴブリンの親玉が映っている。

この距離なら殆ど時間差も無く着弾する。

良く狙え。頭を一撃でいい。

身体は出来るだけ避けて頭を狙おう。その方が確実だ。胴体は貫通してしまえば生き残ってしまう可能性がある。

いや、12.7mm弾ならば問題は無いと思うが念の為だ。

既に頭は捉えた。

後は引き金を引くだけだ。

ドオン！！

タイムラグはほんの僅かだった。

狙った通り、アイツの頭に12.7 m弾が突き刺さった。その瞬間に頭部が弾け飛ぶ。

殺った。

そう思った瞬間に、他の丘を攻めてきていたゴブリン共が、急激に統率が無くなっていく。無茶に突撃してきたり、逃げようとするのも居る。

が、例外無くM2と迫撃砲で殺されていく。

逃げようと背中を向ければ狙い撃たれ、突撃してきても同じように撃ち殺される。暫くすると、自然と銃声と迫撃砲独特の発射音が鳴り止む。

逃げて行つたゴブリンはあちらこちらに潰走して行き、統率など無くなっていた。

それを見て皆、歓声を上げずにただ茫然としているだけ。

それはそうだ。この数日間、死に物狂いで戦い続け、合計すれば約15万などという馬鹿げた数のゴブリンを相手にしていたのだから。

殺した数で言えば凡そ13万はくだらないだろう。残りの2万は散り散りに何処かへ逃げて行った。そんな数を相手によくここまで生き延びたと思う。

正直な話、かなり呆気なく終わったな、と思った。今までの戦いが強烈過ぎたと言うのもあるのだろうがやはり、呆気なく感じてしま

う。
そして、誰も彼もがその事実には呆然とするしかなかった。それはそうだが、援軍が到着するまで終わらないときえ思っていたこの戦いが、突如として終わりを告げたのだから誰だって拍子抜け、いや困惑してしまうだろう。

5分、もしかしたら10分かもしれない。暫くすると少しづつ、少しづつ状況が分かって来た。

「勝った、のか……?」

「分からない……」

「どういう事だ?なんで奴ら撤退した?」

「んな事俺に聞くな。分かる訳無いだろう……」

そうだ、俺もボーっとしてないでクレイドルさんに元凶を仕留めた事を報告しないと。

急いでクレイドルさんの下へ向かう。

「クレイドルさん!!」

「お、おお、イチロー。どうかしたのか? いや、そもそもこの現状の理解すら出来ていないのだが」

「今回の元凶のゴブリンを仕留めました」

「……………ん? は?」

「今回の元凶のゴブリンを仕留めました」

「そうかそうか……」

クレイドルさんは俺の報告を聞いて何だかよく分からない、という顔をして固まった。

十数秒固まって、漸く復活したクレイドルさんは、

「なんだと!? 本当か!?!」

「はい、本当です。確認されますか?」

「あ、ああ！勿論だ！」

そして確認するために双眼鏡を渡して見てもらう。

「本当だ……確かに他のゴブリンとは倍ぐらい違うな……」

言葉を漏らしながら見ている。

そして俺の方を向いて聞いてきた。

「どうやって仕留めた？あれだけの距離があるのに。あの、置いてある君の武器でか？」

「M2等は使っていませんよ。今回奴を仕留めたのはこれです」

「うん？これも君の物なのか」

「ええ。遠くの目標に正確に当てる事が出来る物です」

「そうか。そうすると君の手で、という事か」

「そうなりますね」

「……………よし、分かった。少しこれの上に乗っても良いか？」

「ええ、構いませんよ」

クレイドルさんはハンヴィーの上に登って大きな声で言い始めた。

「諸君！たった今、そこに居るイチローが今回の元凶であるゴブリンを討伐した！これにより完全に今回の戦いは終結したと思われる！しかしまだ危険は残っているので気を抜かないようにしてもらいたい！以上だ！諸君、本当にご苦労だった！」

「「「「「お”お”お”お”お”お”!!!」」」」」」

皆が叫ぶ。

あれほど絶望的な戦いを生き延びたのだ。誰だつて喜ばないはずがない。

互いに肩を叩き合い、涙を流しながら喜んだ。

一頻りその様子を見てクレイドルさんはハンヴィーから降りて、俺の肩を叩いて言った。

「イチロー、今回の件、本当に感謝する。君が居なければ最初の戦いで皆殺しにされていた。君のお陰でこれだけの被害で済んだ。ありがとう。そして今回の一番の功労者は間違い無く君だ。胸を張れ」

「はい、有難うございます」

そう言うときクレイドルさんは何処かに行ってしまった。

クレイドルさんに言われた事を思い出して、漸くこの戦いが終わりを告げた事を噛み締める事が出来た。

「おい」

「はい？あ、エルフラントさん。どうかしましたか？」

「いや、そのな、ありがとう」

「え？」

「私がゴブリンに連れ去られそうになった時、助けてくれただろうか？」

「ああ、気にしないで下さい。助けるのは人として当然の事ですから」

「いや、そこはしっかりと礼を受け取って欲しい」

「あー、それじゃあ、どういたしまして」

「ああ。それでは後日渡しに行く。それでは私は行くとする。まだやらなければならない事が沢山あるのだな」

エルフラントさんにお礼を言われたりしながら、今回使用したM2と迫撃砲を格納する。そして辺り一面に散らばった薬莖をメニュー欄で一気に回収しておく。

あくまでも今回は俺一人の力ではどうにもならない、と判断したからこそ武器を貸し出したのだ。

銃はこの世界の技術からするとオーバーテクノロジーにも程がある。

これからは俺自身が身を投じた戦いである事、俺一人では何ともならない状況の時に限って武器を貸し出す事にしよう。

ホイホイと渡していい代物じゃない。

それからは大変だった。まず最初に行ったのが今回の元凶であるゴブリンの死体の回収だった。

これは王都から派遣された援軍の中に居る魔法使いの手で凍らせて王都にある研究所だかなんだかに運んで詳しく調べるんだそうだ。

そのゴブリンの死体を丘まで総出で運んできて、天幕の一つに放り込んだ。

そう言えば今更だったのだが今回のこの部隊には魔法使いが居たらしい。ただ治療魔法使いしか連れて来ていなかったという事らしい。

攻撃系の魔法が使える人は殆どがイザという時の町の防衛に引き抜かれてしまったらしく、今回は治療魔法のみとなった。

俺自身も治療魔法が使えるので怪我人の手当てをしたりした。

戦闘終了後の7時間後、王都からの援軍が漸く到着。

既に戦闘が終結し、元凶も仕留めたという事で大騒ぎになった。

あとはゴブリンの死体の山を見て王都からの援軍の人達が吐いていたりしたが些細な事だろう。

援軍として派遣された兵士の数は9000で、今回のゴブリンの総計には到底足りない数でもし戦闘に間に合っていればそれこそ皆殺しにされていた事だろう。

援軍到着後、ゴブリンの死体の山にガソリンを撒いて焼き払ったりした。

全て燃やし切るのに丸々4日掛かる程だった

。ありったけのガソリンを呼び出して人海戦術を使いあっちこつちに撒いて、火を点け、燃やす。それはもう驚くほどの火力と煙、匂いだった。

かなりの数、10万近い死体の山を焼いたのだから早い方なのだろう。

結局丘からリーヴォオリの町に帰還する事が出来たのは町から出撃して10日目の事

であつた。

後日譚

町に戻ってからの話をしよう。

結局、あの丘での被害は重軽症者が土囊壁で防衛線を繰り広げた兵士、ギルドの人間270人中104人、死者56人となった。

防衛線で深手を負ってそこからの失血死が殆どだった。

戦闘中に直接死んだ人はおらず、結果的に見れば520倍以上の敵と戦ってこれだけの被害で済んだことは誰もが奇跡だとしか言えずに、その戦いに参加した者、戦死したものは救国の英雄として大いに騒がれ、死者の内、ギルド所属の人間を中心に身寄りのない者は王都にある墓地に手厚く葬られ、戦死した人間の家族には多額の金銭が払われその働きを讃えた。

王立墓地は、国にとって多大な功績を残したり、貢献したりしなければ入ることが許されない墓地である、と言えば今回のその待遇は領けるだろう。

勿論、生き残った俺達にも多額の報酬が支払われ、今回直接的に戦闘の勝利に貢献し

た俺には今回消費したM2、迫撃砲、砲弾薬、手榴弾、C-4爆薬、ガソリン等の全ての金額と残った金額の3倍以上が支払われることが約束され、領主のレイフォード・リーヴオリからも後日別で直接報酬が支払われる事になった。

幾ら何でも貰いすぎだと思ったので減額してもらおうと思ったのだが、言う前に押し切られてしまった。

何故これだけの金額になったのかと言うと、元凶であるゴブリンの発見、討伐、そして戦闘での多大な貢献、という事らしい。

どうにもクレイドルさんとエルフラントさん、レナードさんノーマンさん、他にもM2、迫撃砲を操作した人達の証言による、との事。

そして彼ら彼女らだけでなくあの丘で戦った人間全員が俺が居なければ負けていたと証言した事で報酬がとんでもないことになったそうさ。

これはクレイドルさん本人に笑いながら聞かされた話なのだが。

ああ、それと何故か王都に来いと言われてしまった。

どうやら国王を始めとした重鎮が俺に会いたいだのなんだの言ったそうさ。

完全に今回の事が原因じゃないか。流石にやり過ぎたか……

しかしそれを教えに来てくれたあの時のエルフラントさんの顔にはまだ何かあると

書いてあった。それが良い意味なのか悪い意味なのか分からないが。

……仮に報酬を貰うとしてもこれ以上貰ってどうするんだ。これ以上はもうお腹一杯だぞ？

貧乏性の俺には多すぎる。

人間、お金を貰えると言われると喜ぶものだが、金額が大きすぎると怖くなったり遠慮がちになるもんなんだな。

まさか自身が体験する事になろうとは、思っても居なかった。

ああ、それと散り散りに逃げたゴブリンに関してだが王都からの援軍が直接残敵掃討、という形で討伐する事になった。

—————

後年、この丘での戦いは戦史に残る大偉業とされ、長く語り継がれる事になる。

戦術一つを取つても、敵が侵入できる場所を限定し、その一点に自軍の戦力を集中させるなど、少人数でも数万を超える数を相手に出来ることが証明された事などが挙げられる。

この丘での戦いは、敵の侵入を制限するために作られた橋の部分の名前を取り、「オー
ル大平原防衛戦」と言われ、特にあの丘での戦いを「テルモピュライの戦い」と呼ばれ
る事になる。

図らずも地球でのテルモピュライの戦いと同じ名称となった。

そしてその戦いに身を投じた336人の名前は、ロンバルティア王国王立図書館に名
前が一人残らず記されている。

しかしながら、その殆どの人間の詳しい記録は無くあるのは髪の色や、目の色などと
言った身体的特徴に限られている。

詳しい事が記されているのは、

指揮官であった「クレイドル・ラウナー」を始め、

「イチロー・バイタークハイマツト」

「コルネー・バイタークハイマツト」

「レナード・オーデイ」

「ノーマン・ホーバント」

の5人だけである。

この5人は度々、チームとなり多くの国難を救う事になり、その功績を認められ後年、爵位を授与される。

イチロー・バイタークハイマツトによると、

「一度は断つたのだが使者や国王自らに何度も説得され、結局根負けして授与された」

と自記に書いており、その当時の断り文句を考えるのが大変だった、とも記述している。そして王立図書館に所蔵されている記録によれば、

「何度も爵位授与を断られたが最後には領いて貰えることが出来た」

と当時の国王直筆の日記に書かれている。

信憑性は高いだろう。

何故断つたのか、という点に関しては議論が絶えず、「国の面倒事に巻き込まれるのが嫌だった」「縛られる事を好まなかった」等々様々な説が出ているが残念ながらその様な

事を記載した文書が無いためにどの説も確証が得られない。

この4家は今でも続く「ラウナー家」「バイタークハイマツト家」「オーデイ家」「ホルバント家」の直系の先祖に当たる。

因みにだがコルネー・バイタークハイマツトはイチロー・バイタークハイマツトの妻となるがその詳しい経緯は別の書物に記載する。

イチロー・バイタークハイマツトにはコルネーの他に数人の妻が居たとされ、その誰もが特殊な経歴を持つ。

一説によればゴブリンの数は30万にも上ると言われてきたが最近になってオール大平原で「テルモピユライの戦い」の跡とみられる物が発見され、大規模な調査の結果、ゴブリンの数は推定13〜4万だと判明した。

しかしながら336人で最低でも500倍以上の数に勝利した事実は変わらず、驚異的な物である。

領主からの報酬

ゴブリンとの戦いから暫く経つ。

その間も戦後処理は続いていた。完全に燃やし尽くしたとは言えないゴブリンの死体をしっかりと燃やし尽くして疫病が蔓延したり不死者化するのを防ぐ。

あとは散り散りに逃げて行ったゴブリンの残敵掃討ぐらいだろうか。

しかしこの残敵掃討も中々進んでいない。と言うのも王都から派遣された応援の軍の編成が問題だった。

いや、編成というよりは指揮系統に問題があった、というべきだろう。

その指揮系統は貴族連中が中心で戦いなどしたこと無いや言う連中ばかりであった。上から下までの殆どがだ。要は実戦経験を多少なりとも積ませよう、という事らしい。あとは箔付けと言った所か。

貴族の息子だったり指揮を執っていて簡単な部隊間同士の連絡も出来ない有様だった。

そんなんだから連携など取れる筈も無く、強化されて強くなったゴブリンに全くと言つていいほど歯が立たなかった。

突出した部隊から包囲殲滅されていき、9000も居た軍はたった1日の戦闘で7000にまでその数を減らしていた。

しかしそんなんでも状況を理解していないからか戦闘を続け、結局3日目の時点で4000にまで減っていた。

町に戻つて来るたびに数をどんどん減らしていく様を見て、あの丘で戦った人間は少なからず怒りを覚えていた。

あれだけ俺達が必要になつて戦つたのにあのざまはなんだ、と。

まあその気持ちに分からなくもないのだが。

結構態度が横暴な連中が多いのも、そう思う要因の一つだ。

結局その後、王都から遅れて派遣された今回の事を報告書に纏める人間に付いて来た軍の階級の高い武官が幾ら何でも酷すぎる現状に、独断で王都へ時間が掛かるもの連絡の人間を送り現場での指揮権を継承した。

結局軍だけでは対応が出来なかった。

ゴブリンの強さは兵士10人に相当し、囲んで袋叩きにするしかなかったのだがそのゴブリンが如何せん強すぎて囲んでも簡単に突破され、効果的に掃討していくことが出来ず遅々として進まなかった。

ゴブリンと直接戦闘をしたクレイドルさんを始めとした領軍と、ギルド、そして勿論俺も参加する事になった。

その時はレナードさんとノーマンさんにハンヴィーに乗って貰ってM2の射手、警戒を担当してもらった。

そして今日漸くその掃討作戦が終了した。

期間にして2週間。

軍や領軍の歩兵では機動力に問題があり騎兵を中心にあちこちを走り回って殺して行った。それで思いの外時間が掛かってしまった。

そして今現在、俺は領主の屋敷に居る。

と言うのも報酬を直接手渡すという事で以前から呼び出されていたのだが掃討作戦への参加もあつて中々行く事が出来なかった。

そして今日漸く時間が出来たので向かう事が出来たのだ。

日程なんかは特に伝えられていなかったなので暇な今日、という訳だ。

門を通されて、応接間で領主が来るのを待つ。

部屋には俺の他に何人かメイドさんが居る。

するとそこに来たのは、身長の高い男性だった。多分180cmはあるだろうか？髪の毛は茶髪、と言つても染めたりしているようなものではなく生まれつきの様に見える。

瞳の色は青。この世界じゃ結構居る色だ。年齢は3〜40つて所か。

「初めまして。レイフォード・リーヴオリだ。今回の戦いは誰よりも一番の活躍をしてくれたとクレイドルやコルネーから聞いているよ」

「有難うございます。光栄です」

「ああ、そこまで畏まらなくていいよ。威厳とは程遠いからね、私は」

「いえ、そんなことはないと思いますよ」

「ありがとう。さて、早速だけど今回の報酬の件に移ろう。君は何を望む？何が欲しい

？私に叶えられる事ならば聞くよ」

この話、今日は辞退したくて来たのだ。

やはり幾ら何でも貰いすぎな気がするのだ。国からだけの報酬金の金額ならば普通に暮らせば問題無く暫くは暮らせる。

そこに領からの報酬も入って来るとなるとやはり幾ら何でも貰いすぎだ。

「それなんですが……やはり辞退させていただけないでしょうか？」

「ふむ？それはどうしてだい？」

「正直申し上げますと、国からも直接的に報酬が支払われるので、これ以上貰うのは何と
いうか貰いすぎな気がしてしまうんです」

「君は謙虚なんだね」

「いえ、そんな事はありません」

「いや、何処の人間よりも謙虚だ。しかし残念ながら報酬を取り消すことは出来ないんだ」

「それは、何故ですか？」

「貴族にも面子という物があつてね。今回の戦いの一番の功労者に国から報酬が出るのに私の方から報酬が出ないのはおかしいからね。後々何かにつけて嫌味を言われる事になるんだよ」

「そうなんですか」

「うん。だから出来れば受け取ってくれると有難いんだが駄目かい？」

「……分かりました」

「うん、ありがとう。で、何がお望みかな？」

「そうだなあ……正直金銭はもう国から貰うだけで十分だしな……」

「あ、家でも貰うか。そろそろ宿暮らしから卒業したいと思っていたのだ。」

「今回の報酬で貰ってしまえば買う為のお金を貯める必要は無い。」

「家を貰えれば有難いです」

「ふむ……家か。うん、分かった。2日程時間を貰えれば有難いんだけどいいかな？」

「大丈夫です。有難うございます」

「うん。それじゃ準備が出来たら宿に使いを出すから」

「はい。有難うございます」

「これで用件は終わりだね」

「はい。それでしたら私は帰ります」

「うん。道中気を付けるように。君、彼を送ってあげなさい」

「畏まりました」

「そうしてメイドさんに玄関まで送られて宿に帰る。」

家が貰えるのか。うん、やったぜ。これで周りの目がある程度気にしないで色々と作業が出来る。

さて、王都に向かうのが1週間後だ。

それまでにやる事と言っても特に無い。依頼もゴブリンがあれほどの大軍で現れて以降それ以外の魔獣や魔物は逃げてしまったかゴブリンに狩られて食料となった。

恐らくこの辺り一帯、オール大森林からオール大平原は全く持って居ないと考えた方がよさそうだ。

まあそれで暫くの間は平穩に暮らせると考えるべきか、それとも収入が無くなったことを嘆くべきか。

報酬を貰っているので俺は困らないが他のギルドの連中は使いすぎて後々泣きそうなのもするが。

俺は今回使った分の金を全てストックする。

確か3倍は貰えるのかなんとか言ってたから倍額突っ込んでおくのも良いかもしれない。何かあるか分からないだし。

家も貰える訳だから特に残金に気にする必要は無い。

気にするとしても食費程度だ。それも馬鹿みたいに高い食事でなければ問題は無い。

最悪、呼び出せる食料で全く持って事足りる訳だし。

以前はそれで過ごしていたのだから。胡椒や塩、香辛料類で味付けを無理矢理変えてしまえば別の料理として食べる。

2日後、約束していた日だ。

朝になって宿の1階にある酒場に降りるとそこに居たのはエルフラントさんだった。

あの戦いの時の鎧姿とは違い礼装だろうか？の様な格好だった。しかしそこまで堅苦しいという訳でもない。

「エルフラントさん？どうして此処に？あ、もしかして」

「そうだ。私が使いの人間だ」

「そうだったんですか。ありがとうございます」

「何、気にするな。それでは支度が出来次第向かおう」

「分かりました。少し待っていて貰えますか？」

「ああ」

急いで着替えないと。

まさかこんなに早く来るとは思っていなかった。早くても昼頃だと思っていたもん

だから全く準備をしていない。

急いで身支度を整えて、護身用にM9を携行する。

「お待たせしました。それでは行きましょうか」

「ああ。外に馬車が待っているからそれに乗って行くぞ」

「へ？歩いて行くんじゃないんですか？」

「んな訳あるか。お前自覚してないようだから言っておくがあの戦いにおいて一番の功績を上げたのはお前だぞ？そんな人間を歩かせた、なんて噂でも広まればレイフオード様自身の面子に関わる」

「そうなんですか。そんなものとは無縁の人生でしたから」

「そういうわけであの乗り物みたいに乗り心地はよくは無いが寛いでくれ」

見た目は普通の前よりも明らかに高いだろう、と言う感じだ。そもそもこんな凝った模様を彫っていたりするのだから当然つちや当然か。

促されて馬車に乗る。

中も普通の馬車とは違い木の板剥き出しではなくしつかりとクッションが張られて居たりする。

座ってみると意外と心地は良い。

「おお、フカフカだ」

「まあレイフォード様が所有している中で一番の物を用意させたそうだからな」
「そんなのに乗っちまっつていいのか俺……」

「ついぼそりと漏らしてしまった。」

「いや、もし壊したりしたら、と考えるとチキンになってしまう。」

「何、気にするな」

「そして家に向かったのだが。」

「……まさかこのでつかい家？」

「そうだ。ほら入れ」

「めっちゃデカイ家が貰えた。」

「言っておくが王都に行けばこの程度の家などまだまだだぞ。レイフォード様の屋敷よりも遥かにデカイ屋敷ばかりだからな。恐らく平均よりも小さいぐらいだ」

「なんてエルフランドさんは言っていたがどうも俺の感覚からすると十分デカイのだが。」

「多分あれって馬小屋？だよな。馬なんて俺必要無いんだけど……」

「いや、この世界からすると標準なのか。」

「ほら、これがこの家の鍵だ」

「ああ、ありがとうございます」

手渡された鍵を受け取り中に入る。

うお。広い。

何部屋あるんだ？これ。

「部屋の数は10部屋だ。好きに使え、との事だ。ああ、それとこれも渡しておかないと」

そう言つてエルフランドさんが渡して来たのは紙だった。

「この家の権利書だ。ここにサインをすればお前の物になる。何か書くものはあるか？」

「あー、いえ」

「だろうな。ほら、これを使え」

「有難うございます」

権利書にサインをして、受け取る。

「それでは用件は終わりだ。私は帰る。掃除なんかは既にやってあるから問題はないと思う。もし何かあったらレイフォード様に言うといい。無理な物でなければ何とかしてくれるだろう」

「はい。有難うございました」

「ああ。ではな」

そう言つてエルフロントさんは歸つて行つた。

さて、部屋を見て回ろう。

この家やつぱりデカいな。

1階と2階に同じ大きさの部屋が5部屋づつ。で、それとは別に調理場とか庭も付いてるし。

庭の広さは家と同じ面積十、つて所か。広い。

しかも部屋の家具類は一通り揃つていて態々買いに行く必要は無かつた。

こんな所まで貰つてしまうとは。なんだか申し訳なくなつて来たぞ。

部屋は何処でもいいか。

日当たりのいい家だから何処でも変わらないし。

という事で2階の角部屋にした。

こうして領主からの報酬の受け取りが終わった。

ああ、一週間後には王都に行かなければならないのか。

……正直面倒臭いな。

なんて思いながら過ごしたこの家での初めての夜だった。

あ、宿を引き払うの忘れてた。

王都へ

家を貰つて1週間後。

今日は王都へ出発する日だ。

王都から派遣された軍と共に俺は向かわなければならぬ。

ここで問題になつて来るのが俺と派遣軍の移動速度の違いだ。

先ず俺は基本的に乗馬なんて出来ない。そりやそうだ。少なくとも俺は馬になんて乗つたことが無い。

この世界の移動手段は基本は馬なのだが俺はこの世界に来てからも乗つたことが無い。

と言うのも村々からこのリーヴオリの町にそれなりの頻度で物の売り買いの為に来ている。だからもし依頼でその村の方に行くのであればその荷馬車に同乗させてもらうか、それか歩いて行くしかない。

そもそも馬を個人で所有しているなんて貴族や商人、あとは畑を耕す農家ぐらい。

殆どの人間が乗馬の機会なんて騎兵になるでもしなければ有り得ない。

そんな状況での派遣軍と歩調を揃えての王都行きだ。

正直な話、馬車には乗りたくはない。

確かに凹凸の無い道ならば問題は無い。しかし残念な事にそんな道はこの世界じゃ早々お目に掛かれない。

と言うのも町などの道も舗装されてはいるが石畳なのだ。

しかも丸い石。平らに加工された石なんて使っている訳も無い。王都に行けばもしかするかもしれないがあまり期待はしない方が良い。

サスペンションなんて存在していない。車軸と車輪が直接繋がっているものだからダイレクトにその衝撃が伝わって来る。

度合いにもよるが凸凹道に入った瞬間にそれはもう筆舌に尽くしがたい痛みと揺れが襲って来る。尻を打ち付けるだけでなく背中や腕、頭を彼方此方にぶつけ、身体中に痣が出来るなんて当たり前。

揺れも酷い。弱い人は数分乗っただけで簡単に酔ってしまうレベルだ。

しかしハンヴィーに乗った俺に速度を合わせろ、なんて言える筈も無く。

俺が我慢して馬車に乗ってしまえば簡単に事が済む話なのだ。

が！俺は馬車に乗りたくない。

なので派遣軍の速度に合わせてハンヴィーを進めることにする。

色々と面倒な事になりそうなのは間違い無いがそれでも尻をぶつけまくって赤く腫れるよりはいいに決まってる。

最悪、とつとと帰って来てしまえばいいだけの話だ。

どうせ滞在すると言っても2、3日程度だ。

報酬を貰ったらさっさと帰って来よう。

派閥争いやらに巻き込まれたくなんて無いし縛り付けられるのも御免被る。

そう言えば、この世界の悪い所は娯楽が少ない所だ。

まあ農作業なり洗濯なり全てを人力で行わなければならぬ事を考えるとそんな事に時間を使っていられない、なんてのもあるんだろう。

しかしそれにしても少ない。

それでも貴族なんかはチエスの様な物をやっているそうだ。

車の中でやるには向かないが。

ああ、王都までの道のりは死ぬほど暇なんだろうな……

憂鬱の気持ちを抱えながら王都への道のりに備えた。

翌日、王都へ向かう為に派遣軍が町の外に集まっていた。

俺はその指揮官に挨拶をする。と言つても俺がイチローである、と顔を見せに行くだった。後は隊列のどの辺りに俺が居ればいいのかなどを教えて貰った。

それ以外は軽く2、3言葉を交わしてとつと退散をする。

長居をしても余り意味は無いし。

そして軽く離れてからハンヴィーを呼び出す。

まあこんなド真ん中にいきなりこんなのが現れたら知らない人間なら誰だつて驚く。

実際に大騒ぎになっているし。

中に俺が居るから変に攻撃したり、何て事は無いが。

それでも万が一に備えてM4とM9も呼び出して置く。

ベストのマガジンポーチにもしつかりとマガジンが入っていることを確認する。基本的に俺が車内に居る時に敵が車の近くに來たらM9の方が取り回ししやすい。

だから普段なら3本しか呼び出さないが今回5本M9のマガジンを呼び出した。運転席に座って出発を待つ。

あー……ゴブリンの大軍と戦っている時は忙しすぎてそのことしか考えられなかったがこうして何も無いとなるとそれはそれで暇だな。

しかも道中話し相手すら居ない訳だし。ボケツと外を眺めながら待っているとドアを叩かれる。

なんだ？ 出発か？

なんて外を見ると何故かエルフラントさんがそこに居た。

「エルフラントさん？ どうして此処に？」

「ん？ 聞いていなかったのか？ 私もお前に同行するんだ」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。一応付き人、という形になっている」

「でもどうして？ 付き人なんて貴族でもなんでもないんですが……」

ただ王都に行つて報酬を受け取るだけなの？

なんだつたら別に俺が王都に向かわなくても良い気もするんだけど。

「王都に行つて変な女に引つかからない様に、つて事だ。レイフォード様から直接の命だ」

「俺が変な女に捕まる？それどういう事ですか？」

「文字通りだ。今回の丘での戦い、掃討戦も含めて一番の活躍をしたのはお前だ。しかも未知の武器を扱うと来た。それで狙わない訳が無い」

「でも武器なんて俺にしか扱えませんか？」

「それでも、だ。それにお前は貴族でもない。だから取り込んでやろう、って言う奴らが殆ど。報酬を渡すなんてあくまで口実程度に過ぎない。本当の目的はどうやって自分の派閥に取り込もうか、なんてことだろう」

「それじゃなんで領主様は態々エルフラントさんを僕に付けたんですか？」

「簡単な話だ。この町に戻って来て欲しい、という事だ。立地的にはオール大平原にあるこの町は近くに大森林もある。大平原はまだしも大森林の方は全くと言っていいほど調査も何も出来ていない。分かっているのはその森の大深部にエルフの村がある事と中間辺りに大きく深い裂け目がある事」

「でもそれに何の問題が？」

「調査が全く出来ていない、しかもエルフの村と裂け目の正確な位置すらも正確な場所なんて全くの不明。考えてみる。全くの未知の魔獣や魔物が居ても何らおかしくもなんともない。今はまだそう言った存在が町や大平原に現れていないとは言ってもこれからどうなるのかすらも分からん。そう言った脅威から町を守って欲しいという事だ」

「はあー、そうなんですか」

「ま、お前を自分の膝元に置いておきたいなんて事も当然あるだろうからな。お前の扱
う物は全てが軍人だけでなく為政者にとつては何が何でも手に入れたいモノなんだ。
自分達で扱えないのならはその扱える人間を取り込む、なんて発想は当然だ。今回の件
だつてそうだ。態々王都に呼び出さなくても使いの人間に報酬を持たせてこの町に
持つてくればいいだけの話なんだからな」

「うーん……なんだか実感が湧きませんね」

「王都に行けば嫌でも思い知るさ」

そうしてエルフロントさんと話しながら出発の時を待った。

この際ついでと言うのもあれだが、ハンヴィーに乗って貰った。

どうやら馬車での移動らしいのだがエルフロントさんも馬車に乗るぐらいなら自分
で馬に乗った方がマシ、とも言っていたので。

まあハンヴィーなら一人も二人も大して変わらないし。

それとクレイドルさんも一緒に行くらしい。

馬車に乗るそうだが。

戦いの最高指揮官だった、という事で王都に来いと言われたそうだ。

別行動を取るらしい。久々の王都だから報酬を貰ったら好きにさせて貰うとか。貴族とのやり取りは面倒で嫌いらしいから当然っちゃ当然なのだろう。

しかしあのクレイドルさんが嫌いだ、という程なのか。

……俺も逃げられないものか。

別にパーティーなんて参加したくない。

だったら家で呼び出した食事で全く持つて構わないし。

なんて考えている間に出発となった。

道中はエルフランドさんが居たお陰で暇になる事も無くなんだかんだで楽しい物だった。

こちらに来る時は緊急事態という事でまあ急いでいたらしいから普通よりは短い期間だったらしいが王都に帰る、という事は火急の用件も無いし兵士の疲労も考えてゆっくりとしたものだった。

途中、休憩の時にクレイドルさんに何度か会ったが尻を摩っていた。

やはり痛いんだな……

なのでハンヴィーに乗るか誘ってみたのだが断られた。

「流石に馬車を空にするわけにはいかないからな。御者の面子もある。それに、二人の邪魔をしては悪い」

と、言つて馬車に戻つて行つてしまった。

いや、前者の理由は分かるが後者はどうなんだ？まさか俺とエルフラントさんがそういう関係だとも言いたいのだろうか？

俺としてはこんな美女と付き合えるのは願つても無いが幾ら何でもそれはエルフラントさんに失礼だろう。

まあそういう関係でも無いので態々否定する事も無い。

そして、王都に到着した。

まず目に入って来たのは王都全体をグルッと囲んで作られている高さが20mはあろうかという城壁。

かなり頑丈そうだ。

「エルフランドさん、あの城壁は？ 凄いですねー」

「ああ、あれは王都全体を囲っている城壁だ。300年前に戦争で一部の敵軍が王都まで攻め上がったて来てな。それから建設が進められているんだ。壁自体は完成している。その補強や増設、壁上に武装を施す為の工事が今でも続けられている。老朽化も進んでいたりもするからその改修も常に行われている状況だ」

「へー、そうなんですな」

「元々は王城から20km程までを囲んでいたんだが、それからもう一つ外側に増設したんだ。それを切っ掛けに今じゃ4重の壁が完成済み。5つ目の壁も建設中だ」

「2つぐらいで十分な気もするんですけど」

「まあ、備えておいて損することは無いからな。それに公共事業として人を雇っているから貧しい職の無い人間に仕事と給料を与えるという意味もある。今建設中の壁もどれだけ早く完成しても数十年は掛かる。まあその分だけ国庫の金が無くなって行くんだが、変な事に使うよりはマシだ」

「まあ確かにそうですね。でも実際に使わないなら意味が無いのでは？」

「それがそうでもない。隣に帝国があるのは知っているな？」

「ええ」

「この帝国と言うのはこの国の西側に存在する大きな国家の事だ。」

軍事力も大きく周辺諸国を併合、傀儡化したりしてその勢力を伸ばしている。

対抗できるとすれば西にもう一つある大きな国だその辺は今が良いだろう。

「帝国とはそれなりの頻度で小競り合いが起きている。もし帝国との戦争に突入ともなればこの国の国力では到底勝ち目は無い。だからもしそう言う事が起きても問題が無い様にといい事だ」

「そこまで差し迫っているんですか？」

「さあ。本当かどうかは分からないが最近小競り合いの頻度が上昇傾向にあるそう。恐らく強硬偵察だと思う。何時になるか分からないが仕掛けて来るのは間違い無い」

そうなのか。

いや、こんな城壁を作らなきゃいけない程、帝国は強大という事だろうか。

「これ、戦争になつたらどうするんです？ 食料とか」

「食料に関しては問題無い。第2城壁と第3城壁の間は穀倉地帯と牧場なんかがあるから。穀物と肉、野菜の生産に問題は無い。ただ資源に関しては何とも言えない。かなりの量の備蓄があると聞いているがそれでも全面衝突ともなれば1年は何とかなるだろうがそれ以上は分からん」

「でも鉱石とかは？ イリオル大山脈からですか？」

「そうだ。あそこは我が国の領土だから。輸入したりしなくても問題はない」

そう言えばこの国の地理は結構恵まれている。

この国は東にオール大森林、東のオール大森林の真ん中辺りから北、そして北西の方向に掛けてイリオル大山脈が存在する。

そしてそれを跨いで幾らか言った所までがこの国の国土だ。

なのでそこからからの敵の侵入はまずない。西か北からの敵は防がなくてはならないが北にはこの国と同じような中小国家しかない。

西に帝国ともう一つの大きな国しかない。

イリオル大山脈に付いて言えば、鉱石の産出で有名だ。鉄、銅などの戦争をするには不可欠な鉱物が大量に取れる。金や銀の産出もある。

そしてこの大山脈の鉱物資源を産出する場所の近辺には古くからドワーフが住んでいる。

どれくらい昔から、と聞かれてもものすつごい昔からとしか俺は詳しくないので言えないが。

ドワーフが住んでいる為、金属加工品に関しては国内随一、他国なんかよりもよっぽど優れている。

そのドワーフの作った武器は通常の物よりも遥かに性能が優れており、この国では王都に駐留している5個騎士団を始め、精銳の部隊には人数分十予備が配備され、それ以

外の部隊も予備は少ないが人数分は配備されているのだとか。

これは他国も知っている事で、エルフラントさんも鎧と剣もドワーフ製だそうだ。

各領軍も基本的には領が給料などを負担するのだが、武器に関して一定以下ならば国から支援を受ける事が出来る。

この国は、帝国との戦争の準備に関して相当準備をしているらしい。

因みに王都にその帝国軍の一部が王都まで攻め上がって来たそうさ。

そりゃ二度と好き勝手やらせて堪るかかってなるか。

だけど国力的に国境線での防衛は無理があるから万が一そうなたら此処で引き付けて叩いてやろうって事か。

持久戦をするならこれ程都合な立地は無いわけだし。

「もうそろそろ門を潜れるだろう。そしたら王城に向かう」

「了解です」

「それと、流石にこいつから降りた方が良いで。巡回している衛兵に捕まったら面白くない」

「そうですね。リーヴオリの町じゃこれに乗っていてもみんな驚かなくなりましたから感覚がおかしくなりました」

「毎日毎日こんなものを町の近くで走らせていれば誰だって慣れるさ」

エルフラントさんの助言に従ってハンヴィーから降りる。そしてM4とM9をしつかり装備し、ベストも着る。

話を聞く限り、治安も良いようだし問題は無いだろうと思われるが、まあそこは念の為だ。

そして壁門を潜る。

「おお……！」

これはすごい！

この世界に来てからリーヴオリの町と依頼で向かった村ぐらいしか見てこなかったからか、途轍も無く発展しているように見える。

街並みもしっかりと整っていて、こう、何というんだろうか？職人街、と言ったような感じだな。

煙突から煙が、あちらこちらから空に向かって伸びている。

そんな俺達を見て、近付いてくる身形の良い馬車あった。

そして身形の良い人間が。こちらに向かつて来る。

「イチロー様と、エルフラント様で間違いありませんか？」

「ええ、そうです」

「それは良かった。どうぞこちらへ。馬車で王城までご案内致します」

「クレイドルさんは？」

「ラウナー様は既にお乗りになっています」

「そうですか。なら行きましようか」

そうして馬車に乗り込む。

その中には御者さんが言っていた通りクレイドルさんが座っていた。

「どうだった二人共。二人だけの空間で何かなかったのか？」

「何言っているんですか。途中会つたりしていたでしょう」

「別にそう言う事の一つや二つあっても良いと思うんだがなあ」

「団長、黙って貰えますか？」

「おおっとこれは失礼。これ以上喋ると大変な事になりそうだ」

そんな冗談を言い合いながら馬車は出発する。

街並みはしっかりと整備されている。

王城に向かうその間、エルフラントさんに王都の説明を受ける。

クレイドルさんは寝てしまった。

「この辺は工房と、そこで働く者達の居住区画が併設されている場所だ。東側は工房区

画と居住区画で北と南、そして西は穀倉地帯だ」

「何故穀倉地帯の方が多いいんですか？」

「基本的に帝国との戦争となった場合は国民全員を城壁内に収容する事を想定しているからな。武器ならば一日に職人が複数作る事が出来るが食料はそうもいかない。備蓄はあるが備蓄が無くなってしまうえば後は収穫期の生産を待つしかなくなる。配給にしろそうでないにしろ、食料生産に比重が偏るのは仕方が無いことだ」

「そうなんですnee」

「そうなんだ」

もし、穀倉地帯に行けば、城壁の内側とは考えられない程の驚く程の穀倉地帯が広がっているに違いない。

これは、収穫期になったら辺り一面黄金色に輝く事だろう。

……見てみたいな。

馬車を通る道と歩行者が通る道が分けられていて、さらに言えば馬車用の道は王城方面に向かう道と、外側へ向かって行く道とが分けられている。これのお陰でスムーズに馬車が進んでいく。

城壁と城壁の間は凡そ20km程。かなり広い。まあ300年も掛けての工事ならばそれもそうなのか。

まあいいや。その辺は俺が気にしても仕方が無いことだし。

それから暫く、王城に到着した。

「うお……でけえ……」

思わずそんな声が出てしまうほど大きな城だった。

そもそもこんなデカイ建築物なんてこの世界じゃ早々見る事が出来ない。

精々が2、3階建てのこの世界だ。

どれだけの時間と金を使って作ったのか物凄く気になってしまう俺はやはり貧乏性なのか。

城門の前に来ると、門番の人が開ける。

この馬車は王家の物だとエルフラントさんも言っていたから紋章とかで分かったんだろう。俺はさっぱり分からないが。

そして城門を潜るとこれまたビックリするほど綺麗な光景が目飛び込んでくる。

庭、庭園か？しつかりと手入れが施され、王城の壁は真っ白だ。大理石かなんかか？まさか石灰とか？

馬車から降りて、白の中に通されると無駄に天井の高い物凄く豪華な内装だった。

ヤバい、今更緊張して来たぞ。

すると俺達の目の前にやって来た、いかにもな執事のお爺さんが俺達に恭しく、とはまさにこの事か。と思うように頭を下げてきた。

「イチロー様、ラウナー様、エルフラント様、ようこそ王城へいらつしやいました。私は執事長のカルマン・レイウエン、と申します。皆様が王城に御滞在される間、お世話させていただきます。お気軽にカルマン、とお呼びください」

「これはこれは……初めまして。イチローと申します。残念ながら私には姓が無い、というよりは覚えていないので、そのままイチローと呼んで下さい」

「コルネー・エルフラントです」

「クレイドル・ラウナーと申します」

「それでは皆様、どうぞこちらへ。先ずはお部屋にご案内させて頂きます。その後、国王陛下に謁見、という流れでございます。その後は自由時間となっておりますので是非、王都の町に行ってみてください。戦勝パーティーは3日後ですのでそれまでどうぞごゆるりとお寛ぎ下さい」

カルマンさんの案内の元、王城で俺達が滞在させて貰う部屋に案内される。

そして入って再び度肝を抜いた。

豪華すぎる！

豪華すぎてビビった。

地球の一番豪華なホテルの一番豪華な部屋ですら足元に及ばないのではないかと
思ったぐらいだ。

いや、地球の物を知らないからその辺は何とも言えないが……

「本当にこの部屋で合ってますか……？」

「お気に召しませんでしたか？」

「むしろ逆です。豪華すぎてちよつと驚いたというか……」

「そうでしたか。ご安心下さい、このお部屋はイチロー様のお部屋で間違い御座いませ
ん」

「そうですか……有難うございます。というか俺なんかが使っても良いのですか？そ
の、生憎と私は私自身を保証出来る様な立場と身分ではないのですが」

「何を仰いますか。ゴブリンの大軍を退け、そして元凶である変異種のゴブリンを討伐
し、しかも本来ならば派遣軍の仕事である掃討作戦にも参戦して頂いた。これ程の功績
を、そして我がロンバルティア王国を救っていただいたのです。このぐらいなどまだま
だでございます」

と、何故か嬉しそうに話すカルマンさん。まあそう言う事ならそれで納得するけど。

いやあ、こんな部屋に案内されるとは思っても居なかったぞ。多分これ、夜落ち着かなくて寝れないぞ？

いや、ベッドは家にある奴や、お世話になった宿なんかよりも遥かにフカフカで最高の心地なんだけど。何というか、別問題なのだ。

家にあるベッドが恋しい。

部屋に関しては奥からエルフロントさん、クレイドルさん、俺と言う順番だ。特に文句はないのでそのままという事になった。

そして、部屋に荷物を置いて王様に謁見しに行く。

とうか俺、そう言う時の作法なんて知らないぞ？

その辺の事をカルマンさんに聞いてみたら、

「国王陛下はそのことについて承知でいらつしやいます。もし粗相をしても気にしないとおっしゃられておりました。普段通りの英雄が見てみたいと」

と言っていたが、礼儀作法に関して許してくれるのは有難いのだが普段通りの英雄が見たいって俺に何を期待しているんだ？

言っちゃあれだが俺に何かを期待されても困るんだが……

元は普通の人間だぞ？

しかも格好もこのままでいいのか？迷彩だぞ？

物凄く変なんだが。城の中じゃかなりどころか滅茶苦茶浮いている。擦れ違う人員が俺を二度見、三度見するし。

町の人やエルフラントさん、クレイドルさんは見慣れたのか何も言わないからそれに慣れてしまっていたのか。

それに今更だが四六時中この格好だから気にした事が無かった。

森の中だったり林だったりと緑の多い場所で依頼をこなすことが多く、基本的に服装は迷彩だ。それに戦闘靴だし。

実用性に関してはピカイチなんだがファッションとしては無理だ。

Tシャツも同じような物しかないし。

でもカルマンさんが何も言わないんだから問題は無いのだろうが、さすがにちよつと心配だ。

そんな事を考えながらやって来た謁見の間。

謁見の間ってなんだ？聞いたことも無いぞ。扉でけえ。

そして中から声がする。

なんて言っているのか分からないが、その声が終ると同時に扉が開く。
ギイイイイ……

謁見の間めっちゃ広いな!?

しかもその先にある玉座になんかめっちゃ偉そうな人が座ってるし。

あ、あの人が国王か。

てか何時まで進めばいいんだ。

クレイドルさんとエルフランドさんが止まったので俺も一緒に止まる。

しかし何故俺が真ん中なんだ。

端が良かった。

そして二人が膝を付く。

おお、何かかつこいい。

「おい、お前も頭を下げて膝を付け！ 私達の真似をしろ！」

そう言う事に入る前に言っただけだった。

じゃない。取り敢えず真似をしないと。

見様見真似で同じ動きをする。

すると、何故だか足音が聞こえて来た。

ん？ 立って歩くのか？ なんて思って横を見ると二人はちゃんと居た。

そうすると誰の足音？

と思うのは自然だと思う。

訳が分からず考えていると頭上から物凄い威厳のある声を掛けられる。

「面を上げよ」

ビックリして思いつき顔を上げてしまったが如何やら間違いだつたらしい。

二人共少ししか顔を上げていない。上からぎり見えるか見えなにかぐらいだ。

あ、国王とガッツリ目があつちやつた……

やべえやべえ。どうしよう。まさか不敬罪とかで死刑？それは勘弁して欲しい。

必死になって頭の中で色々とグルグル回転させて考えるがどうにもならない。

これどうすればいいんだ!?

そんな俺の心中を知ってか知らずか、国王はニヤツと笑ってから大きな声で笑い出した。

「わはっはっはっはっは!!いやいや、すまんすまん。ついからかってしまった。どうか許してほしい」

「へ?」

間抜けな声が出ってしまった。

だが言わせてもらいたい。先程までは顔も雰囲気も全てが威厳ある者だったのに今はただ爆笑してニヤニヤしているだけのお爺ちゃんだ。

誰だってこんな差を見せられてはそうなる。

「余はロンバルティア王国国王、デイストニウム・ハンシユルト・ロンバルティア。よくぞ参られた、英雄よ。歓迎するぞ」

再び声が戻って、自己紹介を始める国王。

いや、いきなりの事過ぎて全く頭に入らないのですが。

そんな自己紹介が終わってニコニコされても物凄く困るんですが。

「陛下、そんなにいきなり詰め寄られては皆様が困惑してしまうでしょう?」

「それもそうか。いや、すまんかったな英雄殿」

「え? あ、いえ、お気になさらず……」

多分王妃? だと思っただけその人も国王の傍に来て窘める。すると国王が今気が付いたように言って謝罪をしてくる。そんな謝罪をされた俺がそんなしどろもどろになりながらも答えると、ニツと笑って俺の顔をジツと見る。そして気が済んだのかエルフラントさんとクレイドルさんにも声を掛けた。

「他の二人もしっかりと顔を見せてくれ」

「はっ」

二人が顔を上げ、国王は俺を含めて顔を見るとうんうんと頷いて言った。

「此度の働き、誠に大儀であった。執務が残っている故今は話を聞きたくても聞けないのが残念だ。どうか許してほしい。代わりと言っては何だがこの王城と、王都を存分に楽しんでいつて欲しい」

そう言うと、王妃と何人かの人を連れて何処かに行ってしまった。

どうすりやいいのか分からないので二人を見ると、王様が完全に見えなくなつてから立ち上がった。それに倣つて俺も立ち上がる。

そしてエルフラントさんに怒られた。

クレイドルさんは触らぬ神に祟りなし、と言わんばかりにそっぽを向いて逃げて行った。いやちよつと助けてくださいよ、なんて思つてももう手遅れ。

エルフラントさんに部屋に引きずられていき、そこでしつかりお説教を喰らい最低限の礼儀作法を叩き込まれた。

その後は部屋に居るのもあれだし、という事で王都の観光をする事に。

別に1人でもよかったのだが迷子になりそうだったのでエルフラントさんを誘つてみたら付いて来てくれる事に。

有難い。でも今更だがこれって多分護衛の人とかが付いて来るんじゃないや?と思つたが

その通りだった。カルマンさんに観光に行つて来ると言う当たり前の様に護衛の人が4人程付いて来ることになった。

しかもエルフラントさんに気を使ってなのか全員女性。場違い感凄いな。

改めて説明させてもらうとこの世界の軍隊は男女ともに入隊が可能だ。

それも戦闘職種である歩兵や騎兵、弓兵にも普通に女性が居る。勿論後方支援系の方に居る女性が多いのだが実際の所、割合で言えば五分五分。

平民から貴族に至るまで例外なく軍門を叩けば入る事が出来る、という訳だ。

まあそんな話は置いておいて。

そもそも話、女性5人の中に男一人と言うのはかなり変だ。

何より気まずいというか、居づらいのが4人とも美人なのだから余計にそう感じてしまう。

いや、別に嫌という訳ではない。俺だって男だしそれなりにそういう欲求はある。

まあエルフラントさんは顔見知りだし、何だったらちよつと色々あったからそれなりに親しい。失礼だが簡単に言えば慣れている。

しかし4人は今日が初対面の人達である。

そんな人達に囲まれたら普通に緊張するしなんだつたら怖いとさえ感じるだろう。

まあそんな事を気にしても全く意味が無かったのだが。

簡単に言えばこの4人、良い人達だった。

王都の事を何も知らない俺に懇切丁寧に説明してくれる。

食事、洋服、アクセサリー関連の店。まあその辺は基本的に高価な店が多いので今の俺には全く手が出せない。

報酬が出れば行けるんだけど。

今の俺は殆どすっからかんなのだ。ハンヴィーの燃料を往復分十多少の予備、M4、M9の弾薬をマガジン7本×3回分。

これで精一杯。

あとは此処に来る道中で食料の呼び出しで使ってしまった。

家が貰えて、王都行きが間近に迫っていたこともあって依頼を受けられなかったことがここに来て響いてきた。多分報酬は戦勝パーティーの時に貰えるんだろうが、それまでの今日と明日、明後日の昼までは王都を見て回れることは出来ても面白い物とかは一切できないという事だ。

まあ見ているだけでも十分楽しいのでその辺は全く問題は無いが。

さて、取り敢えずの所、王都に到着した初日である今日はエルフラントさんと王都を観光して、夜を迎えた。

王城に帰ると既に夕食の準備がされているらしくエルフラントさんは、

「国王陛下に食事に招かれたのだからちゃんとした格好でなければならぬ。私も着替えて来るが、お前もくれぐれも、その恰好で来る事が無いようにな。もしその恰好出来たら張り倒す」

と言いながら部屋に戻って行つた。

いや、この格好で来るなも何も服をこれしか持つて居ないんですが。

流石に無いだろうと思ひながらメニユーで確認してみれば、一応あるにはあつた。

軍服としての正装が。

というよりも制服があつたのだ。

しかし呼び出すことが出来なかつた。

金が足りないのだ。

流石にあのエルフラントさんの目はマジだったのでどうすればいいのか悩んだ挙句、カルマンさんに相談したところ。

普通に貸してくれた。

いや、最初っからそうすればよかつたじゃないか。

という事で服装はクリア。

これでなら行っても問題は無いだろう。

廊下に出ると、クレイドルさんとエルフラントさんが既に待っていた。

「おお……よく似合っています」

「そうか？俺は余りこう言った服装は好きじゃないんだがなあ」

「私よりはマシですよ。着ているというよりは着られている、と言った方が良いでしょう」
クレイドルさんはスーツか燕尾服だか分からないがそれを着ている。

そして筋肉が凄すぎてパツパツだ。胸のあたりと腕が主に。

変な動きをしたら千切れ飛んでしまうだろ。あれは。

もっと大きなサイズが無かったのか、と考えたがクレイドルさんがきているんだから問題は無いのか。

「エルフラントさん、とてもお綺麗ですね」

「ありがとう。まあ、こんな格好なんて初めてなんだが似合っていたように感じるよ。それよりも、お前こそちゃんとした格好で来たとは驚きだ」

「エルフラントさんが言ったんでしょう？」

「お前が正装用の服を持って居ない事なんて丸分かりだったからな。カルマンさんに言えば貸してくれたらどう？」

「ええまあ」

「私もこういう服は持って居なかったからな。貸してもらったんだ」

「そうだったんですね」

歩きながら話す。

さっきの謁見したところと同じような所かと思っていたのだが、如何やらそうではないらしい。

晩餐会なんかをやる時はあれと同じぐらいデカイ所でやるらしいが今回は人数も少なく、何より国王自身が近くで話をしたいから、という事らしい。

そして何処かの部屋の前に着いた。すると扉が開き、その先には国王と王妃、それに見覚えの無い50代程の夫婦と思われる二人と更に20〜30代の男女が6名にそれよりも若い10代〜20代ぐらいの少年少女達が10人程。

「おお！良く来てくれた！さあこちらに来てくれ！」

何故だか物凄く上機嫌な国王に部屋の真ん中あたりに連れて行かれる。

「紹介しよう。今回の件の英雄であるイチロー殿にラウナー殿、エルフラント殿だ。三人とも、こっちの面々は私の息子夫婦と孫達、そして曾孫達だ」

国王一家勢揃いですか。

これ今此処が吹き飛びでもしたら大変な事になるな。

「イチローです」

「クレイドル・ラウナーと申します」

「コルネー・エルフラント、と申します」

それぞれ自己紹介をする。そして国王一家との夕食会が始まった。

それから始まったのは国王一家とは思えないほどの無駄にフレンドリーな会話だった。

その雰囲気にかけてられてやらかしてしまわないか終始緊張しっぱなしで何を話したのか全く覚えていない。

多分、俺の戦い方とかそんな感じだったと思うんだが……

3時間程の夕食会を終えて漸く解放される。出された無駄に豪華な食事の味も全く覚えていない。というか緊張しすぎて口が乾いて水ばかり飲んでいた気がする。

その日は結局緊張疲れで部屋に戻って、この世界に来て初めての風呂に入った。風呂も無駄に装飾に凝ったりしてちよつと引いてしまった。

どういう原理なのか聞いてみると鉱山で発見される魔石（鉱脈付近で可視化出来る程に濃く溜まっていた場所で土に埋もれて長い年月をかけて生成されるものらしい）を使う事によって出来るそうだ。

コスト的にもかなり掛かるが初期投資に必要な金額だけだそうで、魔石自体は魔力を込めれば何度でも使用できるから長期的に見れば安上がりになるそうだ。

魔石かあ……

いつか購入して俺の家にも設置したい。

正直、井戸から水を汲み上げてそれで身体を洗うでもいいのだが、考えてみて欲しい。井戸水である。地下から汲み上げるのだから当然冷たい。

そんなんで真冬にでも身体を洗えばどうなるか。当然風邪を引く訳だ。体が資本な職業柄、そんな事になれば稼ぎが無くなるし、この世界の医療は魔法に頼りきりで全く進歩していない。

風邪でも余裕で死ぬるのだ。冗談抜きで。

だからそんな事にならない様に風呂が欲しい。

いつかイリオル大山脈に行って魔石を購入しよう。

そんな決意を胸に抱きながら、ベッドに潜り込むと疲れもあつてか直ぐに寝てしまつた。

設定集1

ロンバルティア王国

東側をオール大森林、そしてオール大森林の中心辺りから北、そして北西の方角まで伸びるイリオル大山脈に囲まれている国家。

規模としては中国程度だが、資源に恵まれており自給率が高い。

北に同じような中小国家が存在するがそちらとは貿易程度の関わりである。

国内で鉱物資源、主食料である麦やその他野菜などを多くとれるため、北の中小国家へ輸出をすることで稼いでいる。

王国領内には人族の他にエルフ族、ドワーフ族などの複数の種族が共存している他種族国家。

しかし基本的にエルフ族は森から出て来ることは無く、時折森の特産品や森の中では調達出来ない物を購入する為に近くの町に出て来る程度。しかし王国の庇護下にあ

る為、戦時に関してはエルフ族の庇護をする代わりに魔法適性が高く、弓の使い手にも優秀な者が多く存在するので可能な限り軍に協力する事が義務付けられている。

庇護下に存在する理由としては、ロンバルティア王国側ではないオール大森林の向こう側に国家が存在するがその国家は人種族至上主義な為、王国の庇護が無ければ簡単に飲み込まれてしまう。

戦争時に追われた為、オール大森林を超えてロンバルティア王国に逃げ込んだことから関係が始まる。

ドワーフ族もエルフ族同様、イリオル大山脈から出て来ることはまずない。

物を作ったりする方が性に合っている職人氣質な種族。

ただやはり変わり者は居る様でドワーフ製の鉄器を売り歩いていたりする者もいるので一概には言えない。

少数だが王都の工房や軍にもいる。

政治なんかお断り、というスタンスを貫いている。しかし理不尽な事を言われると普通に怒りだすので扱いが難しい。

ロンバルティア王国は西に存在する帝国と呼ばれる国家と度々軍事衝突を繰り返しているが小規模。過去に王都まで一部の軍勢が攻め上がったって来た事がある為、その時蹂躪された教訓から壁を建設した。

王都は4重の壁に守られており、現在は5つ目の壁の建設中である。東側から最優先で建設を行っているがどれだけ急いでもあと数十年は掛かる。

基本的に建設は人力、高所に物を運ぶ時に簡易的な木組みのクレーンで物を運び上げたりする為、大きな石材を使用することは出来ず強度に問題が出て来るがその辺りは厚さでカバーしている。

現代で言う所のセメントの様な物を使って隙間を埋めている為、厚さもあつてか強度は驚くほど高い。ただ、主人公が呼び出せる自走砲などに関しては全くの無力。

—————

オール大森林

広大な面積を有する森林。

余りにも広大且つ、強力な魔獣や魔物、未知の魔物、魔獣が数多く生息しており調査もされていない手つかずである。

知られている事は森の最深部にエルフ族が住んでいる事と、中間付近に大きな裂け目が存在する事程度。

これはエルフ族からの情報によるもので人間が直接見たものではない。

エルフ族の村も、裂け目の正確な位置自体も何処に存在するのも不明。

エルフ族によると最深部付近の方が他よりも安全で住んだりするのは問題無い。

しかし裂け目付近には他よりも強力な魔獣や魔物が存在するという。

翼竜種、飛竜種などの存在から、地中を住処とするイーターワーム、土竜なども生息しているとの情報がある。

なんとか調査隊を派遣してはいるがどれも未帰還となった為、今現在では調査などは行われていない。

多種多様な生態系を有していると考えられているが全くの未知である。

しかし大森林の魔物や魔獣が大森林から出て来ることは稀。

オール大平原

リーヴオリの町が存在する。
村などが点在する。麦や野菜の栽培が盛ん。
特筆事項無し。

イリオル大山脈

ロンバルティア王国を東にあるオール大森林の中心辺りから北を通過して北西の方に

伸びる大きな山脈。

地下資源が豊富。

各種鉱石の産出が多く有名で、鉄鉱石から始まり銅鉱石、錫など戦争をするにあたって必要不可欠な物から、金銀、白銀などの装飾品として用いられる鉱石の産出も豊富。

古くからドワーフ族が此処に定住しており、建国時に衝突などがあつたが山脈の向こう側の国とドワーフ族との戦争時、ロンバルティア王国がドワーフ族側に立つたこと、今現在はロンバルティア王国領となっている。

ドワーフ族は鉱山で働く者、鍛冶職人として働く者が殆ど。

先述の通り稀に変わり者は居る様でドワーフ製の鉄器を売り歩いていたりする者の様に行商人の様な事をやっていたり、軍に入隊する者や王都などに出て来る者もいるので一概には言えない。

ドワーフ族が住んでいる為、金属加工品に関しては国内随一、他国なんかよりもよっぽど優れている。

そのドワーフの作った武器は通常の物よりも遥かに性能が優れており、この国では王都に駐留している5個騎士団を始め、精銳の部隊には人数分十予備が配備され、それ以外の部隊も予備は少ないが人数分は配備されている。

この山脈を挟んで向こう側までがロンバルティア王国領となる。山脈の向こう側にも町などがあり、そちらと行き来するには特定のルート以外に道は無く、その数も3箇所と限られている。守るに容易く攻めるに堅い、天然の要塞の様相を呈している。

生態系に関しては、よく見られるのがジャイアントワーム。平均的に50m程である。

未確認ではあるが100mを超す個体の存在もいるらしいが……

採掘作業中にぶつかってしまふ事がある為に確認される事が多い。

ただし性格は温厚か、臆病のどちらかであり襲われることは無い。土ごとエサとなる存在を吸収するが、土や鉱物などは糞として排出するので彼らが通った後には多くの鉱石資源が残っている。

ドワーフ族からは信仰されており大切に守られている。

他にもジャイアントワームを狙って土竜や、その土竜を狙って飛竜種も生息する。

ただし温厚なのはジャイアントワームのみで土竜や飛竜種などは普通にドワーフや人間を襲う。エサとして見ている為である。

模擬戦

国王との食事会の翌日、この日は何故だか組まれていた騎士団との模擬戦を行う事になった。

いや、なんでだ。おかしくないか？

そんな訳が分からない事になっている理由なのだが、どうにもゴブリン討伐の時の話を聞いた何処ぞの誰かさんが、

「聞いた話に違いがない強さなのか確かめたい。もし嘘をついているのだとしたらそんな輩に報酬金を出すわけには行かない。それにもし嘘だったとしたら取り押さえなければならぬ」

とか何とか。

まあ実際にはそんな大層な理由なんかでは無くただ単に金が惜しいだけなんだろう、との事らしい。

こんな時にも貴族の連中はそう言った事しか考えてばかりで、もし本当だったとしたらその力を何とかして自分が独占したいのではないか、とも。

どちらにせよ碌な事じゃないのは確かだ。

態々教えてくれるエルフロントさんとクレイドルさんには頭が上がらない。

という事で王城の中にある練兵場に来ており、模擬戦の準備を進めている。

この王城すげえな。収容量が半端じゃない。

聞いた話じゃ食料、武器その他の戦時に備えての備蓄は王城での物資がその半分を占めているんだそうだ。

それに加えてその物資を前線への運搬などを担当する部隊が複数、それに近衛騎士団が駐屯する練兵場。しかもその軍人の人数が運搬を担当する部隊が3000に近衛騎士団が2000の合計5000。

それに魔法使いの部隊、何と言ったか。

たしか魔法師団とかなんとか言っていたな。それが大体500人ぐらい。

これ程の数がこの練兵場には駐屯しているとの事。

と言つてもどうすればいいのやら。

基本的に実弾ばかりで、一応訓練用のゴム弾やらもあるにはあるのだが分厚い鎧を着込まれると効果があるのかどうか怪しいと言わざるを得ない。

しかし実弾なんか使つたら間違ひ無く殺してしまうに決まつてる。

今俺が使っているM4の実弾と言うのはそれなりに殺傷能力を持つて居る。それも人であればあるほどに効果的だ。

と言うのも、小さい目標であれば銃なんて使う必要は無いが逆に大きい目標だとそれはそれで威力が足りない。

しかし人間や、人型の魔物や魔獣、それに近い体躯の生物魔物魔獣に対しての効果は絶大だ。当たり所が悪ければ即死。そうでなくても間違ひ無く戦線離脱を余儀なくされる。

ただそれは堅い鎧なんかを纏っていない、という事が前提になる。

そう言う目標に対しては貫通弾を使つたりすればいいのだがこれ、貫通する威力が高すぎて下手をするとう文字通り貫通してしまう。そんな見ず知らずの人の身体に風穴を開けたくはない。

殺さずに無力化すると言われるとそれこそ……あ。

そうだ、催涙弾があつたな。

ゴム弾もあるにはあるが、鎧を着込んでいる相手なら間違ひ無く弾かれそうだ。

ただの鉄製の鎧で薄いなら効果はあるだろうが、ドワーフが作った上にしかもただの金属じゃない。薄いものにも関わらず正気を疑う様な硬度を誇っている鎧もあるらしいしそれが本当だとすれば多分意味が無い。

エルフランドさんやクレイドルさんの鎧を見てみた感じ、呼び出せる防護服の様な密閉性は皆無だと見ていいな。

関節部分には装甲は施されていないし、兜も物によるが結構隙間だらけだ。

あれなら普通に撒き散らせば余裕そうだ。

取り敢えず、催涙手榴弾とスタングレネードを呼び出す。

ガスマスクと耳当て、サングラスを用意する。

まあ至近距離で浴びる100万カンデラの光を防げるかどうかと言われると分からないが……

サングラスなんて無いと思っていたので驚きだ。

どうやら軍でも使われている物らしく作りも頑丈だし、砂埃も防ぐ事が出来そうな作

りだ。

まあしかしガスマスクとサングラスは併用出来ないのが痛いな。サングラスを掛けながらガスマスクなんてしたら隙間から催涙ガスが入ってきてしまう。

なので先に閃光手榴弾を使って視力を奪ってから催涙弾の使用となるだろう。

本当は室内とかの方が効果が高い上に自身への被害も抑えられる。

だが今回は開けた練兵場のグラウンドの様な場所で行うのだ。風が吹けば催涙弾の煙は流れて行ってしまいうし風の向きが自分の方へ流れて来たのならば自滅だ。

閃光手榴弾に関しても同じ。

投げて自分も喰らってしまつては意味がない。

そう言う訳で準備した装備は基本は非致死性の閃光手榴弾4つと催涙弾を8つ。これをを中心に、一応M9とマガジンを7本。

催涙弾を閃光手榴弾の倍呼び出したのには理由がある。

と言うのも練兵場のグラウンドの面積は広い。それ故にカバーできる範囲を増やす為だ。

M9のマガジン数の数が多いのはM4を持ち出さないのでM9のマガジンの携行数を増やした。

まあドワーフ製の鎧に効果があるのかどうか分からないが……

弾かれて変な方に飛んで行ったりしていけない被害が増えそうな気もするので使うのはあくまでも最終手段という事だ。

あと、エルフロントさんにちよつとした書類を準備して貰っている。

万が一対戦相手が怪我をした場合、向こうから仕掛けて来た事なのだから責任を取れなど言われたら堪らない。そしてこの模擬戦で起きた全ての事に対して責任を取らないと確約する事。

だから書類に万が一の時、俺に対して責任を要求するな、という内容の文面とそこに国王のサインを貰う予定だ。

サインしてくれるかどうかは分からないが

もしそう言った状況になって銃火器を寄せなどと言われたら取り敢えずオール大森林に逃げ込もう。

携行できる武器が通じなければエサになりかねないが。

そんな事を考えながらベストにハンドガン用のマガジンポーチと閃光手榴弾、催涙弾をポーチに入れていく。

それとガスマスクを取りやすい様に吊るしておく。

サングラスはまあ、胸の辺りにでも挿しておくか？いや、予め書けといて良いか。閃光手榴弾を使つてからじゃないとどうせ煙だから簡単に避けられるに決まつてる。

「国王陛下、模擬戦を始める前にこちらを読んで欲しいのです」

「なんだ？何が書いてあるのだ？」

「もしこの模擬戦で何かしらの被害が出た場合、その一切の責任を私に問わないと約束して欲しいのです」

「それは何故か？不都合でもあるのか？それにその言い方であれば周りへの被害が出ることを前提としているような口ぶりではないか」

「説明させていただくと、最悪模擬戦の相手が死んでしまうかもしれません。私の武器には皆様が使うような刃引きをした剣の様な物は少ないのです。直接攻撃する手段ともなると殺すしか出来ません。寸止めも出来ない。一応非致死性の武器を選んであ

りますがそれも絶対ではなく、死なないかもしれませんが痛みなどを伴う物です。それも対象者だけではなく周りへも被害を出してしまうのです」

「それは何とかして防ぐことは出来ないのか？」

「無理です。ここまで開けた場所ならば間違い無く国王陛下やご観覧されている方々にも被害は出てしまいます。出来るだけこちらも気を付けますが」

「ふむ、良かろう。そもそもこれを言い出したのは我ら側だ。その様な事があれば責任は問わないと約束しよう」

「有難うございます。感謝します。それではこちらにサインをして頂けますか？書いてある説明をもう一度ご自分の目でお確かめになっても構いません」

「分かった。誰か、書くものと国璽を急ぎ持つて参れ」

「畏まりました」

それから国王はペンに国璽（本来ならば国の重要書類に押す印鑑なのだが今回は何故かこの書類に使う事に）が届くまで書類に書いてある内容を読んでからサインと国璽を押した。

「ふむ、これで不備は無いか確認して貰えるか？」

「有難うございます。確認させて頂きます」

隅々までしっかりと確認してから問題が無い事が確認された。

「問題ありません。お願いを聞いていただき有難うございました」

「なに、気にするな。それでは色々と期待しておるぞ。どうやら格好も戦闘用の物であるらしい。楽しみだ」

「はい。あ、そうだ。皆様、強い光と煙にはご注意ください。侮っていると痛い目を見る事になりますので」

俺がそう言うのと全員が不思議そうな顔をしていたがエルフロントさんとクレイドルさんは何となく察したようだ。

まあ俺の戦い方を見ていたのだから当然か。

よし、国王からのサインも貰った。

あとは戦うだけだな。

練兵場のグラウンドに立つと、正面に鎧を着た如何にも強そうな人が立つ。

すると兜を脱いだ。

「今回の相手を務めさせてもらう、近衛騎士団一番隊隊長レイトン・キンテットだ。よろ

しく頼むぞ」

中の人はまあ言ってしまったえば筋肉モリモリの白髪の男性だった。

おうまじか。この人身長190はあるぞ？

しかも武器がでっかい大剣……重さだけだったら100kgあるんじゃないか？

そんなもんをぶん回せるとかどんな筋肉しているんだ一体。

余りにも衝撃的すぎて固まってしまったが慌てて挨拶を返す。

「名乗りが遅れました、イチローと申します。生憎と名乗れる姓がありませんのでご容赦下さい」

「イチローか。よろしく頼む。それじゃあ早速始めようか！」

「はい」

二人でそう頷くと、それぞれ位置に付く。

取り敢えず、右手に閃光手榴弾を握っておく。

「なんだ？武器はその、黒い筒か？」

「秘密ですよ。教えてしまったら意味が無いですから」

「それもそうか」

「両者とも準備は宜しいか？」

「はい（おう）」

「それではこれより模擬戦を開始する。両者どちらかが戦闘不能、もしくは降参した時点で終了とします。それでは……」

「模擬戦開始！」

耳栓をしてしまったので周りの音が良く聞こえない。

サングラスも掛けた。

審判の手が振り下ろされた。

様子見なのかレイトンさんは近寄って来ない。

これなら好都合と言える。接近されなければこつちのもんだ。

閃光手榴弾の安全ピンを抜き、正面に向かって即座に投げつける。

続けて右、左と投げて落としていく。

流石に警戒しているようだがもう手遅れだ。

直後、耳栓をしても突き抜けて来る爆音と閃光が周囲を包む。

流石に耳栓じゃこの至近距離の爆音は防ぎきれなかったか。

サングラスをしていて良かった。まあ防ぎきれないんだが。

「なんだ!? 何も見えんぞー!」

そう叫びながらも彼は周りへの警戒をしつかりとしている。

これは下手に突っ込んだでも逆に斬られるだけだったな。

というか普通だったら方向感覚なんかの見当識を失うはずなんだがなんで周りの警戒が出来るんだ?

続けてガスマスクを装着してから催涙弾を二つ足元に投げつける。

催涙ガスが出始めた。

二つも投げつけられそれなりに濃くなった煙に包まれてしまったレイトンさんは、想像通りとなった。

「ぐわあああ!?! な”ん”た”こ”の”け”む”り”は”あ”あ”あ”あ”!?! ゲホツ!?! い”き”か”す”え”な”い”!?!」

取り敢えずガスマスクをしているので催涙ガスの中に入って行き、レイトンさんを引つ張り出してくる。

するとどうだ、顔は酷い有様だ。

鼻水涙、涎でドロドロ。

目は充血して口と鼻からは際限なく涎と鼻水が流れ出している。しかも顔は真っ赤になっているし。

なんだか申し訳なくなつて来たぞ。

それから取り敢えず井戸の方へ案内して貰つて徹底的に洗い流す。

鎧からその下に着込むシャツや肌着に至るまで全部だ。

こうでもしないと本当に取れない。適当にやると後々また痛い目を見る事になる。

そして他の人にレイトンさんを任せて俺は練兵場の方に戻る。

するとどうだ、大騒ぎになっていた。

なんでも風に流された催涙ガスが運悪く訓練中だった騎士団に直撃してしまつたらしくそれはもう酷い有様になっていた。

あちらこちらで催涙ガスによつて喉や鼻、目をやられ呻いている。

すると貴族と思われる人間の一人がこっちに顔を赤くして怒鳴り散らして来た。

「おい貴様ああ!!これはいったいどういう事だ!？」

「どうも何も、私の武器のせいとしかと言えませんが」

「なんておぞましい毒を撒いてくれたんだ!!さては帝国の手先だな!？」

「何を言っているんですか。これは毒物じゃありませんよ。それに帝国の手先?仰っている意味が分かりません」

怒る理由は分かる。

そりゃ何十人もがいきなり苦しみ出したりしたらそりゃ毒だと疑うだろう。

まあそこはしようがないが帝国の手先って何なんだ？

俺は帝国に言った事もないんだぞ？

「シラを切るな!毒物でないというのなら何なのだ!?どうやって証明する!？」

「全員を水で洗ってください。それと鎧や剣なども全て。そうすれば痛みなども引いてくるはずですよ」

「嘘をつくな!!」

じゃあ何て言えばいいんだ。

もう怒りで我を忘れてるな。

そこでタイミング良く国王が登場。

なんか言つて落ち着かせている。

凄いな、あれがカリスマというやつか？

「部下が申し訳ないな」

「いえ、こちらでも事前の説明が不足していました」

「それはしようがないであろう。態々手の内を晒すような事をする奴は愚か者だ。だが模擬戦は終わった。出来れば説明をしてくれると助かるのだが、どうだ？ 勿論先の書類に書いた通り責任は問わん。まあ謝罪くらいはしておいた方が良からうがな」

この国王は物凄く良い人なんじゃないか？

だつて普通だつたらあんな書類破り捨てて極刑でもおかしくは無い筈なんだが。

「勿論説明させて頂きます。最初に投げたものは音と光で聴覚と視覚を奪う物です。遮蔽物があれば防げるのですが」

「あれか。あれは眩しかつたしとんでもない音だつたな。太陽を直視して耳元で飛竜が叫んでいるのかと思つたぐらいだ」

「それは本当に申し訳ありません」

「今のは笑う所だぞ？」

今の笑う所だったのか。

そう言うのは分からないから難しいな。

「失礼しました」

「気にするな。それで？」

「二つ目の物は噴き出した煙によって肌や鼻、口、目に刺激を与えて戦力としての能力を削ぐものです。正直あれはやり過ぎたと思っっています」

「ふむ。で、毒ではないのだな？」

「勿論です。水で洗い流せますので問題は無いですよ。ただ身に着けていた物全てを洗わないとそれを着たりしたときに軽いですが同じような症状が出ますのでご注意ください」

「分かった。それは命令しておこう。おい、聞いていたな？」

「はっ。今すぐに装備などを含めてすべて洗わせるように命じます」

近くに居た執事さんが伝えに行く。

そして幾らか説明した後レイトンさんが戻って来た。

「おお、レイトン大丈夫だったか？」

「出来ればもう二度と体験したくない物でした」

「そんなにか？」

「はい」

「ほほおう……イチロー、先程のを余にも体験させてはもらえんか？」
この王様何言ってるんだ。

思わず素の口調で返してしまう所だったが何とか踏みとどまった。

催涙ガス体験は結局流れる事になった。そりやそうだ。一国の国王がそうホイホイとやっても良いような代物じゃないな。これ催涙ガス浴びると最悪一日程度は催涙ガスに触れた部分に違和感を感じたり鼻水が止まらなかつたり目が痛かつたりとしないで。

身体は倦怠感に襲われてそれどころじゃなくなる。

そうなれば執務など手を付けられなくなるかもしれない。

ああ言った物は一日の遅れで後々に盛大に響いてくるものだったりするからな。

部下の人達が宥めていた。

と言つても国王本人もそこまで本気だったわけじゃなく出来たらいいなぐらいにし
か考えていかなかったそうだ。

「しかし改めて考えてみると完封と言つた勝利だったな。随分と面白い模擬戦であつ
た。だが本当の実力は見る事が出来ていないと言えよう。イチローよ、他に何か実力を
見せられるようなものは無いのか？」

模擬戦も終了し一旦全員で集まつた。

この場で国王自身が勝者を告げることで云々……と言つていた。

そこでそれが終わつてから国王がまた何かを言い出した。

曰く、他にもつと実力を測れるものは無いのか？だそうだ。

と言われてもそうなつて来ると射撃や格闘になつてしまふが相手を付けたら射撃で
は殺しかねないし格闘では通じるかどうか分からない。

「あるにはありますが……」

「ほう？ではなぜ渋そうな顔をする？」

「相手が居ると死んでしまふかもしれないのです。そんなことは出来ればしたくない」

「ふむ、相手が居なければ出来ない事では無いという事だな？」
確かにそうだ。

何時もは適当に目標を定めてそれに向かって撃っていたから考えもしなかった。
木だったり適当な丘だったりしたからな。

「そうではあります」

「ならば打ち込み訓練用の人形であれば問題は無かろう。どうだ？」

そんなものがあるのか。

まあ生身の人間でなければ問題は無いか。

「……それならば大丈夫かと思われます」

「そうか。ならば早速準備させよう」

すると指示を出して早速準備をさせる国王。

はっやいなおい。今やるのか。まあいいけど。

それから先程まで模擬戦（という名の一方的蹂躪）が行われていた場所に打ち込み訓練用の木で作られた人形がそこに立てられた。

スツゴイなあれ。しつかりと人間の形をしている。

しかし近いぞ。こんな近距離射撃じゃないか。精々15m程しか離れていない。この距離なら外す方が難しい。

M9ならまだしもM4でならほぼ確実に何処かしらに命中させることは出来る。

「これでよいか？」

「まあ、大丈夫です」

「ん？何か問題でもあるのか？」

「いえ、これと言つて問題はありません。人形とは言つても丸太のような物を想像していたので驚きです。ですが強いて言うならば距離の問題でしょうか」

「距離？遠いという事か？」

「いえ、その逆です。近すぎるのです」

「近すぎる？」

「はい。あまり詳しくお教えできませんが私が普段扱っている武器の射程距離は300m程なのです。ですからこの距離だと近くて驚いただけなのです」

「ふむ。ならば端の方に置き直すとしよう。置く場所に何か意見はあるか？」

「……あそこにお願ひできますか？」

「分かった。おい、誰かあの場所に人形を置いて参れ」

「承知いたしました」

そう言つて俺が指定した場所に人形を置きに行く。
手間を取らせて申し訳ない。

俺が指定した場所と言うのはこのグラウンドの一角にある斜面になつてゐる場所だつた。あそこなら流れ弾の心配も少ない。

しかし地面でも跳弾は起きるから絶対ではない。

あとは向こう側に人間を立たせなければいけないだけだ。

ふと周りを見ると多くの人間が集まつていた。

まあ国王が態々練兵場に来て何かやっているし、いま新しく何かを始めようとしているのだから気になるのも無理はない。

「国王陛下、これから私の戦い方をお見せします」

「うむ」

「その前に幾つか注意事項があります」

「注意事項？」

「はい。まず今私が居る場所より前に誰一人として立たないで下さい。私の攻撃は当たれば下手をすると即死ですから」

「分かつた。他に何かあるか？」

「私に近づかないで下さい。危険ですから」

「分かった」

「以上です。それでは始めましょう」

俺がそう言うのと、周りが少しざわつき始めた。

まあこれ程の遠距離でどんな攻撃をするのか誰も見当が付かないのも無理はない。

確かこの世界での遠距離攻撃となると弓か、投石器、あとは魔法攻撃の三択になっていたはず。他に何かあっただろうか？

まあどちらにせよこの武器の射程は短い。

弓の種類にもよるが確実に殺すのであれば50m程度が有効射程だ。それも鎧を着ていないのであれば。

もし鎧を着ていればもつと短くなる。

投石器に関しては弓よりも射程は長いがそれでも高が知れている。

そもそもあれって攻城兵器というやつなんじゃないか？野戦でなんて使えそうにもない。装填に時間が掛かるし。

だったら弓の数を揃えた方が良いに決まってる。

魔法に関してはよく分からないが銃火器程の射程は無いとだけしか言えない。

というのも術者によって射程が大きく前後するらしい。

という訳でこんな距離に届くような攻撃なんて想像もつかないだろう。

まあ大人しく見ていればいい。邪魔されると危険極まりないが見られる分には問題無いだろう。

それじゃあ、始めるか。

まず最初はM9……ではなくM4から。

目標（人形）は大体300〜350m程離れている。この距離だとハンドガンじゃ無理だ。だがアサルトライフルであるM4じゃ余裕の距離だ。まあ特に修正を掛けたりしなくても狙えば当たる。

それでも多少の修正は必要だが。

M4を呼び出して、うつ伏せで射撃をするのでバイポットを取り付ける。

うつ伏せになり、じっくりくる姿勢を探る。

まあ何時も射撃している時の姿勢なのだが。この姿勢を探るのに二週間ほど掛かつ

た。

それが終わったらバイポットの高さを調整して丁度いい高さに。

これ、高すぎても低すぎてもやりずらくなって大変だ。だから適当に出来ない。

それが終わればマガジンを呼び出してM4に挿し込む。

コッキングレバーを引いて初弾を装填。安全装置はまだ掛けたままにしておく。

サイトを覗き込み狙いを付ける。その時、左右上下への修正を忘れない。

そして安全装置を解除して、先ずはセミオート射撃。

レバーをセミオートに持って来てこれで射撃が出来る。

狙いの修正はしてあるから問題はない。

風が若干吹いてはいるが問題にはならない。

そのままゆっくりと引き金を引く。

適当に引き金を引くと狙いが外れてしまう。

バンツ!!

うつ伏せでの射撃だから砂煙が上がる。

多少視界が悪くなるがまあ直ぐに晴れるし大丈夫だ。

しかし、やはりなにか引いておけば良かったかもしれない。
薬莢の回収が面倒だ。

でも射撃を見せてしまっている時点で面倒事になりそうな気もするが今更か。
砂煙が晴れて来た。

サイトを覗いてみると、上手い事ド真ん中に当たってくれた。

続けて2発目3発目と打ち込んでいく。

それもしつかりと人形に吸い込まれて行く。

1マガジン分全てを単発で撃ち切る。

マガジンを引き抜き薬室内に弾薬が残っていないか確認する。

よし、問題は無い。

それが終わってから立ち上がる。

取り敢えず薬莢の回収をしてから終わる。

まあ別にフルオートはやらなくても良いだろう。

「よし、こんな感じでどうでしょうか？」

「な……………あ……………これは……………一体どういう事なんだ……………？」

「これが私の武器です」

結局その後はまあ面倒だったとだけ言っておこう。

銃とその攻撃力を見た貴族連中や騎士や兵士が詰め寄ってきた挙句、なんとかして手に入れようとあの手この手で寄って来てうざかった。

「いやはや、あんな凄い物だとは思っても見なかったぞ」

王城に戻り、部屋でゆっくりしていると何故だか国王が訪ねて来た。

いや、仕事しないでいいんですか？

午前中丸々潰したんだから絶対溜まっていると思うんだが。

「有難うございます」

「例のゴブリンの大軍もあれで全て仕留めたのか？」

「まあ同じような物ですね」

「そうかそうか」

結局この日は国王が部屋に入り浸っていた。
いや、本当に仕事をしなくていいんですか？

下賜式

模擬戦後、国王が部屋に日が暮れて晩飯になるまで居座った次の日。

その日は祝勝会だか晩餐会だかを行った。

さて、今現在参加している俺の意見を言わせてもらおう。

今すぐ帰りた。

と言うのも銃の威力を知った貴族連中の娘達が大挙して押し寄せて来た。

まあこれぐらいなら想定済みだったしエルフロントさんやクレイドルさんに説明されていたから覚悟はしていた。

実際それ以外にも滅茶苦茶な程の数の勧誘を受けるし、挙句の果てには脅迫紛いのような事を言つて来るような連中もいた程。

まあそう言う奴らはカルマンさんにしよつ引かれて行つた。凄いぞあれは。

貴族だなんだと言ひ張る連中を物ともせずにしていたのは格好良かった。

そんな事をして大丈夫なのか、と聞いたが国王から直々にもしそう事があつたらカルマンさんの裁量に任せ、俺やエルフランドさん、クレイドルさんを守るよう、と言われていたそうさ。

カルマンさんは笑いながら、

「これは王命ですから。逆らうという事は国王、ひいては国家そのものに反逆するといふ事です」

とか何とか。

正直言つて迫力が凄かったとだけ言つておこつ。

ただ、それ以上に問題だったのはもつと別の物だった。

今現在の俺の状況でもある事だ。

貴族連中の娘共、香水とか化粧品を馬鹿みたいに使つていて物凄い匂いをしてやがる！

そう、化粧品や香水の方が問題だった。

ハッキリ言つて臭い。物凄く臭い。簡単に気持ち悪くなるほどだ。

考えてみて欲しい。バスの中でやたらと香水や化粧品の匂いが強い女性が居る事があると思う。

あの密閉空間とまではいかないがバスの中でさえあれほど匂う物なのにそれが数十

人も集まってそれぞれが別々の物を使っていたらどうなるか？

答えは簡単だ。ただひたすらに地獄。

しかもド真ん中に居るのだから俺への被害は想像を絶するという事だ。

あの丘での戦いでゴブリン共の死体の匂いにも勝るとも劣らないと俺は思う。

結局俺は簡単に気分が悪くなってクレイドルさんに担がれて速攻で退場。

開始一時間で俺が居なくなるという異常事態になり、その日予定されていた報酬の下賜は予定時刻の二時間遅れで行われる事になった。

「おい、本当に大丈夫なのか？」

「まあ……さつきよりはマシです」

「そんなに顔色悪くて何を言っているんだか。取り敢えずは横になっておけ」

「すいません……」

一旦部屋に戻ってベッドに横になった。

その時、クレイドルさんは同じく面倒だと言ってそのまま俺の部屋に残りエルフラントさんも男共が寄って来てしつこいからとこちらも俺の部屋に。

氣を利かせたカルマンさんが軽食を幾つかと飲み物を持って来てくれたが俺はそれらにも手を付けることはせず起こされるまで眠っていた。

それから4時間後。

揺り起こされ、目が覚めた。

「そろそろ行くぞ。あと30分で始まる」

「ああ、すいません。起こしてもらって」

カルマンさんに案内されて三人で会場に戻る。

戻りたくねえ……またあの匂いと戦わなきゃいけないのか。

なんだか会場の事を考えるだけで憂鬱な気分になって来たぞ。

何となくだがクレイドルさんとエルフラントさんの顔も面倒だと言っているような気がする。

会場に戻ると、先程よりはかなりマシになっていた。

と言うのも窓が全開になっている。風遠しが良くなったことで匂いも抜けて行ったのだろう。

すると後ろから声を掛けられた。

「イチロー、先程はすまなかったな。部下を止める事が出来なかったのは余の責任だ」

「陛下。御心配をお掛けして申し訳ありませんでした」

陛下だった。

今更だけどこの人かなりフットワーク軽いと思うんだけど。

あれか？もう挨拶とか済んだから自由になっているだけなのか？

「なに、部下の失態は余の責任だと言ったであろう？どうか許してほしい」

「大丈夫ですよ。最初から怒ってなどいけませんから。それに下賜式の件も態々時間を遅らせて頂いてこちらこそ頭を下げなければならぬ程です」

それだけじゃなく態々俺の為に謝罪まで言つて来たのだ。

流石にこの公の場で頭を下げる事は出来ないのか言葉だけだったがそれでもその気持ちは十分に伝わって来る。

「よいよい。気にするな。して、体調は？見たところ顔色もマシになったと見えるが」

「万全とはいきませんがもう大丈夫です」

「うむ、そうか。ならば下賜式までは出来るだけ楽しんでいってくれ。ではな」

「はい。有難うございます」

幾らか会話して国王は立ち去って行った。

国王が居なくなつたことでまた集まつて来るかと思つたが今回は流石にそうではなかつた。

漸く平穩になるか？と思つたがそうはならなかつた。

なんか色んな人が俺に挨拶しに来るんだけどどうすればいいんだこれ。

必死になって挨拶を返したり時には躲したりしてやり過ぎす事20分。

漸く下賜式が始まった。

俺、クレイドルさんと並んで俺はクレイドルさんの見様見真似で同じ動作をする。

今は傳えているんだが国王がなんか難しい言葉を言っている。

まあよく分からないので聞き流しているが。

今更だがなんでこういう偉い人の話って長いんだろうか。

ポケットと聞き流していると、本題の報酬下賜の場面となった。

「クレイドル・ラウナー。面を上げよ」

「はっ」

「オール大平原での戦いにおいて部隊の的確な指揮は誠に見事であった。その功績を讃え銀騎士章の授与、及び金貨150枚を与えるものとする」

「有難き幸せに御座います」

その後、国王が首に銀騎士章だかなんかを掛ける。

多分金貨はあれだ、これが終わって帰る時に渡される感じだな。

「というか金貨150枚って普通に暮らせば暫く賄える金額だぞおい。」

「遊ぶんだつたら5年は余裕だとは思うがただ生きていくだけなら20年は安泰だと思う。人によるだろうが。」

「……ん？戦いの時に弾薬その他諸々で消費した金額ってその数倍くらいだった……」

「銃を使っているから依頼の消化がめっちゃめっちゃ早くてしこたま稼ぎまくったような……」

「それに事あるごとに貴重な薬草やらなんやらを取って来たり色々稼ぎまくって……」

「イチロー、面を上げよ」

「はっ」

「今回の戦いで一番の功労者に与える報酬だが、余りにも大きすぎる為に中々思いつかなかった。丘での戦いでゴブリンの大軍を見事討伐、ゴブリンロードの直接的な討伐、そしてそれによる国家存亡の危機を救った事。丘での戦いで死者を最低限まで減らし、自身も治癒魔法を掛けて回ったと聞く。更には本来派遣軍の仕事であるはずの掃討戦への参加。他にも多数あるが此処では紹介しきれぬ」

「これ程の功績を挙げた彼に金銭だけを渡すわけには行かぬ。よって幾つかの報酬を考

えた。もし辞退したいものがあるというのであれば申せ。出来るだけ配慮しよう。良
いか？」

「はっ」

「二つ、金貨3000枚」

はあ!?

3000枚って頭おかしいんじゃないですか!?

驚いたのは俺だけじゃない。見守っていた貴族連中も騒然としている。

そりゃ3000枚なんて訳が分からない金額を提示されたら誰だってそうなる。

多分俺の顔もとんでもない事になっている筈だ。

「二つ、彼は名乗る姓が無いと言った。そこでバイタークハイマットの姓を与える。こ
れからはイチロー・バイタークハイマットと名乗るが良い」

次は苗字ですか。

確かに姓が無いと不便な事は結構ある。

これは有難い。

「三つ。貴族位である侯爵位を与える」

予想してたやつだ。

これは思いっ切り断らせていただきます。

縛られるのは嫌だし、今日見て来た貴族連中の争いに巻き込まれるのは御免だ。

「有難き幸せ」

「して、辞退したいという物はあるか？」

「恐れながら申し上げます。爵位を辞退させて頂きたく思います」

「ほう？何故だ？」

「少なくとも私に見合ったものではない、と思います」

「ふうむ、あい分かった。爵位の授与は取り消すでしょう。他に何かあるか？」

「……できれば報酬の金額も減らしていただけると」

「ならん。それは受け入れられぬ。どうしても言うのならば爵位か減額かどちらかを
取れ」

まあここら辺が落としどころか。

全部ホイホイ辞退していたら意味が無くなるだろうし。

そうするとどっちを辞退するかなんて決まっている。

「……ならば爵位を辞退させて頂きます」

「うむ。それでは次にその他の人間に対する報酬に移る」

次にあの丘で共に戦った人達への報酬の話となった。

「戦いに参加した336人に対しては金貨200枚をそれぞれ与える。本人が戦死して

いる場合は遺族に支払われるものとする。そして身寄りの無い戦死者に関しては王立墓地へ埋葬し、金貨200枚で墓石を立てる事とする」

何故クレイドルさんへの報酬150枚よりも多いのか。

後々聞いた話だが、この金貨200枚という金額は国王によれば妥当との事。

命を懸けて国家、家族の為に戦った人間を軽んじる事はしない。

そして大抵の場合、夫や父親を亡くした家庭は母や姉が苦勞をする。

それは身体を売ると言う事に変わりない。中にはそうではなく別の仕事に就く者も存在するが出来るだけそういう事は無くしていきたい、との事だった。

これだけの金額であれば子供や孫が育ち、職に就くだけの期間は安定して過ごせるだろうという配慮からの物だった。

その後、幾らかの時間を国王が再び皆に向けて話をした。

「これにて下賜式を終わる。皆よ、今宵は羽目を外さぬように楽しんでいってくれ」

そして再び始まる宴。

宴と言つて良いのか分からないが。

俺は相変わらずあの貴族連中の中に入るのは気が滅入るのでテラスでのんびりと食事を摂る。

酒は飲まないから代わりに水か、果実水を持って来て貰っている。

果実水と言うのは水に果汁やエキスを入れたものだ。オレンジや檸檬などの柑橘系に始まって林檎や葡萄、様々な物がある。そう言えばライチもあったな。

勿論果物そのものもある。しっかりと冷やされていてこれがまた美味しい。

用意されていた椅子に腰を掛け、食を進める。

偶にあの時の戦いの話を聞きたがる人間が来るがそれも大体二種類に分けられる。

本当にあつた戦いだと信じている奴とそうでない奴。

ぶつちやけ前者は前者で面倒だし後者もかなり面倒だ。

そう言えば掃討戦に参加していたとかいう奴も居たな。

なんだったか、

「貴方のおかげで妻と子供の元に帰る事が出来ました。ありがとうございます」

と言つていたな。

素直に嬉しいと思う。少し話したがなんでもお腹の中に二人目の子供がいるそうだ。

そりや帰れてよかったと思うよ。

幾ら貴族とは言っても未亡人には何かと風当たりが強いのが現実らしいし。

しつかしあの若さで妻子持ちか。

見た感じじゃまだ20かそこいらだろうか。

やっぱり貴族は結婚も早いんだろうか。

「イチロー、隣に座ってもいいか？」

「ああ、エルフラントさん。どうぞ」

「ふう……漸く一息つける」

「大変そうでしたからね」

「貴族の独身連中は女の後を追っかける事しか出来ないのかもな。そうでなきやあそこまで戦が下手糞なのは有り得ん」

「そうですね」

「とどうか見ていたら助けてくれても良かったらどう？」

「俺にそんな王子様染みたことは出来ませんよ？出来るのは今の所戦う事だけです」

「なに、そんなことは無いさ。あの時だってゴブリンに攫われそうな私を助けてくれたじゃないか」

「状況が別ですよ。あんなに囲まれていませんでしたし」

「ふふ、化粧品匂いでダウンしてしまう王子様か。さぞ人気は出ないだろうな」
「お恥ずかしい限りです」

二人で並んで座り、笑いながら話す。

多分エルフラントさんは酔っているのか分からないが顔は少し赤く、素面の時よりも喋る口調が軽い。

胸元が開いているドレスを着ているからほんのりと汗ばんだ北半球も丸見えだ。
端的に行つてしまえばエロい。

ものすつごくエロい。

元々エルフラントさん自身は化粧をしなくても十分にそこらの女性よりも美人なのだが今日はそれを上乗せする様に化粧をしている。

薄化粧程度だがそれで十分な程の破壊力を持つて居る。

いやそうじゃない。

何を考えているんだ俺は。

というか大丈夫か？変な輩に絡まれたりしないだろうな？

1人にしたら不味そうだなこれ。

そう思つて見ていると少し赤くなつた普段のキリつとした顔つきでは無く少しフ

ニヤつとした表情をこちらに向けて来ていた。

気のせいではないければちよつと、いやかなり全体的にフニヤフニヤしているような。

……本当に大丈夫か？この人。もしかして結構酔っているんじゃないかな？

「エルフランドさん、どのぐらいお酒を飲みました？」

「ん？んー……グラスを10杯ぐらいか？」

「結構飲んでますね……」

そりゃこんなフニヤフニヤになるわ。

10杯って相当だぞ？

呂律は回っているがそれ以外が心配だ。

「エルフランドさん、部屋に戻りますか？」

「ん……そうだな。戻るとしよう。心地が良い時に変な男に話し掛けられては台無し

だ」

そう言って立ち上がると少しふらつく。

やっぱり結構酔っていたんじゃないかこの人。

ふらつくって相当だと思っただけ。

「イチロー、すまないが手伝って貰えないか？ちよつと足取りが覚束無い……」

「ああ、いいですよ」

「部屋まで頼む……」

そう言つて体重を幾らか預けて来る。

……今腕に当たつた柔らかい物は気にしないようにしよう。

というか俺は変な男じゃないのか。

まあ送り狼になつたりする気はさらさらないんだが。

後々が怖いし。

そして部屋に到着。

階段は危なつかしいので俺が抱き上げて登つた。

だつて二回も足を滑らせたら自分で登らせる気にはならない。

本当にヒヤツとしたぞ。多分支えて居なかつたらそのまま一番下まで転げ落ちていたかもしれない。

「エルフラントさん、部屋に着きましたよ」

「ん……ちよつと待て……鍵は何処だ……」

ガサゴソと鍵を探す。

小さいポーチの中に入っていた。

かちやりと鍵を開ける音がする。

エルフラントさんをベットに寝かせて終わりかと思いきやそんな簡単には終わらなかった。

「イチロー、ドレスを脱ぐのを手伝ってくれ……一人じゃ脱げない」

「ええ……そうしたらメイドさんと呼んできますから少し待っていてください」

俺がそう言っただけに行こうとすると、呼び止められる。

「イチロー、ちよつとこっちに来い」

「はい？なんですか？」

「あのな、酔った女が、それも泥酔している訳じゃない女が男に身体を預けるのは何故だと思っ？」

「へ？」

「その男になら何をされても良いという事なんだ。これがどういう意味か分からないわけでは無いだろう？」

「……本気ですか？」

「本気だとも」

まじか!?

まあ確かに部屋に戻る道中やたらと身体を押し付けて来たりしたからまさかと思っ

ていたが……

いやでも有り得ないんじゃないか？

だってエルフラントさんだぞ？あのエルフラントさんだぞ？

俺が自問自答していると、扉の方からかちやりとさつき聞いたばかりの音が聞こえる。

振り向くとエルフラントさんが扉の前に立っていた。

「ふふふふ……これでもう逃げられないな？」

「oh……」

「1人じゃ脱げないと言っていたドレスを脱ぎ去り、あつさりと下着姿になるエルフラントさん。」

逃げようと後ずさりするとベットの端にぶつかると。

……逃げ場が無い。

段々と俺の方に迫って来る。

その姿は何故か迫力があるものだ。

どうする？どうされちゃう!?逃げる？逃げない？迎え撃っちゃおう!?

そんなテンパった思考をグルグルと頭の中で巡らせていると俺の手をキュッと握って来る。

そして小さい声で言った。

「お前は、女にここまでさせておいて帰ろうとするのか……？」

流石にこんなこと言われたら無理だ。

抱き寄せる。

「そんな事はありません。少し慌てただけです」

「それならいい……」

「でも、あとで後悔しませんか？」

「その心配は無いから大丈夫だ」

「なら良かった。あとで後悔して欲しくありませんから」

まあ、その後の事はご想像にお任せする。

「あ、その、初めてなんだ……」

「え？」

「だから、初めてだから優しくしてくれと嬉しい……」

「……善処します」

—————

————— side コルネー・エルフロント ———

今日は下賜式だった。

私自身は直接国王陛下に呼ばれるわけでは無いが、ドレスを着て会場に立っていた。しかしイチローが貴族の子女達に囲まれその化粧品や香水の匂いで気分が悪くなつて一時間しか経っていないというのにダウンしてしまった。

まあ確かにあれはキツイ。

団長がイチローを担いで部屋に運んでいく。

私もその後を付いていく。

貴族の男共が何かと声を掛けて来て一緒に飲まないか、一緒に踊ろうなどとしつこくたまらん。

団長もこういう場が苦手だと言ってそのままイチローの部屋に居座ってしまったが私もそうだから人の事は言えない。

国王陛下が気を利かせて下賜式を二時間遅くしてくれた。

確かにイチローの顔色は悪く、気持ちが悪そうにしている。

イチローの部屋で時間を潰す。

4時間程部屋でのんびりとしているとそろそろ下賜式の時間だ。

イチローを起こして会場に向かう。

そして下賜式が始まった。

国王の話から始まり、団長への報酬。

そしてイチローへの報酬が発表された。

なんと金貨3000枚に爵位、そして名乗る姓が無いと言っていたイチローに姓を与えるとの事だ。

幾ら何でも大盤振る舞い過ぎる。

確かに本人の功績を考えれば莫大なものになると予想はしていたがこんなにか。それに爵位だなんて早々と与えられる物じやない。

この二つにも驚きだが姓を与える、という方が驚きだ。

これは爵位よりもずっと与えられることが少ない。

歴代の中でも与えられているのは、3人のみ。

いずれも帝国軍との戦いで武功を上げた指揮官や将軍だ。

そんな三人に肩を並べる程の事だ。

与えられた姓は「バイタークハイマツト」。

国王陛下はもし辞退したいものがあれば可能な限り善処するから遠慮せずと言ってくれとも。

普通こんなことにはならない。本来ならば断わる事が出来る様なものではないからだ。

だがそんなことはつゆ知らずのイチローは、爵位の辞退と報酬金の減額を求めたのだ。

しかし国王陛下はどちらか一つだけだという。

多分爵位を辞退するだろうな。

そんな予想を立てたが大当たり。

爵位を辞退して莫大な報酬金を受け取る事にしようだ。

まあ爵位があつたとしても領地があつたりするわけじゃないから税収も得られない。そうなる何かしらの商売で稼がざるを得なくなる。

そこまで考えているとは思えないが。

そして下賜式が終わり再び晩餐会が始まる。

そしてイチローはテラスの方に行つて一人でのんびりと食事を摂っている。

主賓がそれでいいのか、とは思うが先程の事を考えるとしようがないのだろうか。

私は私で周りをまた貴族の男共に囲まれウンザリしている。

こいつら本当にしつこいな。お前なんか覚えている限りじゃ五回はあしらつては
はずなんだが。

適当に酒を飲みながら適当にあしらう。いい加減にしてほしいんだがこいつらは
こつちの事などお構いなし。

自分の家はどうか、私の家は云々、お家自慢のオンパレードだ。

自分の事で自慢出来ることは無いのか？と思いたくなるほど家の事しか話さない。

そもそもお前らは当主じゃないだろうが。

前後左右からそんなつまらんことを延々と聞かされるのだからいい加減イライラして来た。

挙句の果てには丘での戦いの後の掃討戦に参加して生き残って帰って来たあの言い始める奴も居る始末。

お前よくそんな事を言えるな？そもそも掃討戦じゃ派遣軍はまともな連携も取れずにゴブリンに一方的に叩かれたただけだろうが。

9000も居た兵力を無駄死にさせて半分以下の人数まで追い込んだのはお前達じゃないか。

それで生き残って帰って来ただと？

お前の実力じゃなく、イチローが居たからだろう。

居なかったら9000の兵力は消滅していたんだ。むしろイチローの下に行って頭を下げて感謝をするべきなのにそんな事を考えている奴なんて一人もいない。

あー、本当に嫌になって来た。

薦められるままにドレスを着なければよかった。

胸元が開いているせいか視線も胸元に集まっている。

気付いてないでも思っているのか？馬鹿な奴らだな。

イチローの所に行こう。あいつの近くに居れば絡んでくる馬鹿は居ないと思う。

しかし飲み過ぎたかもしれない。ちよつとフワフワするな……

思つた通りだった。

イチローの隣に座つた途端に話しかけて来る馬鹿共は居なくなつた。

そこでイチローと話す。

他愛もない話だ。

貴族の女共に囲まれて化粧品の匂いでダウンしたイチローの事だったり、あの時私を助けてくれた事だったり。

知らず知らずの内にイチローと話しているととても気分が良くなってくる。

嬉しくてなんだか幸せだ。

酒のせいでもあるのだろうが素面でも恐らく同じ気分になると思う。

王都に来るまでの間も同じ、イチローの乗り物に乗っていたがあの時も同じ様な気分だった。

イチローも貴族連中と同じで胸元を見たがそれも一瞬。

あんなジロジロ見たりしない所も良い。

だがあれだな。うん、ちよつとムカつくな。

貴族連中に見られるのは嫌だがイチローには見てもらいたいと思う。

なのにこいつは見ることもせずに呑気に私と話しているのだ。
なんだか癩に障るな。

……よし、ちよつと仕掛けてやろうか。

と思つて酔っている事を前に出して部屋までの介抱を頼む。

そして部屋についてなんやかんやで、イチローと寝た。

寝たというのは所謂男女のやつのだ。

うん、ここまで来てあれだが私は処女だった。

ちよつと怖くなって来たぞ。聞いた話じゃ痛いとかなんとか……

大丈夫か？まあでもなるようになるか。

イチローにも初めてだから優しく頼むと言つたし。

善処しますとか言っていたが心配は無い……と思う。多分……

朝、起きると私は裸だった。

隣には私を抱き締めているイチローが。

……ん？んんん？これはどういう事だ？

必死に頭を回転させて昨日何があったのか必死に思い出す。

ああ、そうだ私が誘ったんだっとな。

昨日の夜の事は思い出せた。

まあうん、後悔は無い。寧ろ嬉しいし幸せだ。

こう、満たされる感じがする。

呑気な顔で寝ているイチローの顔を見ている。

とふと思った。

……ちよつと待て。ここつて玉城だぞ？そしてこの部屋は借りている部屋で……

やばい。やばいやばいやばい!?

結構後先考えなかったがこれって物凄く大変な状況だぞ!?

国王陛下からお借りした部屋で男、しかも今回の件の主賓と寝たなんて物凄く不味い事じゃないか!

慌てて飛び起きる。

とかいうかイチローが抱き締めてきているから起きられない。

先ずはこいつを起こさないと!

「おい、起きろイチロー!」

「ん……?んあ……エルフラントさん……?おあようおあいます……」

「呑気に欠伸をしている場合じゃないから早く起きて服を着ろ!それと片付けもしなきゃ……!」

「服……?片付け……?……ああ!」

そこで漸くはつきり目を覚ましたのか慌てて服、昨日の正装を着込む。

私も急いで下着を着て、ドレスを着る……違う違う。ドレスは返すのだから持って来た服を着ればいい。

まあ多分この後国王陛下に呼ばれるだろうからその時にまた正装しなければならぬのだろうが。

二人して大慌てで着替えを済ませて、イチローを一旦部屋に帰らせる。そして私服に着替えたらか片付けの手伝いをさせる。

イチローの私服は相変わらずあの緑や茶色、黒が混じった斑模様の上下の服装だ。今思ったがこいつ私服これしか持つて無いのか？

ちよつと致命的すぎるぞ。

……今度適当に見繕つてやろう。

そんな事を考えながら片づけを進める。

まあ元々窓は開けていたから匂いは籠つていなかったし多分大丈夫だとは思ふ。

それよりも赤いしみがついたシャツだったりの始末はもうどうしようもない。

赤い染みは落ちなかった……

それから取り敢えずイチローには部屋に帰つて貰う。

殆どの人間が起き出してくる頃だし本当は居て貰つても良かったんだがまあ下手に勘繰られるよりは、という事で。

取り敢えず寝るか。

明け方まで行為に及んでいたし、晩餐会の疲れもある。

ぶつちやけて言うと、片付けのドタバタが終わったあたりから物凄く眠い。

そう思つて綺麗なシーツに変えたベットに潜り込む。

匂いを嗅いでみるとちよつとだけイチローの匂いがする。

すると、急に恥ずかしくなつて来た。

うああ!?!イチローとやつてしまったのか!?!本当に!?!

ベットの中で悶える事暫く。

でも、何というかこう、いやだという気持ちはやはり湧かない。

アイツは事に及ぶ前に、ちゃんと私に後悔しないかと確認を取つて来たのだ。

普通男ならあの状況じゃ理性なんて吹っ飛んで獣になるのかと思つていたから驚きだ。

それほど自分の事ばかりでは無く、私の事も考えてくれていたという事だろう。

優しくしてくれと頼んだ私に配慮してか、そこまで激しくすることも無かつたし。

かなり大切に、大事に扱われていたと思う。

そう思うとなんだかとても嬉しくなった。

とそんな事を考えながら再びベッドの中でもぞもぞと悶えていると気が付かないうちに寝入ってしまった。

l l l l l s i d e o u t l l l l l

朝、エルフラントさんに起こされて飛び起きて、色々と事後の後片付けをして。

部屋に戻って、迷彩服を脱いで軽装になると、流石に晩餐会の疲れと昨晚のエルフラントさんとの事もあってかとても疲れていた。

だが後者の疲れはどうにも嫌な物じゃない。

寧ろ心地良い物でさえある。

と思いつながらベッドに潜り込むこと数分。

あつさりと眠りについてしまった自分だった。
夢見に関しては最高だったと言っておこう。
どんなものは教えないが。

オール大森林調査編

国王からの依頼

明け方、エルフラントさんとの色々の後始末を終えて寝る事数時間。

多分時間的には10時か11時そこいらだと思う。

むくりと起き上がりベットから降りると、なんだか無駄に心地良い疲れが身体を襲う。

まあそれも昨夜の事があつたからだと思うし、色々考えるがやはり嬉しいという感情は捨てきれないもので。

まあそんな気分浸っているのも悪くは無いが流石にそんなわけには行かない。

取り敢えず何時も通りの上下迷彩に着替え、靴もサンダルから戦闘靴に履き替える。

一応の護身としてM9をホルスターに入れ、予備のマガジン二つも装備しておく。
うーん、やっぱりこの格好が落ち着くな。こう、実家の様な安心感がある。

よし、そんなじゃあ何するかな……これと言ってやる事が無いんだよ。

そりゃここ王城だし依頼を受けられるような場所じゃないな。

1人で王都に行くのも憚られる。と言うのも普通に迷子になりそうだからだ。

まあスキルだかなんだかよく分からない「地図作成」なんてもんがあるから完成させてみたい感はあるが急に呼び出されでもしたら帰って来るの面倒だし、今日はこのままのんびりしよう。

「バイタークハイマツト様、失礼しても宜しいでしょうか？」

なんか扉の向こうで誰かが話しているな。

あー、お茶飲みたい。けどこのティーポットだか何だかがとても高そうだから扱いにくい。割ったりしたらとか考えると正直触りたくない……

水かなんかないかな。

「バイタークハイマツト様？いらっしやらないのですか？」

あ、あった。

水が入ってるやつも無駄に高そうだなおい。

まあいいか。水飲みたいし。

コップに注いで一気に呷る。

「美味い……ちゃんと冷えてるし、これも魔法か。魔法便利すぎだな」

これは科学が進歩しない訳だ。

正直科学を簡単に補えるぐらいの利便性はあるし、何だったら多分汎用性の高さだったら科学技術よりも上かもしれない。

俺が使えるのは治癒魔法だけだ。

そもそも他の魔法なのかそれともスキルなのか見当が付かないのが困り物だ。

出来れば王都にいる間に王都の地図を完成させてしまいたいな。

王城に向かう時に通って来た道と、エルフラントさん達と観光した時の一部しかマップピングされていないから全然不十分だ。

出来れば王都の周辺のマップピングもしておきたい。

時間を見つけてやるしかないが、早ければ明日か明後日にはリーヴオリの町に向けて出発するかもしれないからな。

ここに長居するのも悪いし、保身的な意味で都合が悪そうだ。

さてと、どうするか。

「バイタークハイマツト様？入らせて頂きますよ？」

「あれ？カルマンさん？どうかしたんですか？」

「いらつしやるではないですか。何かあったのですか？いくらお声をお掛けしても反応が無かったもので入らせて頂きました」

「え？本当ですか？」

「ええ、何度もバイタークハイマツト様、とお呼び致しましたが……」

「あ!? そうだった……俺って苗字を貰ったんだっけ」

やべえ、全然気が付いてなかった。

何というか実感が物凄く湧かないのだ。苗字の事を思い出す事が出来なくて俺の事を呼ぶのは基本イチロー、としか呼ばれてこなかったからな。

「その後様子だとかご自分のお名前をすっかりとお忘れになっていたようですね」

「申し訳ありません……今までイチロー、としか呼ばれてこなかったものですから」

「いえいえ、お気になさらず。致し方の無い事でございます」

「それで、どうかしたんですか？」

「おお、そうでした。国王陛下がお呼びになっておられますのでお迎えに上がりました」

「国王陛下が？分かりました。行きましようか」

「それではご案内致します」

カルマンさんの後に続いて国王の下へ向かう。

どうやら今日は執務室で話をするらしい。ここに来た時のあの大広間じゃないのは有難い。あそこ広すぎて落ち着かない。

執務室の前に着いた。

でも驚いた事にこの執務室の扉もでけえ……

「国王陛下、バイタークハイマツト様をお連れしました」

『入れ』

「失礼致します」

カルマンさんがでっかい扉を音を立てて開く。

その先には机に向かい何かの書類、いや羊皮紙というやつか？に何かを書き込んで考え込んでいる国王が。

「すまないが、少しそこに座って待っていて欲しい」

「バイタークハイマツト様、こちらへどうぞ」

カルマンさんに促され無駄に装飾の凝ったソファに座る。

おお、めっちゃフカフカ。

座っているとカルマンさんがお茶を出してくれる。

「どうぞぞ」

「有難うございます」

お茶を飲む。

紅茶か？呼び出せる物資の中に何故かお茶もあるが、緑茶から始まり珈琲、紅茶などもある。

何故だ？あれか？嗜好品としてなのか？でも第二次大戦の戦争映画米軍主役だと珈琲とか飲んでたりする事もあるし……

紅茶は……イギリスか。

緑茶は日本で間違い無しだな。

どれにしろその遙か上に行く美味しさだ。

入れ方なのかそれとも茶葉からして違うのか分からんが。

国王がやっている作業が終わるまで座ってお茶を堪能する。

ああ、美味しい……お代わり貰おう。

「すまない。待たせたな」

「いえ、そこまで待つて居ませんよ。それでどんな御用ですか？」

「君を指名で依頼をお願いしたい」

「依頼、ですか？」

依頼？どんな依頼を提示してくるんだ？

「うむ。丘での戦いでゴブリンの変異種であるゴ布林ロードが新たに発見されたのは知っていると思う。まあイチローが直接討伐したのだから当然だが」

「ええまあ。それがどうかしたのですか？」

あー、何となく依頼内容が分かった気がするぞ。

多分調査依頼とか、そんな感じなんじゃないか？

「それが、王立研究所で色々調べた結果なのだが既に確認され何度も出現しているオークロードと比べても明らかにその能力が次元が違うレベルなのだ。これが個体差によるものなのかそれとも先の個体が特異だったのか分からない」

「確かにあれは初めての特異個体討伐でしたが明らかに異常でしたからね。オークロードの特異個体の聞いた話じゃ多くても2、3万だと聞きましたから」

「うむ……にも関わらず報告によれば15万に届く数だ。これは幾ら何でも多すぎる。オークとゴブリンが違う種族だから、という事で片付ける事には不安が残る。王立研究所に運ばれたゴブリンロードの死体を私は見たが何から何までおかしい」

あのゴブリンロードが明らかに特異個体を使う言葉としてはどうかと思うが、普通じゃない。そこら辺の認識はあれを実際に見た人間ならば一瞬で思う事だしな。

「確かにその通りですね」

「もしこれが外的要因によつて起きた事なら原因を突き止めねばならないし、そうでなくても調査は必要だ」

「確かにそうですね」

「そこで、君にオール大森林の調査を行つて欲しいのだ」

やっぱりな。予想は大当たりつて事だな。しかもオール大森林の調査と来た。

「そう言う事ですか。構いませんが出来ればギルドを通して貰いたいのですが」

「それは勿論だとも。ギルドの面子を潰すわけにはいかんしな」

「それでは何故態々お呼びになったのですか？」

「事前に了承を貰いたくてな。一応指名という事で依頼を出すつもりだが、危険度を照らし合わせると報酬金は必然的に高額になってしまふ。そうなると報酬につられた連中がむやみやたらに受けてしまふと犠牲が増えてしまふ」

「そう言う事ですか。構いませんよ」

「すまないな。それと王立研究所の人間を一人、同行させることは可能だろうか？」

「同行、ですか……」

「不可能なのならば断わってくれて構わないのだが……どうだろうか？」

王立研究所の職員の同行か。

正直言ってしまうえば断りたいのは確かだ。

理由は幾つかあるのだが……

まず一つ目に挙げられる事が調査場所がオール大森林だという事。

そもそもオール大森林は全くの調査が行われていない事。進んでいない、ではなく行われていない、だ。

確かに国防という観点から過去に何度か調査隊を派遣しているがいずれも未帰還で終わっている。

しかしながらこの国には帝国という強大な敵が存在する為に不確定要素の多い調査にそれ以上戦力を投入するのは無駄という事になる。

それ故に全く持ってオール大森林についての事は分かっていない。

精々がエルフ族が居住している事、大きな裂け目がある事、あとはその大きさぐらいか？

分かっていないと言つてもそもそも調査が行われていないのならばしょうがない、とは思えるが。

だからこそ、そんな場所の調査ともなれば俺自身の身の安全の確保をする事でさえ難しいかもしれない。

俺一人ならばその辺はなんとかなりそうではあるが同行者、それも戦う術を持たない人間を伴うのは危険度が上がるなんてレベルではなく跳ね上がる。最低限自衛の術を持って居るのならば話は別だがそれでも全くの未知であるオール大森林でそれが通じるか、と言われれば答えはNOだろう。

もし何かあつた場合、エルフ族の村へ助けを求める事も出来ない。

第一エルフ族の村はオール大森林の中心部に存在し、中心部に行けば行くほど魔物や魔獣の強さのレベルが上がる、という事がエルフ族から伝えられている。

そんな場所に態々助けを求めに行くのは無理がある。

そもそも、エルフ族の村の正確な位置は分かっていない。

あくまで中心部にあるという事だけだ。

そんな正確な位置の分からない場所に助けを求めるのは無理がある。

なんだつたら大森林から抜け出そうとした方がいい。

物資の問題もある。

運搬面をどうするのか、という事だ。

俺は食料から飲料水、衣類に至るまで種類の少なさはあれど呼び出す事が出来る。

が、他の人はそうはいかない。まず調査機関にもよるがその日数分の食料、水、着替えの服を持ち込まなければならぬ。

たった数日ですら相当量になるのにそれが長期間、数か月単位にでもなってしまうえば一人では無理がある。それ程の期間になるのなら拠点を構築してしまつた方が早いのではないかとさえ思う。

別にハンヴィーがあるからどうにでもなるんじゃないか、と思われるがそれは大間違いだ。見た事がある人間ならわかるがオール大森林は、車両が通る事が出来ない程に木々の密度が高い。それが外縁部だけなのか、それとも中心部までもそうなのかは分からないが、幾ら悪路走行が可能なハンヴィーとは言ってもそもそも通れないのなら意味がない。

バイクなら何とかかなりそうではあるが、それも同行者がいるのならバイクは使えない。徒歩移動になる。

バイクすら使えない可能性の方が高いかもしれない。

そうするとやはり物資の問題は大きい。

森の外に戻るといふ手法を取れば良いとは言いが、そうすると物資の集積場所を守るための人員も必要になってくるし一日単位での調査時間が限られてくる。

長々と理由を並べたが要は同行者は出来れば断りたい、つて言うのが正直な所だ。

ただ調査という事は要は専門的な知識等を備えて居なければならぬのは事実。

しかし残念ながら俺にはそんな知識なんて持つていないのは確かだ。

俺が見ても何の違があるのか全く分からない物ですら専門職の人間からすれば明らかに違う物だったという事もあるかもしれない。

ただ資料収集すれば良いという訳ではない。その場で見なければ分からない事も数多くあるだろうし。

しかしなあ……危険度から考えればやはり同行者は断った方が良いのだろうか？

確実に守り切れるとは言えないのだし。

「陛下、今回の調査に関しては請け負います。ですが王立研究所の人間の同行者の件に

関してはお断りさせて頂きます」

「ふむ、まあ仕方が無い。そもそもオール大森林の調査なのだから不確定要素が多すぎるからな。その判断は正しいと私は思う。分かった。王立研究所へは私から直接その旨を伝えておこう」

国王はそう言うで一息付く。

「申し訳ありません」

「何、気にする事では無い。それでは私からは以上だ。すまないな、昨日の件で疲れているのに呼び出してしまつて」

「いえ、お気になさらず」

「それでは説明に移ろう。まず依頼内容だが先程も言った通りオール大森林の調査だ。調査範囲は君に一任、必要だと感じた場所、範囲を調べて欲しい。報酬金に関してだが危険度が非常に高く、尚且つ想定外の事態が複数発生するなど、危機的状況に陥る可能性が大いにある。よつて金貨700枚を基本報酬とし、調査成果などによつては増額する事とする。調査期間はイチロー自身準備期間の事も踏まえ、二週間後から約三か月間。ただし調査状況や緊急の場合に関しては期間の短縮、もしくは延長も有り得る事を十分に理解しておくように。何か質問は？」

説明終わりに質問の有無を確認される。

幾つかある。

「そうですね……まず一つ。報酬金に関してですが多すぎるのでは？既に国からは3000枚の金貨を頂いている身です。幾ら何でも多すぎます。それに加えて調査成果によつては増額も有り得るといふのは貰いすぎな気がします」

「いいや、これは正当な報酬だ。先程イチロー自身が言つた通り今回の調査依頼は不確定要素が数多くある上での実行となる。それを考えれば妥当だろう」

「分かりました……では次に王立研究所の人間の同行者は居ないという事で決定しましたが調査成果の報告はどうされるのですか？」

「それに関しては君自身が調査報告書という形で一か月に一度程度で書いてくれれば構わない。そしてリーヴオリの町に拠点を置いて研究員を2人派遣する。その2人は君に同行させはしないが君が持ち帰つた調査成果の精査等を行う役割も担っている」

「分かりました。その2人は何時リーヴオリの町に出発されるのですか？」

「君達が帰る時に共に行つて貰う。馬車で研究機材も運びながらだ」

「……馬車ですか。時間が掛かりますね」

「それはしようがない。出来るだけ急いで貰うしかないが研究機材を手荒に運ぶわけには行かない。結局は移動が長引いてしまう」

やはりか。正直馬車と一緒に行動していたらリーヴオリの町に着くまでに何日掛か

る事か。

そうすると俺がトラックを呼び出して運んだ方が良い。

トラックも呼び出せるし、中には6トンもの積載量を誇るトラックもあつたはずだ。それを使えば一台のトラックで一日と掛からずにリーヴオリの町に到着する事が出来る。

「それに関してなのですが、もし宜しければ私が運搬を担当しましょうか？」

「何？どういふことだ？」

「まずお聞きしますが持ち込む機材の量は荷馬車何両分に当たりますか？」

「そうだな……専門的な解析を行うのであれば最低でも2台か3台だな。引ける重さは大体1トンと言った所か」

それなら多くても3トン程度の重量だ。

十分に積載は可能だし、なんなら追加でもう三トンほど積み込める。

いや、積載量と積載面積の違いはある。嵩張る機材であればそこまで積み込めない。高さ、幅によつては完全に積み込めない。

が、それでも運搬は可能だ。

「それならば私個人での運搬は可能だと思います」

「何？それはどういふ事だ」

「そのままの意味で捉えてください。荷馬車3台分の重量であれば積載は十分に可能です。ただ積載面積に関してはやはり制限があるのでそれさえ考慮すれば問題は無いかと」

流石にデカイ荷物を複数となる積み込む事が出来ない。

ただ小さい荷物を多数という事なら大丈夫だ。

「なんと……それは本当か？」

まあ驚くよな。

当然だ。荷馬車を何台も必要とするような荷物をたった一人で運べる事が出来るなんてこの世界の常識に当てはめれば驚愕だ。

ましてや国のトップともなればその驚きは凄まじい物だろう。

なにせ、ありとあらゆる物流の根底を覆しかねないのだから。

軍事から商業に至るまで。

「はい。移動時間の短縮も可能です」

「そうか……分かった。頼んでも良いだろうか？」

「はい。勿論です。ただ研究員の方々には積載面積は出来るだけ少なくして欲しい、という事だけ徹底させておいてください。積載量は荷馬車4台分までなら大丈夫ですの
でその旨をお伝えください」

「これさえ守ってくればまあ、問題は無いか。」

「あい分かった。他に質問はあるか?」

「これと言つて特にはありません」

「うむ。それでは細かい所の説明や色々と言つていいか?」

「はい」

それから暫く調査に關しての詳細を詰めていき、気が付けば正午をとつくに過ぎていた。

「……大体、こんなものだろうか?」

「そうですね」

「それでは、私はまだ執務が残っている故、仕事に戻らせてもらう。急に呼び出してすまなかつた」

「はい。そうしたら私も部屋に戻らせていただきます」

「カルマン、話は終わった。彼を部屋まで案内しろ」

「畏まりました」

「それでは失礼します」

執務室を後にする。

ううむ、結構長く話していたな。

というか腹減ったな。何か食いたい……

王都に降りるのもいいが、今日はゆつくりしようかと思っていたから行くのが面倒だしな……

「バイタークハイマツト様、昼食はどうされますか？念の為御用意させて頂きましたが」

「おお、本当ですか？是非頂きます」

「分かりました。お部屋にお持ち致しますので暫くお待ちください」

「分かりました。あ、それと一ついいですか？」

「何でございましょうか？」

「出来ればイチロー、と呼んで欲しいんですが……何というか呼ばれ慣れてなくてさつき見たいに気が付かないかもしれせんから」

これ本当に悩み所だ。

朝だつて実際に思いつ切り自分の事を呼ばれているだなんて全く気が付かなかった訳だし。あのままでと本当にイザつて時にスルーしかねない。

「構いませんが、今の内に慣れておかれた方が宜しいのではないのでしょうか？」

「それなんです、俺ってそう呼ばれる機会なんて無いでしょうから」

「その様な事は無いと思いますが……そう言う事ならば承知致しました。イチロー様、お部屋で少々お待ち下さい」

「はい。有難うございます」

そう言つてカルマンさんは食事を取りに行つてくれた。

……なんか飲み物無いかな？ 呼び出せる物の中になんか無かったかな？

「お、スポーツ飲料あるな。……おお、ラムネもある。は？ なんでこんなに炭酸飲料が……」

ラムネは……ああ、旧日本海軍の艦艇内の消火装置が云々って書いてあるからそれ繋がりだろうが他に全く想像が付かないな。

まあ久々にラムネでも飲むか。

まあ最後にいつ飲んだのかなんて全く覚えていないのだが、多分子供の時以来だろうか？ その時の記憶も今は思い出せないから定かではないが。

呼び出すと、しっかりと冷えていた。

これは絶対に美味しいぞ。そうに決まってる。

「つああ……美味い……」

久々に飲んだが、何と言えればいいのか。

身体に染み渡るような感じだ。そう言えば水以外に地球の飲み物を飲んだのはこの世界に来て初めてだ。

この炭酸が口の中で弾ける感じも随分と久しぶりだ。

そうやって一息付いていると、カルマンさんが食事を運んで来てくれた。

お礼を言つて、遅めの昼飯にありつくことにした。

オール大森林調査 準備期間

さて、今日は王都からリーヴオリの町へ帰る日だ。

結局依頼を受けてから一週間程、王立研究所の研究者の人の準備に時間が掛かった。持っていく機材、薬品等の選別にそれらの梱包。

その間、俺は手伝えることが無くハンヴィーで王都とその周辺を走り回り「地図作成」で地図を作製していた。大体王都から40km程までの距離を全体的にマッピングを行っただけだ。

研究者の人にちゃんと言い聞かせておけばよかった。

荷物が多すぎてトラックに乗り切らなかった。

結果、荷物の再選定を行い二日ほど日程が延びてしまい五日ほどで完了していたのだが一週間に伸びてしまった。

それでも荷台が完全に満載状態になり、研究者の2人は運転席の屋根の上に無理矢理座席を取り付けたところに乗って貰った。

エルフラントさんは助手席に座り、クレイドルさんは何故だか馬よりも早い乗り物の風を感じたいとかなんとか言って屋根によじ登って行った。

本当はエルフランドさんとクレイドルさんは馬車で来るはずだったのだが二人共馬車に乗ると尻が痛いし足が遅いという事で断つたらしい。

取り敢えずトラックに計五人十荷物を載せて出発する。

見送りだが王城で済ませて来た。

仕事もあるだろうし手短に済ませ今に至るといふ訳だ。

しかし、流石に荷物が多すぎて移動速度が遅い。

最高速度なら百キロ以上出る筈なんだが重すぎる故に半分程度の速度しか出ない。

それでもアクセルをベタ踏みしているのにも関わらず、だ。

いやもう本当にこれは効率が悪いな。二回に分けた方が良かったかもしれない。

エンジンも悲鳴を上げているし燃料効率も悪すぎる。

途中、燃料を補給して再出発し、その日の内に何とかリーヴオリの町に到着する事が出来た。

機材はレイフォード様が用意した「王立研究所オール大森林調査本部」と書かれた大きな立て看板のある屋敷に運び込んだ。

流石に俺も手伝おうとは思ったのだが調査の準備をしなければならぬので手伝いはレイフォード様に言われてきた兵士の人達がやってくれた。

さて、俺も準備を進めよう。

先ずはオール大森林の調査計画を立てなければならぬ。

と言ってもこのオール大森林、詳細な大きさが分からないのだ。無計画に入り込んでの調査となればもうどうなるのかなんて明らかに目に見えている。

という事で、大体一か月事に調査範囲を区切る事にした。

残念ながらオール大森林の向こう側に存在している国の影響もあつてロンバルティア王国側の調査しか出来ないが、内側から15 kmごとに調査を進めていくというものだ。

この距離は「地図作成」でマッピングできる最大範囲を基準にしている。

と言つてもそれだけでも調査すべき面積はとんでもなく広く、効率良く進めなければならぬ。

そこで必要になつて来るのがオール大森林の精細な地図だ。

なのだが、そもそも調査が行われていないから地図なんて存在していないし、王国全土を記した地図も、何と言えはいいのか、大まかな方向と位置を記した原始的な地図しかない。

だからこそ自分で作成しなければならないのだが、オール大森林の地図なんてどう

やって作成すればいいのやら。

この「地図作成」は欠点があり、自身で直接見たり、歩いたりしなければ地図として書き込まれないことにある。

実験目的で無人機、所謂ドローンというやつで試してみたのだがマッピングされなかった。モニターを通したりする様な間接的に、見る事ではマッピングされない。という事は自身で歩いて見て回らなければならぬのだがここで一つの疑問が浮かんだ。

飛行機に乗れば直接見た事になるのか？

これは大きな疑問だった。

ハンヴィーに乗っている時はマッピングされていたから同じ乗り物という事であれば航空機でも同じことが言えると思うのだ。

そう言う訳で航空機を呼び出そうとしたのだが、そもそも滑走路が無ければ飛び立てないじゃないか。

しかも操縦はどうするんだ？ やったことも無いぞ。

今までの呼び出したもの乗事を考えると自動的に使えるようになるという事ではない。練習をしたりしなければ扱えるようにはならない。

航空機を飛ばす訓練ってどれだけ時間が掛かるんだ……？

いやまあジェット戦闘機を運転する気じゃない。

昔のプロペラ機を予定しているから操縦幾らか簡単だと思う。

一週間程常に飛ばし続ければまあ何とかなる、か……？

まあそんな簡単なもんじゃ無さそうだがそれでもしなければまともに調査なんぞ出来る訳も無い。

差し当たり、どんなプロペラ機が良いのか調べなければならぬ。

前提条件として一人で操縦出来るものでなければならぬ。流石にエルフロントさんやクレイドルさんノーマンさん達と一緒に乗せていくわけにも行かない。

特にエルフロントさんは。

そう言う訳で万が一の時には自衛の戦闘が出来、その場を即座に離脱できる速度を持ち、尚且つ一人で操縦が出来る航空機。出来るだけ長い距離を飛べることも必要事項だ。

そうなるとやはり戦闘機になってしまふ訳だ。

ただし今回は武装よりも速度と航続距離を優先する事にした。

しかしプロペラ機となればどうするべきか。

一応代表的な機体を調べてみた結果がこんな感じだった。

「B f 109」

航続距離 680 km

最高速度 621 km/h。

「FW190」

航続距離 835 km

最高速度 685 km/h。

「スピットファイア」

航続距離 680 km

最高速度 582 km/h。

「ハリケーン」

航続距離 966 km

最高速度 547 km/h

「F4F」

航続距離 1337 km

最高速度 533 km/h

「F6F」

航続距離 1520 km

最高速度 611 km/h

〔F4U〕

航続距離 1618 km

最高速度 718 km/h

〔P51H〕

航続距離 1609 km

最高速度 759 km/h

〔零戦52型〕

航続距離 2560 km

最高速度 565 km/h

〔紫電改〕

航続距離 2395 km

最高速度 644 km/h

〔隼〕

航続距離 3000 km

最高速度 540 km/h

〔飛燕〕

航続距離 1600 km

最高速度 610 km/h

「疾風」

航続距離 2500 km

最高速度 660 km/h

「YAK-1」

航続距離 700 km

最高速度 569 km/h

「YAK-9」

航続距離 1360 km

最高速度 591 km/h

凡そこんな感じだった。

まずどれにするのかを決めるのに航続距離だが1000 km以下のものは除外する。

出来るだけ飛んで情報を集めたいからだ。

そうするとBf109、Fw190、スピットファイア、ハリケーン、YAK-1は最初から考えないものとする。

航続距離で見れば軒並み高いのが日本製の物がずば抜けている。

2000kmを超えている機体が軒並みあるのだからぶっ飛んでいる。

唯一超えていない飛燕も1600kmと他国の中に混ざれば明らかにトップクラスだ。

ただしこれ程の航続距離ともなると6時間以上飛び続ける事が確定してしまう。流石に俺の様な只の新米がそれ程の長時間を飛び続けられる訳も無い。

まあしかしその場合は飛行時間を減らしたりすれば良いだけの問題だから大したことではない。

ともなると決め手は速度になる訳なんだが早いものから遅いものまでの間がかなり開いている。

本当は格闘戦性能を考えても良いんだが対G訓練などをしていない俺がそんな事をすれば間違い無く死ぬ。死ぬる。

殆どの機体が最高速度が600km前後を超えているので、先ずは最高速度600km以下の機体を除外。そう言う訳で残ったのはF6F、F4U、P51H、紫電改、飛

燕、疾風、となる訳だ。

一番速度が速いP51Hも良いと思ったんだが航続距離で見るとやはり短い。

疾風と凡そ1000kmも違うのがデカすぎる。最高速度で見ればF4Uも700km台だがそれでも40km/h近くもあるのはこちらもデカイ。それに航続距離は大して変わらないしな。

そうするとやはりP51Hに軍配が上がる訳だ。

しかしながらP51Hの速度も良いがやはり調査目的ともなると疾風の2500kmも捨てがたい。

事前に集めた情報によるとオール大森林には翼竜や飛竜と言った空を飛ぶ存在も複数存在しているらしく、それらの飛行速度がどれほどの物か分からないが逃げ足が速いに越したことは無いに決まっている。

高度を上げれば良い話だろうがオール大森林の様子を見る事が出来なければならぬので高度は出来るだけ下げて見ておきたい。

自身の足で歩くときにそれらの情報がなければ本気で何のために航空機に乗ったのか分からなくなる。

さて、結局色々と悩んだ挙句、軍配が上がったのは疾風だった。やはり偵察を目的にするのなら出来るだけ航続距離が長い方が良い。最高速度と航続距離の両方を兼ね備えた機体であることは間違い無い。という事で疾風に決定した。

そして搭乗するにあたってしつかりとした性能を見ておきたかったから見てみた。

正式名称「四式戦闘機一型乙」

全長 9.92 m

全幅 11.24 m

全高 3.38 m

最高速度 660 km/h (高度6000 m)

上昇力 5000 mまで約5分弱

武装 翼内20 mm機関砲(ホ5) 2門(携行弾数各150発)

胴体20 mm機関砲(ホ5) 2門

爆装 30 kg / 250 kg 爆弾なし 夕弾2発

航続距離 2500 km (増槽あり) / 1400 km (増槽無し)

大体こんな感じだった。

なんだか排気管がどうこう、翼面積やら翼面加重がうんたら書いてあったが分からなかったので省略した。

そんなもん分らない俺にどうしろと言うのだ。

と言うか20mm機関砲でどれだけの破壊力を持っているんだ？

俺が扱っている最大口径が12.7mmのM2だぞ？……想像しただけで凄いな。

それに爆弾も積める。

しかも250kgつて結構な威力だと思うんだが、それを積めるのは凄いな。

まあ今回は積まないが。だって増槽付ける気だからいらん。攻撃目標何て無いんだから持つて行つたつてしようがない。

エルフの村にいきなり爆弾落す何て事もしない。そもそもそんなことしたら打ち首にされかねない。

そう言う訳で取り敢えず呼び出してみた。

まあ生産機数が500機ほどしかなくそれなりに値段が張ったが報酬金を頭悪いぐらい貰っていたので痛くも痒くも無かった。

うーん、やっぱりデカいな。

そりや約10mも全長があるんだからしょうがないか。

そしてみていた時に気が付いた。

滑走路無いじゃん。飛ばせないじゃん。

そう、滑走路が無いから飛ばせない。

これは明らかな致命的ミスだった。最低でも600mクラスの滑走路が東西に向かつて一本、南北に向かつて一本必要だ。

イメージ的には十字の様な形で滑走路を建設しなければならない。

取り敢えず疾風を格納しておく。

使わないのに出しておいてもしょうがない。

滑走路の向きは風向きに関係しており、航空機、特にレシプロ機は風が吹いている方向に向かって滑走を始めなければならない。空母からの発艦が良い例だろう。

例えば時速200kmで飛び立てるとすれば、向かい風が時速50km吹いているとすると飛行機は時速150kmで飛び立てるといふ事だ。

こうする事で出来るだけ滑走距離を短くする事が出来る。

特に今回選んだ疾風は空母に載せることを前提としていない為、滑走距離が長い。だから風向きがとても重要だ。

本来ならば1000mクラスの滑走路があればどんな風向きでも飛び立てるのだが、そんなものをいきなりぶち立てたら多分怒られる。いや、確実に怒られるだろう。

まあどんな長さでも十分怒られそうな気がするが。

しかし滑走路を建設するとなると先ず整地、地面を平らにしなければならぬ。

そして安定した離着陸を行う為には舗装もしなければならぬ。

それだけでは無く、風向きを知る為の器具を複数設置したりしなければならぬし

それらを行うとなるととてもではないが一週間、飛行訓練も行いながらでは絶対に出来ない。無理。

ええ……なんか最初から航空機を使う事が頓挫し始めたぞ。

希望的観測をしながら呼び出せる物品の中に滑走路とか無いものかと物色してみる。

いや、流石に無いだろうなあ……それ以外の建物なら結構あるんだがこりや今回は諦めた方が良さそうかもしれないな。

ありました。

滑走路在りました。

しかもジェット戦闘機の運用も出来るコンクリート舗装の滑走路がちゃんと用意さ

れていた。いやまあ確かに戦闘機があるんだからそれを離着陸させるための滑走路があつても不思議じゃないが……

しかし、今の所ジェット戦闘機の運用は考えていないし別にコンクリートでなくても良いのだが後々の事を考えるとこれにした方が良いのだろう。

取り敢えずコンクリート舗装の滑走路にすることに決めたのだが、長さが問題だった。

後々のジェット戦闘機運用を考えると1000mは欲しい。しかしそうなるとレシプロ機1機にそれは明らかに勿体無さ過ぎる気がしなくもないのだが……

ええ、いやどうするかな……

さつきも言ったがレシプロ機1機の運用にどう考えても1000mも必要無いぞ。

結局、考えに考えた結果、1300m級の滑走路を1本建設する事にした。幅は50m。

理由は後々の事を考えて、と言うのと正直、風向きを考えなくても滑走路が長ければ飛び立てるし、俺が建設しようとしていた十字型の滑走路、正式名称を横風用滑走路というやつは基本的に離着陸する航空機が多い空港に使われるもので俺一人しか使わな

いんだから別に要らないよなという事で1本にした。

取り敢えず、滑走路だけ思いっ切り呼び出してしまおう。

管制塔なんて管制する人が居ないから建ててもしようがないし、

あと必要な物は風向きを知る為の機材を滑走路に200メートルごとに建てる。

夜間の離着陸は予定していないから誘導灯は設置していない。

取り敢えずはこんなもんか。

しかし、整地をする必要も無いとは楽だな。

今、どれぐらいの金を使ったのか見てみたが、報酬として貰った金額の三分の一を消費していた。

嘘だろ!?!こんな大した設備の無いただの滑走路と風向きを知る為の機材を取り付けただけで!?

ぼったくりなんじゃないのか!?

若干消費金額で荒れ狂ったが、冷静に考えると滑走路だし、それぐらいになっても仕方が無いのだろう。

だが、こう、こんな大盤振る舞いで良いのか？良いのか？まあ良いか。

自問自答した後、滑走路の説明を読む。

説明を読んでもみると、なんでも呼び出したらそれ以降、と言うよりも一定期間は格納が出来なくなる。期間は約半年間。これは滑走路の大きさに比例して年数が伸びるらしい。

結構長い期間だが今回の調査の三か月間がカバー出来れば問題無い。

それが終わったらさっさと格納してしまえば良い。

よし、滑走路は整った。

そしたら疾風を呼び出そう。さっさと飛ばせるようにならなければ。

あ、服も呼び出さなければ。空は寒いからな。

それから一週間、みっちりと操縦訓練を行い、常に飛行場にいるような毎日だった。

最初の三日間で全ての操縦を身体に叩き込み、それから漸く飛行訓練となった。

俺に教えてくれる人間が居ないから滅茶苦茶な我流で、しかも最初の一日は離陸で失敗し疾風を損傷する事3回、離陸が成功しても着陸で失敗し疾風を損傷させる事7回。

まあ格納してしまえば完全に修復されるから問題無いんだが。

離陸の時はフルスロットルで飛んで行けばいいのだが着陸はとにかく難しかった。

というのも着陸の際は減速しなければならぬのだが地面に接地する時どの程度の速度まで落とせばいいのかという感覚を掴むのに苦労した。

下手に速度を落とすと失速して墜落してしまう。実際何度か地面とキスしかけた。

そう言う訳で何度も何度も挑戦した。

死が直前にあったのは丘での戦いと今回ぐらいなものだろう。

丸一日必死になってやった結果、200km/h以下でなければ俺はほぼ確実に失敗する事が分かった。

そう言う訳で最適だったのは180km/hかそれ以下の速度で滑走路に侵入すればいい。いや、これを見つけ出すのに本当に苦労した。

二日目は幾らか慣れ、離陸と着陸でそれぞれ2回ずつしか損傷しなかった。

飛行に関しては特に問題無く、スロットルの加減や上昇下降、左右横旋回、上下縦旋回その他諸々を飛行中は行い、コツは掴んだ。

ただ一度、速度調整を失敗し、上昇旋回中に失速してしまい、物凄く焦った。本気で死ぬかと思つた。

まあ高度を4000mまで取つていたからある程度速度が戻つて来た時に操縦桿を引き起こして事無きを得た。

これ以降は高度を5000mまで取つてから各種操縦訓練を行う事にした。あれほどの恐怖は多分これ以降の人生では早々感じることは無いだろう。

三、四日目は離着陸で失敗する事は無くなり、午前は離着陸の訓練、午後は各種操縦訓練という具合で分けて行つた。

五、六、七日目は離陸から高度を取り、各種操縦訓練を三回ずつ行い着陸という通しの訓練を一日中行つた。

結果的に合計の飛行時間は91時間に達する事出来た。

睡眠時間八時間と飛行訓練中の反省が一日凡そ二時間前後と、食事休憩一時間があ

り、毎日十三時間の飛行訓練を行っていた計算になる。

睡眠時間を削る事も出来たがそれでは危険性が上がるので睡眠はしっかりと取る事にした。トイレはなるべく短時間で済ませ、結構色々犠牲にしながら訓練をした。

風呂に入る時間が惜しく、その時間を訓練に当て、一週間風呂に入らずに過ごしていたため物凄いい事になっていたらしい。

よし、取り敢えずこれで準備は整った。本格的な調査開始は二日後。

この二日間はまず偵察を行い、地図を作る事に専念する事にした。

因みに町に戻るとリーヴオリの町から離れた場所で俺が何か変な事をしてると結構噂になっていた。

ついでにレイフオード様とエルフランクさんにしっかりと怒られた。

別に建設するのは良いが事前に言ってお欲しかった、と。

うん、許可を取るのをすっかり忘れてた。

調査の事ばかり考えていて全く頭の中に許可を取るという考えが無かった。

今度からはちゃんと許可を取るようにならなければならないな。

というか町の人達から見れば俺の奇行にも慣れたと思っただが今回は特に変だっ

たから噂になったそうだ。

ついでにエルフロントさんに臭すぎるからと風呂（水浴びだが）に突っ込まれ許可が出るまでひたすら身体や頭を洗っていた。

それからエルフロントさんが態々食事まで作ってくれた。

というか失礼だとは思うが料理出来たのか。しかもちゃんと美味しかった。

流石に翌日から調査だからそう言う事はしなかったが、一晩外泊許可を取ったとの事で一緒に寝る事に。

それじゃあ、明日からの調査に備え今日は早めに寝る事にしよう。

隣にいるエルフロントさんと手を繋ぎ眠りに着いた。

地図作成

さて、一週間の疾風の操縦訓練を終え、町、自身の家に帰って来た翌日。

朝早く、日の出の一時間半程前に起床し準備を進めた。

まずはエルフラントさんが作ってくれた朝食を取りその後、兵舎に送り届けた。

流石に滑走路まで付いて来て貰う訳には行かないし帰りは歩いて帰って貰う事になってしまふ。それでもついて来ようとしていたが取り敢えず今日から三日間は家に帰って来る予定だからと説明し何とか抑えて貰った。

その後、研究者の人達の元に向かいこれから調査を開始するという旨を伝え、それからハンヴィーに乗り滑走路に向かった。

滑走路に到着後、直ぐに疾風を呼び出す。

増槽の取り付けもしてあるし万が一の時の唯一の自衛手段でもある20mm機関砲にも異常は見られない。

ハンヴィーを格納し、点検は終了、着替え、疾風のエンジンを始動させる。

本格的にエンジンを回し始めるには最初に温めなければならぬ為、それまでの間に飛行ルートを再確認する。

まず一番最初に侵入していくのは此処から一番近い森の淵では無く、最も北側からの侵入となる。そこから東側の端に向かって飛行する。そしてまた北に向かう。これを繰り返しながら地図作成を行う。

オール大森林の向こう側にある国家に悟られない距離の場所まで地図作成を行ったらその段階で終了とし、可能ならば裂け目の詳細も個人的に調べたいと思っている。

どれほどの範囲を調べるのか詳しくは分かっていない為に3日間の日程で行う。もしそれよりも早く終わった場合はより詳細に調べながら作成した地図に細かく書き込んでいく。

それよりも日程が掛かるとされた場合は出来る限りの地図作成を行い、期限の三日の時点で地図作成は切り上げ、本格的な調査を行う事にした。

飛行高度に関してだが大体1500mを予定している。

本当は3000m以上で飛行したいのだがそうすると地図作成に支障が出るかもしれないので半分の1500mとした。

地図作成開始地点までは高度を6000mまで上げて進んでいく予定だ。高度が高

ければ高いほど空気抵抗が少なく、6000mで最高速度を發揮できるし何より燃料の消費が少なくて済む。

取り敢えずはこんな感じだ。

もし途中で何かがあつた場合その都度対応して行く事にする。

そう言う訳で日の出前に既にエンジンを回し始め、あとは飛び立つだけとなったのだが、ここで問題が起きた。

空が明るくなり始めた時に漸く気が付いたのだが雲がかなり分厚い。

しかも結構高度が低い所にあるのでもしかすると地図作成に影響が出るかもしれない。

一応飛んでみて雲の高度が予定している飛行高度の1500m付近やそれ以下だった場合は安全策を取りしようがないので今日は断念しよう。

もし2000m以上ならば続行だ。

そして遂に疾風の車輪止めを外し、乗り込みブレーキを外す。

そしてスロットルを上げていく。

フルスロットルにして幾らかの滑走の後、一週間の内で慣れたふわりとした、地面を

離れた時の独特な感覚が身体を包む。

よし、よし、飛んだぞ。あとは地図作成開始地点まで飛んでいくだけだ。

徐々に高度を上げていき、雲のある高度まで到達。

結果的に雲の高度は3200m程だったので全くの問題は無かった。ただしかなり広範囲に広がり、尚且つ分厚い。

高度5000mになって漸く雲を抜けた。そしてそのまま上昇をして行く。

凡そ5分弱で高度6000mに到達。幸いな事に今日はエンジンの調子が快調だ。

それから30分後、ここで降下を始める。急激に降下するのではなく徐々に落としていく為、それなりに距離が必要だからだ。

エンジンのスロットルを50%に落とし下降。

下手に速度が上がりすぎると空中分解する危険性もあり、その意味でフルスロットルだと速度が上がりすぎてしまう。

だからスロットルを落したのだ。

取り敢えず雲を抜けるまではこのままで行く。

それから10分程で雲を抜けた。

かなり緩い角度での降下だから思ったよりも時間が掛かった。

雲を抜ければ少し先に広大なオール大森林が広がっている。

なんとも言えない、幻想的で雄大な光景だ。

いやあ、これかなり広いんじゃないかなろうか？

どう見てもこれ程の高度を取っているのにも関わらず淵が見えないって……これ三日間で足りないだろう。

まあいい、取り敢えずどんどん進めていこう。

巡航速度で飛行していく。

地図作成でマッピング出来る範囲は15 kmを予定していたのだが、ここでもさかの事実が発覚した。

今の高度だと地図作成でマッピングされる範囲が直径40 kmまで伸びたのだ。これはかなり嬉しい誤算だった。

これならば往復回数が減るので予定した日程よりも、早く終わるかもしれない。

よし、このまま進もう。

もしかすると高度を上げればもっと範囲が広がるかもしれないが雲の関係や目視が出来ないのは不安が残る。このままの高度で進めて行こう。

眼下に広がる森は途切れる事が無く、延々と続いている。

時折、鳥が羽ばたいて行ったりする光景が見られるがそれ以外は特に変わりはない。それに時折森の中で何か大きな存在が動く事があるが残念ながら今の俺にその存在を確かめる手段は無く、それらを眺めながら操縦桿を握るより他は無い。

しかし、本当にこんな光景が存在し、俺がその光景を見る事が出来るとは思っても居なかつたな。

遠くの方に川が流れている。しかしその川の幅はかなり小さく数も数本と少ない。あれだけでこのオール大森林全体を育てる事が出来る程の水量があるとは到底思えない。そうなると、どうやってこの広大な大森林を育てているのだろうか？

地下水脈でもあれば可能なのだろうか……

これは森に立ち入った時に調べなければならぬな。

俺は飲料水と呼び出せるから必要は無いがあれは間違い無くこの地に生息している生物の飲み水として使われている。

強力な魔物や魔獣がいるだろうから下手に近付くと面倒な事になりかねないな。注意しておこう。

しつかし本当に広いな、オール大森林。大体片道450kmちよいはありそうだ。これだと今の所1往復が完了しているから今の！往復が終わつたら一度戻る必要があるな。

見渡す限り森、森、森。時偶、少し開けた所を3つほど見たがこれ程の面積ともなると驚く程少ないと言わざるを得ないだろう。

それに開けた場所自体も直径が大体10mかそこら程しか無くかなり狭い。

しかし大森林に入つて調査を始めた時のキャンプ地点として使えるかもしれない。メモつとこう。

こういう時、燃料を燃料タンクに直接呼び出せないのが辛いな。

基本的に一度降りて給油口から直接入れないといけないのでこの点に関しては今後も色々と試した方が良いな。

巡航速度で飛んでいるがそれでも燃料は消費するのはしょうがない。

一応余裕持つて燃料を残しておこう。そうすれば燃料の心配でビクビクする必要が

無くなる。

補給が終わったら途中から始めればいいだけの話だしな。

こうしてみると速度でP51Hを選択しなくて良かった。1往復しただけで滑走路に戻らなければならぬのはかなり面倒臭い。

燃料計を見ると1500mで飛んでいたからか空気抵抗の関係で燃料消費量が多いな。それに風の流れに逆らって飛ぶこともあるからそれも影響しているのだろう。

追い風の時は逆なんだが。

この分だとそこまで残らないな。2000km分も1500mで飛んでいたんだからそれはしょうがない。

本当はもっと航続距離の長い爆撃機なんかもあるにはあるが複数人でないと運用出来ないものだからしょうがない。

確か一式陸上攻撃機というやつが6000kmという本当に頭が痛くなるような航続距離を持つ機体があった。

あれが使えればなあ……でも人が居ないもんだからしょうがない。諦めよう。

事故があつた時が怖いからな。

2 往復が終わり、滑走路に向かって飛ぶ。

暫く飛ぶと飛行場が見えて来た。燃料計を見ると残燃料は大体30km分程。かなりギリギリだったな。

取り敢えず高度を落して行って速度を絞る。

前輪を出し、フラップを着陸にする。

エンジンの出力を調整して、180km/h前後を維持する。

段々と滑走路に近付いて来る。

そのまま段々と高度を落して行くと、前輪が接地した衝撃が伝わって来る。そのままエンジン出力を0にして徐々にブレーキを掛ける。

ここでブレーキを掛け過ぎると前転するから要注意だ。

そうすると後輪が地面に付き、ここまですればブレーキを強めに掛ける。

それ以上速度が落ちればしつかりと掛けても問題は無い。

それからエンジン出力を若干上げて疾風を滑走路の中心線の所に持って行く。機種
の向きを整えたらブレーキをしつかりと掛け、エンジンを切る。

しつかりと停止したことを確認して、疾風から降り車輪止めを設置する。

これで万が一勝手に動き出す事が無くなった。

そして航空機用ガソリンを呼び出し給油口から燃料を入れる。

疾風は機体本体に凡そ750Lの燃料と、200Lの増槽を2つ積む事が出来る。

そしてそれ+メタノールを130Lに潤滑油50Lを搭載する。

燃料に關してはオクタン価やグレードなどがあるが呼び出せる物は基本的に質が良く、俺が呼び出して補給している燃料自体も100オクタン/140グレードという値の物を使用している。

まあどんな基準がありどうなっているのか詳しい事は分からないが取り敢えず言える事は今使用している燃料は高品質だと言えるものらしい。

取り敢えず燃料を満タンにする。

それから次は増槽に燃料を入れる。

増槽が無ければ2500kmなんて距離は飛べない。本当はもつと燃料を積んでいきたいんだがそれを可能にする方法が無い。

これ以上増槽を積むことは出来ないし諦めてこれで飛んでいくしかないだろう。

燃料補給に1時間も掛かってしまった。

幸いなのは20mm機関砲を1発も使用していないからそちらの補給をしなくて済

む事だろうか。

それ以外に一応点検してみたが特に問題も無い。この調子なら飛ばしても問題は無い。

格納してしまえば良い話なんだがこう、エンジンをいじる事が楽しくてしょうがない。

燃料補給と点検が済んだら再度エンジンを始動させ、温め始める。

それが済み次第最初の手順と同じ様に車輪止めを外し、ブレーキを外してフルスロットルに、エンジン出力を100%にする。

それが済むと再び滑走路を駆け、空に舞い上がる。

そして先程ここに引き返した地点まで一直線で飛んでいき、そこから再びマッピングの開始。

今回は雲が既に無くなっていた為、高度を3000mまで上げて行った。

結果、マッピングが出来る範囲が60kmまで伸び、更に作業効率が良くなった。

ただし開始地点に到達するまでに既に100kmは飛んでいたので帰りの燃料がかなりギリギリになってしまった。

うーむ、次は1往復半しか出来なくなるだろうな。

飛行距離が短くなればなるほど効率が悪くなるな……

まあそれでも今までに横450km縦200kmの範囲のマッピングが完了しているからかなりの面積をカバー出来たと言えるだろう。それでも未だに森の向こう側が見えないのだから驚きだ。

今日はこれで終了だ。丸々半日以上をマッピングに使った為、疲労もかなりの物だしここらで切り上げておいた方が良さだろう。

これ以上飛ぶともなると18〜19時間飛行したことになる為、睡眠時間が取れなくなってしまう。それに夜になると視界が利かない中での着陸になると予想されるからそれは危険だ。一応飛ばしてはいるがまだまだ新米も良い所だし誘導灯などを設置していないから更に危険だ。

明るいうちに滑走路に降り立った。

そして疾風を格納し、家に向かう。

家に到着したら取り敢えず夕食を摂ろう。

さーて、今日はどんなパック飯を呼び出そうか。

うーん、かなり腹減っているから2つか3つほど食べてしまおう。

このスパイシーチキンとか言うの美味そうだ。それとあとは豚の角煮も良いな。それと筑前煮がいい。スパイシーチキンには米がついていないから追加で米のパツクを呼び出す。

元々付いている米+もう一つずつ程呼び出す。
早速温め始めよう。

と思ったら家のドアを叩く音が響く。

ん？誰だろうか？もう時間的には7時頃なのだがそんな時間に訪ねて来る人などいないように思うのだが……

念の為警戒して出よう。

「はい」

「イチロー、私だ。エルフラントだ」

「エルフラントさん？今開けますね」

確かに聞こえる声はエルフラントさんの物だ。

警戒するだけ無駄だったか。

「エルフラントさん、こんばんわ。中へどうぞ」

「こんばんわ。夜にいきなり訪ねてすまないな」

「いえいえ、お気になさらず。それで何かありましたか？」

「いやなに、帰って来ているだろうと思つてな、夕食でも作つてやろうかと思つていたんだが、もう食べてしまったか？」

なんと!?

エルフラントさん、態々作りに来てくれたと言うのか。

これは有難い。

「いえ、まだですよ。今どうしようかと悩んでいた所でしたから」

「そうか、なら厨房を借りるぞ」

「はい。あ、荷物持ちますよ」

「ん、すまないな」

二人で並んで厨房に向かう。

そしてエルフラントさんはそのまま食事の準備に取り掛かる。

「しかしいつ見てもこの香辛料の種類と量は驚かされるな……」

「あはは、お好きに使つていただいて構いませんよ」

「全く、贅沢な奴だな」

「そうかもしれませんね」

「そうかもでは無く、そうなんだ。全く」

香辛料が数多く取り揃えてある棚を見てエルフラントさんは声を上げる。

まあ確かに香辛料はかなり貴重だからな。減茶苦茶高いのだが俺にはそんな事関係無い。だつて幾らでも呼び出せるしな。

でもそれを商売する気は無いので自身の食事に使うぐらい。

昨日エルフラントさんが初めてこの厨房で食事を作ってくれた時、香辛料を見てとても驚いていた。

しかしあれだな、エルフラントさんの調理している後ろ姿良いな。

後ろ姿を見ているところ、なんだか新婚になった気分でも楽しく幸せと言うか何と言うか……

態々部屋に行つて食べる必要も無いから厨房に併設してある机の前に座り、頬杖を突き眺める。

しかしあれだな。エルフラントさんの私服、とても良いな。

ロングスカートに簡素だがシャツを着ており、その上から上着を羽織っているが、それでも薄手だからか身体のラインがかなりくつきりと浮き出ている。

何というか悪戯したくなる気持ちが湧き出て来るがそんな事したら怒られそうだから辞めておこう。

エルフロントさんが食事を作る後ろ姿を眺めながら出来るのを待つ。何だかこういうちよつとした日常って凄い幸せだな。充実している感じがする。

「ほら、出来たぞ」

「おお、凄く美味しそうですね」

「まあ今日はかなり疲れた様子だったからな、肉と精力が付く食事にしたんだ。早速食べてみてくれ」

「勿論ですよ。それじゃあ頂きます」

俺は手を合わせて挨拶をして食べ始める。

「おお、美味しい！」

「それは良かった。どんどん食べてくれ」

俺はバクバクと食べ進める。

思ったのだが中世って食事情はあまりよく無いものだと思判断していたのだがこの世界共通なのかそれともこの国が特別なのか分からないが町の食堂などの食事もかなり充実し、調味料もしっかりと使われている。流石に香辛料は高く、王都の高級店にでも行かない限りは味わえないが塩などはかなり使われている。

というのもイリオル大山脈では岩塩が良く採れるんだそうだ。

流石に鉱石とは全くの無関係の場所で採れるから安全性も申し分無い。

色は白というよりピンクに近く所謂ピンクソルトというやつだ。

個人的には普通の塩とピンクソルトの味の違いは分からないが使えるのだからそれで良いじゃないかと思う俺はやはり庶民舌なのだろうか。

それ以外にもハーブなどはよく栽培されているから流通量もかなりの物だし手に入るのの容易い。

見た事のないハーブもかなり種類があるしそれに伴って味も色々が多い。

意外と食事を楽しめる世界なのだ。

エルフランドさんの食事はとても美味しい。

味付けは濃くも無く薄くも無い、丁度良くしつかりとしている。それに岩塩やハーブだけでは無く俺が呼び出した香辛料である胡椒なども使っているから美味しい。

そんな食事だからあつという間に平らげてしまった。

「ふう……とても美味しかったです。ご馳走様でした」

「それは良かった。食器は流しに置いておいてくれ」

「はい、有難うございます」

本当は洗い物位はやりたいのだがこっちはこっちでやらなければならない事がある

ので甘んじよう。

「エルフラントさん、やる事があるので部屋に戻ってますね」

「ああ、分かった」

エルフラントさんに言ってから部屋に戻り、大きな紙を呼び出す。

縦1m横2m程の紙だ。それを数枚。

これに今日マッピングしたオール大森林を書き写す。

まあ自分の手でやるのではなく印刷するような感じだ。「地図作成」を思い浮かべ、オール大森林の事を強くイメージすると紙に地図が自動的に書き込まれて行く。

5分ぐらいで地球の地図と大差無い物が出来上がった。

もしかするとそれ以上かもしれない。これ、紙に印刷されているのに多少魔力を注ぐと三次元立体的になる。

物凄い技術だなこれ。しかも拡大縮小が可能で拡大すると自分の視点の様なものになる。までなる。

しかし生物に関しては表す事が出来ない。それは直接足を踏み入れて確かめる他無いだろう。

それを幾らか確かめ、森の中を見ると思ったよりも木々の密度はそこまでではないのが分かった。

しかし一本一本の大きさが桁違いにデカく、淵の方はそうでもなく、一般的な大きさの木々なのだが中心部に行けば行くほど木々は大きくなりその傾向は顕著に表れる。

これ樹高軽く60mはあるような木ばかりじゃないか。

だがこれぐらいならば普通にハンヴィーも通れそうだ。

だが小回りが利きにくそうだな。こりやバイクの方が良さそうだ。

分割しての印刷だから残りの範囲を残りの紙に印刷する。

そしてそれが終わったら幾つかの地点の詳細を書き込んでいく。

開けた場所の事や大きな魔獣や魔物らしきものを確認した地点だ。開けた場所はキャンプ地点として使えるかもしれないし魔獣魔物の方は警戒して進まなければならぬ。

あれほどの森の中で無警戒で進むのは馬鹿すぎるからな。

そして間違いや書き洩らしが無いのを確認する。

「イチロー、それは地図か？」

「エルフラントさん？そうですよ、オール大森林の地図です」

「なんだこの精細な地図は……見た事も無い」

「まあこれを作る為に今日1日と明日明後日の丸々3日間を使う訳ですから」

「そうか……イチロー、この地図は絶対に他の誰にも見せるんじゃないぞ。大騒ぎになる」

エルフラントさんはこういう時、王家などに提出を進めるのでは無く注意して警戒するように言ってくれる。

「ご忠告有難うございます。気を付けます」

「うん、それにかなり質の良い紙を使っているな。こっちはこっちで騒ぎになりそうだ。この紙も出来るだけ見せない方が良さだろう」

「はい」

「ふーむ、少し見せてくれないか？」

「はい、どうぞ」

「見れば見る程精細な地図だな……」

「少しだけ魔力を紙に流してみてください」

「魔力……？ おお!!? なんだいきなり!? 飛び出したぞ!」

「凄いでしょ?」

「凄いなんでもんじゃないだろうこれは……」

地図のあれこれを見せると物凄く驚きを表している。

そんな感じで2時間程過ごして。

「エルフロントさん、明日も早いので俺はそろそろ寝ますがエルフロントさんはどうしますか？」

「うん？ そうだな、泊まっても良いのならば泊まっていきたい」

「どうぞ遠慮なさらず。水浴びは？」

「うん、借りよう」

「分かりました。それじゃタオルをお貸ししますね。服等はどうしますか？」

「一応こうなることを想定して持って来たから大丈夫だ」

「それじゃ案内しますね」

「頼む」

エルフロントさんが水浴びをして、それからそのまま一緒に寝た。

明日の事もあるし特に何もするわけでも無く、今日の疲れもあつてか直ぐに寝てしまった。

ウトウトしてきた時にエルフロントさんの胸元に抱き締められてとても安心した所までは覚えているがそれから直ぐに寝てしまったのか記憶が途切れていた。

朝、再び日の出前に起きるとエルフラントさんは既に起きていて朝食を作ってくれていた。それを食べてエルフラントさんを兵舎に送り、そこから滑走路に直行した。

それ以降は昨日と同じ様にマップピングを行った。

変わった事と言えば2往復する事が出来ず、1往復しか出来なかった事だろうか。高度は変わらず3000m。

それを2回繰り返し、終了。

家に帰ればエルフラントさんが訪ねて来て食事を作って貰い、部屋で紙にマップピングした範囲を印刷、水浴びをしてエルフラントさんと共に寝た。

そして今日、3日目を行う予定だ。天気は快晴、雲は一つも無い。
さて、それじゃあ最終日も張り切って行こう！

空戦、そしてエルフ族との邂逅

今日は漸く3日目だ。

エンジンの暖機運転を完了したら車輪止めを外し、疾風に乗り込む。

そのままブレーキを外し、フルスロットルまで押し込みエンジン出力を最大まで上げていく。

段々と速度が上がって行き、ふわりと機体が浮く。

脚とフラップを格納し、そのままエンジン出力を最大に保ったまま上昇を続けていく。

今日は快晴で雲一つ無く、上昇すればするほど遠くの方まで見渡せる。

ただし今日は昨日よりも1000m程高度を上げた。

今現在の高度は4000mだ。マップング出来る範囲は70km程。

1往復で140km稼げる。

今日はそれ程、マップング距離は稼げないだろう。

良くて1往復ずつできるかどうか。今日は念の為に改造して増槽を1つだけでは無く3つ、200Lの物を装備している。

昨日までの2つ増槽を取り付けている時、1100kmぐらい延長されているから単純計算では大体550km程の航続距離の延長がされている筈だ。

それでも1往復約900kmもあり、更に行き帰りの分の燃料を計算するとキツイ。合計して約3000kmの航続距離がある訳だが、それでも1往復半すれば滑走路に戻るのはギリギリになる。

クソ、やはり航続距離の問題はデカいな……今までもそうだったがこれじゃ大した範囲をマッピングできずに終わってしまう。

実際そうなのだから何とかならないものか。以前一式陸上攻撃機の航続距離は6000kmだ。大体今の2倍以上の範囲を稼げるわけだが……それでも3往復程度しか出来ない。

もつと航続距離の長い航空機となるとそれこそジェット爆撃機レベルになる。

一応見てみたが幾つかの機体があった。

t。 B-52 戦略爆撃機は約14,200kmにもなる訳だ。最大爆弾積載量は約16

正直これ程の航続距離ぐらゐは欲しい。爆弾を搭載せずに燃料タンクを増設する改造を施せばもつと伸ばす事も出来るだろう。

こいつは運用が始まってからも既に65年と半世紀以上経っているのにもかかわらず未だに現役で運用されているという、とんでもない航空機なのだ。

性能に關しても申し分無く、速力、爆弾積載量、航続距離のどれを取つても一級品だ。

全長 47', 55 m.

全幅 56', 39 m.

全高 12', 41 m.

最高速度は時速 1028 km/h.

爆弾積載量は最大で 16', 6 t.

航続距離は 14', 162 km.

今現在俺が扱っている疾風よりも全ての性能が上だ。

それ以外にも目立つたのは、「富嶽」という日本陸軍の超大型爆撃機だ。

エンジンは殆どの人間が見慣れた4発では無く、6発。

全長は 46 m、全幅 63 m、全高 8', 8 mで B-29 よりもでかい。自重だけで 42 t もあり、さらにそこに燃料や爆弾を装備すると 122 t という戦車よりも重い物が空

を飛んでいるのだ。

それだけデカいものにも関わらず速力は時速780km/hと同年代のレシプロ戦闘機よりも早かったりする。ギリギリ速度が近いのはP51Hだがそれでも富嶽に速力で負けている。

それだけに留まらず驚く事はもつとある。こいつ、航続距離が19,400kmという、余りにも馬鹿げたものだ。

しかも爆弾積載量が最大20tという本当に何を考えているのか分からない。

B-29ですら航続距離は9000km、最大爆弾積載量は9t程なのだからそのスケールのデカさが伺える。

20tともなると殆どの軍事基地を一撃で吹き飛ばせるじゃないか。

飛行場に至ってはでかい穴がいくつも開けられて修理するだけでとんでもない時間が掛かるし、1t爆弾を20発も落とせばそれこそ暫くの間は使用不能になるだろう。

爆撃なのだから1機単位で行う訳も無く数十機単位でやるとしても30機で爆弾の量は600t。こんなもん桁が違いすぎて分からない。

B-52と単機ごとの勝負でも速力こそ劣っているがそれ以外の面で勝っている。

最大爆弾積載量がジェット爆撃機よりも多いってどういう事だ。

今俺が乗っている疾風と比べても爆弾積載量は250kg爆弾2発。合わせて50

0 kgにしなければならない。富岳は20 tだから40倍、航続距離は3000 kmと19、400 kmと比較にすらならない。重量だつて自重の時点で疾風のフル装備よりも遙かに重く、上昇限度も富岳の方は15、000 m以上とそもその段階で比べ物にならない。

まあ戦闘機と爆撃機を比べるな、という話なんだがそれでも比べてしまうのは人の性だろう。

この性能での設計段階の運用思想が日本本土からアメリカ本土を直接爆撃して、そのまま当時結んでいた三国同盟の一つであるドイツに着陸、そこで補給を受けた後、アメリカ方面に向かつて再度爆撃するかソ連方面へ飛んでそちらを爆撃するか、というどちらにしろ世界一周をするようなことを考えていた機体だ。

と長々と説明したが、そもそも爆撃機と言ってもこの世界では爆撃目標何て物は無いに等しく、それこそ戦闘機に搭載出来る程度の爆弾でも十分な建物が殆どだ。

鉄筋コンクリートの様に頑丈に出来ている訳では無く、精々が石造りで殆どは土壁や木造。最悪爆風だけで吹き飛ばレベルの建物しか無い。

失礼だとは思いますが王城を引き合いに出させてもらつても20 tもいらぬ。その半分程度で完全に破壊する事が出来るだろう。

本当にとんでもない物を考えていたな、日本陸軍は。

で、何が言いたいかと言うと。

偵察目的のためにB―52か富岳のどちらかが欲しい。

別に爆撃をする訳じゃないから燃料タンクを増設すればもつと飛べるだろう。

万が一爆撃をすることになったとしても搭載量が馬鹿みたいに多いから何とでもなる。

ただ問題なのは搭乗員の方だ。

B―52で5名。

富嶽に至っては13人という大人数だ。これだけの人数を集めるのは並大抵の事じゃない。

まあ特に何をするわけでも無いから操縦を担当する俺以外は遊覧飛行になってしまおうだろう。それはやはりしようがない所なのだろう。

搭乗人数と速力で言えば圧倒的にB―52なのだが。

それ以外の性能は何故か大戦中の富嶽の方が良いというもう何なのか分からない。

どちらを選ぶにせよ、そもそも搭乗員を集める所から始めなければならず今すぐには

無理だ。緊急時の脱出訓練もやらなければならぬしそれ以外にも機器の操縦訓練を行ったりもしなければならない。

今は疾風でのんびりと進めて行く事しか出来ない。

そう言う訳で疾風の機内でそんな事を考えながら飛び続ける。

と言つても範囲が被らない様に真っ直ぐ飛ぶだけでいいから楽なんだが……ん？

距離的には左方向のまだマッピングが終わっていない方向に約6km程先に黒点が幾つか見える。

何だあれは？まあまだ行程の半分程度だし、あと2時間もすれば大森林の端に到着するだろう。

それに万が一聞いた事しかないが飛竜や翼竜という奴ならば速力の面で振り切れる筈だ。流星に音速を超えるような奴が居たらもう俺は終わりだな。

そう言う訳で大森林の端まで到着し折り返す。

そう言えばさつき、他の木々が生えている場所とは若干違う場所があった。

具体的に言うとは枝の密度が少ない気がしたのだ。

そして幾らか進むと、かなり遠くの方に大きな裂け目が見える。

おいおいおい、この距離から見ると出来るって相当デカイぞ……グランドキャニオンなんて目じゃないぐらいのデカさじゃないか？

しかし今直ぐに裂け目に向かって進むわけには行かない。

最優先はマッピングだ。正直あまり距離を稼げていないと思われる。

一応これでも1、2日目の合計で440km程の範囲をマッピングしたのだが……

今日の1往復分の140kmを合わせて580km程か。

恐らくだが裂け目まで40〜50kmぐらいある筈なのだが余りにもデカすぎて裂け目の端が見える。

という事はあのあたりがオール大森林の中心付近と言う事だ。

そうするとあれとは別の場所にエルフの村があるという事か。

……今日はマッピングをやめて裂け目の方に行ってみよう。駄目だ、好奇心が勝ちすぎてちよつと抑えられそうにない。

しかし直径で換算すると1250kmの森か……

デカすぎだろう。

取り敢えず、反対側の端に到着したら一旦燃料補給をしよう。

途中まで進んできたのだが……

先程の黒点にまた近付いてきた。

双眼鏡を取り出して覗いてみると、予想していた通り翼竜なのか飛竜なのかどちらかは知らないがそれだった。

俺が飛んでいる4000mよりも2000m程は低い所を飛んでいるらしい。

これならば上昇してきても躲せるな。

ん？高度を落して行つた？どういう事だ？

しかもかなり急に高度を落したから何かがあるのだろうか……

餌でも狙っているのか？

なんか興味あるな。

少し機体を横転させて固定する。

そして双眼鏡を覗くと、森の中にいる何かを狙っているらしい。見た感じはそこまで大きい生物ではなさそうだが地面を移動する生物としては速いほうだ。

しかも動く影は複数存在している。群れを狙っているのか。

幾ら大きな群れとは言えど空から攻撃されてはなすすべも無い。

俺の様に対空砲を呼び出せる訳じゃないしな。

もう少し詳しく見たい。アイツらがどんな風に狩りをするのか気になるし、あれを調

査書に纏める事も出来る。写真も撮ろう。えーつとカメラカメラ……あつたあつた。

カメラを構えて倍率を上げ、シャッターを切る。

流石にこの写真を渡す訳にも行かないからこの写真を見て詳しく文面に纏めよう。

出来るだけ連写で撮り、細かく分析出来るように……

おお、飛竜は連携を取って狩りをしているのか。

しかも火を吐くし結構小回りが利く様だ。機動力はかなり高いほうだな。火力も高

そうだしもし戦うとすれば油断は出来そうに無いな。

連携も取って来る訳だしかなり厄介だな。

追い立てたり回り込んで逃がさない様にしたりとかなり高度な連携を取っている。

ふと気が付くと地面が近い。おおっと夢中になりすぎて高度が段々と下がってきてしまったのか。

すると獲物の方が反撃をしたのか飛竜達は一旦離脱して再度攻撃を仕掛け始めた。

今まで逃げ回って来ていた獲物もスタミナが切れたかそれとも別の理由か、追い詰め

られ始めた。

……ん？あれって魔獣とかじゃ無いぞ？

動きが獣っぽくない。動きはどちらかと言えば人間だ。

双眼鏡を獲物の方に焦点を合わせて覗くと、獲物として襲われていたのは人間だった。

おいおい嘘だろ!?こんな所に人間がいるのか!?話じゃエルフしか住んでいないって言っていたはずだが……

いや、あれはエルフなのか。そもそも国が派遣した軍が帰って来ない程の危険地帯なのだから人間がいる筈が無い。

居るとすればこの森に詳しく、生活しているエルフ族だ。

どうするか……助けたいのは山々なんだが……

だが流石に見捨てるのも後味が悪い。正直今ここで戦闘を行えば間違い無くこれ以上のマツピングは行えなくなるし、更に言えば帰る分の燃料を残すのも苦勞する。

仕方が無い、後々夢に出て来られても困るし手助けしよう。

増槽を落とすと燃料が足りなくなってしまうかもしれないから増槽を付けたまま戦う。

数は17匹か。まあ何とかなる筈だ。別に全部墮とさなくても何匹か墮とせば逃げていくはず。生物の本能を考えればだが、当てはまらなかつたら最悪だ。

現在高度は3000m程だ。

このまま飛竜の真上から幾らか進んだら180度機体をロールをして急降下一撃離脱をかましてやろう。

その思惑通り、飛竜の直上に着た瞬間に機体をロールさせ、急降下に入る。所謂逆落とすというやつだ。

そのまま飛竜に向かって落ちていく。

さっきまでの速度が370kmぐらいだが下手に降下で速度を出しすぎると空中分解するからな、気を付けなければならない。なので一度エンジンの出力を30%以下まで下げる。

するとエンジンの回転数が下がり音が変わって来る。

飛竜自体の高度は7〜80m程だ。木々の高さのお陰でなんとかエルフ達は持ち堪えているような物か。

飛竜に照準を付け、距離が近付いて500m程で射撃レバーを引く。牽制目的と、これで逃げて行くことを期待して全部の機関銃を放つ。機首と翼内にある合計4門の20mm機関銃が一斉に火を噴いた。

その瞬間、コックピットの中にまで響いて来る大きな射撃音が響く。

20mmという大口径の弾丸が狙った飛竜の頭上から降り注ぐ。

音が気が付いて上を向こうとした頃には初弾が直撃していた。

使用している弾種は二式曳光徹甲弾と二式焼夷榴弾だ。この2種類の弾薬を混ぜて使用している。これは好きなように弾薬を呼び出す時に弾薬ベルトに含む弾種を好きなように変えられる俺独自の利点で1発ずつ交互に入れているから徹甲弾と焼夷榴弾が毎分750発で発射される。他にも3種類ほどあるが今回は使用していない。

徹甲弾の方は100mで20mmの装甲を貫通する威力があり、飛竜の鱗ぐらいなら貫通出来るだろう。

その予想通り一番最初に狙った飛竜はあっさりとブチ抜かれて血をまき散らしながら落ちていく。

角度の問題か弾かれた弾もあるが殆どは鱗を貫通している。

それから直ぐ後、操縦桿を引き起こす前にエンジン出力を一気に100%まで上げて操縦桿を引く。

すると勢いそのままに離脱していく。一気に距離を引き離して後ろを振り向くと俺を一番の脅威だと認識したのか追いかけてくるが速度はそこまで早く無く、ぐんぐん引き離していく。

ある程度離れた時に右に旋回をする。

縦旋回で上に向かって旋回する事も出来るが速度が無くなってしまうし、その時に下降して速度を稼いで逃げることも出来ない。だからなるべく速度を維持していられる横旋回を使用する。

そのまま飛竜に向かって、飛んでいく。飛竜も俺の方に向かって飛んで来る。所謂ヘッドオンというやつだ。そのまま距離が目測で100m程で射撃レバーを再び引く。大きな射撃音と共に弾丸が吐き出されると同時に飛竜も火を噴いた。

その火を避けるために左斜め下方向に機首を向けて回避する。
ガガガガガッ!!!!

しかし飛竜と擦れ違った時に大きな衝撃が伝わって来る。

クソッ!? 避け切れなかったのか!?

右側の翼を見ると大きな切り口が開いていて、そこから燃料が漏れ出していた。

切り口からして火球を食らった訳では無く、避ける時に距離間隔をミスったのか爪か

何か引つ掻いて行つたのだろう。傷もデカく、結構派手に漏れ出ている。これは飛行場まで辿り着く事は難しそうだ……

それとは全く関係無いが今接近して気が付いたが体長は大体10〜14mかそれ以上。個体差もあるだろうが周りに飛んでいるのも同じぐらいの大きさだ。このサイズなら射撃を外すことは早々無い。

しかし、問題は燃料だ。

離脱して少し上昇しながら引き離していく時に燃料計を見たがぐんぐん減っていく。この減り具合は不味い。

もし今ここで飛行場に向かって飛んでいったとしても殆ど進むことなく墜落する。

精々5〜60km進めればいいか……

仕方が無い。

今此処で戦つて飛竜連中を叩き落としてから機体から脱出、疾風を回収してパラシュートで降下しよう。

再び呼び出せば完璧に修理されているのだが、この高度だと再び飛べるほどの速度を出す前に木と衝突だ。

上昇出来る程時間的猶予も無く、引き離してしまつたら飛竜達がエルフ達の方へ向

かつて行ってしまうかもしれない。

パラシュートで降りたらハンヴィーで調査しながら帰るしかない。

エルフラントさん、心配掛けてしまいます。本当にすいません

徐々に高度を取りながら300m程の所で再び反転、飛竜に向かって行く。

ヘッドオンをして3匹目を墮とす。

再び離脱後、旋回して一撃を仕掛ける。

残弾の心配もあるので翼内機関銃のみに切り替え射撃を行う。

装弾数が150発づつで、使い切ったとしても呼び出しから装填できる。

が流石にそんな余裕は無い。

4匹目が落ちた時に大きなミスをした事に気が付いた。

反転するタイミングが早く、思ったよりも飛竜との距離が近かった。

慌てて一気に左に旋回したが、囲まれて離脱する事が出来なくなってしまった。なん

かホバリングしている奴が居るそれを見るとこつち以上に機動力が高そうだが格闘戦

をするか。

左に旋回後、偶々照準器に収まった1匹に向けて射撃する。

威力が大きく簡単に墮とす事が出来たが残弾が心配だ。残りは12匹だが弾数は機

首がそれぞれ124発づつ。翼内は73発づつ。

合計で400発弱と、最大装弾数は600発なので凡そ200発ほど使った事になる。残り400発で12匹か……

全て落とすとするとギリギリ行けるか行けないかぐらいだな。

トリガーハッピーにならない様に気を付けてはいるが10数発程度じゃ死ななさそうだしある程度数を撃ち込まないといけない。

外すのは禁物だな。

完全に周りを囲まれているから逃げ出せそうな隙は無く、がつつり格闘戦をしていくしかないのが辛い。一撃離脱ならば照準も付けやすいのだが格闘戦ともなると追いかけて、追いかけれだから見越し射撃がかなりやりづらい。

しかも疾風の旋回性能とこいつらの旋回性能じゃ飛竜達の方が圧倒的に上だ。

そもそもホバリングして方向転換できるのだから、速度で優つていても数と旋回性能で負けているから後ろを取られてしまう。

事実今も後ろに回られてしまっている。

攻撃されているが当たっていない。接近されていないからだ。それは俺の技量では無く速度で優っているからだ。

しかも連携を取って来るから後ろに回る奴と囲んで逃がさないようにする奴とで分

かかれていて一度離脱する隙が無い。

しかも前面の一直線にしか攻撃できない事を理解したのか絶対に射線に入ろうとしない。トカゲのくせに生意気な奴らだ。

俺も俺で後ろから来る火球を避けたり気に懸けたりしながら射撃の機会を探るのでそれこそ全く撃てない。

左に右に操縦桿を倒しラダーペダルを踏む。

左を踏んでは離し、即座に右を踏み込む。

照準器の端に映ることはあるが撃つてもどうせ当たらないのだから撃たない。

ひたすらタイミングを待つ。

フツと燃料計を見てみると大幅に減っていた。

基本的に只飛ぶだけの時と戦闘を行う時では燃料の消費量が違う。

巡航速度で飛んでもやはり殆ど飛べずに燃料切れだ。それでも高度があれば幾らかは滑空出来るだろうが今の高度は700m程しか無いのだからあっさりと墜落だ。この高度ならさっさと疾風を格納してパラシュート開いた方が安全だ。

15分程、全く射撃機会が来ないまま過ぎて行った。しかしそれも遂に破られる。

ツ!!来た!!

ドドドドド!!

一度、右に向かうと見せかけ一気に左に向かうとその先に居た飛竜が騙されて照準器の中にしつかりと納まった。瞬間、射撃レバーを引いて撃つ。

するとその放った20m弾は簡単に飛竜に吸い寄せられて行き、胴体から首の辺りにかけて命中する。

やはり何発か弾かれたりはするが殆どが鱗を貫通してダメージを与える。

そして絶命した飛竜は真つ逆さまに落ちて行った。

この10数分間は一切ダメージを受けていなかった自分達の仲間が墮とされ少なからず動揺したように見える飛竜達。

少し隙が出来てそこを突き一気に離脱をする。

旋回範囲を縮めるために落としていたエンジン出力を最大まで持つて行き、速度がどんどん上がっていく。

一度機首を上げ、高度を1000mまで上昇するとかなり後ろの方に飛竜が必死に追いつこうと翼を動かしていた。そのまま上昇縦旋回を行い、そのまま急降下に入り再びヘッドオン。それまで上昇をしていたからそこまで速度は乗っておらず操縦桿は動かしやすい。

速度計は623 km/hを指している。

しかし一撃を加えてから離脱上昇すると高度がぐんぐん上がって行く代わりにゴリゴリと速度が削られて行く。

そしてそのまま左旋回を行い、即座に再び一撃離脱を行う。

それを数度繰り返し、飛竜達の数が5匹になった時、飛竜達は不利を悟ったのか逃げに転じる。

流石に逃げる後姿に銃弾を叩き込む気は起きないし、再び戻ってこないか高度を少し取って警戒をするが戻ってくる気配は無い。

この分なら大丈夫だろう。

残弾を見ると残りは機首が34発。翼内は6発しか残っていないかった。

ギリギリだったな……

このまま戦ってもあと1匹か2匹しか墮とせなかつただろう。

燃料計を見れば穴が開いていた方の燃料タンクは空で、残りの燃料も格闘戦を行ったお陰ですつからかん。帰りの分の燃料は間違い無く足りなかつた。

しようがない、予め決めていたとはいえ脱出するしかない。

まずはエンジンの出力を0に、スロットルも完全に閉じる。フラップを展開し速度を可能な限り落とす。

それからコックピットを開け翼の上に立ち、そしてメニユーを開き疾風を格納。するとそれまでであった足元の安定感は失われ俺は空を舞う。腹を向けて降下し、パラシュートを開く。

思いつ切り上に引つ張られる感覚の後、ゆっくりと地面に向かって降下していく。方向を調整しながらクルクルとその場をゆっくりと旋回しながら降りていく。枝に突っ込んだ時に顔を保護する為、ゴーグルをしておく。

木々の枝がどんどん近づいて行く。

足の先が枝に触れたと思ったら身体が枝の中に突っ込んでいった。

顔や身体中に枝が叩きつけられるが目は守られている。

目が無事なら問題無い。

と思っただが、パラシュートが枝に引っかかり宙吊り状態になってしまった。

樹高は60mと大きく、そんなてっぺんの方の枝に宙吊りなのだから40m程の高さだ。パラシュートを外してもいいのだがそれだと地面に叩きつけられてあの世行きだ。

ガサツ！ガサガサツツ！！

ガクンと大きく高さが落ちる。

やばいな、このまま宙吊りだと地面に叩きつけられる未来が分かり切っている。さて、どうしようか。

正直解決手段が見つからない。

高さが落ちたとはいえそれでも30mはある。

いや、本当にどうしよう……

一応俺が乗つても大丈夫そうな枝があるが距離がある。

呼び出せる物の中にロープかなんか無いかな……

あ、あつた。

いや、あるにはあるがまんま只の何の変哲も無い普通のロープだ。

これを枝に引っ掛けるとしてもぶら下つたら速攻で落ちるな。なんか別に引っ掛けられそうな道具は無いな……

カラビナが付いているロープもあるにはあつたがこれを投げても枝には絶対引っつかからない。

本当にどうすれば……あ。

上を見れば太めの枝にパラシュートのロープが引っかかっている。

あの枝なら今も俺を支えているのだから多分あそこにカラビナ付きロープを括りつ

ければ降りられるかもしれない。

カラビナ付きロープを枝に向かって投げる。

2回、3回と投げて4回目でも漸く成功。真上だから大きめのカラビナが枝を超えてくれば後は自重で落ちて来てくれる。

そして俺の所まで下ろしたカラビナにロープを通す。これで輪が出来たから引つ張っていくと輪が小さくなっていき、しつかりと締まる。

そうしたら一度ロープを俺の足の辺り輪が来るようにもやい結びを作る。多少輪が大きくなってしまったが問題は無い。

そうしたらその輪に足を入れてしつかりと体重を預けても大丈夫かを確認。

ぐつぐつ、となんだか力強く踏み込むが枝の太さが思ったよりも太いのか、それとも強度が高いのか分からないがこれぐらいの重さでは何ともないらしい。

これなら大丈夫だ。

ロープの輪に足を掛け、パラシュートを脱ぐ。

そして完全にロープにのみ体重が預けられているが枝が折れる気配は全く無い。

よし、これなら安心だ。

メニユー欄を開き、パラシュートを格納する。

それから下の方まで垂らしていたロープを伝って地面まで降りていく。

あと5 m、4 m、3 m、2 m、1 m……

よつ、と。

久しぶりに地面に足を付けると不思議な感触だ。

降りた場所は普通の土ではなさそうだな。これは苔、か？

まあいい、取り敢えずM4とマガジン7本、M9とマガジン3本に手榴弾2発、ベス
ト、戦闘靴を呼び出す。それとレッグホルスターも。

最低限これらがあればなんとかなる。

食事や水は後から幾らでも呼び出せるから。

本当はパイロットスーツから迷彩服に着替えたいが周りに何かあるか分からない以
上、パイロットスーツの上着だけ脱いでベストを着込み、マガジンポーチにマガジン
を入れていく。そしてその内の1本づつをM4とM9に挿し込みM9をレッグホル
スターに入れM4のグリップを握り、何時でも撃てるように周囲を警戒しておく。

感覚的に周りに何かが居ると言う感じは無い。

「探知」を使っても索敵範囲内には敵性となりえる生物はいない。

しかしここはどこなんだ？

裂け目から凡そ40〜50 kmぐらいの位置にいるという事は分かっているんだが
それ以外の事が丸つきり分からん。

マツピングはされている為、方向で迷うことは無いが広大過ぎてどうすればいいのやら。

周りを見渡すと樹高60mかそれ以上の木々があちこちから生えている。

淵の付近はこんなデカくないんだがなぜこも巨大化したのか不思議でしょうがない。

しかしその巨大樹一本一本の感覚は広く、ハンヴィーもギリギリ通れるだろう。

ただそれで他の木が生えていないという訳では無く、背丈の低い木々や草も生えてい

る。
先程から気になっていた足元の植物だが、やはり苔だった。しかし種類を判別することは出来ないで感触を確かめるとフカフカだった。

苔らしく換装しているわけでも無いが、かと言って湿っているわけでも無い。

寝転がったらさぞかし気持ちがいい事だろう。

しかし触れば触るほど、見れば見るほど不思議な苔だ……

苔以外にも依頼などで訪れた野山では見た事のない植物などが数多く生えている。

これは全部収集したほうが研究者の二人は喜びそうだな。

しかし今はそんな余裕は無いので今回は見送ろう。

いやいや、まだ再初期段階だが研究者の人を同行させなくてよかったよ、本当に。

探知によって周りの安全が確認されているから一度、座って休憩しよう。

流星に疲れた。時間的にも昼飯時だが流星に今ここで食べるのはマズイから水だけにしておく。

ふう……美味しい。

何時間も操縦桿を握り、さらに戦闘をこなしパラシュートで脱出。

それだけに留まらず木の上に宙吊りにされてロープで降りて漸く地面の上に立つ事が出来た。たったそれだけに酷く落ち着く。

完全に気が抜けてしまった。

しかし一応は探知を発動させているから範囲内の700mに接近して来たら分かる。

その範囲に無いのだから多少は良いだろう。

苔の上に座っているが、ちよつとばかり寝転がってみる。

おお、良い感じだ。

寝転がるとやはりフカフカで心地が良い。

下手なベットよりも良い気持ちだ。

あー、駄目だ駄目だ……眠くなってきてしまったぞ……

このまま寝たい気持ちもあるが完全に安全を確保出来ていないから今はまだだ。

時計を取り出すと時刻は12時47分。

昼飯を取るには丁度良い時刻か。

だが無理だ。匂いにつられて魔獣や魔物がやって来ては困る。

そう言う訳で寝転がりながら時折水を飲む。

そんな事を2時間程そうしていると、探知の索敵範囲内700mに何か高速で動く生物が入ってきた。エルフ達が襲われていた方角だ。数は9。

前衛と後衛で分かれているがまだ断定はできない。コボルトやゴブリン、オークと言った魔物は前衛と後衛に分かれる事がある。

しかし移動速度がかなり早く、その3種類は考えにくい。

となると魔獣、それもウルフ系統だが森の中だとフォレストウルフかグレーウルフ。ただの狼の可能性もあるがこっちはこれほど早くない。

そうなる可能性は2つ。

……エルフ達か？それとも別の魔物、魔獣か？

木の影に隠れてそちらを警戒する。

どんどん近づいて来る。早いな、100mを7秒程で走っている。

あと400m。目視出来るまで23秒って所か。

引き金に指を掛け、安全装置を外す。

サイトを覗いてもし魔物や魔獣だったとしても直ぐに発砲出来る様、準備をしておく。

10秒前。

5秒前、4、3、2、1、0！

見えたのは魔獣などでは無く、人間の形をした存在だった。

顔がこちらを覗くと耳が長い。エルフだな。

銃口は下ろすが直ぐに撃てるように引き金に指を掛け安全装置は解除したままにしておく。

よく見ると武器を構えている様子は無く、何かを探しているようだった。

すると彼らは何かを言いながら探し始めた

エルフの言葉は分からないからあれだが、上を指して何か言っている。

……どうする？出て行くか？

恐らく探している物に対しての敵意は無さそうだ。

最低限警戒していれば咄嗟の時にも動けるだろう。

「おい！そこで止まれ！」

「!?!? g f f b l d O s n v y、 l f k l h n e r b t l !?!?」

エルフ語は分からないがいきなり現れた俺に驚いているって感じだな。

見た感じは全員女、なのか？エルフは総じて体格が細い者が多くそれは男も例外ではない。しかしエルフと言えども流石に男にしては線が細すぎる。

出た時に語気を強くしたのは威圧の目的がある。幾ら敵意が無いとは言ってもそれとこれとは別問題だ。こっちだつてこうして武器を所持している相手と対面している以上命懸けなんだ。

向こうも近接用の短剣を抜く者、弓を構える者とそれぞれだ。

しかしかなり練度が高いな。俺が現れた瞬間、声を出す前に構えたエルフが殆どだ。

「お前達は誰か？」

「g h y n d b e o j y i l ! k w q p x c z E L F b q U n m w !?」

聞いた感じは向こうも俺の正体を聞いていて、エルフというように聞こえる単語もあつた。もしかするとエルフ語を喋れないのか？と聞いているらしい。

「お前達は人語を喋れるか？俺はエルフ語を話せない」

すると俺がそう言うってから仲間内で何か話し始めた。

「？」

「……………」

「詳しく聞こえないから俺は警戒しながら待つ。」

「何か意見を言い合っているように見えるが、対立している訳じゃ無さそうだから先行きは大丈夫そうだ。」

「あー、あなたは、人間？」

「そうだ、俺は、人間だ」

「なんで、ここにいてる？人間が来れる程の場所ではない筈だ」

「森の調査に来たんだ」

「あなたはさつき空から降って来たのか？なにか凄い速さで飛ぶものから出て」

「そうだ。さつき俺は空から降りて来た」

「ツ!!そうか!あなたは私達の命の恩人だ!」

「は?ああ、まあいや助けたには助けたが……」

「さつきはありがとう!あのままでは私達は翼竜に食われていた所だった」

「翼竜?飛竜じゃなくて?」

「俺は完全に飛竜だと思っただが……」

何の違いがあるのかさっぱり分からない。

「そうだ、翼竜だ。飛竜はあれの2、3倍ぐらいはある。それに火球の威力も桁違いだしそもそも群れを作らない。番同士での行動はするがそれだけだ。それに比べて翼竜は群れを作って群れ単位で行動する。狩りもそうだ。ただ交尾の時期になると他の群れの雌を探しに行くんだ」

「そんな違いがあるのか……初めて知ったな。メモつとこう……」
教えて貰った事をメモ帳に書き込んでいく。

飛竜や翼竜なんてオール大森林かイリオル大山脈にも行かなければ出会う事はま
ずないからな。こういう意見は貴重だ。

オール大森林とイリオル大山脈の飛竜と翼竜の習性に何か違いがあるのかというの
も気になるがその辺は置いておこう。

「本当にありがとう。翼竜は群れで襲って来るからこの人数じゃ到底太刀打ち出来ない
んだ。しかも連携がかなり上手くて囲まれたら逃げきれない。それに頭もかなり回る
連中だ」

「それは災難でしたね。それで、これからどうするんですか？」

「村に戻る。それにいくらあなたが撃退してくれたとは言っても他の群れが来る可能性
があるから」

「そうなんですか。……それ、私も付いて行っていいですかね？ちよつと今この森から出る手段が無くて」

「ああそれは勿論だとも。そもそも礼をしたくて探していたんだ」

別に野宿でも良いんだが地面で寝るわけにもいかず、木の上に寝るとしてもそこが安全とは限らない。この森で一番安全なのはエルフ族の村なのだ。

「有難うございます。暫く休憩してから出発しましょうか」

「いや、我々は今すぐにも出発出来るぞ」

「私を探してここまで走って来たのでしょうか？皆さんが戦っていた場所から22km程離れているのにこんなに早く着くなんて余程物凄い速さで走ったのは分かりますから」

「そうか……すまない。それじゃあ少しだけ休憩させて貰おう」

「はい。この辺り700m程は危険な魔物や魔獣は存在しませんからゆつくりしていても構いませんよ」

「何故そう言い切れるのだ？」

「ああ、まあ私の能力です」

「ほー。それならばお言葉に甘えさせていただけよう」

うーん、正直自分で言うのもあれだが油断しすぎじゃないか？

こう、何というか隙だらけというか。多分これ、俺に襲われたらヤバいぞ。

「その、私自身が言うのもあれですけど幾ら何でも私の言う事を信じすぎではありませんか？」

「ん？ああ、それは気にしなくても大丈夫だ。そもそも私達を殺すのなら隠れていた時に態々出てこないでもうとつくに殺せていた筈だ。それに空から降って来たというのも私達が見た時に落ちて行つた場所が一致する。このあたり一帯に魔獣や魔物が居ないという言葉も、翼竜の群れを一人で退けられる程の実力者が言うのだ。間違い無い」
「うーん……」

こう、かなりしつかりした理由を言っているのにそれでも心配だ。寧ろ初対面の男の前でこうも警戒心が無い状態で過ごせるものか？

今でこそ、そういう中だがエルフラントさんはバリバリ警戒していたぞ。

「それに、もし私達をこの距離で襲うと言うのなら返り討ちに出来る自信があるからな。短剣が一本あれば十分だ」

……怖い。

この発言をした時の目が本気で出来るって顔だった。

これでも格闘はかなり鍛えているから自信があるが、流星に勝てなさそうだ。

それと、全体的に皆大なり小なり傷を負っている。

なんか放っておけない。まあ男だったら身体に着いた傷はかっこいいとか言うだろ

うが女性に対してそうなのか？と聞かれると答えは否だ。

一応聞いてみよう。

「そう言う事なら納得です。それと、その背中 of 傷大丈夫ですか？」

「これか？まあ痛むがその内治る」

結構サバサバしているのか余り気にしていないらしい。

「ですが血も出ていますし、感染症の心配もありますから、もしよかつたら私が手当てをしましょうか？」

「手当て？治癒魔法が使えるのか？」

「ええまあ。それ以外にも幾つか方法があります」

「それなら頼む。余り身体に傷が付くのは嬉しくないから」

ふむ、やはり女性という事か。

それじゃあ始めよう。

「分かりました。それじゃ始めますから背中を見せて貰えませんか？軽く捲る程度でいいので」

「分かった」

見てみると出血に対して傷はそこまで酷くは無い。

これならちゃんと消毒して治癒魔法で治療を施せば大丈夫そうだ。

綺麗なタオルと消毒液があれば十分。あとは水だな。

「少し沁みますけど我慢してください」

まずは水で患部をしつかりと洗浄する。砂などの異物をしつかりと取り除き、再度水で洗う。水分を軽く拭いてから消毒液を患部にかける。この際服に染みない様に腰のあたりに綺麗なタオルを当てておく。

「んう……！」

「すいません、我慢してくださいね」

消毒液はやはり染みて痛いのだろう。

慣れていない痛みなのか顔を顰めて我慢しているのがよく分かる。

消毒し終わったらしっかりと拭いて終了。

それから治癒魔法を掛ける。するとみるみる傷口が塞がって行く。

よし、これで完璧に治ったな。

消毒もしたし感染症のリスクも大きく下がっただろう。

「終わりましたよ。もう服を元に戻していただいて構いません」

「本当か？この短時間で？」

「ええ」

彼女は疑っているのか背中を自分の手でぺたぺたと触ってから完全に治っている事

が分かったのか驚いて喜んだ。

「本当だ！凄いなこれは！」

「他の方も良ければ治しますよ」

「そうか？なら頼む！」

そう言う訳で残りの人達もしつかりと治療した。

まあ怪我の程度も殆ど大したことは無く、洗浄、消毒と治療魔法で十分事足りるものだった。

「そう言えばまだ自己紹介をしていなかったな。私はネル」

「私はイチロー・バイタークハイマツトです。気軽にイチローと読んで下さい」

「分かった。それとその敬語は止してくれ」

「ああ、分かった」

そうして2人で握手を交わした。

それから1時間程の休憩後、エルフの村に向かって出発をした。

聞いた話ではここから徒歩で凡そ3日の位置にあるらしく、流石に今回ばかりはハンヴィーを出して乗る訳にも行かず彼女たちに合わせて歩いて行くことにした。

これが俺の人生初めての空戦を味わい、エルフとの邂逅をした日だった。

エルフ族の村

ネル達と共に森の中を進んだ。

移動速度は遅く2、3日で村へ到着するのは難しそうだ。というのも俺が墮とした翼竜の肉と鱗などを大量に抱えての移動だからだ。

何故そんなに翼竜の肉と鱗を抱えているのか。

それは、彼女達エルフ族はよく言われるような野菜などしか食べない、何てことは無く、しっかりとタンパク質となる魚や野兎、野豚、野鳥を捕って食べているそうだ。

彼女達はその野鳥などの狩りに出て、獲物を探している時に翼竜の群れに襲われたらしく、それまでに捕った野兎や野鳥は全て捨ててしまった。

だから再び狩りをするぐらいならば目の前にある翼竜の肉があるじゃないか、となった。しかしその翼竜達を仕留めたのは俺だから所有権は俺にある。

そこでこの森の事を詳しく教えて貰う代わりに翼竜の肉を提供すると言う取引を持ち掛けたのだ。

俺は肉何て要らないし、食べるとしても1人だから少し貰えれば事足りる。

それにそんなに持ち歩けないし、何より今の俺に生肉を腐らせない様に持ち歩く手段は無い。

そう言う訳で提案したら彼女達は大喜びでそれを受けてくれた。

彼女達は肉を切り分け、綺麗な大きな葉を何処からか取って来てそれに包み、魔法で凍らせた。あれはかなり驚いた。

そんな方法があるのか、と驚き尚且つ彼女達が全員魔法が使えることにも驚いた。

彼女達から聞いた話ではエルフ族と言うのは総じて魔法に対して適性が高く殆どの人間が魔法を使えるそうだ。

属性の違いはあれど、全員が使える程のレベルだそうだ。

ただこの場所での生活だからか火属性魔法という物はあるにはあるが使う事が無く、精々が調理の時に火を起こす程度だそうだ。

基本は今の様な水属性に加えて水属性、風属性の3種類だ。

そこに火属性なども加わる。やはりかなりの適性がある様で聞いているだけで驚いた。

水属性は今の様に獲物や備蓄食料の保存のために氷の塊を生み出したり獲物そのものを凍らせたりする。

水属性は水を作り出したりする。

基本的にこの2種類はどちらも使えるという事が多く、実際にこのメンバーの中にも2人いるがその2人はどちらも使える。

風属性は狩りの時に弓で矢を放った時に飛距離を伸ばしたりするために使われる。

そう言う訳で肉を葉で包み、凍らせる。

俺は俺の分を切り取り、凍らせてもらう。

そしてそれが終わってからふと思ったのだが翼竜の鱗つてもしかすると等価交換の金の代わりになるのではないかと。大きさは大体5〜7cm前後。

そう思い鱗を1枚剥ぎ取り、入れてみる。すると思つた通り金と同じ役割が出来るだけでは無く金貨の2倍の価値がある。

そう言う訳でこの鱗を剥ぎ取りまくった。

滑走路を呼び出したので思いつ切り消費してしまっていたからこれは嬉しい誤算だった。

ひたすら無心に剥ぎ取りまくって、途中からはネル達にも手伝って貰った。

流石にタダ働きは申し訳ないので何百枚か渡した。

その時の顔と言つたらもう面白くて面白くてしょうがなかった。

え!?これ貰って良いのか!?

という顔で全員が全員俺を見て来るものだからついつい笑ってしまった。まあ鱗を渡した代わりにしっかりと討伐した頭数分は剥ぎ取って貰った。

それに鱗だけでは無く骨なんかもそう言った対象らしく骨もしっかりと回収した。

流石に肉は駄目だったので彼女達は持てるだけ持って出来るだけ無駄にしない様にした。

基本は必要な分だけを狩る。それがエルフのライフスタイルと言う事だそうで肉を切り取る時もしっかりと祈っていた。

まあ何に祈っているのかは知らないが。

そう言う訳で翼竜の鱗を一匹当たり3000枚近く剥ぎ取り、ネル達に渡した分を引くと12匹分なので35500枚という普通ならば一財産どころか大金持ちになれる枚数だ。

翼竜の鱗1枚で金貨2枚分の価値があるのだから、金貨に換言すれば71000枚になる。

……国王から貰った報酬よりも遥かに多いじゃないか!?

国王から貰ったのは金貨3000枚だぞ!? それの……24倍!?

うっそだろおい……飛行場が凡そ金貨1200枚ぐらいだったから余裕で回収しちゃったじゃないか……

……俺こんな大金持ちになっちゃって大丈夫だろうか？

何故こんなにも高額になったのか気になって調べてみたところ分かった事があった。そもそも翼竜を含めて飛竜や土竜という、竜種は殆ど討伐される事が無い。

というのも基本的に硬い鱗に覆われている竜種は俺を覗いた人間の持てる武器でそれらを貫きダメージを与える事は困難だからだ。さしずめ空飛ぶ要塞と言った所か。

それ以外にも空中を飛びながら攻撃を仕掛けてくるから手出しが出来ず、基本的に時間を稼ぎながら逃げ回り、隙を見て一気に逃げ出すのが殆どだ。

稀にこの竜種を討伐出来る人間やエルフ、ドワーフはいるにはいるがやはり滅多に無い出来事だ。比較的討伐数が多いのは土竜だが、これは土竜が空を飛べないという事にあるからだ。それでも硬い鱗で全身を覆われており、さながら移動する要塞のような生物だ。

比較的柔らかい腹部へ攻撃を集中すれば討伐出来ない事も無いが飛竜、翼竜は飛び回り攻撃が当てられない。土竜はその点飛べないから攻撃は当てやすいが土竜は竜種の中でも特に鱗が硬く、腹の鱗は飛竜や翼竜の鱗と変わらない硬さで、背中側はそれ以上に堅いらしい。

硬さの順で言うると土竜〈飛竜〉翼竜、と言った形だ。

それ以外にも竜種は存在するがオードソックスな竜種はこの3種だ。

というかこの3種類以外俺は知らない。

まあ疾風から撃ち出された20mm弾を翼竜の鱗では防げなかったという事か。

これが飛竜や土竜になったら20mm弾で効果があるのかと聞かれると多分無理そうだ。M2ならなおさら貫通出来ないし、5.56mmや9mm弾では傷を付けられるのかどうかすら怪しい。

今の装備じゃ全くの太刀打ちが出来ないな。

態々自分から討伐しに行く事なんて無い。絶対に無い。

流石に全部金として入れてしまうのは勿体無いし、何よりエルフラントさんに心配を掛けてしまうのだからそのお詫びと言うのもあれだが、鱗を幾らか取って置いてネックレスか指輪でも作って贈ろう。

まあ翼竜の鱗の色って1匹1匹違う。

赤や濃緑が多いが青っぽいのも居るししかも磨けばかなり綺麗に光りそうだ。

聞いた話からすると普通の宝石なんかよりもずっと貴重そうだから多分怒られた後に喜んでくれるだろう。

あ、そう言えば逆鱗とか言うのは無かった。翼竜には逆鱗が無いらしい。飛竜や土竜

にはあるらしいが何故無いかその辺は不思議だな。

金として入れずに各種類の色の鱗を10枚ずつ程残しておく。

小型のリユックを呼び出し、その中にタオルで包んで入れる。するとその事を不思議に思ったのかネルが話しかけて来た。

「その鱗はどうするのだ？」

「ああ、これ？加工して首飾りか指輪にしようと思ってるんだ」

「ほう、それは誰かに贈るのか？」

「そうだな。よくお世話になってる女性が居るからその人にな」

「なんだ、イチローも案外やるじゃないか」

俺が捕まえたと言うより、奇跡が起こったからエルフラントさんとああいう仲になれたのだと思う。

取り敢えずそれ以外は全て入れてしまう。

そんな多い数を持ち歩ける事が出来ないからな。ハンヴィーかバイクでも使う事が出来ればもつと持ち運べるし移動も楽なんだがなあ……

俺の格好は上下迷彩服に戦闘靴を履いている。

ネル達と合流してから余裕が出来たのでパイロットスーツから迷彩服に着替えさせ

てもらった。

ベストにマガジンポーチを3つ、それぞれ2つづつ入れられる物とM9用のマガジンポーチも取り付けてある。鉄板は重量が嵩む為に入れていない。それと右側の腰にコンバットナイフを1本。

あとはブツシユハットを被っている。ヘルメットでも良いのだが重いし蒸れる。その上伏せ撃ちをしたときに邪魔だ。それと翼竜の鱗を入れてある小型のリュックを背負っている。

総重量はM4が約2,7kgとM9が約1kg。銃本体だけで3,7kg。

それに5.56mm弾210発全て足すと約2,5kg。マガジンを含めると3kg程にもなる。更にM9用の9mm弾が45発なのでマガジンと足すと1kgくらいか。

弾薬だけで3,5kg。

迷彩服上下とブツシユハットで1.2kgあり、戦闘靴も両方で2kgはある。

ベストとマガジンポーチが1kgくらい。

ナイフは1kg無いな。多分5.600gか。

それと翼竜の鱗は1枚当たり100gと見た目と反して随分と軽い。それが30枚なので3kg。

合計で15kgにもなる。

エルフランドさんやクレイドルさんの鎧は全部で3〜40kgもあり、更に剣が5kgもある。

それと比べると軽いのだろう。しかしこの森の中で行動するには重すぎることに変わりはない。

それに比べて彼女達の格好は森の中で動き回るのに支障がない様、かなりの軽装で行動していた。基本は全員が弓を装備し、矢はそれぞれ20本ずつ。矢の数は折れたりしたときに困らない様に比較的多めに持ち歩いているようだ。

そこに短剣と小さなナイフの2本と後は水。

これだけで行動しているのは驚きだ。

格好は皮鎧なので見た目ほど重く無く、全て合わせても5〜7kgぐらいか？

俺と比べると天と地程の差があるな。

しかし1人当たり10kgの鱗と更に20kgづつの翼竜肉を持ち歩いているから総重量は35kg以上と俺よりもずっと重い。

にも関わらず移動速度は俺と変わらず、しかも余裕がある。

寧ろ俺の速度に合わせてゆっくり進んでくれているのだから驚きだ。

水はこの森の中では確保が難しいらしく、それだけは確実に持って来ていて、他の食

事は現地調達で十分やって行けると言う。魔法で生み出せるには生み出せるがそれ限度がありやはり自身で持つて行かなければならぬらしい。

彼女達はやはりこの森での移動にかなり慣れており、まだまだ疲れている様子が無い。

俺も体力に自信はあるから疲れてはいないが慣れていない土地、地面を歩くのが意外と疲労が溜まってしまふのかもしれない。

今のところ、特に何か問題が起こる様な事は無く、順調に進んでいた。

「探知」で700m範囲内に何かしらの反応があった場合、確認はしていないが危険が及ぶ可能性を考えて全て避けて進んでいた。

追いかけて来る魔物や魔獣も居るには居たが、襲い掛かって来る方向も何もかも分かって居る為に簡単に対処が出来た。

だがネル達は俺の探知で魔物や魔獣を避けているのにも関わらず、俺が幾ら大丈夫だと言っても、それでもガツチリと警戒をしている。最初に俺と話している時の感じは何処に行つたんだ？と思うぐらいだ。

それどころか行き過ぎなぐらい周りを警戒している。

剥ぎ取っている時も、休憩中も常に交代で3人の歩哨を立たせ、用を足している時は必ず3人は一緒に付いて行き、身体を拭く時は一人ずつ。寝ている時は歩哨を四方位に立たせ交代で寝る。尚且つ寝ている者も装具は一切外さずそのまま。

何時でも何かあれば対応出来る、そんな感じだった。

流石に幾ら何でもこの森に慣れているのだから行き過ぎているような気がするの。気のせいなのだろうか？それともそれ程この森が危険という事か？

道中、休憩中に紙にマッピングした範囲を印刷する事も忘れない。この辺りは2日目の夜までに印刷していた範囲では無く、まだ印刷をしていない場所だったからだ。

途中、何度か紙に印刷した地図を見たが特に変わった事は無かった。

そして翼竜を剥ぎ取った日から5日後、漸くエルフの村に到着した。

「イチロー、ここが私達の村だ」

「おお……これは凄いな……」

思わず声を上げてしまう村の様子だった。

その村がある場所は疾風で飛んでいる時に見た、森にしては違和感のある場所だった。

どうやら巨木の上に家を作り、家同士を吊り橋のような物で繋いでいるという、宙に浮いている村だった。それに地面にも建物が見つかあり、村の範囲を柵で囲っている。

そのエルフ達が吊り橋の上を行き来しているのはかなり幻想的な光景だ。かなり高い所にある。

そこまでは良いのだが、何か違和感がある。

軽く見渡すと気が付いた。

何というかこう、幾らここが危険なオール大森林の中とは言え余りにも殺気立っているというか、ピリピリしすぎているのだ。

それに村の中から本来はする筈の無い血の匂いが漂ってくる。

獲物の解体をするにしてもここまで血の匂いがするか？

それに全体を見ても明らかに村人の数が村の規模と釣り合わない。

こんな昼間なのだからもっと多くのエルフが活動している筈なのだ。

エルフが夜行性なんて聞いたことも無ければネル達にもそんな事は欠片も見られなかった。

諸々を考えると明らかにおかしい。

どういう訳だかは知らないが普通ならば何百年もここで暮らしているのだから寧ろ

安心して普通に行っている方が自然なのだ。

俺の様に森の外から調査に来たのなら四六時中周りを警戒し続けるのは当たり前だし、何より見知らぬ土地で周りに何も見覚えの無い物ばかりなのだから寧ろ俺がもつと警戒しなければならぬ。

しかしながら住み慣れている筈のエルフ達までこんなにも警戒しているのはおかしい。

しかも地面の上に建てられた建物からは人の気配がせず、無人の様だ。

「イチロー、早く来い。地面の上いつまでも突っ立って居たら危険だ」

「危険？ここは村の中だよな？何故だ？」

「いいから早く。あとで説明するから」

「あ、ああ……」

村の様子を詳しく見る前にネルに手を引かれ巨木の上に建てられた家々に案内される。上から梯子を下ろしてもらいそれを使い上って行く。

ネル達の様子も肉を切り分けていた時とは随分と変わっている。

彼女達もどこかピリピリとしている。

梯子を上り、通路に上がる。

すると下から見上げた時も感じたがかなりの高さにある。

大体30 m程の所にあり、低くても25 mくらいの所にある。

なんとうかツリーハウスが沢山あってさらにそれらが吊り橋などで繋がっているような感じだろうか？一本の木に上下に連なって建てられている家は梯子で上下に行き来出来るようになってる。

此処に立つてみて感じたがやはり男としては色々と擦られるものがあるな。浪漫だ。

しかしこれだけ高い位置にあるのならば翼竜や飛竜の様に上からの攻撃には弱いから下の攻撃に対してはかなり強い筈だ。

確かに上からの攻撃に対しての警戒は必要だろう。

だが何故下に対してもこれほど警戒する必要があるのか？

この高さなら弓などの武器での攻撃も上を見上げての攻撃だから寧ろ上から一方的に撃ち下ろす事が出来るではないか。それなのにも関わらずこれほど下への警戒が高いのだおかしい。

「取り敢えず村長の所に行く。翼竜に襲われた事と、イチローの事の報告、あとは成果の報告だな。と言つても全てイチローが関わっているから付いて来て貰うぞ」

「ああ。村長に挨拶したいからな。あとは数日間の滞在許可を貰いたい」

「挨拶は全然構わないが、村の様子を見て貰えば分かるがもしかすると滞在許可は貰えないかもしれないぞ」

「構わないさ。なんにせよ挨拶は必要だと思っからな」

「そうか。それなら付いて来い」

そう言う訳で村長の元に行った。

村長の家は他の家よりも大きく存在感のある家だった。

巨木は幹自体もかなり太く、直径が余裕で8 m程はあるような太さを誇り、並大抵の重さなどではビクともしない。そもそも一軒家が丸々木の上に建てられているのだからこの巨木は驚くレベルだ。

そして村長の家に入る。

「村長！ネルです！狩りから戻って参りました！」

「どうぞ入ってください……」

中から聞こえてくる声は何故か随分と弱々しい声だった。

いや、おかしいぞ。

そしてドアを開けて中に入ると、家から普通する事のない血の匂いが充満していた。

にも拘らず窓も開けていないのだから完全に籠ってしまっており、酷い匂いだ。

血の匂い自体も流れて直ぐの匂いでは無くかなり暫く経ったものだった。

ベットに近付くと、そこには重症を負った痛々しいエルフの女性が横たわっていた。

見た目は恐ろしくかなり若いと思われるが片目は包帯のような物で覆われており、左足は

無く、右腕は骨折をしているのか添え木をして同じ様に布で固定されていた。恐らくそれ以外にも傷はあるのだろう。

「村長、体の具合は如何ですか？」

「見た通り、良くありませんね……」

ネルが村長に話しかけると先程よりもずっと弱々しい声でそう答えた。

なんとかして身体を起こそうとするが力が入らないのか少しも動く事が出来ない。

「そうですか……余計な事をお聞きしてしまい本当に申し訳ありません……」

「それで、皆さんに怪我はありませんか……？」

ネルは申し訳なさそうに謝る。

村長は自分の身体の状況なのにネル達の事を気に掛けているあたりとても優しい人なのだろう。

「途中、翼竜の群れに襲われましたが事無きを得ました」

「翼竜の群れ……!? 本当に無事なのですか……!?」

「はい。彼のお陰で。17匹は居るのにそれを瞬く間に墮とし、さらに私達は怪我をしました。彼はそんな私達に治癒魔法を掛けて下さり傷は全て治っております」

「彼……? 彼とはそこに居る人間の男性の事ですか……?」

「はい」

ネルはそう聞かれると返事をして俺に挨拶をするように目配せをして来た。

そして彼女の視界に入れる場所に立ち、挨拶をする。

「イチローと申します」

「イチロー様、と言うのですか……ネル達を助けて頂き本当に有難うございました……」
弱々しい声で俺に礼を告げて来る。

しかし様呼びは止めて欲しい。

今言う事では無いがむず痒い。

「いえ、大した事では無いので気になさらないで下さい」

「彼は、翼竜の群れに襲われていた私達を空を飛ぶ何かで助けてくれたのです」

「空を飛ぶ……!? うっ……御伽噺のようですね……それは本当のですか……?」

流石に空を飛んでいる何かで、と聞くと驚いたが痛みが走ったのか直ぐに落ち着いた。

「はい、私だけでは無く他の者もそれから降りて来るところを見ております」

「そうですか……それは信じるしかなさそうです……」

「そしてそれだけでは無く襲われたせいで捨てざるを得なくなった狩りの成果を、翼竜の肉を分け与えてくれたのです」

ネルがその説明をすると村長は俺を見てもし頭を下げられるのならば本当に地面に

頭が付いてしまうほどに頭を下げているだろう雰囲気です。礼を言つて来た。

「そうですか……イチロー様、此度の事は本当にありがとうございます……！出来れば何かお礼がしたいのですが残念ながら私はこの様です……どうかご容赦ください……」

「いえ、お礼をされるほどの事ではありませんし、そこまでの事をしたという認識もありません」

「ですが翼竜の肉まで分けて頂いて……これで何もしないと言うのは……」

「そうですか……それなら今のこの村の状況を教えて頂く事と、数日間この村に滞在したいのでその許可を頂きたいのです。あとは森の事を教えて頂きたい。この3つで十分です。食事などは自分で何とかしますし、もし食料状況が悪いと言うのならば提供する事も出来ます。もし迷惑だと言うのならばお断りして頂いて構いません」

本当は森の詳しい事も聞きたいのだが流石にそれは躊躇われる。

村の状況を聞くのはもし俺に出来る事があれば手助けをしてあげたいからだ。

ネル達を助けた時から乗りかかった船どころかもう既に船には乗ってしまったているのだからこのまま突っ走つてしまおう。

俺にだつて損得勘定はある。

それを考えた時、もし彼女を助けた場合に得られる情報が恐らくとても貴重だ、と判断したからこそ助けるのだ。

「本当にそれだけで良いのですか……?」

「はい。正直な事を申し上げますと私はロンバルティア王国国王の命でこの森の調査に来たのです。しかし少々問題が起きてしまい……」

「そうですか……それぐらいならば幾らでもどうぞ……村への滞在は好きナだけ、お好きな時に滞在していただいて構いません……」

この村の状況の説明と村への滞在許可を得られた。

一応の目的は達成したと言えるな。

「有難うございます。それではまず、村長の治療からしましょうか」

「治療……!?ですがこれ以上ご迷惑をお掛けする訳には……」

「気にしないで下さい。このぐらいならばお安い御用です」

「すいません……すいません……本当に有難うございます……!」

彼女は少し涙声になりながら俺に謝罪と感謝をする。

いやだつて流石にこんな状態の彼女を前にしたら出来る事があるのだからやってあげたいという気持ちにはなる。

それにこの状態じゃ話をしてもらう以前の話だ。

それに、この村は彼女以外にも怪我人が多く存在する気がする。

村長さん1人の出血量じゃどうやって嗅覚が特別良い訳でも無い俺が血の匂い

を嗅ぎ分けられる訳が無いからな。

治療のための準備をする。

まず呼び出したのは綺麗な水と消毒液。それと忘れてはならないのが手術をするときに人体に対して投与を行う麻酔だ。

呼び出したのは局所麻酔と呼ばれるもの。

全身麻酔というのはまあイメージ的には眠ってしまったという物だ。いや、どちらかと言うと薬物によって意図的に意識を失わせると言った方が正しいか。

そして局所麻酔というものは、よく戦争映画などでモルヒネだ、と言いながら注射しているような感じだ。その名の通り意識は失わずその部分の痛みや苦痛だけを取り除く事が出来る。村長さんの怪我の程度は見た感じでしか分からないが片目の損傷に加え左足欠損と右腕骨折もあるというこれ程の重傷は本来、全身麻酔を使う事が普通なのだ。だが全身麻酔の扱いはかなり難しく、容態の急激な変化も有り得る為に医学のド素人の俺には明らかに手を出すべきではないと判断したからだ。

局所麻酔が素人でも扱えるという訳では無く、あくまで今回はこちらの方が安全性が高いかという観点で選んだだけなので危険なことに変わりはない。

局所麻酔として選んだのはモルヒネだ。

よく映画などでも使われている麻酔薬で、鎮痛作用は強力だ。だからこそ軍などで使われるのだろう。有効限界が無いのも特徴的でより強い痛みに対しては容量を増やして使う事が出来る。

それと簡易的な血液型調査キット。

そして異物などが入り込んでいた場合にそれを取り除く為のピンセットなども。

あとは綺麗な布と包帯、ガーゼを大量に。

それと止血剤。

それ以外に呼び出したのは軍用のI F A K応急処置キットだ。

これが応急処置キットだと馬鹿に出来ないのだ。

基本的に戦場での死因の多くは大量出血による失血死と気道閉塞の2種類に分けられる。その2つに対しての対応が出来るし、恐らく今回も出番がある。

内容物はかなりの数がある。

C A T ターニケット：患部を圧迫して出血を止めるための止血帯×1

バンテージ：片手でも患部に巻くことのできる包帯×1

圧縮包帯：圧縮された伸縮性のある包帯×1

外科用テープ×1

経鼻エアウェイ：気道を確保するために鼻腔から挿入する管×1

外科用ゴム手袋：感染防止用のゴム製手袋×4

戦闘負傷者記録カード：負傷者の処置内容や時間を記載するためのカード×1

マジックペン：記録カードに書く為のペン×1

ガーバーストラップカッター：患部を露出させるため衣類を切る道具×1

アイシールド：負傷した眼球の保護をする為のアイカップ×1

チエストシール（バルブ付き）：気胸の処置に使う機密性の高いシール×1

以上だ。

これらの出番が無いと言い切れず呼び出しておいた。

というのも、今回は足を切開し開き血液の流れを止めるといふ事が出来ない。

露出している血管そのものを閉めてしまえば良い話だがそれでは俺の技量が無く危険だ。だからこれらを活用して治療を行う。

その前に俺は綺麗な服に着替えないと。

両手と、肩の辺りまでしっかりと洗い流す。

そして新しく綺麗な衣類を呼び出して着用。

「お聞きの通り多少は治癒魔法が使えますのでそれを使って治療します。それに加えて私独自の治療も施しますが、もしかするとかなりの痛みがあるかもしれません。その時は我慢せずに伝えてください」

「は、……」

痛みがあつた時は即座に知らせるように言っておく。

というのも、余りの痛さ故に下手をするとショック死の恐れがあるからだ。程度と場合によつてはその場で一旦手当てを中断せざるを得ないかもしれない。

先ずはどこが一番重傷なのかを確かめ、優先順位を付けて治療を施す。

だが一番は左足の欠損なのは明らかだ。

今も出血は続いているようだし早急に治療を行わなければならない。

優先順位的には今の所左足欠損が最優先。

脈拍を手首の部分で確認を取ると、やはり弱いな。

出血量が多かつたのだろう。それに加えて食事などの栄養状況も良くなかつたのか。

いずれにせよ理由は複数存在するだろうし、断定は出来そうに無い。

あとは感染症のリスクだがこれは高いだろう。そもそもこの世界に消毒や細菌、ウイルスという概念がまず無いからそれはしようがないのだが。

健康状態の確認が終了したら最初に右目と右腕の状態を確認しておく。

先ずは右目。

ゴム手袋を着用し、更にその上から念の為に消毒液をかけておく。

そして包帯をずらして見てみる。

……かなり酷いな。右目を含めて鼻の少し右側辺りからこめかみの方まで大きな傷が残っている。まず触られた感覚、目は見えるのか、色覚に異常が無いかと動かせるかを確認しなければ。

「少し触りますね。触られた感じがあればなんでもいいので出来るだけハッキリと声を出してください」

「あうっつっ……!!痛いです……!!」

「すいません、ありがとうございます」

触覚はまだ機能しているな。

痛みを感じるという事はそう言う事だ。もしかすると触覚として痛みを感じている

のではなく、怪我をしているのだから痛いと言う幻覚かもしれないが。

「右目は見えますか？」

「はい……」

視覚に異常は無く見えている、と。

それならいい。見えていないと流石に骨が折れる。

治療魔法で視神経を再生させれば何とかなるかもしれないが失敗するとあとが無い。

「そしたら俺の指に合わせて動かしてみてください」

俺の指示の通り、右左上下と動かす。

よし、眼球周りの筋肉にも異常は無さそうだ。

ただ右と下に動かす時に少し動かさずらそうにしていたので軽く損傷しているかもしれない。

「色の見え方に何かおかしい所はありませんか？」

「大丈夫だと思えます……」

「それではこの色は？」

「緑……」

「これは？」

「赤です……」

「それじゃあこちらは？」

「青です……」

色覚にも異常は無くしつかりと判別が出来ている。

うん、傷の見た目は酷いが眼球やそれらの神経にダメージは殆ど無いようだ。

次は右腕の骨折だ。

「次は腕を触ります。痛いと思いますが少しだけ我慢してください」

「はい……」

触ると、骨にヒビが入っているのが確認できた。

骨折ではないな。これなら治癒魔法を掛ければ完治できるくらいだな。

「目の傷は酷いですが恐らく問題は無いと思われます。治癒魔法などで十分事足りま
す。腕の方も骨折では無くヒビですのでこちらも治癒魔法で対応できます」

「そうですか……」

「次は足を見ます。ですが恐らくかなりの痛みが襲うと思うのでそうしたら知らせてく
ださい。あと舌を噛まないようにこの布を噛んでいてください」

最後に左足だ。

まずは万が一出血した場合に備えて止血帯を巻く。

膝の辺りから無いので太腿の付け根辺りに止血帯を巻き、強く引き絞る。

「わ、分かった!」

ドアの向こうで待機していたエルさんに確認してきてもらう。

かなり賭けな部分があるが治療魔法を掛けながらくっ付けようとすれば繋がるかもしれない。まだ試したことも無いからどうかは分からないがやってみる価値はある。

流石に未だに治療魔法で欠損を治せるほどの力は無いがこれならば出来るかもしれない。

「よし、それじゃあ足の治療を始めます。最初に鎮痛剤を打ちますが、恐らく左足の感覚が無くなるかと思いますが心配しないで下さい。もし違和感を感じたらすぐに教えてください」

「分かりました……」

「イチロー、足は取ってあるらしい。氷属性魔法で凍らせてあると言っていた」

「分かった、そうしたらそれを持って来て」

「分かった」

ネルにもう一度頼んで取って来て貰う。

解凍しなければならぬのでその時間も込みだ。氷漬けでかちんこちんの状態で繋がられるはずがないからな。

そしてモルヒネを注射する。

効果が出るまでの間に村長さんの血液型を調べておく。

すると村長さんの血液型はA型。

なのでA型の輸血用パックを呼び出しておく。

そもそも今までにかなりの出血をしていたのか明らかに血が足りないと見て取れる。

その血液を補うと言う意味合いもあるから多少多めに呼び出す。

そうこうして準備を行い暫くすると感覚が無くなつて来たのか触つても反応しなくなつた。

よし、そうしたらいよいよ治療の開始だ。

先ずは水でしっかり洗い流し更に消毒液をかけ、消毒を行う。

洗浄、殺菌は基本中の基本だ。

そしたら軽く拭き取り水では流せなかつた断面に入り込んでいる異物、小石や木の破片を取り除く。

拡大鏡を使用して出来るだけ早く取り除く。掛かった時間は40分程だ。

そうしたら再び消毒液をかける。

ここまで来たら輸血の開始。

そうしたら針を刺しチューブを繋げる。

そしてチューブを輸血パックに繋げ、血を流し始める。

止血帯を緩めて血の流れを増やす。

暫くすると断面の血管から先程までよりも多い血が流れ出る。

しつかりと血の流れがあるという事だ。

幾らか汚い血を流し切っておく。

そしてやはり血の流れが思ったよりも多く流石に完全に止血帯を締める訳には行かず、血管をクリップで止めておこう。

細い血管はどうにもならないので所謂大動脈、大静脈を始めとした太い血管を中心に止める。この太い血管の止血をするだけで十分止血に成りえる。

そして止血帯を若干緩める。

これぐらいの出血量ならば輸血で十分何とかなる。

「村長さん、今の所の意識はどうですか？ 朦朧としたり、ぼーつとしたりはしていませんか？」

「大丈夫です……」

「寒いとかは？」

「ありません……」

今の所問題は無いな。

受け答えもしっかりしているし、意識もしっかりしている。

心電図とかは流石に無いので脈は俺自身で計らなければならぬ。

ちよくちよく手首の所の血管で確認を取るが、輸血をする前よりもマシンになった気がする。

あとはネルが千切れた足を持ってくるのを待つだけだ。

「イチロー、持って来たぞ」

「ありがとう」

数分後、ネルが持って来た千切れた足を断面に繋げ治療魔法を掛ける。

止血帯を締めて、クリップを外す。それからネルが持って来た足を治療魔法で繋げる。

暫くすると、内側から徐々にくっつき始め、30分もすると完全にくっついた。念の為に更に30分治療魔法を掛け続ける。

……よし、これで左足の治療は完了か。

確認するが異常は見られず恐らく問題は無い。ただ幾ら消毒したとはいえウイルスや細菌の侵入が考えられる。後々の経過で必要なら抗生物質などの投与も考えなければならぬ。

「左足の治療は終わりました。次は顔の治療に移りますね」

「有難うございます……お願ひします……」

それから同じ様に顔の治療を行った。

モルヒネを打ち効いたら全体的に洗い流し、異物を取り除き消毒を行う。

女性なのだから顔に傷が残るのは好ましくないだろうから丁寧に行う。

幸い出血も無いので左足のように出血に気を配る必要は無い。ただこめかみの方は少しだけ血が流れているがそれでも指を軽く切った程度なので治療魔法を掛けてしまえばすぐに治るだろう。

異物を完全に取り除いたらもう一度洗い流して消毒し、終わったら治療魔法をかけ終了。

次にヒビの患部に治療魔法を掛け、終了し触った時にヒビの感触が無かったのでこちらも完了。

途中なにか輸血パックを交換したが出血量が多かったっぽいからそれはしようがない。

「村長さん、治療は終わりました」

「有難うございます……」

「まだ安心は出来ないので暫くの間はしっかりと食事と生活を摂って安静にしておくこと。もし何か異変があればすぐに知らせてください。熱が出たとか、気分が悪くなってきたとか本当に簡単なものでも良いのですぐに知らせてください。命に関わる場合がありますから」

「はい、分かりました……本当に有難うございました……」

未だに麻酔が効いているのか怪我をした部分は動かさないようだがどちらにしろ今日一日は身体を動かす事は無理だろう。

なんなら暫くはリハビリをしないとならないから普通に立って歩けるようになるのは順調に行っても1、2カ月は先の話だ。

多分、目と腕は足に比べ軽い方だったし大丈夫だと思う。

そうして村長さんの治療は終わり。

これは疲れるな……何というか普通に戦っている時よりも全然疲れる。

慣れもあるのだろうが、命が掛かっているという精神的負担もあるのかもしれない。

そして忘れかけていたが感染症を抑えるための薬を点滴で打っておく。

こうすれば発症する事を抑えられるはずだ。必ずしも100%防げるといふ訳ではないので油断は出来ないからしっかりと気を付けておく必要があるが。

暫くすると幾らか余裕が出て来たのか口を開いて話し始めた。

「イチロー様、本当に有難うございました」

「いえ、気になさらないで下さい」

「それと一つだけお願いがあります……」

「はい？」

「どうか、他の村人も助けては貰えないでしょうか……う？」

「他の村人？元々考えてはいたので構いませんが……」

村の中に入った時から何となく分かっていたがやはり怪我人が居るのか。

それも多分大勢。やはりこの村に来て直ぐに血の匂いがしたのはそのせいだろう。

村長さんを治療する時に考えたことは大当たり、という訳か。

「どうかお願いします……私の様に大怪我を負っている者がまだ居ります。対価は必ず、どのような形になったとしてもお支払い致します……！私の事をお好きなようにして頂いても構いません！ですからどうか、どうか……！」

起き上がることは出来ないが、それでも必死に頼み込んでくる。

いや、治療するのは構わないが対価なんて必要無いって。

そもそも村長さん自身を対価として渡されても困る。俺にはエルフランドさんがいるし。

「対価なんて必要ありませんよ。強いて言うならば既に先程要求した村への滞在とこの村の状況説明、あとは森の情報で十分です」

「ですがこれだけの事をして頂いたのに何もお返しをしないと云うのは……」

村長さんは納得してくれそうにない。

うーん、正直これ以上金を貰っても困る。翼竜の討伐でとんでもない金額を手に入れたのだからもう必要は無いのだがなあ……

あ、そうだ。

「村長さん、そこまで対価を支払いたいと言うのならば一つだけお願いしても良いですか?」

「は、はい……!何なりと……ですがどうか村人には手を出さないで下さい……!」

「大丈夫ですよ、そんなことはしません。取り敢えず要求するのは、リーヴォリの町はご存知ですか?」

「勿論です。あの町はこの森に最も近く、何かを買いに行ったり売りに行く時は基本的にあの町ですから」

「あの町に使いの人間を出して欲しいのです。帰ると言っていたのに既に5日も経って

しまい私の親しい友人や大切な人はとても心配していると思うのです。ですからどうか私の無事を伝えるための使いを出してください」

「そ、それだけ……？ 本当にそれだけで宜しいのですか……？ 他に何か無いのですか……？」

「ええ。これ以上何かを望んでも罰当たりになつてしまいますから」

「……どうしてそこまでしてくださるのですか？」

「え？ うーん……なんででしょうか。私にも分かりません」

「そう、ですか……」

「しいて言うならば『困った時はお互い様』という事ですかね」

俺はそれ以上その場に留まらず、村長さんの家を出た。

そして外に立っていたネル達に村長さんを綺麗な家に移す事、そして村長さんの家をしっかりと綺麗にすることを言い、頼んで怪我をしている村人の元へ連れて行つて貰う。

怪我人が収容されている家の中に入る。

そこには苦痛に呻くエルフ達が横たわっていた。

「うっ!?!これは酷いな……!」

「ここに居る怪我人は全員で170人だ。その、本当に全員治せるのか……?」

「分からない。努力はするがどうしようもない場合もあるからその辺りはしっかりと覚えておいてくれ」

「勿論だ。他に何か手伝えることはあるか?」

「何人か手伝いを連れて来てくれ。流石にこの人数を1人で何もかもやるのは無理がある。それと何処か空いている家の部屋を1つ貸してくれ」

「分かった」

そして村人の治療を始める。

先ずは1人1人診断を行い、優先度順に分けていく。

基本的に四肢欠損や出血状況によって優先度を変える。

「あんた誰だ?人間か?何故この村に居る?」

「ちよつとした事情があります。今はそれを説明している暇は無いので後で説明させ

て頂きます」

「そうか……」

トリアージの為に診断をした人が話しかけて来た。

明らかに俺の事を警戒しているようで態度や言葉、目からも簡単に分かるぐらいだ。取り敢えずこの人は優先度は中ほどだな。

1人1人の診断でゴム手袋を取り換え、次の人に移る。

四肢欠損の場合は止血帯と止血剤を使い応急的に止血をしておく。

漸く分け終え、それから優先度順に治療をして行く。

聞いた通り、怪我人は村の人口300人中170人にも上り、さらに言えばその殆どが男性で、男女比で言えば男154人女16人。

かなり重症の人が多く良くて骨折、欠損という具合で本当に多岐に渡った。

男の負傷者が多いのは何かしらの戦闘が行われた、と考えるべきか。

怪我の程度は個人個人で様々で村長さんの様に足を失っていたり、腕、目が見えなかったり、腹部を大きく損傷し内臓が見えていたり、内臓そのものにダメージがあった人も居たが、どれも何とかして治療した。

しかしながら千切れたりした足や腕が無く繋げる事が出来なかった人。

断面の部分が壊死を起こし、繋げるどころか寧ろ切断をしなければならなかった人。片目、両目を問わず完全に視力を失った人。

半身不随になってしまったりと様々な障害を抱えてしまった人も多く、残念ながら治療をしている時に亡くなられた方が43名ほど出てしまった。

それ以外にも俺がこの村を訪れる前に亡くなった方が25人居るらしく、合計して68人の死者となった。

亡くなった原因は元々、俺が来るまでに手当と言っても無理矢理血を止めたり、消毒などの医療的概念が全く無く既に感染症を引き起こしていて何とかして薬の投与などで症状を抑えたり治そうとしたりしたが完全に手遅れで何ともならなかった人が22人。

あとは大量出血による失血死と失血性ショック死。残りの全員がそうだった。

輸血しても間に合わない程に血を失い、更には傷とは別の箇所、肉で覆われている場所からの出血があつたりして止血が間に合わずに、というものだった。

そもそも出血箇所の特定する事も出来なかった人も居たりと出来なかった事は数多かつた。

なぜそのような状態で今まで生きて居られたのか分からない様な人も居たのでもう

少し頑張ってくれば助けられた。

俺が来る以前に亡くなった方の死因は分からないが恐らく同じようなものだろう。

俺自身は医者ではないからしようがないと言えましょうがそれでも目の前で救えない命があるのは悔しい限りだった。

丸々4日間を治療や手当、それ以外に感染症が蔓延しない様にあちらこちらを消毒して回る事に費やし、負傷者の殆どが男だったので足りない人手を補うためにあちらこちらを走り回った。

亡くなった43名の埋葬や、治療後の感染症などを抑えるための点滴や欠損などの重傷で未だに身体を動かす事が出来ない人への食事の配給、その他諸々。

しかし本当に怪我人の殆どが男なのは不思議でしようがない。

やはり何かしらの戦闘があつたと考えるべきか。

細かい傷などがどう見ても普通の生活を送っていくうえで負うはずの無い物ばかり

だったからだ。

それについては村長さんから聞けるから放っておくとして目下の課題は食事だ。

というのも基本的に呼び出せる食事の中に消化の良い物なんて欠片も無いのだ。だから出来るだけマシな物を選び呼び出しているのだが、基本的にパン食や野草、野菜に肉が殆ど。

米なんて食べたことが無い人しか居なく、提供した時に、

「こいつは本当に食えるのか？」

と警戒されてしまった。

まあそりやそうか。俺だって見た事も無い聞いた事も無い初めての食い物だったら警戒する。そもそも食えるのか分からないのだからええ……？これ何……？となる。

だから俺がその場で食って安全だという事を証明した。

流星に携行食をそのままはいどうぞ、と渡せない。

だってあれ基本的に戦場での食事でしかも消化の事なんてお構いなしの高カロリーだからだ。

そう言う訳で携行食ではなく米単体で呼び出し、おかゆを俺が作った。

塩や少量の胡椒を入れ、味もしつかりとつけてある。

エルフ族はあまり濃い味を食べることが少なく、俺の味付けでは濃いと言われた。

まあ森の中だし塩は取れそうにも無いからな。胡椒なんかの香辛料は森の中で調達出来るから慣れていたが。

調味料というかおかずとして海苔も呼び出したな。海苔は自分で起き上がって食べられる人限定で渡した。

美味しい食事と言うのは食べるだけで活力に繋がるから出来るだけ美味しいものを提供できるように努力をした。

怪我をしていなかったり元気な人はもうガッツリと翼竜肉を食らっていた。

この状況になってからというもの、村を守ることを最優先に考えていたから狩りへ満足に行く事も出来ず肉を食べるのも随分と久しぶりだと言っていた。

さて、村人の今後の話をするとすれば、生活を送る上で少なくとも四肢のいずれかを失ったり視力など何かしらを失っている場合は恐らく今までの生活に戻ることはかなり厳しい。いや、この森での生活は殆ど他者に頼って生きなければならなくなる。

地面に降りれば登る事が出来ず、これから先の人生はこの木の上にある家で一生を過ごさざるを得なくなるのは分かり切っていた。そこら辺は役割分担で出来る事をやればいいが、腕を失っている人は難しいな。

そんな訳で過ごした4日間は村中を駆け回り色々となしていた。

血などで汚れた家や部屋の徹底した清掃と殺菌処理。

汚れたシーツやベットを全て総取り換えし、衛生状況の改善を行った。

今の所容態が急変したりする人は居らず、順調に回復に向かつて行っている。

本職の医者ではないからあれだけ変化を見逃さない様に周りにも手伝って貰っている。

最初は俺自身に対して警戒していたがまあこの期間で随分と打ち解けた。それほどろかかなり親しくなったと思う。村の様子もかなり落ち着き、怪我人も大分体調は良さそうだ。

うん、今も1回見回ってきたが全員順調に快方に向かっている。

この分なら余程の事が無い限り問題は無いだろう。

さて、そしたら村長さんの所に向かうか。色々と聞きたいこともあるし、話をすると約束したのにもう丸々四日が経ってしまったている。

そう言う訳で村長さんの家に向かった。

村長との話 戦闘準備

「村長さん、入りますよ」

「どうぞ」

今日は村長さんの家を訪ねた。

話を聞く為だ。

身体を起こそうとする彼女を手伝い、体が冷えない様に毛布を掛ける。

「今日は、話を聞きに来ました」

「そうですね、それではお話しましょう」

「あ、その前に使いの件、どうですか？行けそうですか？」

「そのことならもう既に選抜は済ませてありますから後は出発するだけです。今回は道中狩りの必要が無い様に多めに干し肉なども持たせますから、休憩以外はすべて移動です。ので順調に行けば10日程で森を抜けられる筈です。町までは合計して11日もあれば到着出来る筈ですよ」

「徒歩にしては随分と早いですね」

「まあ慣れていきますから。あとは道中何も問題が起きない事を祈るだけです」

「有難うございます」

「なにかお渡しする物がありますか？あれば使いに渡しておきますよ」

「そうですね……」

渡す物、か。

俺だと簡単に分かる物の方が良いのだから……

残念ながらそんな物は持ち合わせていないのだ。

しょうがない、無事を伝える手紙と写真を一枚か2枚撮って同封しておこう。あとは空薬莢を1つか2つ入れて置こう。薬莢何てこの世界で所持しているのは俺だけだから簡単に分かる。

「手紙をお願いしても宜しいですか？」

「はい。構いませんよ」

「今日中には書き上げてお渡しします」

「はい、分かりました」

使いの人に渡す物が決まり、そして話を聞く。

「この村のある場所は、元々殆ど魔物や魔獣が居ないので」

「魔物や魔獣が居ない？」

「はい。この辺り一帯は白狼一家の縄張りだったので、3週間程前でしょうか？大地の切れ目に原因は分かりませんが異変が生じました。それによって元々大地の切れ目付近に生息し縄張りとしていた竜種全てがそこから移動し全く別の森の中に縄張りを形成したのです。力関係はこの森に置いて竜種は絶対的強者です。その竜種によって住処を追われた魔物や魔獣が村の方に流れて来て、元々の縄張り関係が完全に変化しました。外側にどんどん押し出されて行くようなかんじです。その流れて来た魔物や魔獣との度重なる縄張り争いによって傷付いた白狼一家の長が、大怪我を負ってしまいました」

「白狼一家はどうなったのですか？」

「基本的に白狼一家は縄張り争いは群れではなく長が行っていました。狩りの時は別なのですが、他の魔獣と渡り合えるほどの技量はまだ子供や孫にはありません。長からも教えられていなかったのでしょうか。数回子供や母親が何とかして縄張りを守ろうとしましたが結果は惨敗。彼女達も傷付き……」

「さらに長が大怪我を負っていますから、白狼一家はこの辺りから追われ、森の外縁部の方に移動しました。それ以降、守ってくれる存在が無くなった村には魔物や魔獣が押し寄せるようになってきて……丁度イチロー様が来る3日前に今までで一番多い数が

襲ってきました。本来同種族同士でしか行動しない魔物や魔獣が滅茶苦茶になった状態でした。中にはこの森でも上位の強さを誇る、魔獣は大蛇や巨大な熊、魔物はグレンデル、キマイラまでもが村を襲いました」

「それは……余りにもおかしすぎますね……」

村長さんが言ったように魔物や魔獣と言うのは絶対に他の種族と行動を共にしない。

もし鉢合わせしたりすれば速攻で殺し合いに発展し、どちらかが死ぬまで続ける。

そんな生き物同士が群れを成して襲い掛かって来る？

それはおかしい。断言できる。

「それで村を守るために全員で立ち向かいました。最初の内は村の柵の辺りで食い止められていたのですが時間が経つにつれて強力な魔物、魔獣の数が増えて行き、悔しなから敵わずに……」

「村長さんの怪我もその時？」

「はい。私は弓と魔法で戦っていました。その時にキマイラの火球が近くに落下してその爆風で私を含めて数名が。立て続けに数回それが起こりました」

そう言う事か……

腕や足を失ってしまった人の原因は殆どがそれだろう。

しかしそこまでしてこの村を襲う理由はなんだ？この村に何かあるのか？

白狼一家は何を守っていたのだろうか？

「魔物や魔獣に何かおかしな感じはしましたか？」

「いえ、それが全く普段の感じと変わらなかつたのです。強いて言うならば、痩せていた、ぐらいでしょようか？」

「痩せていた？」

「はい。どういう訳か痩せていたのです。恐らくは縄張り関係が変わったことよつて新しい縄張りでの狩りが成功しなかつたのか、それとも獲物そのものが居なくなつてしまつたのか……確かに異変が起きてから私達が獲物とする野兎や野鳥の数が激減していますし有り得ない話では無いのです」

ふーむ……

獲物が居なくなつた、か。

野鳥や野兎はこの森の中の力関係で言えば恐らく最下層の捕食される側だ。

それに比べて魔獣や魔物は捕食する側に立っている。

とするとだ。この森でのエルフの立ち位置は？

「……村長さん、一つお聞きしますね」

「はい、なんでしょようか」

「エルフ族の、この森の中での強さはどれぐらひですか？」

「私達の強さ、ですか？」

「はい。もしかするとそれが関係しているのかもしれない」

「そうですね……恐らく魔獣や魔物と比べると弱いと思います。普段白狼一家の縄張りから出て行く事は殆どありませんし、出て行くとしてもあまり離れません。大きく離れる時は森から出ようとする時ぐらいですね」

「魔獣や魔物と遭遇した時は？」

「余程こちらに害が無いのであれば関わりません。出来るだけ避けるようにしています」

あー、何となくだけどここの村が襲われた理由が分かった気がする。

「もし気分を悪くさせたら申し訳ないのですが、1つ仮説を立ててみました」

「仮説ですか。聞かせてください」

「恐らくですがこの村の、エルフ族の森での立ち位置って白狼一家の庇護下に無ければ存在していけなかったのでは？」

「……ええ、その通りです。私達は弓矢や魔法が得意でそれだけで生きて行く事もできます。しかしこの森はそれでも全く敵わない存在が数多い。ですから白狼の縄張りの中に村を築いています」

村長さんは少し考えて頷いた。

やはりな。正直言ってこの森の中で俺達人間やエルフが生き残るのには余りにも厳しすぎる環境だ。気候や食べ物に関して言えば温暖で豊富な植物体系だから探せば幾らでもある。だが敵となる存在が余りにも強すぎる。

ヒエラルキー的には恐らくこの森の中ではエルフ、人間は俺達が野兎や野鳥を狩って食べるのと同じ様に一番下の、それこそ野兎や野鳥などと大して変わりない程度にこの森の魔獣や魔物に見られている。

なのにも関わらずエルフ族はこの森で数百年間もこうして生きて居られるのか。

それは件の白狼一家と言うより白狼の長の影響によるところが大きいとみる。ただ1つ疑問なのが白狼はエルフ達を襲わなかったのか？と言う事だ。

この森の中で縄張りを維持出来るという事はそれ相応に強さを保っているという事。そんな存在が縄張り内に居る森の中で最下層レベルのエルフを狙わないのは変なのだ。

というかおかしい。

普通こんなご馳走というか、簡単に狩れる存在が居るのなら普通そつちから狙う物ではないだろうか？

「そこで質問なのですが白狼はエルフ族や人間を襲わないのですか？」

「はい、襲いません」

「断言出来るのはどうして?」

「元々私達エルフ族が追われてこの森にやってきた時に白狼の一族も一緒だったので。ロンバルティア王国とは反対側の国では白い毛の狼は忌むべき対象ですから。その時に共に逃げて来たのです。その時からの関係です。偶にすれ違ったりすることはありましたが互いに干渉しすぎないよう、遠巻きにするだけです」

何となく理由は分かった。

まあ白狼が自身と同じ種族ではない生物に対して共感するか、とかそういう話は置いておいて、同じような境遇でこの森に逃げて来たエルフ族に対して何故か同情的というか、その当時に何があったのかは分からないがもしかすると仲間意識を持って居るのかもしれない。

「白狼の強さは?」

「うーん……直接見た事などは無いので分かりませんが竜種に近いぐらいでしょうか? 翼竜となら1対1では負けることは無いと思います。飛竜種だと同じくらいか少し劣る程度ですね。土竜は裂け目付近から離れることは無いので比べられません」

そんな存在が大怪我をするほどにこの森に激しい変化があったという事だ。

これは多分、ゴブリンの大軍の件もこの変化が大きく関係していると思われる。

「そうなる」と森の中でも殆ど頂点に位置するぐらいの魔物の庇護下にあったという事に

なります」

「そう言う事ですね」

「その庇護下から抜けてしまった事でこの村が襲われたのだと思います。基本的に捕食者は弱い存在から狙っていくものですから、これに、エルフ族は当て嵌まつてしまった。周りにいる強い魔物や魔獣を襲うよりもこの村を襲った方が自身が怪我をする事無く遥かに安全に獲物を狩れます。元々魔獣達は白狼がいなければ貴女方がこの森で生きていけない事を知っていたのだと思います。森の中で擦れ違ったりした時に。そういう事に敏感ですから、野生の生き物や魔獣、魔物と言うのは」

「そう言う事ですか……納得しました。何にせよ今の状況が続くという事ですね……」
「そうですね……」

力無く、顔を俯かせる。

それはそうだ。ただでさえ今回これだけの被害を被つて尚且つ死者まで出し何とか生き残つたと思つたらそれがまだ続くと言うのだから。

今の状況が続くと、断言出来るだろう。

言い方は悪いが、こんなにもまだ餌となるものが残っているのだから襲わないと言う

理由は無い。もし多少の知恵があるのならば手傷を負わせた獲物とそれを守る獲物がまだ沢山いると考えるだろう。そうなれば次に行われるのは狩りが終わった後に獲物の取り合いだな。それも命懸けの取り合いだ。

その時点じゃもう生き残りは一人としていないだろうな。恐らく肉片になってその取り合いだ。

木の上に逃げると言う選択肢は一時的な物にしかならない。

どれだけ高い木の上に逃げててもそこに居るのだ、と分かっているのならばそこまで折って来るに決まっている。どれだけの大馬鹿者でも木に登れないのならば木を倒す、ぐらいの知恵は回るだろうからな。

それに下からだけじゃない。上からの脅威も考えれば木の上に逃げたって辿る運命は同じだろう。

正直に言ってしまうえば俺ではどうしようもない。

この森の中では火力のある武器は使えない。村長さんの言った魔獣や魔物が襲って来るとするのならはこの森で展開する事の出来る武器では歯が立たないだろう。

火力の大きな自走砲ならば一帯ごと吹き飛ばせる。

だがそんなものこんな狭い森の中に出せる筈も無く。M2は恐らく火力不足。最低でも翼竜を倒した様に疾風に搭載されている20mmクラスの弾丸でなければ致命傷を与えるのは難しい、と言わざるを得ない。

確かドイツの戦闘機なんかには搭載されているMG151機関砲は他の国の20mmクラスに比べると随分と高火力だった筈だ。何だったか、確かそう……薄殻榴弾という炸薬量が他の榴弾よりも多い弾丸を使用出来る。

ただ残念ながらMG151機関砲はそれ単体で呼び出す事が出来ない。というのもこいつは航空機に搭載するための機関砲だから陸上運用型が呼び出せる兵器の一覧に無かった。

ただ別の20mm機関砲が一応兵器としての物ならばMG151ではないものがある。

同じくドイツ軍の2cmFlakvierling38という対空機関砲だ。

これは4連装の物で20mm弾を撃ち出すと言う何とも凶悪な兵器だ。

多分人間に向けて撃つたらミンチになると思う。しかし運用に問題があり対空機関砲という空に向けて撃つ性質上、地面にいる敵に対してはあまり得意そうではないという事だ。しかも相応に重量が重く容易に陣地転換が出来ない、森だから視界が悪く木の影に隠れられると木の直径もあって簡単に避けられると、こんなにもこの土地で運用に

向いていないのだから使う事が出来そうにも無い。

個人で携帯出来る武器は威力不足で効果が無い。

威力が高い武器はこの森での扱いが難しく効果が殆ど期待出来ない。

大口径の対戦車砲などはそもそも展開するスペースが無いから出せない。

そう言う訳でこの村を守る事がどれだけ難しいか分かって頂けただろう。

「村長さん、俺は出来るだけこの村を助けたいと思っています」

「これ以上、ご迷惑をお掛けする訳には行きません……それにこの村がまた襲われると分かっているのですから早くお帰りになった方が良いでしょう」

村長さんは自分達の心配よりも俺の心配をして町へ帰ることを薦めて来た。

普通ならここで助けてくれと言ってくるものだと思うのだが、自分を差し置いて俺の心配をしてきているのだ。

しかしそれが出来ない。

とうかやらない。そもそも俺がこのオール大森林に来たのは調査が目的なのだ。

そして以前考えたように恐らく裂け目の異変とこの森の異変、村への襲撃、俺が戦つ

たゴブリン達の件は関連性があると思うのだ。

でなければ元々オール大森林に生息している魔物や魔獣が態々オール大森林の外に出て来る筈が無いのだ。知性がある変異種と言えどもそんな思い付きの様に、突発的に森を出てくるか？

そう言う訳で俺は関連性があると見ている。

まあ恐らくだがその関連性があるのかどうかを調べるとなると裂け目の調査もしなければならぬので予定している3カ月という調査期間じゃ足りないだろうな。

そう言う訳で帰るわけには行かない。

「いえ、それがそうも行かないんです。私の目的はこの森の調査です」

「はい、それは以前お聞きしましたがそれに何の関係が？」

「そもそも、何故調査する事になったのか、理由はご存知でしょうか？」

「いえ、分かりません」

そりゃ知らないだろう。

だって俺は調査理由を教えていないし。

「裂け目の異変から、この森に異変が起きた頃と同時期に、私達も大きな異変に襲われたのです。それはゴブリンの変異種が率いる大軍勢がリーヴオリの町に向かって攻めて

きました」

「はあ……それと何の関係が？」

「そのゴブリンの軍勢が現れたのが、このオール大森林だからです」

「この森から？……まさか」

「そう、そのまさかです。私は裂け目の異変からこの森の異変、そしてゴブリンの変異種が突然森の中から現れたのには関連性があると考えています」

そう言うのと村長さんは考え込んだ。

まあそんないきなり言われても困るだろう。

「それならば尚更早くここから出て行った方が宜しいと思います。ここに居たら調査も出来ないでしょうし何より危険です」

「いえ、先程も言いましたが私は帰りません」

「何故ですか？」

俺が帰らない理由はもう一つ。

ここまで首を突っ込んだのだからもう今更見捨てて帰る、何てことは出来ない。もしそうしたとしても後々思いつ切り後悔する事になるだろう。

「それに皆さんの事を放って自分だけ逃げる、なんて事はしたくないんです。したとしても私は後悔する事になる」

「……………」

「私は、もしかすると皆さんを助ける事が出来るかもしれないんです。どうかこの村を守るお手伝いをさせて頂けませんか？」

俺がそう言うのと村長さんは再び俯いてしまった。

まあ部外者の俺の手を借りると言うのもそれなりに考えてからでないかと決断は下せないのだろう。俺にはそれを遮る事は出来ないし、する気も無い。

「イチロー様、どうか、村をお助け下さい……お返しできるものは何もありませんがそれでも、と言うのならばどうか、村を助けてください……」

俺に向かって村長さんは頭を深々と下げた。

勿論俺の答えは決まっている。

「はい。私はこの村を守ると約束しましょう」

「ありがとうございます……！」

村長さんは泣きながら頭を未だに下げて来る。

いやいや幾ら何でも頭を下げ過ぎだろう。

それから10分程頭を下げる村長さんを宥める事になった。

「村長さん、私の事を様付けで呼ばずに、イチローと呼び捨ててくださいって構いませんよ」

「いえ、これだけ村の為に尽くして下さった方を呼び捨てするわけには行きません。それにそう言う事ならばイチロー様こそもつと砕けたように話してください」

「そうですか？それなら普段通りの口調にしますが、出来れば俺に対しても畏まらずに接してくれると有難いです。正直、むず痒くてしょうがないんです」

「……分かりました」

喋り方について少々問答があったが結局お互いに砕けた口調で話そうという事になった。

「そう言えば、私は自己紹介していませんでしたね。私はエリカと申します。どうぞよろしくお願いします」

「エリカさん、どうぞよろしく」

そう言えば自己紹介していなかったな、と村長さんが自己紹介してくれた。エリカさんというそうだが、何故姓が無いのだろうか？

「あの、1つ聞いても良い？」

「どうぞ？」

「エルフって俺達に伝わる話だとんでもなく長寿だったり不老不死だとか言われているんですがその辺ってどうなっているんだろう、と思って」

「ああ、そのことですか。恐らくですが勘違いですね。私達エルフは見た目が古い始めるのが遅いのです。大体見た目が古い始めるのが60歳くらいからなんですよ。ですから何十年も同じ様な見た目だから勘違いしてしまう人が多数いるでしょう。最高寿命は100歳くらいでしょうか」

「そうだったのか……見た目が変わらないか……」

「はい。私は26歳ですよ」

エルフ族の不老不死という伝承とか何かを確かめる事が出来た。

でもエリカさんはまだ26歳なのか。見た目もそれくらいだから延齢に関しては納

得だが、26歳で村長をやっている事に驚きだ。

あれだろうか、代々世襲的に村長を継いでいるのだろうか？

「にしても何故その若さで村長を？」

「私の家は代々村長をやっているんです。先代の父が早くに亡くなったので3年前に村長に」

「へえ……あれですか？男女関係無く村長に成れるという事ですか？」

「その通りです。基本的に第一子ですが、私は長女ですが3人目なんです」

「上にお兄さんが？」

「はい。長男は行商をやっています、リーヴオリの町にも偶に訪れて居た筈です。次男は向いていないから、と言って村を出ました。行商をしている兄から聞いた話なのですが王国軍に所属しているらしいです。何というか、兄達はかなり変わっているの……人族の方達からしても随分と変わり者だと思えますよ」

エルフ達の不老不死という噂と、何故その若さで村長をやっているのか、という理由まで知る事が出来た。

しかしエリカさんのお兄さん2人がまさかの変わり者の人達だとは……

まあ一定数いるらしいし、人間にも変人はいるからあれだけだ。

その日1日、エリカさんと話し続けた。

そしてその後、使いの人に持って行って貰う手紙と写真、葉莢を1発封筒に入れ、封筒の表部分に俺の名前とエルフранトさん宛、という事を書いて渡した。

使いの人は6人で構成されていて俺が手紙を渡して直ぐに出発した。

エリカさんの言う事が本当ならば凡そ10日もあればリーヴオリの町に居るエルフранトさんに俺の無事が伝えられるだろう。

本当に心配を掛けてしまっているだろうから帰ったらしっかりと謝らないと。

まあ暫くは返れそうにない。早くても1か月は先になつてしまふだろうか。

それと今更だが俺が寝泊まりしているのはエリカさんの家だ。

といつても4日間は仮眠程度に睡眠をとっただけでそれ以外は1日中村の中を走り回っていたから殆ど居なかつた。

別に空いている家であればどこでも構わないと言つたのだがエリカさんが自分達のことをこれだけ助けて貰つた人にそんな事出来ないと頑なに言つて聞かず、村の家の中

で一番の大きさを持つエリカさんの家に泊めてもらう事になった。

多少血が床に垂れていたりはしたがしつかりと清掃、消毒、殺菌を行ったので問題は無い。染みが付いている程度だ。

もし気になるのならその部分だけ取り換えてしまえば良いだけだし、ベッドのシーツに殆どが付着していたのでそのシーツを片付けるだけで十分だった。

そして今日は、怪我をしていない元気な人達を集めた。

それにもちゃんとした理由がある。理由も無しに人を集めたつてしようがないからな。

理由と言うのはこの村を守ると言ったが流石に1人では無理だ。

当然村人にも手伝って貰うのだが、俺は弓や魔法だけで到底立ち向かえるとは思っていない。俺1人が銃を使えてもしょうがない。

「皆さん、集まって頂き有難うございます」

「兄ちゃん、態々全員集めて一体何の用だ？」

「皆さんは、村を守りたいですか？」

「なんだいきなり？ イチロー、何故そんな事を聞く？」

「村長さんと相談してこの村を守るお手伝いをさせて頂く事になりました」

「兄ちゃんが？」

「そうです。そこでお聞きしたい事があります」

「聞きたい事？」

「皆さんは、この村を守りたいですか？」

「そりや勿論守りたいに決まってるだろうが。ここは俺達の生まれ故郷で育った場所なんだ」

「それは全員の、この村の総意に間違いありませんか？」

「「「「「ああ」」」」」

「それなら良かった。それじゃあ皆で村を守りましょうか」

という訳でエルフの皆さんには思いっ切り銃の扱いを学んでもらう事にした。

多分実戦は近いうちに来るだろうから3日間程、1日中練習していればだいぶ慣れる。

呼び出したのは初めて呼び出す事になるグロスフスMG42汎用機関銃。それとM2重機関銃だ。

まあM2に関してはもう何も言う事は無いだろうがMG42に関しては説明をしななければならぬ。

種別	汎用機関銃
口径	7.92mm
銃身長	533mm
使用弾薬	7.92×57モーゼル弾
装弾数	ベルト給弾方式
全長	1220mm
重量	11.6kg
発射速度	1200〜1500発／m
有効射程	1000m

大まかな性能を記したが特筆すべきはこのMG42のその発射速度だろうか。

1200〜1500発/mというM2の発射速度485〜635発/mの凡そ3倍〜4倍に上る。M2も種類によっては発射速度がMG42に匹敵するものもあるがそれは扱わないので割愛する。

このMG42はドイツ軍で使用されていた汎用機関銃で使用弾は7.92×57mmモーゼル弾という物で、ベルト給弾式とドラムマガジン式の2種類に分かれている。今回はベルト給弾式を採用している。

生産数に関して言えばM2には劣るものの、生産数は40万丁という数を誇る。

そして高い発射速度は特徴でもあり弱点でもある。

というのも余りにも発射速度が速すぎて銃身の過熱が激しいのだ。

だから基本的に1秒という短い短連射で射撃を行うのだが、それでも最大25発の弾丸を発射できる。

当然短連射でも銃身は過熱し、摩耗してしまうのだが、その弱点の発射速度をそのままにする訳も無く、それを補うために銃身交換を簡単に行えるようにしてあるのだ。

銃身カバー右後端のハッチを開く一挙動だけで簡単に銃身を抜き、新しい銃身に交換する事が出来た。

戦闘中は予備銃身を脇に置いて時々交換しながら冷却して使用する。

今回呼び出したのは後期型のもので銃身の摩耗対策に硬質クロムメッキを施してある

もので摩擦はそれなりに抑えられているだろう。

発射速度が速すぎて命中精度は多少悪いがそれも発射速度で補える。

他にもMG34という物やMG3という、MG42を元にしたものもあつたが断念した。

というのもMG34はこの森で扱うには向いていないのだ。汚れに過敏で直ぐに排莖不良を起こすらしく、この森の中で使うにはその弱点は余りにも大きすぎる。

そしてMG3の使用を断念したのは使用弾が7.62mm弾という物で7.92mm弾とは全く大きさも威力も違う。その点で見ればMG42の方が威力が高い。

そう言う訳でMG3は呼び出さなかつた。

それぞれの運用方法としてはM2が火力担当、MG42が弾幕担当という感じでそれぞれ分けてある。正直な話、この2種の銃に魔物や魔獣直接的に殺すことは期待してない。弾幕を張って敵の足止めさえ出来れば構わないのだ。

多分だが小さい魔物や魔獣なら一撃とはいかないものの、M2とMG42で十分殺せるだろう。

しかしながらデカブツ、村長さんの言っていた魔物のキマイラ、グレンデル、魔獣の大蛇や巨大な熊となるとかなり討伐に苦勞する。

まあキマイラやグレンデルと言った魔物に関しては体長が大体20m近くにもなる。大蛇や巨大熊も地球基準で想像するような大きさでは無い。

大蛇に至っては全長が小さいもので15mにもなる。太さは2mにもなりその硬さは発達した筋肉などによって鋼鉄と同じぐらい。

巨大熊も同じような物で立った時の高さが5〜6mという。

この森がどうなのか知らないが少なくともこれ以上、と見積もっておいた方が良い。

多分この森のマップピングをしていた時に見た大きな動く影なんかも魔物だろうと推測できる。そんな奴相手に12.7mm弾や7.92mm弾で歯が立つか？

答えは立つ訳が無い。

そもそもこのクラスの魔物、魔獣ともなるとこの国で言えば王国の精鋭部隊である5個騎士団の内の騎士団を丸々1つ投入し、緊急の討伐隊を組む程に強力で強大な存在だ。1個騎士団の兵力は戦闘を行う事が専門の戦闘部隊だけで3000人。兵站などの補給を担当している者を含めると5000人になる。

キマイラもグレンデルもどいつもこいつも無駄に硬くて厄介な相手ばかりだ。

傷1つを与える為だけで一苦勞。接近すれば剛腕で叩き潰され、離れていても火を吐

いて来る訳だから文字通り決死の覚悟で挑む。

この王国の騎士団や兵士がそんな奴ら相手に戦えるのは高い練度と良質な装備が多数揃っているからに他ならない。しかしそれでも多くの犠牲を払っての討伐だ。

そんな相手に一度とは言え凌ぎ切ったエルフ族はとんでもない連中だとしか言えない。

装備も王国軍が使用している武器や防具なんかよりもずっと貧弱で頼りない物を使っているのにも関わらず。

しかし何故呼び出したのかというのは先程も書いた通り足止めや目くらましになら十分使えるからだ。

さて、ここで俺の呼び出せる武器をエルフ達に貸し与えて戦う為の術を教えたらどうなるか？

答えは簡単、鬼に金棒という訳だ。

元々は弓が得意な彼らだ。射撃も同じ様にこなしてくれるだろう。という訳でこの2つの武器の扱い方を教える。

M2とMG42で仕留められないと予想されるのにこの2つを呼び出したのか。先程も言った通りだが弾幕を張って足止めさえ出来れば良いのだ。

何故かと言うと、流石に小口径では仕留められると思っていけないので中口径クラスで探してみたのだが、20mmクラスではやはりどうにもならなさそうだと、という結論に至った。そもそも想定している硬さは戦車クラスだからどうやっても弾かれてしまうのがオチなのだ。

そう言う訳でどうかして一撃で倒せそう兵器となると対戦車砲だ。

他にも個人携帯用の物もあるにはあったが使い捨てとかそんな感じだったから止めた。

貫徹力に関して言えば対戦車砲に軍配が上がるし、個人で簡単に使えるとは言っても相手の硬さが未だ未知数なので出来るだけ高い貫徹力の方を選ぶことにした。

2. 8cm、3. 7cmなどの口径が小さなものから12. 8cmという対空砲や艦船に載せられるレベルのデカイやつまで様々だ。

しかしながら2. 8cm、3. 7cmでは貫徹力と火力不足。かと言って12. 8cmなんて逆に過剰だ。

結構選ぶのに苦労した。

7. 5cmなど良さそうだと、思っただがこいつ回転砲塔ではなく自走榴弾砲の様

に前方方向にしか撃てないタイプで、そんな一々戦っている時に砲をあっちこっちに引つ張り回すなんて効率が悪すぎる。

しかも木と木の間に設置する事を考えると方向転換などが容易に行えなければいけない。

そこで一度、しっかりとこの村の木と木の間をしっかりと調べた。

もし使う事になっても移動や方向転換が楽になる様に、位置を選ばなければならないからだ。

するとぱっと見だけでも村の中では森よりも木と木の間隔が随分と広いのだ。

平均して10mはあり、一番広い所だと村の中心にある広場が25mもあった。

これについては村長さんから聞いたが狭いと生活する上で不便だから村の中だけは此処に来た時に木々を切り倒して間隔を広げたのだそう。

そう言う訳で口径の小さいものではなくより大きな口径を持つ砲の使用が可能になった。しかし12.8cm対戦車砲は幾ら何でもデカすぎる。

そこで選択した対戦車砲は8.8cm Pak 43対戦車砲。

8.8cm Pak 43対戦車砲はドイツの物だが台座が約5m、砲身を含めた最大全長は6.3m程。

砲身長 6.28m

重量(移動時) 5400kg

(設置時) 3700kg

口径 8.8cm

元々、8.8cm Pak 43 対戦車砲は8.8cm Flak 18 / 36 / 37 対空砲を改良したものだ。名前にある通り元々対空砲だったのだがそれを転用したのが対戦車用の8.8cm Pak 43 対戦車砲である。

8.8cm Flak 18 / 36 / 37 対空砲は対空、対戦車のどちらも出来たのだが対戦車専用として開発されたのが今回選んだ8.8cm Pak 43 対戦車砲である。因みにだが Flak だの Pak だの書いてあるがそれは略語だ。

Flak と言うのはドイツ語で「Flugabwehrkanone (対航空機砲)」の略語。

そして Pak と言うのは「Panzerabwehrkanone (対戦車砲)」の略語。

まあこれを知っていて何になるのか、と言われても多分何にもならないとしか言えないな。

さて武器の説明に戻ろう。

8. 8cm Pak 43 対戦車砲は十字型砲架という、地面に設置するタイプの砲架を装備している。こいつは旋回砲塔なので全方位に対しての射撃が可能だが、対空射撃は出来ない。

貫徹力は被帽付徹榴弾を使用し30。に傾斜した装甲板に対しては次の通り。

203mm (100m)

185mm (500m)

165mm (1000m)

148mm (1500m)

132mm (2000m)

タングステン芯を使用した砲弾で30。に傾斜した装甲板に対しては、

237mm (100m)

217mm (500m)

193mm (1000m)

171mm (1500m)

153mm (2000m)

という値だ。

森の中なので2000mどころか、500m、100mという距離ですら射撃機会が

無いかもしれないが、やはり近距離での貫徹力は驚くものだ。

まあ流石にこれだけの貫通力があれば殆どの魔獣や魔物を一撃で仕留められると思うし土竜でも倒せると思うのだが……そこら辺は実際に戦って見てからでないと分からないとしか言えないな。

そう言う訳で直接的に仕留める役割を担うのは対戦車砲が務める。

M2とMG42で弾幕を張って足止めをしている間に8・8cm砲でデカブツを仕留める。もしその討伐が終わってしまったら榴弾を撃てば小物も纏めて吹き飛ばせる。

村の中で一番全方位を良く見渡せる中心の広場に設置をする。この広場は直径20mもあり、十分な広さを誇る。

その設置に関しても1つ工夫をする。

設置する場所を深さ100cm、直径12mの穴を掘り、そしてその掘り出した土は土嚢袋に入れて周りに積んでいく。

しかし砲自身の安定性を高める為に十字砲架の端にあるY字型の穴4つに杭をしつかりと打ち込んでいく。こうする事で動かない様にするのだ。

これで8・8cm砲に関しての準備は完了だ。

本来は4門で一個中隊の編成なのだが今回ばかりは4門も設置はしない。

運用人員に関して言えば本来は牽引用のハーフトラックの運転手なども入れると12人だ。だが今回はハーフトラックの運転手は必要ないので10名。

班長1人

砲手1人

砲操作係2人

装填手2人

砲弾運搬係3人

伝令1人

通信係1人

と言うようになっていた。

本来ならば通信係が測距離係を同時に担うのだが今回は想定される敵との距離はかなり近く、態々そんな測距離をする必要は無いと判断した。

班長は俺が務めるからその分他に回って貰う。

通信に関しては砲声と銃声が入り混じり、更に走って伝令をするのにはあの丘とは違い範囲が広すぎるのだ。だから今回ばかりは有線通信機を導入した。

というのも今回、呼び出したM2とMG42はそれぞれ25挺ずつ呼び出したのだ。合計で50挺。

それぞれ操作の為に必要なのは1挺につき2人だ。それに通信手を1人付ける。そうすると全部で150人になる訳だが、村人の数は元々ピツタリ300人だ。

そこから亡くなった人が43人。命は助かったが腕や足を失った人が36人。

身体が健全で元気に動き回れる人達は全員で222人。そこから8.8cm砲の1人を除けば210人になる。この210人から150人を引くと60人。

この60人で50もある銃座に伝令と弾薬運搬の2つの仕事をさせるのは余りにも手に余ると判断したからだ。

あの丘での戦いの時もそうだったが伝令と弾薬運搬の2つを行っていたノーマンさん達は本当に大変だったと記憶しているから、その経験を生かして今回は有線通信機の使用に踏み切ったのだ。

そうすれば60人は弾薬運搬に専念する事が出来る。

しかしこちら側で銃座の通信を受ける為の人間も必要だから10人を通信係に。

50人の弾薬運搬係という事になる。

各銃座は射手、装填手、通信手、弾薬運搬係の計4人態勢となる。

それぞれ北から西を第1区画、西から南を第2区画、南から東を第3区画、東から北

を第4区画と言うように担当区と担当区の呼称を決め、それぞれM2とMG42を5挺ずつ配置し、更に残り10挺を防御が難しいと思われる区に優先的に配置していく。

優先配置したのは第2区画と第3区画。こちらには残りの10挺の内の3挺ずつを配置。

残りの4挺は第1区画と第4区画に2挺ずつを配置。

各区画のM2とMG42の割合は下記の通りだ。

第1区画

銃座 × 12箇所

M2 × 6挺

MG42 × 6挺

第2区画

銃座 × 13箇所

M2 × 6挺

MG42 × 7挺

第3区画

銃座 × 13箇所

M 2 × 7 挺

M G 4 2 × 6 挺

第4区画

銃座 × 1 2 箇所

M 2 × 6

M G 4 2 × 6

この割合で設置することにした。

役割と区画、配置を分担し、区画内での設置箇所を決め、次に行ったのは銃座と交通壕を掘る事だった。今回想定されるのはキマイラなどの火球などの攻撃を仕掛けてくるということだ。

と言つても銃座はトーチカのような物だが。

しかしながらコンクリートで作られている訳では無く、銃眼を開けた鋼鉄板で囲っただけの簡単な物だ。

俺で言いかえれば砲弾銃弾が飛び交う何の遮蔽物もない場所を移動するようなものだ。まあここは森の中だから遮蔽物はあるにはあるのだが銃を全て隠せるほどでは無

いし何より全方位からの攻撃を想定しているのだから背中ががら空きの状態なんて良
い的にしかならない。だから移動中に確実に身を隠せる壕を掘ることにしたのだ。

8. 8cm砲の砲座からそれぞれの区画に向かって伸びるように構築していく。

交通壕の深さは1m掘り下げて、土を土嚢袋の中に入れて淵の部分に積み上げてい
く。こうする事で深さを掘り下げずに高さを確保できる。銃座の所は1.2m掘り下
げて更にその周りを土嚢で囲った。

交通壕の深さは土嚢と併せて1.6mになった。

土嚢は2列で4段重ねてある。

エルフ族の男の平均身長は大体170cmから175cmと言った所だ。

高くても1.8mだから交通壕なら頭の大部分が少し出るぐらいだ。

女性是完全に隠れる事が出来る。

その構築を行う上で重要なのは銃座に向かって一直線に掘らない事だ。

真つ直ぐに掘ってしまおうと火球なんか飛んできた場合に交通壕内に直撃する恐れ
があるがワザと曲がりくねったように掘ると直撃の危険性を大きく減らせるのだ。

そう言う訳で掘り進めた壕は、途中で弾薬集積所を各区画に一か所ずつ設置した。

深さは2 mで大きさは6 mの正方形。流石に野曝しにするわけには行かないから上の部分を鉄板で覆った。

厚さは3 c mの鋼鉄製の鉄板だから早々ぶち抜かれる心配は無い筈だ。

交通壕と銃座壕構築で丸々1日使い、2日目から早速訓練の開始だ。

ああ、そう言えばエルフの皆は随分と協力的というか、物凄く熱心だ。

やはり自身の生まれ故郷であるこの村を守る為だからだろうか？

全員が全員、全てにおいて全力だ。

先ずは全員にM2とMG42の操作方法を身体に徹底的に叩き込んでもらい、全員が最低限扱えるようにした。

それからは射手と装填手は只管早く装填、射撃、銃身交換が行えるように反復練習。

弾薬運搬係と通信手はそれぞれ弾薬を運ぶ速さの向上と通信手は通信機器の取り扱いを身体に叩き込んで貰った。

ああ、それと各銃座の名前を決めた。

と言っても第1区画の第1銃座ならば1—1、第2銃座ならば1—2言うように簡単なものだが。

魔獣や魔物の襲撃が何時来るのか分からないから襲撃が行われるその時までひたすら同じことを反復練習し続ける。射手と装填手は装填から射撃、弾切れからの装填時間を出来る限り短くする事と、銃身交換時間の短縮をする。

時間の短縮だけでなく、M2とMG42の操作などに慣れることも目的だ。

丸々1日操作や装填、銃身交換や射撃訓練を行ったお陰かかなり精度が上がった。

銃身交換に至っては教えても居ないのにそれぞれの銃座が銃身交換中の銃座の力バーをするという事すら出来るようになった。

MG42の銃身交換時間は4秒程で出来るし、M2も平均15秒で交換出来る。

詰まりが起きた時の対処方法などもしっかりと行えるようにしてある。

不発は無いがどうしても弾詰まりは起こってしまう現象だ。

射撃訓練は流石にこの森の中で最初から実弾を使うわけには行かない。

空砲弾を使つての訓練だ。それでも十分音はデカく、最初の内はかなり怯えていたり驚いたりしていたが3時間もすれば慣れたのか平然としていた。

弾薬運搬係は各区画にある弾薬集積所に呼び出した空砲弾を取りに来て、自身の銃座に走って持って行く、という事をひたすらやって貰った。早く！もつと早く！もつともつと早く！と言うようにひたすら尻を叩きながら走って貰った。

と言つても全員狩りなどで走り慣れているのかそこまで疲れた様子は無かった。

なのでもつと速く走って貰った。

通信手は最初の1日で操作には慣れたのか扱えるようになっていた。

そこから本部の通信手はそれぞれ多数の通信に対応出来るようにする事と、銃座の通信手は時間短縮の為に簡潔に用件を伝える為の訓練を行った。

そして俺を含む8・8cm対戦車砲も例に漏れず。

砲塔旋回、照準、昇降ハンドル（上下角度の調整）、装填、射撃という一連の動作の繰り返しだ。

砲弾の運搬は装填手に渡るまでバケツリレーという事なのでそのひたすら練習。

班長である俺は目標の指示、上下左右の角度調整指示、装填、射撃命令とかなり仕事が多い。

因みにだがエリカさんは通信手として本部に、ネルは第1区画の8番銃座の配置となった。

本来ならば不発弾も有り得るのだが、呼び出す砲弾は嬉しい事に不発弾が存在しない。だから砲弾が不発で発射されない時の処置は気にする事が無く、そこは楽だった。射撃に関しては実際に空砲弾を撃ち、爆音や衝撃に慣れて貰う。

本来エルフという種族は森を大切にされるらしいのだが、村が無くなって死んでしまえば大切にすることもクソも無いと言って訓練に参加していた。ある意味、かなりのリアリストという事だろうか。

一連の訓練に丸々5日を使い、ほぼ一日中自分の担当する役割の訓練に没頭し続けたお陰か、かなり熟練する事が出来た。

こうして魔獣、魔物の迎撃準備は整った。

あとは、戦って勝つだけだ。

防衛戦 エルフ族の村

丸々5日間掛けて訓練をしてから更に6日間、魔物や魔獣の襲撃は無く訓練に費やした。

その間1日2回、一切なんの告知も無しにいきなり戦闘準備命令を出して自身の担当に素早く配置に付く為の訓練も実施した。

まあやはりと言うか最初の内はかなり慌てて転んだり、混乱して自分の配置を忘れて全く違う所に行ってしまったり全く必要の無い銃座に弾薬が運び込まれたりしてそれはもう酷い有様だった。

しつかりと対応出来る者も居るには居たが全体的に見てやはり手間取っている事が良く見て取れた。

一切の説明無しにしたから多少は反感を買ったがこれが本当の襲撃なら今頃酷い有様になって居ただろうという事を説明すると、全員が落ち込んでそれから気は抜いて

いるがそれでも直ぐに反応出来る様にはなつて居た。

そう言う訳で練度はこの11日間で比べるまでも無い程に上昇した。

空砲程度では今更驚かなくなつたし、何より元々弓が得意と言う事もあつてか射撃に關してはとんでもなく命中率が高い。

的を用意して撃たせてみるとMG42なんて射撃速度がとんでもなく早く命中率は良くないのだがそれでも平然と的にブチ当てていく辺りそれがどれほど凄い事か分かつて貰えるだろうか？

しかも固定目標だけでは無く移動目標にしてもそんな感じなのだから。

最初の内は矢とは大きさや重さ、飛翔速度の違いに手間取つていたがそれも1日もすれば完璧に把握していた。弓と銃では色々と違うから一概には言えないのだがそれもまだ2週間も経つていないのにこれほどとは、狙撃銃を持たせたらとんでもない事になりそうだ。百発百中も当たり前の様にこなしていくだろう。

8.8cm砲にしてもまだ実弾射撃は行つていないがそれでも照準は目標のド真ん中を狙っているし、装填は手動なのだがそれなのにも関わらず装填速度は速い。まあそんなに全力でやっても砲身が過熱してしまうしその冷却の關係もあるから多少は落としてゐる。万が一の場合には全力装填して貰うが。

そう言う訳で今の所は出来るだけ早く、配置について弾薬の運搬なども今よりもスムーズに行えるよう、訓練を行うだけだ。

銃座には天井もあるし予め、MG42は250発の弾薬ベルトを、M2は110発の弾薬ベルトが入っている弾薬箱を10箱程づつ置いてあるがもし大挙して押し寄せられたら直ぐにでも無くなってしまうだろう。

そう言う訳で問題は無く進んでいたように思われたのだが雨が降って来たのだ。そう、只雨が降ってきているのならば問題無いのだが壕の中はそうでは無かった。他の場所よりも低い位置に底があるからほとんど水が溜まってしまい、排水処置もしていなかったから溜まって行ってしまう始末。

これぐらいの事なら一番最初に想定出来た事だったのだが完全に

丸々2日間振り続けた雨によって殆どプールの様になってしまい、先ずその排水能力に問題がある事が分かった。そう言う訳で排水用の溝を設置したがそもそも地面は銃座や壕を除いてすべて真つ平とはいかないまでも平らな物だから外に排出しても全く意味が無く、何なら土囊の隙間から少しづつ漏れだして逆戻りになってしまおうと言う始末だった。

幸いなのは銃座を地面を盛り上げてその部分に構築していたから銃座自体が水に浸かり、弾薬や銃自体が汚れたりすることが無かった。それでも壕よりはマシで排水処置をまともにしていないから壕の方に水が流れては行くが地面は完全にぬかるんでしまい、壕が満水になってしまっただけからは銃座も水に浸かってしまい、まとも移動などが出来ると言う様相では無かった。

しかし更に問題なのは壕だった。

銃座からと、雨、地面に降り注いだ雨が流れ込み、完全に水に浸かってしまい移動なんて出来る様な物ではない。無駄に体力を使ってしまうし何より弾薬を濡らしてしまう事は避けたいし、衛生的にも良くないから何とかしたい。目下は排水用のポンプを呼び出して水を村の外に排水したがこれだけではただ問題の先送りにしかならない。

しかし幾ら考えても具体的な方法は見つからなかった。

この壕を構築した場所が他よりも高い場所にあったのなら排水溝を作って低い方に向けて流せばいいだけの話だったのだがそうではない。

先程も行ったが高低差は無く、それが出来ないのだからしょうがない。

雨が降るたびに態々排水ポンプで時間をかけて排出するしかないようだ。一応、また雨が降って来た時に問題が無い様に底を更に50cm掘り下げて高さ50cmの簀の

子を全体に設置。銃座に関しても同じ様な処置を施した。そうする事で直接的に水に弾薬、銃、そして皆が濡れる事は無くなった。それでも限定的だし、水が簀の子を超えてしまえばアウトなのだがそうならない様に前以て排水ポンプで解決してしまえば良い。

そう言う訳で更に2日間、射撃訓練などは行わずに一連の壕の構築、改良を行った。

あと変えた事と言えば8.8cm砲の砲座と銃座の地面と壁をコンクリート製にした程度だ。

もういつその事、銃座から壕に至るまで全てコンクリートで覆ってしまおうかとも考えたが流星にそれ程の余裕は無さそうだったので却下となった。

それに銃座をコンクリートでトーチカなんて作ってしまうと砲撃の邪魔になってしまふから諦めた。それに流星にそれ程の時間は無さそうだしな。

そしてそのような処置を施してから更に3日。

合計して18日の期間が過ぎた。俺が村に来てからは22日が経ち、この森の調査予定期間の3か月の内の凡そ3分の1が過ぎ去ってしまった。

この村の事を最優先にして行動していたから森の調査は全くと言っていい程進んでいない。まあそれも俺の報酬金が減る程度で済むから命が失われる事に比べれば全く痛くも痒くもない。

3日間もあるんだったらコンクリートトーチカを作ってしまったえばよかったかもしれない。

高さを低めにしておけば砲撃照準の妨げにはならなかっただろう。

しかしこれ程までに時間が掛かっている原因は思ったよりも魔獣や魔物の襲撃が無
い事が原因だが、訓練に費やせる日数が増えたと考えると±0にはなったのかもしれない。

その間にもエリカさんやネル達のように狩りを担当するメンバーから色々と森の事を聞いてはメモを残した。

そして今日、漸くその時が訪れた。

まず最初に異変に気が付いたのは壕の中の水が乾き、移動などに問題が無い事を確認してから朝食をエリカさんと共に食べているその時だった。

ふと、空を見上げたエリカさんが異変に気が付いた。

それを聞いた俺は食事を止めて探知を発動したが探知には何も引つかかかっていないのにも関わらず、森の向こうが騒がしい。

野鳥が大きな音を立てて飛んで周り、これほど大きな木々が薙ぎ倒されて行く音が聞こえた。幾らグレンデルやキマイラと言えどもこの木々を薙ぎ倒しながら進んでくる事は出来る筈が無い。

そうなると思えられるのはそれらよりもさらに大きな身体を持つ生物の存在だ。

まあ今考えても仕方が無いし、すぐさま村全体に大きな声で戦闘準備命令を出した。

「急げ！もうすぐそこまで来ているぞ！」

「そこにある弾を持って行け！」

「弾薬箱を2つづつ持て！出来る限り最初の段階で弾薬を持って行つて時間を稼ぐんだ！」

銃座に向けて走つて行く皆と、その怒号があちこちから響き渡る。

弾薬箱を射手、装填手、通信手、運搬係の4人が銃座に置いてある物だと足りない判断したのかそれぞれ2つづつ持って交通壕の中に消えていく。

そして暫くすると銃座の通信手から本部へ向かつて通信が入る。

『こちら4—8！準備完了！』

『こちら3—2！準備完了！』

全ての銃座からそれらの報告が終わり次第、各銃座に向けて命令を発する。

「こちら本部。俺の指示を待たずに目標が見えたら射撃を開始しろ。いいか、デカブツが現れる前に小さい奴らが大量して押し寄せてくる筈だ。先ずはそいつらを片付けるんだ。接近されたら終わりだ。余裕のある内に弾薬の補給を行う様にしろ。弾が尽き

てから取りに来て遅いからな」

「別に小物さえ殺つてくれればデカブツは8. 8cmで何とかする。その際忘れないで欲しいのがデカブツの接近を知らせる事だ。それが無ければ何処に向かつて撃てばいいのかわからないからな。いいか、もし不味くなったら直ぐに後退しろ」

俺がそう言うと、無線からそれぞれ了解という声が聞こえてくる。

そして俺は無縁機に向かつて言った。

「何としてでも生き残つて勝つぞ！ いいか!？」

すると今度は無線では無くあちらこちらの銃座や8. 8cm砲座から声が響いてきた。

その声を聞き届けてから俺は8. 8cm砲の元へ行く。

「準備完了！ 何時でも撃てます」

「了解。初弾は榴弾を装填。小さい奴らの先頭を纏めて吹き飛ばす。装填が完了したらそのまま待機」

「射撃方向は？」

方向は、そうだな……

今砲口を向けているのは第1区画の方向だ。……第2区画に向けよう。

「右に135度旋回。第2区画と第3区画の間に向けておく」

「了解。右135度旋回」

俺の指示によって砲手が旋回ハンドルを回し、右へ135度砲身が向きを変える。これには理由がある。

第2、第3区画が一番守りにくいのだ。だからその方向を一番に支援しなければなら
ない。

「俯角—5度」

「了解。俯角—5度」

次に仰角、砲身の角度を指示した。

砲身の位置はコンクリートや土を盛ったお陰で2 m程地面よりも高い。

だから地面に向かって砲弾を撃てるように—5度の角度を付ける。

多少低く見積もりすぎたがそれでも問題は無い。

ただこの8・8 cm砲の欠点は取れる俯角が浅い事だ。せいぜい15度程度しか下
に向けて事が出来ない。まあそれでもデカブツを最優先に狙うからこれは大した問題
では無いのだが。

そう言う訳で狙いを付けた。

その凡そ30秒後、探知の範囲内に全方位から多数の反応が急接近して来た。

「全員、700m先注意しろ！全方位だ！引き金に指を掛けておけ！」
無線に向かって指示を出す。

すると先程よりも全体の緊張感がぐつ、と増した。

まあそれはそうだろう。この戦いに負ければ文字通り餌になってしまうのだから。

探知でもう一度確認すると第3区画の方が魔物や魔獣が突出して突っ込んで来た。この分なら第3区画がいち早く銃座が交戦を始めるだろう。

それから暫くすると、第3区画の方から銃声が聞こえて来た。

「砲手、第3区画に向けて右45度旋回」

「了解。右45度旋回」

砲座が指示の通りに向きを変える。

「旋回完了」

「照準を群れのド真ん中に付けろ」

「了解。……照準完了」

指示を出して俺は防盾の後ろに隠れる。

じやないと爆風や爆炎に巻き込まれて吹っ飛ばされたり破片が当たる。そうしたら死ぬ。

「射撃用意……撃てッ!!」

俺の号令の瞬間に引き金が引かれる。

ドオオン!!!

大きな発射音が響く。

そして砲弾が飛翔していく。数秒後、照準を付けた場所に着弾して土と爆炎を巻き上げる。

ア" あ" あ" ア" ア" ア" ア" ア" ……!!!!

そして魔獣や魔物の絶叫が響く。

「次弾装填!」

「次弾装填完了!」

「左5度旋回!」

「了解!左5度旋回!……完了!」

「撃てッ!!」

ドオオン!!!

再び撃ち出される砲弾は狙った場所にしっかりと吸い込まれて行く。

最前線はMG42とM2の複数の射撃音が響き、どんどん撃ち出される8.8cm砲弾が土と爆炎と共に魔獣や魔物の肉片が飛び散る。

「うおおお!」

「いいぞお!そのままやっちゃまえええ!!」

8.8cm砲を担当しているメンバーからは喜びの声が上がる。

そして弾薬運搬係は砲弾が3発入っている箱から1発取り出してバケツリレー式に装填手に渡して、装填手は撃ち終わって空薬莖が排莖された瞬間に即座に装填する。

何発か撃ち込んだ後に第2区画、第4区画、第1区画と目標を変更した。

それを10分程続けて砲撃をしていると通信が入った。

『こちら1-7!デカいのが現れた!恐らくキマイラだ!砲撃支援を頼む!』

第1区画から悲鳴とも取れるような通信が入った。

漸くデカブツがお出ましか。これから本領発揮だ。

今は第4区画に向けて射撃をしていた。

「了解！砲手、右45度旋回！仰角5度！」

「了解！右45度旋回、仰角5度！……完了！」

双眼鏡を覗くと簡単にキマイラを見る事が出来た。

デカいな……体高は4〜5mはあるか。

しかしあれだけデカけりゃ外すなんて事は無いだろう。

「弾薬運搬係、装填手、次弾より徹甲榴弾に変更！」

「了解！」

「砲手、照準をキマイラのド真ん中に付けろ！」

「もう付けてあります！」

「よし、撃てッ！」

そして撃ち出される砲弾。

ビイイイイイイン……

命中したのはド真ん中、しかも頭に当たった。

しかしながら砲弾は弾かれて独特の音を響かせながら何処かに飛んで行ってしまっ

た。

榴弾とは言っても8・8cmもある砲弾だぞ?!それがあんな簡単に弾かれるなんて想定よりも厳しいんじゃないか!?

そもそも榴弾ならば直撃した瞬間に炸裂する筈なんだが……

砲弾自体は当たったが信管が作動しない場所、砲弾の先頭部分に当たらなかったのかもしれない。それでも信管が作動して炸裂するとは思うのだが……

流石に信管が起動しなかった原因も理由も分からないがそんな事を気にしている場合じゃない。

角度が悪かったのか、それとも単純に頭部外殻の厚さかそれとも頭蓋骨の強度なのか分からないが8・8mm砲弾が弾かれたという事は変わらない事実だ。

まあいい、流石に徹甲榴弾ならば貫通出来るはずだ。

それに頭に当たったのは偶々だろうからそれ以外の部位なら貫通出来るだろう。

最悪の場合、硬芯徹甲弾を撃ち込むしかない。

貫通力は高いが破壊力が榴弾や徹甲榴弾に比べると低いから一撃で仕留める事は無理だろう。

「照準そのまま！」

「照準そのまま了解！」

「撃てッ！」

ドオオン!!!

発射音と飛翔音の直ぐ後、キマイラに直撃した。

頭部へは直撃せずに首下の胴体部分に直撃した。砲弾は簡単にその分厚い皮膚と毛皮、筋肉を貫いて内部へ突き進んでいく。

グオオオオ……!!

キマイラと言えども流石に痛みを感じたのかその場で立ち止まり悶絶する。

すると簡単にその分厚い皮膚と毛皮、筋肉を貫いて身体の内部で信管が起動して爆発した。

比較的浅い角度で入ったのか爆発した瞬間に内側からキマイラの腹部の辺りが破裂

し、肉片と臓物、大量の血を撒き散らした。

グウオウウアアア!!

砲弾が貫通した時とは比べ物にならない程の大絶叫が辺り一帯に木霊する。

そして途轍もない怒りと憎悪を孕んだ目を向けて来るがあれほどのダメージを負ったからか、その場に倒れ伏した。

それ以降ピクリとも動くことは無かった。恐らく絶命したのだろう。

「ウオオオ!!」

「あのキマイラをこんな簡単に倒しちゃったぜ!？」

「このまま行けば村を守り切れるわ!」

皆、喜んでいるがその姿とキマイラが本当に死んでいるのかという事を見届ける程の時間の猶予は無かった。

『「こちら3—2—デカブツだ! 砲撃支援を頼む! かなり近くまで接近してきている! グレンデルだ! キマイラよりも動きが早い!」』

連絡が入った。次は第3区画だ。

「砲手、左180度旋回！照準をグレンデルに合わせろ！」

「了解！左180度旋回！目標グレンデル！」

双眼鏡を覗くとそこには10mはあろうかと思われる体長の二足歩行の馬鹿デカイ獣みたいなのがこちらへまっすぐに走って来ていた。

キマイラよりも随分と速いが直線的にこっちに向かって走ってきているのだから当てる事自体は多分そこまで難しくはないだろう。

「撃てッ！」

ドオオン!!!

撃ち出された砲弾は真っ直ぐグレンデルに向かって飛んでいく。

視認出来なかったのか、それとも脅威では無いと思ったのか避ける事無くそのまま突き進んできた。

しかしそれがグレンデルの命運を分けたのだ。

真っ直ぐは避ける事も無く突き進んできたグレンデルに徹甲榴弾が命中する。

右胸に命中してそのまま炸裂。

右胸の辺りを纏めて吹き飛ばし、その威力で後ろに向かってもんどりうって倒れた。そしてそのまま動かなくなる。

グレンデルは動きは素早いが砲弾を当てる事さえ出来れば問題は無い。

しかしながらM2やMG42の銃弾ではダメージを与えられない。掠り傷程度すら与えられない辺りやはり防御力は高い。

暫くの間、銃撃と砲撃を続け、デカブツに関して言えばキマイラやグレンデルだけでは無くゴレムなどと言った奴らまで現れた。

ジャバウオックまで現れた時はかなり焦った。

こいつ、地面だけでなく木の上も移動出来たのだ。だから照準を付けるのに手間取ってしまったが命中すれば難なく倒す事が出来た。

1体だけという事は無く、2体目3体目と現れて来るものだから大忙しだ。それだけでは無く榴弾を小物に向かってぶつ放したりもするから8・8cm砲は大忙しだ。

銃座も銃身交換を何度も行っているようだし、キマイラなどが放った火球が飛んで来たりして致命傷にはならないが吹き飛ばされて立て直しの時間が必要となったりする

が、負傷者は出るものの死者や重傷者は出ずに、全体的にこちらが有利に進められていた。

小さい奴の方は丘で戦ったゴブリンを始めとして、オークやフォレストウルフと余りにも種類が多すぎて全ての種類を断定する事が出来なかった。

まあそれは構わないし、何よりも俺達が事を有利に運んでいるという事が重要だ。

しかしながらやはり数が多すぎる。丘でのゴブリンとの戦い程とは言わないがそれでも十分に数が多いし、しかも木があるからその陰に居る魔物や魔獣に対しては一切手出しが出来ない。

流石に奴らも分かったのか小さい奴らは木の影をちよこまかと移動し、出来るだけMG42やM2の弾幕に曝されない様にしてきているのだ。

それでも十分に殺す事は出来ているのだが最初の頃と比べると効率が悪い。

銃弾もどんどん消費していくし、弾薬運搬係は常に銃座と弾薬補給所を往復している。MG42の弾薬箱ならいざ知らず、M2の弾薬箱は1つだけでもかなりの重さがある。それを何十往復もするのだから疲労はとんでもない物だ。

MG42の独特な射撃音に加えてM2の重い射撃音があちこちに鳴り響く。

声は聞こえないが恐らく銃座の中では弾薬を早く持つて来いと怒号が響き渡っているだろう。

通信として入って来る声にも殆どが弾薬が足りない、という物だった。

今の所はどこも問題は無さそうだがやはり弾薬問題が一番大きい。

俺も定期的に弾薬補給所に行って呼び出して置いてきている。俺が離れても最低限砲撃は行える。弾薬補給所に向かって呼んでいる時は砲撃を完全に任せて全力ダッシュをしながら速攻で大量に呼び出し、戻ったら8.8cm砲の指揮を再開する。

意外と8.8cm砲弾の消費が多い事だ。

デカブツへの対処も必ず命中させられるという訳では無く、外す事もある。

そう言う訳で3発砲弾が梱包されている箱を弾薬置き場に大量に呼び出す。

硬芯徹甲弾は消費していかないから、徹甲榴弾と榴弾を呼び出す。小物へ砲撃もあつてか一番消費量が多いのは榴弾だ。

しかしながらその甲斐あつてか魔獣や魔物は一定のラインから進めていない。

そんな事を1時間程続けていた時、森の向こうがとんでもなく騒がしくなった。

いや、正確には元々騒がしかったがそれが近付いてきたことによつて更に増した、と言つた所だろうか

すると村を囲んでいた魔物や魔獣が大慌てで何処かに逃げて行つてしまった。どういう事だ？今更8.8cm砲やM2、MG42に怯えたなんて事は有り得ない。

とすると何か別の要因が考えられる。

それは何なのか？考えられるのは村を囲んでいた魔物や魔獣よりも、それこそキマイラやグレンデル、ゴーレムなんかよりもずっと強い何かが接近してきているという事だ。

ほかにも何かあるだろうが、一番可能性があるのは今の説だろうな。

とするとこの森でそれらよりも強い存在。

白狼一家は有り得ない。森の外側の方に移住したと考えるべきだし、エリカさんの話からもそれは推測できる。

そうなるかととは竜種となる訳だが、飛竜や翼竜ではないだろうな。

そうなれば騒がしくなるのは空の方であるべきだからだ。それ以外で残っているのは、土竜だ。

「全員、今の内に態勢を整えろ！弾薬の補給や交換用の銃身は今のうちに持って行って置け！」

「それと邪魔な空葉莢は全て空いている弾薬箱に入れて俺の元へ持って来てくれ！」

「いいか!? 準備す——」

ギ“ユ“ウ“ウ“オ“ワ“ア“ア“ア“ア“ア“ア“
!!!!!!

「「「「「ツツツツツ?!?!?!?!?!」

今まで一度も聞いたことが無い、キマイラやグレンデルなんかとは比べ物にならないぐらいの、とんでもなく重く威圧感のある咆哮が比誘電率抜きでオール大森林中に響き渡った。

そう思うほどの物だった。

かなり大体3km程だろうか？

この森の太い木々を無茶苦茶な力でもって薙ぎ倒していくバキバキバキツ!!メキメキメキツ!!という音が此処からでも聞こえて来た。

そしてさらに大きな声で、

グ“ウ“オ“ア“ア“ア“ア“ア“ア“
!!!!!!

再び咆哮が響き渡った。

そして移動速度を早めたのだろう、更に木々を押し折る音が大きく早く聞こえ始めた。そして同時に感じられるのは、重い質量のナニカが歩く様な、重い地響きのような物が身体を揺らす。それは少しづつ、段々と大きくなり始めた。

ズズン……ズズン……ズズン……ズズン……ズズン……ズズン……

その地響きに合わせて砲座を設置しているコンクリートの上のあちこちに転がっている8・8cm砲の空薬莖が何もしていないのに音を立てる。

カラン……カラン……カラン……カラン……カラン……カラン……

接近してきている存在が土竜だとすれば、対抗手段はこの8・8cm砲しかなくなる。牽制目的でMG42やM2の射撃も出来るだろうがどれほど意味があるのか。そもそも牽制にすらならないかもしれない。

しかしM2の弾種は徹甲弾だからMG42の弾よりはマシかもしれない。そうして必死になって全員で迎撃準備を行う。

8. 8cm砲は榴弾を全て格納して、徹甲榴弾と硬芯徹甲弾のみを呼び出す。そして今現在装填されている榴弾を撃つたら次から徹甲榴弾を使用する。それが効果が無い場合は硬芯徹甲弾を使う。それが効かなかつたらお手上げだな。どうすればいいのかわからない。そもそもの話、垂直に立てられた装甲200mmを100mの地点から貫通するような砲弾を弾かれたらそれ以上そうすればいいと言うのだ。

土竜と思われる存在が接近してきている方角はあの裂け目のあつた方角だ。

北西の方角、第1区画方面。その方向から迫ってきている。

第1区画以外の第2、3、4区画のMG42、M2は全て第1区画に配置した。

銃座があるわけでは無いから交通壕の途中途中に無理矢理銃座を新たに設置した。

合計で50の銃座と8.8cm砲が迎え撃つ訳だがそれでも不安だ。

そして見えて来たのは、体高30m以上を誇る、茶色や所々緑？の鱗に覆われた馬鹿デカイ土竜だった。

体高は恐らく35、いや40mはあるな。

体長に關してもその倍はあるだろうか？

そんな土竜がこちらへ向かって来る。

距離は700m。

この距離ならば8・8cm砲を撃てば確実に命中させることは出来るだろうが、あの鱗を貫通出来るかが問題だ。

「砲手！目標正面の土竜！あれだけデカイんだ、ド真ん中を狙え！」

「了解！目標正面土竜！照準を土竜真ん中に合わせます！」

「次弾は硬芯徹甲弾！用意しておけ！」

「了解！次弾硬芯徹甲弾！」

大声で指示を飛ばし、射撃準備を整える。

少しばかり不安の残る距離だがそれでも射撃しなければならない。

600mに入ったら射撃を開始しよう。

「照準完了！何時でも撃てます！」

「まだだ！600mまで引き付ける！」

「ッ!?了解！」

段々と近付いて来る。

大きな足音を響かせながら一歩一歩こちらへ近づいて来る。

650m……630m……610m……!!今だッ!

「撃てエッ！」

ドオオン!!!

号令と共に撃ち出された砲弾は真っ直ぐに土竜に向かって飛んでいく。
そして命中。

ビイイイイイイン………

しかし独特な音と共に弾かれてしまった。その砲弾は後ろに弾かれて飛んで行ってしまった。

ただ単純に貫徹力が足りていないだけでは無く身体全体が垂直の鋼鉄板とは違い丸みを帯びているから簡単に弾かれてしまう。

クソツ！これじゃあ幾ら撃つてもただ砲弾を捨てるだけになってしまうぞ!?

「次弾装填完了！」

「撃てツ！」

次々と放たれる砲弾は硬芯徹甲弾だが当たる角度もあるのだろうか！発も貫通することとは出来ていない。

表面に傷を付けてはいるがそれだけだ。

どうする……？ どうすればいい……？

幾ら考えても焦ってしまつて答えは出ない。

そうして土竜はどんどん近付いて来ているのだった。

防衛戦 土竜戦

「装填ー！」

「撃てエツー！」

「発射アー！」

装填手が装填完了の声を上げた瞬間に俺が射撃の合図を出す。

砲手が大きな声で叫び、その瞬間に大音量と、土煙を巻き上げながら砲弾が吐き出される。

ドオオン!!!

撃ち出された砲弾は真つ直ぐ土竜に向かって飛んでいく。

ガギン!!

しかしその命中した硬芯徹甲弾は、分厚い何かに弾かれる音を立てながら思わぬ方向に飛んで行ってしまふ。かれこれ数十発は撃ち込んでいるのに表面に傷を付ける程度に終わってしまったている。

「装填!」

「撃てエツ!」

「発射ア!」

先程と同じように数秒の後に砲弾を撃ち込むが……

ガギン!!

やはり弾かれてしまった。

「どれだけ硬い鱗をしているんだ!?!」

「クソツ!ここまで守り切ったのになんであんな奴が!」

「うるせえ!そんな事喚いている暇があったら1秒でも早く砲弾を運んで装填手に渡しやがれ!」

「分かってる！でも本当にどうするんだ!?このままじゃーー」

「その先は言うんじゃねえ！装填！」

「撃てエツ！」

「発射アア！」

8. 8cm砲のメンバーは必死になってそれぞれの役割を果たしているが……

ドオオン!!!

ガギン!!

それでも土竜の鱗を貫くには至らない。

このままじゃあじきに踏み潰されて食われる。

土竜は俺達の攻撃が自身に被害を与えるものでは無いと思っているのか、避ける事もせず、こちらへ向かって真つすぐに進んでくる。

避けると言ってもあれほどにデカイ図体なら俊敏性もクソも無いだろう。

避けないと言うよりは、移動速度が遅すぎて避けられないと言った方が正しいのかも
しれないがどちらにしる加害を与えられていない時点で俺達の負けだ。

これが戦車砲、それこそレオパルト2やM1エイブラムスと言った現代戦車の使用出来るAPFSDS (Armor Piercing Fin Stabilized Discarding Sabot) などならば貫徹力が硬芯徹甲弾よりも貫徹力が遙かに高く、土竜の鱗をも貫通することは出来るかもしれないが……

「駄目だ、貫通出来ない！」

「どうでもいいからさっさと装填しやがれ馬鹿野郎！」

「装填！」

「撃てエッ！」

「発射ア！」

撃ち出される砲弾は命中するも虚しく弾かれて行くだけ。

銃座は既に射撃を始めていて、土竜に向かって50もの銃弾で出来た線が伸びていくがそれらは傷一つ与えられずに弾かれて四方八方に飛んで行ってしまっただけだった。

「おい！急いで弾を持ってこい！」

「ああ！」

「畜生！分かつちやいたが全く効いてない！」

「そんな事分かつてんだよ！何でもいいから撃ち続けろ！そうすりゃ兄ちゃんがやってくれる筈だ！クソ！弾切れだ！」

「了解！……………！装填完了！」

前線の銃座は盛んに土竜に向かって撃ち続けるがやはり全くの意味が無い様だった。どうやってても、何処に撃ち込んでも全くの効果が見られない。

比較的柔らかい腹部にも幾らか当たってはいる様だが、12.7mmや7.92mmクラスの小中口径では全くと言っていい程に効果が無い。

せめて注意を引き付けられないか……

かる。

そして退避して来たメンバー達は俺の居る8.8cm砲座まで後退して来た。

しかしながら完全に無傷とはいかず、逃げ遅れたり巻き込まれたりして複数名が死傷。

重傷の人間はそのまま急処置を施して後ろに下げ、それ以外の者達に矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「MG42のメンバーはMG42と弾薬箱を持って走り回りながら土竜の顔に攻撃を加え続ける！1、2回の短連射をしたら即座に離脱だ！」

「「「「了解！」「」」」」

「M2の連中はこの砲座の両側面に大急ぎで再展開！再展開終了後、即座に射撃を開始しろ！」

「「「「了解！」「」」」」

「行けええ！良いか、生き延びることを最優先に考えろ！気を引くことも重要だが死んだら元も子もないからな！」

M2とMG42、それぞれに指示を出して行動に移させる。

MG42は指示通りにあちこちを走り回りながら土竜の顔に向かって撃ちまくる。

M2は重量があるから機動戦には向かないから砲座の両側面から土竜に向かって撃ちまくるがやはりダメージは与えられない。

MG42は顔へ攻撃をしているからか土竜の注意を引きまくって、あっちへこっちへ逃げ回りながら撃ち続けている。

そして俺達8・8c砲も負けずに横っ腹を見せている土竜に向かって撃ち続けるがやはり鱗を貫くには至らない。

戦車みたいに正面だけが分厚い装甲という訳では無く全周囲が硬い鱗に覆われている。だから何処に向かって撃つても弾かれてしまう。

本当にどうすればいい？ どうすればあいつの硬い鱗を貫く事が出来る？

8・8c砲対戦車砲の100mで200m以上の貫通力じゃあ無理だ。

今だつてもう既に300mの近距離で砲弾を撃ちこんでいるのに弾かれているのだから100mの距離になつても貫通は期待できないだろう。

となるとそれ以上の貫通力を持つ武器が必要となる訳だがそんな物は基本的に大口径の対戦車砲になる。

だがそんなものを呼び出しても今すぐに使える訳も無い。

各種操作方法を覚えなければならない。勿論そんな時間はある訳が無い。

そもそも今の状況だつて漸く、ギリギリの上で成り立っている様なものなのだ。

一步でも踏み外せば真つ逆さまに、二度と登って来られない谷への落下の開始だ。必死になって策を考える。

するとふと思いつ出したのだが対戦車火器の中に貫通力が8. 8 c m砲よりも遥かに高威力の物があつたはずだ。

………！あつた！

見つけたのはパンツァーファウスト3。

装甲の種類にもよるが700 m mという8. 8 c m砲の3. 5倍の貫徹力を持つ。幾つかに分けられているのだが今回は緊急性が高いので組み立てたまま呼び出す。

このパンツァーファウスト3は使用する弾頭にもよるがトーチカを破壊する為のバスターファウスト、爆発反応装甲に対応できる二重弾頭のタンDEM HEAT弾も撃つ事が出来る。あとは照明弾も撃つ事が出来るし、訓練用の演習弾なんかも使用が出来る。

まあ今の所照明弾や演習弾の使用予定は無い。

なんなら爆発反応装甲もこの世界には存在しないから使わないだろうし、トーチカ何て物も無い。まあ建物に対して撃ち込むことはあるかもしれないが出来ればそんな事は無い事を願いたい。

今回呼び出したのは成形炸薬弾と本体だ。

他にも暗視照準具やテレビモニターを利用したりモコン式の発射架台、センサーを用

いた自動発射架台などもある。Dyna rangeと呼ばれるレーザー距離計と弾道計算機を組み合わせた電子式照準具も使用出来るがそんなもんは必要無い。

パンツァーフアウストにも種類があるが、第二次大戦時に使用されていたパンツァーフアウストは貫徹力200mmと8.8cm砲と大して変わらない。

それを使つても8.8cm砲弾が弾かれる鱗には意味が無い。
だからこいつを使おう。

鱗の硬さがどの程度かは分からないが700mmの装甲を貫通させる事が出来るのだからこれが弾かれたらもうお手上げだ。エルフ族の皆を連れてこの森から出るしかない。

しかしそうならない様に、このパンツァーフアウスト3であの土竜の腹に穴を開けてやるしかない。

「ちよ、何をしているんですか!?!」

「あの土竜に接近してこいつを叩き込む!8.8cm砲じゃ埒が明かない!」

俺が何かをやろうと準備をしている事に気が付いた1人が俺を止めようとする。

「あれに近付くんですか!?!止めてください!死んでしまいますよ!?!」

「こうでもしなきゃこの村どころか皆纏めて土竜の胃袋に放り込まれるか踏み潰されて死ぬかのどちらかだけだ！」

砲座のメンバーと言いつつ合いながらパンツァーフアウスト3の準備を進める。

確実に必中させたいから出来るだけ接近して撃ち込む。50mくらいなら何とかなるかもしれない。

準備をしながら砲座のメンバーに指示を出す。

「俺が土竜に向かって行っても射撃はそのまま続行！出来るだけ数を撃ち込んで俺へ注意を向けさせない様にしてくれ！砲手に指揮を任せる！」

「……了解！」

最後に俺はそう言つてパンツァーフアウスト3を抱えながら接近していく。

頭上をM2の射撃や、MG42の移動しながらの射撃が土竜の鱗に着弾しては弾かれて行く様子がはつきりと見える。

それだけでは無く数秒に一度の間隔で8.8cm砲弾が土竜に向かって空気を切り裂き、揺らしながら飛んで行く音も良く聞こえる。

「クソー！土竜の奴、こんなに面倒掛けやがって！」

パンツァーフアウスト3を背負い全力で走つて行く。掘った壕や銃座を飛び越えたり避けて進んだりする。

今此処で打ちひしがれても土竜は殺せない。

改めて目の当たりにした死に足が少し震えながらもパンツァーファウスト3の射撃準備を整える。

プローブ（信管）を伸ばし、弾頭を本体に挿し込む。

そして肩に担ぎ、狙いを付ける。

狙いは足だ。

左の横つ腹を見せながら大暴れしているが、50mなんて近距離だ、撃つて直ぐに命中する。

クソ！動くんじゃねえ！

幾ら遅い動きとは言っても狙いを付けるには十分に障害となる。

10秒程照準を付けては外れ、照準を付けては外れを繰り返す。

すると、俺が何かをしようとしているのを察知したMG42のメンバー達が一齐に右側に向かいながら射撃を始めた。

その瞬間、土竜も顔を右に向け進もうとする。

土竜の注意を右に逸らしてくれたのだ。

今が好機だった。

「発射アアア！」

声と共に引き金を引いた。

ドシユウウウウ!!!

大きな発射音と共に弾頭が撃ち出される。

無反動砲だから、反動は無く後ろに向かつてカウンターマスが一気に噴射された。

弾頭は直後に安定翼が展開してロケットモーターに点火、加速しながら土竜に向かって飛んで行った。

ドオオン!!!

飛んでった弾頭は、土竜の左後ろ脚の太腿に見事に突き刺さった。

そしてその堅強な鱗を貫き炸裂。8.8cm砲弾ですら弾いた鱗と、土竜の肉を吹き飛ばした。

ク"カ"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ア"ア"!
!?!?

先程までのこちらの恐怖を煽る様な咆哮では無く、今回の声は痛みに対して叫んでいるものだった。吹き飛ばされた足はそれでも尚歩き続ける。

マジかよ!?!こんなもんをブチ当てられたのにまだ歩けるのか!

もうここまで来ると、土竜に対して感じる思いは畏敬の念だった。

しかし今ここで攻撃の手を緩める気は無かった。今こいつを殺さなければ俺達が餌になつてしまうのだから。

土竜は自身の足を吹き飛ばした攻撃をしてくれたその存在をとんでもないぐらいの怒りが籠った目で探し回る。

しかし俺も馬鹿じゃない。

撃つた直後に移動を開始し、今は股の下を通つて反対側に陣取る。

見上げた土竜の腹は鱗で覆われていて確かに硬そうだった。

再度、プロップを伸ばして弾頭を挿し込む。

そして狙いを付け、引き金を引く。

先程と同じ様に鱗を貫通し炸裂。右後ろ脚の膝の裏側辺りに着弾した。

すると爆発で膝の裏にある筋やその他諸々の筋肉を吹き飛ばしたのか先程よりも大

「兄ちゃんがあの土竜を仕留めたんだ！」

「「「「ウオオオオ!!」」」」

皆が土竜の周りに集まり、土竜が死んだという事が分かると一齐に喜び出した。

まあそりやそうだろう。一時は攻撃が一切通らず、俺も本当に不味いと思つたぐらいなのだから。

エルフの皆は村を守り切れた事に大喜びし、抱き合つたり肩を組んだりしている。

中には泣いている者もチラホラどころか結構な人数が居る。

しかし俺は今喜んではいられない。

戦後処理とでもいべきだろうか、要は後始末をしなければならぬ。

魔獣や魔物の死体の片付け、怪我の手当て、遺体の埋葬。他にも色々やらなければならぬ事は沢山ある。

俺はM2とMG42、弾薬、交換用銃身を格納して空薬莖を回収しておく。銃本体の状態を完璧にして、もしまた襲撃があつた場合に備える。8・8cm砲も一度格納。砲弾なども纏めて回収する。

それと同時に怪我人の回収だ。

本当は戦死者の遺体も回収し、しっかりと埋葬したいのだが怪我人の治療が最優先だ。

喜んでいる所に水を差すのは悪いとは思いますが今は先にやることをやって貰わないとな。

「皆さん！喜んでいる所申し訳ありませんが怪我人をこちらに連れて来てください！」

「「「「「おう！」」」」」」

指示を出すと皆は特に何かを言うわけでも無く、それぞれ動いてくれた。

担架を呼び出してそれに載せて連れて来て貰う。

怪我人の重軽症の度合いはやはり多岐に渡った。

土竜が暴れた時の衝撃や余波によって吹っ飛ばされたり、踏みつけられて足や腕が潰されている者、骨が折れている者と様々だ。

骨折一つをとっても複雑骨折や折れている場所も腕、足、腰骨、肋骨、背骨、頭と本当に色々だ。

他にも木や地面に叩きつけられて内臓が破裂しているなんて当たり前だった。

この村に来た時と同じ様に怪我人の手当てをして行く。

傷口や患部の消毒、異物の除去、治療。

そうして全員の治療が終わった。

しかしながらやはり治療中に亡くなってしまった方は居るし、それに腕や足を失い、失明をしてしまったという人、土竜の咆哮を至近距離で浴びてしまい鼓膜が破れたりして聴覚に異常や、耳が聞こえなくなってしまう人も数多い。

しかし今はクヨクヨしている場合では無い。

一刻も早く遺体を回収し埋葬しなければならない。

「皆さん、怪我人の搬送ありがとうございます。次は遺体の回収です。辛い事だとは思いますがお願いします。村の広場に遺体は集めて置いて下さい。それと遺体の身元名前が分かる方はこの紙に名前を書いてその遺体の上に置いておいてください。それが終わったら魔獣や魔物の死体の片付けをお願いします。素材や肉などはお渡しします。ですが土竜の死体は解体して肉はお好きになさって下さい。ですが鱗は調査したので残しておいてくれると有難いです。調査が終わり次第鱗も差し上げますから」
そう指示を出す。

すると先程までは怪我人達や仲間達と話していたのだが俺が言うてからは殆ど話さず、最低限の必要な会話以外はしなかった。

まあそれもそうだろう、以前の襲撃で68人、そして今回の襲撃で47人。併せて115人にも上った。

今回の死者の主な原因は土竜との戦いで吹き飛ばされたりして内臓へのダメージが原因で24人、踏み潰されたりした事が遠因で23人。

半々、と言った所だった。

広場に並べられた遺体は全部で29名。

この29人は即死だったと思われる。踏み潰された23人以外の6名は吹き飛ばされたりした時に内臓へのダメージが余りにも大きすぎたからだろう。

まだ内臓破裂などで死んだ者は幸福だったかもしれない。

身元の判別が付けられるし、家族の元へ帰れるのだから。

踏み潰された遺体は身元の判別を付けることが難しく、ギリギリ身体的特徴を見て恐らく、アイツだろう、コイツだろうと言うレベルだった。

DNAでの判別も出来ない。

思わず、俺にはもつとやれることがあったのではないか、そうすれば死者は出なかったのでは無いかと思ひ、唇を噛み締めてしまった。

それぞれ29人の遺体の上には布が掛けられ、更にその上に名前が書かれた紙を置いてある。その布は血と泥で汚れていた。

その傍で縋り付いて泣いている人は家族だろうか。

残念ながら俺は怪我の治療は出来たとしても死者を生き返らせる事は出来ない。なんなら怪我人ですら死なせてしまう事もあるのだ。

せめて出来る事と言えば、遺体に頭を下げる事ぐらいだった。

それらが終わってから魔獣や魔物の死体を片付けた。

と言つても俺が呼び出したガソリンをかけて火を点けて焼き払うと言う雑なやり方になつてしまったが早めに片付けないと悪臭や伝染病や感染症が蔓延する可能性もある。

衛生的な面で見ると放っておけないのだ。

あとは稀に起こるアンデット化だかゾンビ化を防ぐと言う意味合いもあるから手を抜くことは出来ない。

それを行う前に使える部位の剥ぎ取りは終わっていた。

土竜の死体は解体する前に写真撮ってから肉の切り取りを行った。骨や牙、筋と言った全ての部位を剥ぎ取り、鱗も全て剥ぎ取った。

しかしながら俺にはそれら全てが必要無いので、研究者に渡す分と個人的に報酬として受け取った幾らかを除いてその全てをエルフ族に渡した。

報酬も要らないから全てそちらの自由にしていいと言ったのだが満場一致で渡された。

そう言う訳で頭蓋骨と他の骨を幾らかと鱗を200枚が俺に対して報酬として支払われた。

そして怪我人の治療も全て終わり、感染症予防の点滴を打つたりと言う事も全て終わった。

それら全部が終わったのは日を跨いで太陽が再び登り始めた頃だった。

しかしながらエルフの皆はそれだけ時間が経って居るのにも関わらず、戦闘や戦後処理で疲れているだろうに寝ずに俺のやっている事が終わるまで待っていてくれた。

「皆さん何故？疲れているでしょう？」

「何言ってるんだ兄ちゃん。最初にこの村に来た時に怪我人を治してくれて、それが終わってからもこの村を守る為に手を貸してくれて、今だって怪我人の治療をしてくれてたじゃねえか。色々と指示を出したりもして一番疲れている筈なのは兄ちゃんの筈なのに一番働いている兄ちゃんを放って寝てなんて居られるか」

そう言つて皆揃つて頷いてくれた。

「それで、終わったのか？」

「ええ、終わりました」

「よし、それじゃあ死んだ皆を弔うから是非参加してくれ」

「分かりました」

所謂葬式と言うやつだろうか。

それに参加する為に、血で汚れた服を変え、手や足、顔を洗った。

着替えたのは普段通りの迷彩服だが、これしか着れる物は無いから許して欲しい。

「イチローさん、どうぞこちらへ」

「失礼します」

エリカさんに案内された場所に座った。

そして始まる弔い。

「hgutlPsbvnWmhda f q——」

エリカさんがエルフ語で何か唱え始めた。

すると幾らか唱えた後、亡くなったエルフの身体から何か出て来た。

それは既にこの村に来る前と、来た時の治療で亡くなった方が埋められた場所から
も。

淡い緑色の光が115個、宙に浮く。

「rtunkmsdxceqip」

そして最後に少しばかり大きな声でエリカさんが何かを言った。

「[[[[rtunkmsdxceqip]]]]」

すると生き残った村人全員でそれを唱える。残念ながら俺は唱えることが出来な
かった。だからせめてもの思いで心の中で

(どうか、安らかに眠ってください)

そう念じた。

すると浮かんでいた淡い緑の光球は徐々に薄れて行った。

幾つもの光が俺の所に飛んで来て周りをクルクルと回ってから消えた。その光はどこか温かった。

そしてこれで弔いは終わったらしい。

村人が切り取った土竜の肉や魔獣、魔物の肉を調理し、振る舞い始めた。

「イチロー様、弔いに参加して頂いて本当に有難う御座いました」

「いや……」

「……どうかされたのですか？」

「ああ、なんでもないんだ。ただ、今見た光景が信じられなくて」

「そうでしたか。今、宙を舞っていたのは死者の魂です。私が唱えていた言葉は死者を死後の世界へ送る為の呪文と、安らかに眠れるように、という呪文なんです」

「それじゃああの緑の光は……」

「はい、死者の魂です。本来魂という物は見えませんがその時だけ可視化されたのです。最後に家族や友人に会えるように」

「そうなんですか……1つ聞いても？」

「ええ、良いですよ」

「最後に魂が消える前に、俺の周りを幾つもの魂がクルクルと回って言ったんだ。なん

でだか理由が分からない。俺は友人でもなければ家族でもないのに」

「それは、恐らくですが死者が貴方に感謝を伝えようとしたのだと思います」

「感謝？」

「はい。村を救ってくれてありがとう、家族を救ってくれてありがとう、必死になって自分を助けようとしてくれてありがとう。理由は様々でしょう。ですが感謝を伝えなかったという事には間違いない筈です」

「言い切れる理由は？」

「イチロー様の周りを飛んだ魂達は、温かかったでしょう？」

「ああ」

「それが一番の証拠なんです。冷たければ感謝を伝えたいという訳でも無いし、何よりも寄つて来ませんから」

「そうだったのか……」

エリカさんと話しながら先程の現象の説明をしてもらった。

そして今、皆で食べて飲んでいるのにも理由があり、死者への供養という事らしい。

だからイチロー様もどうか食べてください。飲んでください。

エリカさんにそう言われた。

だから、俺はその時だけは救えたかもしれない、もつとうまくやれたかもしれないと言おう思いに蓋をして、仮面を被って食事をした。

防衛戦 その後

戦後処理を済ませ、死者の弔いとその後の食事も終わりエリカさんの家に戻った。

流石に丸々1日半以上動きっぱなしだったから疲れた。

家に戻って、俺が使用している部屋へ向かいベットに腰を掛ける。

「ああ……クソ……なんでこんなに手が震えるんだよ……」

少し落ち着くと手が震え始めた。

それどころか足や身体までもが震え始めた。

踏み潰されて死んだ人の顔や治療中に出血が止まらず、どんどん顔色が悪くなつていき死んだ人の顔が浮かんで来る。

さつきエリカさんは死者が俺に感謝を伝えたかったと言っていたが、どうにも俺はそう思えないのだ。

あの時、遺体の身元確認の為に死因の特定の時に顔を見たがその顔が、目も瞑っているのにその目が開かれて俺を責めてきているように見えた。

『お前の指示がもつとしつかりしていたら俺達は死ななかつたのに』

目は閉じられているのに、どうしてもそう思っているのだと、語っているのだとそう

考えてしまう。

俺はあの時やあの時、どうすれば良かったんだろうか？どんな指示を出せば良かったんだろうか？どうすれば死んだ人達を助けられた？どうすれば死なせずに済んだ？

遺体が並べられた光景と考えが頭の中でグルグルと考えてしまう。

寝ようとしてもそれらが頭から離れず、目を瞑れば更に鮮明にその光景を思い出すだけ。

多分、今のままじゃあ何時まで経っても寝られないだろうな。

そう思った俺は、一度外に出て夜風に当たりながら調査日程の事を考えるようにした。

丸々1か月とはいかないがほぼ1か月と言っている期間が過ぎてしまった。

しかしながら森全体の調査をする、と言うよりは今の俺には目的がしつかりとある。

裂け目の調査を行うのだ。

エリカさんからも聞いたがどうにもあの丘に現れたゴブリンの大軍然り、村への襲撃然り、裂け目の異変が一番に関係している。

だからオール大森林の調査と言うよりは裂け目の調査を行った方が良い。

ほぼ確定で裂け目には何かがあると断言している。しかし、どうしたもんか。

裂け目に行く方法はハンヴィーか、バイクの二択だ。

この村から裂け目までの直線距離は約300kmもある。その距離を徒歩移動するのは1日30kmの移動を予定しても最低10日掛かる。

50kmの移動にするとほぼ不眠不休で移動しなければならなくなる。そんな事を6日間もやったら間違い無くそれ以降の調査に支障が出てしまう。

しかも直線移動が出来るという訳では無く、多少の迂回なども考えると距離は伸びるだろう。

さて、そこでハンヴィーかバイクのどちらかでの移動となる訳だが。

トラックは無しだ。あんなもんこんな森の中で乗ったら小回りが聞かなくて扱いずらいっいたらありやしない。

俺はバイクを選ぶ。

バイクならば積載量なんかはハンヴィーやトラックには遥かに劣るがそれでもこの森の中で一番に必要な機動力が一番高い。小回りも聞かしく、木々を避けて進む事も簡単だ。

道のりは舗装も何もされていないのだから、2日で裂け目に到着出来れば良いか？最悪その倍は掛かると見ておいた方が良いかもしれないな。

移動日数と裂け目の調査期間は併せて丸々1か月程か？

残りの1か月は状況によって裂け目の調査かそれとも森の調査を行うかを判断しなければなるまい。

どちらにしろ1か月が経つたら一旦村に戻って来よう。

本当は家に帰りたいんだが既に1か月が経過している状況を考えると帰るほどの余裕は無い。エルフロントさんには申し訳ないが手紙と写真で俺が無事だという事を信じて貰うしかない。そもそも写真が入っているから無事を信じてくれるとは思うんだが……

移動手段はバイクで決定だ。

あと持つて行くもの、と言うよりは裂け目に到着したら呼び出す物はかなり長く耐久性の高いロープか？正直な所、降下しなければいけないだろうが、谷底の深さが分からない。出来ればレーザー距離計も呼び出してそこまでの深さもしつかりと測定しておきたい。

余りにも深すぎると緊急事態の際に即座に離脱出来なくなるかもしれない。

いや、底まで降りたら確定でその様な事態には対処出来ないだろう。例えばグラウンド

キャニオンの一番深い場所まで降りたでしょう。そこに居た時に地震や大雨で鉄砲水なんかが襲ってきたら？

地震ならば崩れて来た土砂や瓦礫に生き埋めにされるかもしれないし、鉄砲水なら流されて溺死は免れられない。

そう言う訳で谷底までの正確な深さと、万が一の場合の脱出手段の確保なんか重要なのだが遠目から見た感じでも幅だけで数kmあるだろう。

だが深さになったらどれほどになるのか分からない。もし問題が1つでも起きたら死に直結すると考えて良い。

ロープが切れれば転落死。

降下し切る事が出来ても谷底に到着しても崖崩れが起きれば生き埋め。

大雨が降ったりしても流されて溺死。

これだけではない。

そもそも上げたらキリがないのだが、上げた3つだけでも楽に死ぬことは出来なさそう。恐らくだが戦場よりも過酷な旅路になるかもしれない。

そう考えて部屋に戻って寝ようとしたが震えは収まっておらず、今までの1日半で一

睡もせずにはいたのに、何故か身体は寝る事を拒否してしまっていた。

しかしながら寝ないと明日以降に支障が出てしまう。

そう思つてベットに潜り込み、目を瞑つて無理矢理寝たのだつた。

~~~~~

「」

「お————も————」

「!?!」

「な————い————」

~~~~~

「うわあ!」

掛け布団を思いつ切り撥ね退け飛び上がる。

夢の中で死んだ人達が出て来た。

俺の周りを囲んで延々と何かを言っていた。

それが恨み言だったのか、それとも別の言葉だったのか。

飛び起きたのは、まだ太陽も登っていない夜中だった。

時計を見てみればまだ3時だ。たったの3時間程度しか寝れていないのか。

しかしながら夢のお陰で目は覚めてしまい、もう一度寝ようとしても無理だろうし、そもそもあの夢が頭から離れない限りは無理だ。

「イチロー様?どうかされたのですか?」

「エリカさん?」

「はい、大きな声が聞こえたので何かあったのかと……」

俺の大声を心配したのかエリカさんが部屋を訪ねて来た。

あれだけ大きい声を出せばそれは気が付かれるだろうし、何かあったのか気になる事も仕方が無い。

「まあ、その、悪夢、と言うか、そう言う感じの夢を見て……」

「悪夢、ですか？……もしかして、イチロー様は死者の事をまだ気にしていらっしゃるのですか？」

「……もし、俺がもつと良い指示を出せていたら死ぬ人は居なかっただろうし、治療の時ももつとうまくやれていたなら救えた人もいた筈だ、という考えが頭から離れなくて」

俺はそう言った後に手を見てみると震えていた。俺はその震える手を隠すように組んだ。

「そんなことはありません。イチロー様はこの村の為を、村人の為を必死になって助けてくれたでは無いですか」

「そうなのかもしれない。そうなんだろう。でも、死んだ人達はそう思わないかもしれない。恨んでいるかもしれない。そう思ってしまうんだ」

「それは無いですよ。貴方の周りを飛んだ魂達も暖かかったのでしょうか？」

「ああ……」

「ならばどうしてそう思うのですか？」

「魂になった人達も俺を責めているんじゃない、そう頭では思うんだ。でも、どうしても……」

「自分で自分を責めてしまう、という事ですか」

「……………ああ」

確かに俺の周りを飛んでいた魂はどれも温かかった。それは感謝を伝えたいと言う事もエリカさんから説明されたし分かっている。でも考えてしまうのだ。

「イチロー様は、それこそ命懸けでこの村を守って村人の命を救ってくれた。イチロー様が居なければ来て頂いた時に治療して頂いた皆はいずれ死んでいたでしょう。それにこの村を守るための戦いも戦う為の術を教えてください、自分自身も命懸けで戦って土竜に立ち向かっていった。その後も怪我人の治療や後片付け、誰よりも一番に働いて弔いにも出てくださいました」

「……………」

「そんな方に恨み言をぶつける様な者は誰も居ません。怪我をして、その治療中に死んだ者も自分を必死になってイチロー様の持てるあらゆる手を尽くして助けようとしてくれたのですからそんな人に恩を感じないなんてあり得ません。もしそんな者が居るのなら私が張り倒します」

エリカさんはそう言ってくれたがどうなんだろうな。

そう言ってくれた事はとてもありがたいし、そうなのかもしれない。でも俺自身がそう思っていないから何時になっても同じ様に思うだろう。

「イチローさん、少し失礼しますね」

「え？」

エリカさんは一言俺に言っただけの事を優しく抱きしめた。

「ちよっ……!?何してるんですか!？」

「目を瞑ってゆっくりと深呼吸してください」

抵抗しようとしたが、有無を言わせぬ雰囲気で行われてしまった。

多分だがこれ以上抵抗しても無駄だ。だから言われた通りに目を瞑って深呼吸をした。すると段々と眠くなって来た。

あれほど眠れなかったのにどうしてこんなに直ぐに眠くなったのかは分からないがその後直ぐに寝てしまった。

~~~~~

『兄ちゃん、俺達の事は気にすんな』

『あんたのお陰で家族が救われたんだ、心の底から感謝はしてるが責めるなんて事しねえよ』

『怪我をした私の命を助ける為に必死になって治療を施して頂きました。それでも私は死にました。ですが貴方を恨むことはありません』

『村を助けて頂いて本当に感謝します』



イチロー様が村にやってきたのは、魔物や魔獣の襲撃が起きた後だった。

私は片目を包帯で覆い、左足を失い右腕が折れていた。

ベットのの上に横たわって自分で身体を動かす事も出来なかった。

そんな時、流石に食料も魔獣や魔物の襲撃によって殆ど失いネル達を狩りに向かわせた。今の森の状況は途轍もなく危険だと分かっていた。でもそうしなければ皆が飢える事になってしまう。

だから向かわせました。

——— エリカ・コーウエル ———

帰つて来た時にネル達が連れて来たのがイチロー様でした。

話を聞けば狩りの途中、翼竜の群れに襲われていた所を助けて頂いた、と。

しかも空を翼竜や飛竜よりもずっと早く飛ぶ何かを駆つて。

聞いた時は驚いたし、信じられなかつたが嘘を言っている様では無かつたし、その空を飛ぶ物から彼が出て来た事も全員が見ていると言つていたから本当なのでしょう。

それから、彼へのお礼として村の状況説明、村への滞在、森の事を教えることを承諾。

すると彼は唐突に私の治療をすつと言つた。

迷惑をかけるわけには行かないから、と言つたが彼は気にしないで欲しいと言つて私の治療をしてくれました。

治療魔法を施すだけでなく彼自身の独自の治療方法も行つてくれました。

治療魔法は確かに傷も治るし、軽い傷であれば綺麗に消えてしまうでしょう。

それに欠損があつても傷口は塞がります。

ですが治療魔法を施してもその後死んでしまう者は少なくありません。

理由は分からないが、治療魔法で助かつてその後何もないのに高熱を出したりし

て死んでしまうのです。

イチロー様は、何処から取り出したのか、何かの液体や純白の布やタオル、見た事も無い器具を呼び出して私の治療を始めました。

治療が終わった後、足を見れば繋がっていて、目の周りにあつた大きな傷は綺麗に消え、腕の骨折も治っていました。これほどの治癒魔法何て聞いたことも無ければ見た事も無いです。

それこそ物語などにしか出てこないぐらいに極められた治癒魔法だと思いました。

私の傷口に何か液体や水をかけ、器具で弄っていた時は何をしているのかと思いましたがそれも全部治療として意味のある行為だったのでしよう。

手足の欠損を治すなんて本当に神話や物語の話だとは思っていません。

だから繋がっている左足を見た時は本当に驚いた。彼は手足を生やしたのではなく繋げたのだと言っていたがそれも私からすれば大して変わらない気がします。

それから私は村人の治療を頼み、彼は見返りも要求せず、快く受け入れてくれた。

ああいや、正確には見返りは要求しましたが、リーヴオリの町へ自分の事を心配してくれている人達にイチロー様自身は無事だという事を伝えて欲しい、という事だけ。

寧ろこれで見返りとしていいものかとも思いましたが、この森の現状を考えれば確かに難しい事なのかもしれない。

しかも見返り、としてではなくお願い、と彼は言ったのです。

だから私達が断ろうと承諾しようと私の好きにしろ、という事。

でも私どころか村人全員の命の恩人をお願いを断る気はありませんでした。

彼が村人全員の治療が終わったのは丸々4日が過ぎてから。

村人の治療だけでなく食料の提供もして頂いたし、治療後に患者を放り出すのではなく全員を見て回り、薬を与えて回ったりもしていただきました。

見た事も聞いたことも無い食べ物が幾つもありましたがそれらはしつかりと食べられるもので普段私達が食べている物よりも美味しかったです。

まあ味付けが濃かったのですが、普段食べている物に影響された味覚の違いという事でしょう。

本当に有難かった。

でもイチロー様はこの村に来る前の死者と治療中に亡くなった事をとて悔しく、悲しそうにしていました。

それ等全てが終わった後に私の元を訪ねて来たイチロー様はとても疲れたように見ええました。それはそうでしょう。丸々4日間睡眠も取らずずっと私達の為に動き回ってくれていたのだから。

それでも私と話をして森の状況を聞いて手を貸してくれと言いました。

私はそんなイチロー様の前で泣いてしまいました。

彼はそんな私を困ったように必死に宥めていました。



それから村を守るための準備を始めたイチロー様は見た事のない武器をまた何も無い所から幾つも取り出して私達に使い方を教えました。

その前に地面にあちこちに伸びる溝、イチロー様は壕と言っていましたね。それを元気な怪我をしていなかった皆で掘りました。

班を分けて、それぞれに役割を与えて。

自信も戦う為の準備を進め、私も戦いに参加しました。

と言っても最前線で戦うのではなく、後方の安全な所でつうしん？を専門とする役割に着きました。

遠く離れた人に声を届けるといふ道具の扱いを任せられました。

もう本当にこれも神話や物語の話ではないですか。

いや、神話の中でも聞いた事が無いです。

彼が呼び出した武器はどれもこれも強力な物ばかり。

大きな音を立てて光を発しながら矢とは違い、金属でできた銃弾、という物をとんで

もない速度で撃ち出します。

銃、と呼ばれる武器でした。

銃は撃つ時に大きな音を出すので初めて聞いた時は思わず腰を抜かしてしまいました。た。

事前にイチロー様に注意されてはいたのですがここまで大きな音だとは思っていませんでしたからです。

周りに居た他の者も私と同じ様な反応。イチロー様はそんな私達を見て苦笑いをしていました。

中でも、一番大きな銃、イチロー様は8・8cm砲と言っていましたでしたがそれがとんでもない音を発しながらとんでもなく大きな砲弾を撃ち出します。

そしてまた腰を抜かしてしまいました。

村が再び魔獣や魔物に襲われた時、イチロー様も共に戦いました。

声を張り上げて指示を飛ばし、自身も役割をこなす。

私も忙しく後ろ姿を見ただけでしたがとても格好良かったです。

土竜が現れた時は本当に終わりだと思いました。

大きな砲弾も弾かれてしまう。

でもイチロー様を皆が信じていました。勿論私も信じていました。

無責任だという事は分かっていましたがそれでも縋るしかありませんでした。

するとイチロー様は何かを持って土竜に向かって走って行きました。

イチロー様が土竜に向かって何かを撃った時にあれほど硬く、どんな攻撃でも倒せなかった土竜の後ろ足が大きく抉れました。

同じ攻撃をもう片方の後ろ脚と両前足に加え、止めに首に向かって一撃。

イチロー様は土竜を討伐しました。

それから彼は、喜んでいる周りを嗜め、怪我人を運んで来て貰い治療を施したり、魔

獣や魔物の死体の片付けも全て手伝ってくれました。

それなのに魔獣や魔物の素材も、土竜の鱗も骨も何もいらなと言いました。

流石にそれはこちらの面目も経たなくなってしまうし、無理にでも受け取って貰いました。

そして死者の弔いや供養のための食事にも参加して頂きました。

そして漸く、イチロー様は泊まり宿として私の家に戻り、休み始めました。

本来村とは全く関係が無いのに、いえ、今は思いつ切り関わっているのですが。

今日まで彼は一番に誰よりも働いてくださったのですからゆつくりと数日は休んで欲しいと思うのですが、彼はロンバルティア王からこの広大な森を調査する事を命じられてきたと言っていました。

この村で1か月間丸々過ごさせてしまったのでそれは無理でしょう。

明日にはもうすぐにも調査を再開するのではないのでしょうか？

そう思いながら彼の背中を見ました。

夜、眠っているとイチロー様の眠っている部屋から大きな声が聞こえてきました。

その声はイチロー様の物だと断定出来ました。しかしその声は何処か怯えているような声で。

心配になった私はイチロー様の部屋を訪ねましたが返事がありません。失礼を承知で何かあった場合は大変なので入らせていただきました。

するとそこに居たのは、戦いの時の様な勇ましい顔や、何でも無い時に皆と話して笑っていた優しい顔では無く、何かに怯えて震えているイチロー様が居ました。

震えを隠す為に手を握りましたが私はしっかりと見ました。怯えて、手が震えているのを。それだけでなく、肩も小さく震えています。

何があつたのか聞きました。

彼曰く、悪夢を見たそうです。

内容は死者が彼を責めるといふもの。

もし、自分もつと良い指示を出せていたら死ぬ人は居なかつただろう、治療の時ももつとうまくやれていたら救えた人もいた筈だ、という考えが頭から離れなくてしょうがないのだそう。

そんなに悩む事なのですか？

普通ならばもつと誇るのが普通だと思うのですが、彼はそうではない様です。心がとても優しいのか、それとも他に何かあるのか。

ですが心が優しいのでしょうか。

確かにそれは確かに良い点なのでしょう。ですが同時に大きな弱点でもあるのです。だから今の様に自身に直接関わりが無い死者にもこうやって心を痛めてくれている。村の長としてはとても嬉しく思うけれど、一個人の心としては嬉しくくない。

今のままでイチロー様の心が自責の念に押しつぶされて壊れてしまいます。

村を救ってくれた恩人、私の命の恩人としてそれは見過ごせません。

ですから、少しだけ裏技を使う事にしましょう。

イチロー様の心はまだ壊れていない。だから裏技を使っても今ならまだ間に合う筈です。

そう思った私はイチロー様の頭を抱き締めて、目を瞑る様に言った。

そしてイチロー様に聞こえない様に相手を眠らせる為の呪文を唱えて、眠らせました。

抱き締めた頭は怯えから来るのか、とても小さくて幼子と変わらない様に感じました。

彼も誰もが憧れる様な完全無欠の英雄でもなんでも無い、ただ一人の人の子供なんです。辛いと思う事も悲しみや痛みを感じて泣くのです。

隣で支えてあげないといつか崩れてしまう。壊れてしまう。心と言うものはそんなものなのです。

だから今この時だけでも、出来ればこれからも。せめて私だけはイチロー様の心の支えになりましょう。

イチロー様は泣いているのか、鼻を吸る声が聞こえて来ます。

安心させる様に優しく、出来るだけ優しく、私は子供どころか夫もない身ですが母親が自身の子にする様に頭を暫く撫でていると、落ち着いたのか段々と嗚咽混じりの息が整って、規則正しい寝息に変わってきました。

完全に眠ったことを確認してから、もう一つ呪文を唱える。

この呪文はたった一度だけ、死んだ者の思いを感じ取れる呪文。死者から生者へその思いを伝えられる事は出来ませんが、その逆、生者から死者へ思いを伝える事は出来ません。

夢に現れてしまうほどに悩んでいるのなら、夢では無いのですが、良い意味の夢を見せません。こうすれば心は穏やかになるでしょう。

人によってはそれが毒になってしまう場合もありますが、イチロー様は恐らく大丈夫でしょう。

対象者への思いを死者が伝える。

これは本来有り得ない、有ってはならない事です。死んでいるのだから肉体が無いのですから言葉も喋れない。

ですが、これだけは特別。言い伝えではあの世の神が、死者を思い余りにも残された人達が悲しむものだから、この呪文を授けたと言います。

デメリットは1人1回しか使えません。本当にたった一度だけしか使えないという事です。死者に付き1人という訳では無く生者1人に付き一度だけ。

生きている内に一度だけ。それを使ってしまうばもう二度と同じ人には使う事が出



来ません。

ですからイチロー様はもう二度と誰か大切な人の思いを知りたいと思っても知ることは出来ません。ですが今ここで心が壊れてしまうよりはずっと、ずっと良い筈なのです。もしそれを望んでいなかったとしたらその時は地に頭を付けて謝りましょう。この身を差し出しましょう。

ああ、そうそう。この話から冥界という概念が生まれたとも言われています。

10分程するとそれでも震えていたイチロー様の震えは収まり、顔色も良くなりました。

それから私はイチロー様をベットの淵で座っている状態から寝かせて、布団を掛けました。

離れようとするといちロー様の手が私の服の裾を軽く握っていました。

そして顔をよく見るとやはり先程の涙の痕が頬を伝っていました。

申し訳ないですが戦いの時の顔や、怪我人を治療している時の顔とは違ってとても幼く感じ、そんな彼を見てどうにも庇護欲と言うか、母性と言うか……そう言う感情が込み上げて来てしまいました。

流石に同じベットに入る訳には行きませんが、裾を握っている手を優しく解いて椅

子を持って来てそこに座りました。そして裾の代わりに手を握る。さつきとは違い、穏やかな優しい顔ですやすやと眠っている。そんな顔を見ながら私も椅子に座って眠ってしまったっていました。そつと頭を何度か手を握っている逆の手で撫でました。

| | | | | side out |

| | | | | side コルネー・エルフラント |

オール大森林の調査に向かったイチローが帰って来なかった。今日までは帰って来る、と言っていた筈なのに。

夜、イチローの家の向かうと着いている筈の灯りは無く、家の扉を叩いても出てこない。昨日までなら直ぐに出て来たのだがどういふ訳だろうか？

そう首を捻っていた。

もしかすると帰って来るのが遅れているだけなのかもしれないと思って待っていた。だけど日が昇って来た頃になっても帰って来なかった。

兵舎に戻ってクレイドル団長の元へ報告する。

その日まではただ帰って来るのが遅れているだけなのだと思っていた。

しかし何日経っても帰って来ない。

レイフオード様の命令で毎日、イチローが空を飛ぶ乗り物を飛ばしていた、滑走路と言っていた場所とオール大森林の外縁部付近に兵を配置して帰りを待った。

レイフオード様もイチローには町を救って貰ったし、何よりイチロー程の人間を死なせるわけには行かないと思っていたのだろう。

何度か森へ直接捜索隊を送り込もうと言う話もち上がったが、イチロー程の人間が行方不明になる場所なのだ、送り込んだって何キロも進めずに魔獣や魔物の餌になってしまうだけだ。

そんな意見が出て悔しくてしようがなかったが諦めた。

だから待つことしか出来なかった。

兵舎の自室で私は膝を抱えイチローが帰って来ない事に怯え続けていた。毎日毎日夜になつては泣いていただけ。

少なくとも今の私には何か出来る事も無く、ただ泣くだけ。

そんな日々を過ごして3週間が経った。

すると大きな音を立てて団長が扉を叩いた。

「おい！イチローの行方が分かったぞ！」

団長が言った言葉の意味が最初は分からなかった。

呆けてしまい、肩を揺り動かされて漸く言葉の意味を飲み込んだ。

大慌てで団長に連れられて行くと、そこには6人のエルフがそこに居た。

どういふ訳だが皆目見当も付かず、頭を捻つて見るがイチローとエルフの繋がりが全く分からない。確かにオール大森林にはエルフ族の村があるが……

「エルフの皆さんは、ここに何の用で訪れたのですか？」

「私達はエルフ族の村長の命を受けた使者です」

「エルフ族村長の命？それはどういう事ですか？」

「イチロー様をご存知でしょうか？」

エルフからイチローと言う名前が出て来た時、一瞬で我を失った。

「イチローだと!? どういう事だ!? お前達何を知っている!？」

「コルネー! 気持ちちは分かるが落ち着け!」

大きな声で詰め寄り、問い詰めた。

団長に止められ、宥められ何とか平静を取り戻した。

いや、でもそもそもエルフとは全くの関係の無いイチローの名前がエルフの口から出て来たのだから、彼を知っている者ならば誰だつて驚くし、何か裏があるのではないかと疑ってしまうのは無理は無い。

その思いは団長やレイフォード様も同じだったのか厳しい目でエルフらを見ている。

そして口を開いた。

「疑ってしまうようで申し訳ないが、何故貴方方の口からイチローの名前が出て来るのですか? 少なくとも我々が把握している限りではエルフとの繋がりには無い筈です。ましてやオール大森林の中に住んでいる貴方方との繋がりなどある筈が無い」

「その通りです。事実私達とは全く何の関係もありませんでした」

「では何故でしょうか? それに彼の事を様付けで呼んでいる点も気になります」

「そうですね……まずイチロー様が村に来たのは16日程前です。それよりも5日前に森に狩りに出ていた同胞の面々が翼竜の群れに襲われました。その時に同胞を助けて

下さったのがイチロー様です」

「それと何の関係が……？イチローが此処に帰って来ていない事への説明になつていないと思うのですが」

「同胞を助けて頂いた時に、その者の話によれば空を飛ぶ何かで大空を駆け、翼竜の群れをいとも簡単に墮としていった、と聞いています」

その話を聞いてエルフの6人以外の私達は啞然とした。

いや、翼竜の群れを簡単に墮として行つた？いやいやいやいや！どういう訳だ!?

幾らイチローと言えども流星に翼竜の群れを墮とすなんてそんな芸当が出来る訳が……

……いや、アイツならやりかねんな。団長達も最初は有り得ないと思つたのだろうがあとから、「いや、アイツならやりかねないわ」と顔をなんだか心配しているけれどやはりなんか大丈夫そうなんじゃないか……？と思ひ始めているような……

まあ説明させてもらうと翼竜は、正確に言うると翼竜の群れは王都に駐留している5個騎士団の内の丸々1個を投入しなければ討伐は出来ない。

それですら危うい。騎士団は大きな被害を受けて尚、討伐に至るかどうかは疑問が残る。まあ群れの規模にもよるが、大きな群れともなれば最悪、騎士団が消滅するだけで済めばいい方だ。

そんな生物を一人で群れごと……？

なんだか私も今の話を聞いてなんか大丈夫そうな気がして来た。

いや、やっぱり心配だ。翼竜以外にも未知の魔物や魔獣が多く生息していると言うからな……

私達が一頻り悩んで落ち着いた頃、使者のエルフが口を開いた。

「……話を続けても？」

「あ、ああ、申し訳ない。続けてくれ」

「同胞を助けたイチロー様はその空を飛ぶ物が壊れてしまったらしく、空から降りていらっしやったとの事です。そして同胞と合流し、翼竜の肉と鱗を我らに分け与え、村を訪れたのです」

空から降りて来た、か。

イチローならば本当にやりかねないな。

空を飛ぶことも空から降りてくる事もイチローならばやれるだろう。

しかし何故未だに帰って来ていない？

普通ならば1日2日滞在するとしても10日前ぐらいには帰って来ている筈なのだ。

それは団長も同じことを思ったのか質問した。

「それが何故ここに帰って来ないと言う理由に繋がるんですか？普通ならそこから1日滞在するとしても10日も前に帰って来ている筈です」

「それは我々の村の現状のせいです」

「村の現状とは？何か問題でも？」

「我々の村は、1か月程前に魔獣や魔物の大軍に襲われたのです」

「……………魔獣や魔物の群れの襲撃か」

「はい…………」

彼はその時の村の現状を思っつか俯いた。

もし、オール大森林の魔獣や魔物の強さが私達の間で語られる強力な物ならば幾らあの森で生活しているエルフと言えども厳しいだろう。

「その襲撃の後にイチロー様は村を訪れました。彼が一番最初にやったことは村長の手当てでした。村長の怪我は重いものでした。その怪我の手当てが終わった後に村長の元を訪れると、骨が折れた腕は骨が繋がりに、目の周りにあった大きな傷は綺麗に消え、そして何よりも驚いたのは千切れた筈の左足が繋がっていたのです」

「千切れた足が繋がった…………?!？」

「はい。綺麗に、傷跡、繋ぎ目一つ無く」



「なんだそれは……信じられん……」

隣にいる団長が余りの驚きに小さな声でそう漏らした。

そう、本当に有り得ない。確かにイチローは治癒魔法が使える。だが治癒魔法は精々が疵を治す程度だ。

なのに千切れた足を繋げたなんて……

それはもう神話や御伽噺の話じゃないか。

「そしてイチロー様は、魔物や魔獣から村を守る為に戦い、傷付いた同胞を対価無しに手当てを施してくださいました。いえ、正確には対価を要求しました。対価として要求したのは、イチロー様が帰らない事で心配しているであろうご友人達へ自身の心配をして無事を祈ってくれている皆様に使者を出す事。たったそれだけでした」

「そうだったのか……」

「そして丸々4日、一睡も寝ずに怪我人の手当てを施し、それだけでなく温かい食事と綺麗な寝床も提供してくださいました」

「丸々4日も手当てして回ったのか。アイツらしいと言えばそうなのだろうな……」

団長は息を吐きながらそう言った。

確かに丘での戦いの時も治癒魔法を掛けて回っていたな。それに見た事が無い方法で治療も施していた。

「その後に我々はイチロー様の無事を皆様にご伝えるべく、村を出発しました」

「そうだったのですか……」

「その後の事は詳しくは知りませんが、村を守る為にお力を貸してくださると言ってお残りになられ、再び来るであろう魔獣や魔物の襲撃に備えているか、それとももう既に襲撃があつてそれを凌いでいるのかのどちらかでしょう」

「そう言うと6人は頭を下げた。」

「という事は彼らが知っている事はこれで終わりだという事だろう。」

その話が終わり、レイフォード様が感謝を伝え、町に滞在する事を進めたが村の様子が気になるのかそれを丁寧に断り、数日の滞在の後に村に向かって出発すると言った。

「それと、もう一つお知らせと言いますか、イチロー様自身が本当に無事である事、そして我々から不当な扱いを受けていないという事を証明する為にこれを我々に持たせました」

「そう言う」と使者の1人が懐から封筒を取り出した。

「そして私の前に立つとそれを差し出した。」

「イチロー・バイタークハイマツト様からコルネー・エルフラント様宛のお手紙を預かつ

ております。これをお届けに参りました」

私はその封筒を開くと、イチローが使用している武器の一部と肖像画にしては幾ら何でも色彩が綺麗で正確に鮮明に描かれている絵と手紙が入っていた。

絵を先ず取り出すと裏にこれは絵では無いがその場の風景を紙にそのまま写したものだ、と書かれていた。

その紙に写っていたイチローは行方不明になる前に浮かべていた優しい笑みを浮かべて一人で写っている物が1枚と、エルフの皆と写っている物が2枚。

それを見て私は、本当にイチローが無事である事を確認した。

エルフに限ってそんなことは無いと思っているが何処かでイチローに対して酷いことをしているんじゃないかとも思ったが、この紙に写っているイチローはそんな事をされている面々と共に居る中では絶対に浮かべられない笑みを浮かべていた。

それを思ったら安心してすぎて足の力が抜けてしまった。

床に座り込むと無事だという事が分かって、両目からポロポロと涙が溢れて来て止まらなかつた。

「イチロー様は、我々エルフ族の恩人です。決して一生を掛けても、何代に渡っても返せない程の大きな恩を受けました。彼が居なければ今頃はとつくに村は無くなり同胞は魔物や魔獣の餌食になっていたでしょう」

そう語るエルフの使者6人は、私でもちよつと行き過ぎなんじゃないかと思うほどにイチローを褒め称えていた。

兵舎の自室に戻り、手紙を開く。

そこには心配を掛けた事への謝罪と、イチロー自身の無事を伝える文が書かれていた。

他にもこれから暫くは帰れそうにないという事が書いてあった。

本当は何処かのタイミングで帰ろうとは思っていたがこの手紙が届き、尚且つイチローが此処に帰って来ていない時点では20日以上が経っている筈だからその時は森の調査を行っているか、村の防衛をしていると思うのでそうしたらそのままエルフの村を拠点にし調査等を続行する、と言う事も書かれていた。

まあ、この手紙が届いているこの時もまだ無事だとは限らないが少なくとも何も分か

らない状況よりはずっとマシだし、それにアイツがそう簡単にくたばる訳が無いからな。

手紙と絵の写った紙を見て安心した。

そして再び泣いてしまった。

この私がイチローが居なくなってしまうただけでこんなにも簡単にただの町娘の様になってしまうとは思っても居なかった。

そんな私を気遣ってくれたのか団長は2日ほど休暇を与えてくれた。

確かにイチローが居なくなつてから余り寝れていなかったからこれは有難かった。

そして2日間の休暇の後に私は職務に復帰した。結局団長やノーマン、レナードが発端で広まってしまい、同じ女性の兵士には良かったですね、と声を掛けられ男連中には良かったなという言葉と同時に軽く茶化して来た。

それから職務に復帰した私は心配をすれど何処か多分大丈夫だろうと思いつながら仕事をしていた。

でも何故武器の一部を入れたのか分からない。

あれを入れて何になるのだろうか？多分本当に自分だという事を伝えたかったのだろうがこれを入れなくても絵があれば十分だろうに……  
少しばかり首を傾げたりしたが……まあしかし、あれだな……早くイチローに会いたい。

そう思つて再びイチローに会える日を楽しみにしていた。

l l l l s i d e o u t |

## 裂け目

朝、起きると悩みは消えていた。

悩みが消えたと言うよりは、こう、何て言うんだらうな……分からないが取り敢えず悩みが消えたとしておこう。

記憶はエリカさんに頭を抱き締められて泣いた辺りで途切れているがその後、今のベットの隣に椅子に座って眠っているエリカさんが何かやってくれたんだらう。

どうやったのか分からないがどれだけ感謝しても足りないだらうな。

まあなんで手を握っているのか全く分からないがその辺は置いておこう。

取り敢えず、エリカさんをこのままにしておくわけにも行かないからどうするかな……エリカさんの部屋のベットに運んでおこう。

そつと抱き上げると身体は少しばかり冷えてしまっていた。

多分、俺が今こうして起きるまでの間ずつと隣に居てくれたのだらう。

エリカさんの部屋に運んでベットに寝かせて布団を掛ける。

気持ち良さそうに寝ているエリカさんはもう暫く起きることは無いだろう。さてと。

今の時間は8時か。

本日は今日すぐにもでも裂け目に向かいたいのだがまずは破壊された壕や銃座、砲座を復旧させなければならぬ。

俺が調査に向かっている間に魔物や魔獣からの襲撃が無いとは限らないし、俺が居なくとも俺が此処に帰って来るまでの間は最低限守り切って貰わないといけないからな。

そう言う訳でこの日から丸々2日使って壕や銃座の復旧を行った。

しかしこの際だから、と言う事でコンクリートを使用して大幅にアップグレードを施した。

8. 8cm砲座はコンクリートそのもので高さを10m程確保した。

そして砲弾自体はそれの真下に空間を作り、コンクリート製で広さは縦10m横一辺が20×25mの長方形。入口は階段付き。

そこに8. 8cm砲の榴弾、徹甲榴弾、硬芯徹甲弾をそれぞれ何発呼び出したか忘れてたぐらい大量に呼び出した。

それぞれ弾種ごとに分けて置いた。

可能な限り沢山置いておくために通路は60cmしか無く、かなり狭くなってしまう



た。

そして砲座から銃座に向かい緩やかな斜面を付け、排水に關しての問題を改善することに成功。壕は全てコンクリート製にして地面部分よりも20cm高くコンクリートで固め、雨が壕の中に流れ込まない様にした。

そして壕の天井は家の屋根の様に傾斜を付けて雨が外側に流れて行くようにし、しかしながら太陽光も取り入れられるよう、隙間を空けて浮かせた。本当は電気を使って灯りを確保しようとしたのだがそうすると発電機が必要になる。

発電機自体は良いのだが、発電機を動かす為の燃料が問題だった。

別にガソリンを呼び出して置けばいいのだが俺は裂け目の調査に丸々1カ月を予定しているのでそうなると夜間だけだとしてもとんでもない量になってしまうからやめた。

各区画に1か所ずつある弾薬補給所もさらに深く大きく掘り下げてコンクリートで上下左右を全て囲い扉の部分は鋼鉄製にし、置いておくことの出来る弾薬量は増えた。

コンクリート製の深さ8m、一辺の長さは15m×20mの長さの長方形になり、深さがかなりの物になってしまった為階段を設けた。

MG42とM2の弾薬だけでなく、万が一土竜が再び現れた時の為に110mm個人携帯用対戦車榴弾も呼び出した。

扱いに関してはしっかりと少数の人間になってしまったが教えた。

トーチカや壕、砲座の中では絶対に使用しない事。使用する場合は必ずトーチカ、壕、砲座の外に出る事、後ろに人がいる状態では絶対に撃つてはいけないう事、言う事を厳命した。

そして小型の魔物や魔獣の侵入を防ぐ為に有刺鉄線で村の周囲をしつかりと囲った。屋根型鉄条網で、ただの柵型鉄条網よりも強度は高く、多少の重量物の衝突程度では越えられない。

ジャンプして越えようにも屋根の形をしているので向こう側にも有刺鉄線が張られているから自分から突っ込んでいく事になる。

高さは通常よりも高くし、2mの高さになっていて、奥行きは6mにもなる。

奥行きはジャンプして越えようとしても越えられないようにする為に広く取った。

有刺鉄線は砲撃や航空機からの爆撃でも爆風などは隙間が空いている為に排除をすることが難しく、重機や戦車で踏み越えるか人力で切って進むかという手段を取るしかない。

あとは有刺鉄線の上に板など刺の部分が貫通しないものを置きその上を通ると言う

方法があるが魔物や魔獣にそんな知恵は回らないだろうからその点の心配は要らない。あるとすれば魔物や魔獣の死体が積み重なってそれを足掛かりに越えて来る事なのだが大丈夫だろう。

砲座から眺めてみたのだが……

もうほぼほぼ完璧な状態に近い防御陣地になってしまったが必要な物だと考えればしょうがない。

……よし、これで全ての備えが終わったので明日には出発する事にしよう。

「エリカさん、明日裂け目に向かって出発することに」

「そうですか……分かりました」

「出来れば朝の内に出発したいと思ってる」

「……私も付いて行きましょうか？」

エリカさんは付いて来ようかと聞いてきた。

冗談だと思いが何となく目が本気な気がするのは多分間違いない。

「いやいや、村の事もあるでしょ」

「それもそうですね……ついて行きたいのは山々ですがこればかりは仕方が無いですね」

「それに移動方法が1人で移動する為の物なので他に誰かを連れて行くことが出来ないから」

結構簡単にあきらめてくれたのだが一人で行くと言った事が問題だった。

「まさか1人で行く気ですか？」

「そうだけど……」

「何かあつた時にどうするんですか？」

と、2時間ほど問答を繰り返して何とか納得してもらった。

いや、1人の方が色々と好都合なんだよ。身を守るにしてもなんにしても。

2人で行動するとバイクは使えなくなるしそうなると四輪車なのだがハンヴェーでは小回りが利きずらい。

森の中じゃあ致命的だ。

何かに襲われた時に逃げられなくなってしまう。

そう言う訳で翌朝。

俺はバイクを呼び出す。勿論軍用だが元は民間用のオフロードを軍用に改造したりしてあるのであくまでもベースは民間用のオフロードバイクだ。

車種はKLX250。

説明欄には陸上自衛隊が使用していると書いてあつたな。最高速度は約100km/hも出るので十分に速いがそれはあくまでも整地、舗装された道路であつたりする場合だ。

今回走るのは不整地でしかも森の中という訳だから安全を最優先に考えると速度は30km/h出せばいいかもしれない。

まあそれでも予定している2日より随分と速く到着出来るだろうな。

そう言う訳で出発だ。

M4にスリングを取り付け背負い、M9は何時もの様にレッグホルスターに入れる。しっかりとベストも着こみ、マガジンもしっかりと入れておく。

あとは関節部分にプロテクターと頭にはヘルメットを被る。

これで事故つても多少ならば大丈夫だろう。

「それじゃあ行つて来ます」

「イチロー様、どうか気を付けて。本当に何かがあるか分からないのですから」

態々村人総出で見送りに来てくれた。

そしてペコペコと頭を何度も下げながらの出発となった。

村を出発して1時間。

予想通り地面は凸凹で走るたびに、と言うか今現在も上下にガタガタと揺れまくっている。しかも悪路だからそこまで速度を出す事が出来ない。

人間の平均的な歩く速度は5〜6 km/hだがあくまでもこれは舗装された道を一般人が歩いた速度だ。

軍人がそれらを行う場合、1 km進むのに休憩の時間を入れて凡そ15分を基準としている。

アップダウンは無いとは言っても木の根などが邪魔をして徒歩とは言っても20分で1km進めれば良い方かもしれない。

俺は今現在15km/hでバイクを走らせているが歩くよりもマシという感じだな。しかしながらこれは思ったよりも時間が掛かるな……

座って運転すると振動で尻が痛いし、立って運転すると足が疲れるし、振動を弱めるために足をサスペンションの様にしているがそれも疲れる。

どちらにしろ安全を最優先に考えている為に1時間進んだら1時間の休息を挟むことにしている。

単純計算で1日12時間進むとしても180kmだが睡眠時間を7時間引くと5時間だが75kmしか進めないという事になる。

裂け目まで約300kmあるからこのままだと4日掛かってしまう事になる。

これは予定日数の倍になってしまう。

もつと距離を稼ぐには速度を上げるか、休憩時間を減らすかの二択になる訳だが……速度を上げるのは無しだ。これ以上速度を出すとバランスを崩した時に体勢を立て直せなくなる。休憩時間を減らすとしても疲労が溜まれば後々に響いて来るのは間違いない。先を見据えるならば今のままで進むしかないな。

日数を無駄にしてしまうのは仕方が無い、このままで進もう。

2日後、大体半分の距離まで来た。

地図作成で印刷した地図を見ると大体150km進んでいる。

その道中、特に変わった事は無かった。

強いて言えば休憩中に何度か魔物か魔獣が接近して来たぐらいだが問題は無かった。

夜間寝ている時はこの森のデカイ木の上に登って寝ている。高さは35m程の位置だ。ロープで吊って、良さそうな枝の上に寝転ぶ。落ちないように他の枝にしつかりとロープを縛って寝がえりで落ちたとしても宙吊りになるようにしている。

まあ今の所はそんな事にはなっていないが。しかしながら少なくとも地面で寝ているよりは襲われる可能性は低く、安全だ。

だが空からの、翼竜や飛竜だと少々危険だ。

まあ今の所確認していないから大丈夫だろう。

3日目の今日も今日とてバイクに跨って進む。



しかし裂け目に近付くにつれてどんどん生物の気配と言うか、そう言う物が感じられなくなった。

やはり裂け目に何かあるのは確かなようだな。

4日目、漸く裂け目に到着した。

いやあ……なんつー光景だ……

幅は凡そ40kmにも及び、底の深さはレーザー距離計を使った所、約3900mにもなる事が分かった。これだけ広いと裂け目と言うよりは盆地と言った方がしっくりくる感じがするな。

正直この値を見た時に俺の正気を疑った。

だつて深さが4000mに近いとか頭おかしいだろ。

崖は切り立っており、殆ど垂直だ。

これを降りるのは一苦労するな……

これ、重力とかどうなっているんだらうか？

まあそこら辺は追々確かめる事にしよう。今は何も確かめる手段が無いからな。

それとは全く別の話だが、この裂け目、何かいる気がする。

確かに周辺に翼竜や飛竜と言った存在は双眼鏡などで覗いても一匹も見えないが、それとは別に何かデカい、それらよりもずっと強い何か居る気がする。

が、取り敢えずの所今日は休憩だ。

翌朝、日の出と共に起きて、先ず行ったのはロープ同士を繋げて長さを確保する事だった。

一番長いロープでも300メートルしかなく、一番底に降りるとしても最低13本の連結をしなければならぬ。

呼び出したロープの束は15本。

一応念の為に2つ多めに呼び出して置いたのだ。まあ重りという意味合いもあるし、木に固定するための長さも必要だからだ。

ロープ同士の結び方は「二重テグス結び」という結び方だ。

これはロツククライミングなどで良く使用される結び方らしく、強固なものだ。

同じ太さや材質同士の結び方であれば強く結べるのだが太さが違っていたりすると解けやすい。その点俺は材質も太さも同じなので問題無いだろう。

それら全てを繋げ終えたのは1時間が経ってからだった。

そしてそのロープの端を木に巻き付け結び固定する。

その後、ロープに付ける降下用の器具を取り付けた。

流石にと言うか、普通に4000mもの高さを腕と足だけで支えて降りて行くのは無理だ。途中で間違い無く力尽きるだろう。

そしてそれら全ての準備を終えて、ロープを裂け目向かって落とした。長さ4500mのロープは簡単に落ちて行った。

念の為にロープと地面の間に厚めのタオルを置いて固定しておいた。

これでロープが切れる可能性が低くなったと思う。

9。身に着けている装具は何時も通りで背中にはM4を背負い、レッグホルスターにM

それにベストとM4用マガジン6本を収納し、M9用マガジンを2本入れてある。

頭には意味は無いと思うが落ちた時用にヘルメットを被り、膝や肘にはプロテクターを身に付けている。

正直な所を言えば、建物の屋上からの降下ならばまだしも、4000mの崖を降下するのこれほどの重装備を身に付けて降りるのはただの馬鹿だと思う。

ただ歩くだけなら何てことは無い重量だが崖の一番上からの降下じゃあただ足枷にしかない。

だが万が一、この裂け目に生息していた翼竜や飛竜が逃げ出すほどのナニカが居るとしたらそれに襲われた時に何も武器を携行していないのとしているのじゃ訳が違う。

即座に反撃は出来なくなるし、何より『武器を持っていて反撃が出来る』という心理的安心を得られるのが大きい。

確かに重いが致し方ない。

そしてついに降下を始めた。

降下を始めて200mくらいは土だったり土が固まっているような地層が続いたがそれ以降は岩で、最初の200mは足場が崩れたりして梃子摺ったが岩になれば崩れることも無く安定して降りて行く事が出来た。

ただ気になるのがあちらこちらに直径が10mにもなる穴が幾つも空いていたのは気になる。これも何かの魔物か魔獣が関係しているのだろうか？

これも時間があれば調べてみよう。

見た感じかなり深い所まで続いているな。一旦入って懐中電灯を呼び出して幾らか進んでみたが全くと言っていい程に先が見えない。

その時点で諦めて引き返し降下に戻った。

あとは気になる事と言えば本当に生物の気配が全く無い事だ。

翼竜や飛竜は聞いているから分かつてはいたが、それ以外の、魔獣や魔物では無く普通の野鳥なんかも全くと言っていい程に居ない。

動物だけでは無く虫も何もいない。

普通なら蟻や、羽虫なんかが飛んでいたりしていても良いものなのだが……

取り敢えず周りを見渡したが本当に何もいない。何も無い。

崖には所々に草が生えていたりするぐらいか。

それもかなりまばらなのだが、底は本当に何も無い。荒涼とした光景が向こうの崖まで続いている事だろう。

しかし植物体系を抜いて考えて見てもこの辺り一帯の雰囲気がおかしい。やはり全く普通じゃない事が起きているんだろう。

4時間後、漸く2000m程降下した。

この分ならあと4時間で降り切る事が出来るだろうが、その前に250mくらい下にある穴で遅めだが昼食を摂ろう。

ついでに休憩もするか。

4時間もぶっ続けで降りていたからかなり疲れた。昼食を摂ったら暫く休憩するか。軽く昼寝でもしよう。結構姿勢の保持の為に足、それとロープを握っている手とそれを支えていた腕も結構限界だ。

「ふう……」

思わず一息吐いてしまった。

いやいや、2000mもロープ降下するなんて前代未聞だと思っただが。だがこうでもしないと降りれないからな……諦めよう。

そして昼飯を呼び出す。

何が良いかな……この前、エルフロントさんが食事を作ってくれたおかげで食べなかつたスパイシーチキンと豚の角煮を呼び出そう。

そして白米のパックも呼び出す。

これら全ては温めればすぐに食べられる。なんだっけか、水を入れると沸騰するやつを呼び出して全部一つづつ放り込んで温める。

「痛エ……」

腕だけでなく手の平にも痛みが走っていた。グローブを外して見てみると手の平の皮が剥けてしまっている。

流石にこの状態で色々と作業を進めて行くのはキツイから自身に治癒魔法を掛ける。すると手の平の？けてしまっていた皮がみるみると治り始めた。

誰かに掛けていてそれを見ていたことはあるが自分に掛けてたのは初めてだ……

何というかこう、俺は基本的に怪我をすることが無い。そりゃ銃を使つて弓よりも遙か遠くから狙撃をして相手が俺に気が付く前に殺す事が出来る。一方的にやれるのだから怪我をする訳が無い。まあ偶に腕を出していて気か何かに擦れて切傷が出来る事があるがあれぐらいならば治癒魔法を掛ける必要すら無い。だから自分に掛けるのは実は初めてだったりする。

感想は簡単に言えば、何というか不思議な感覚だな。

こう、手の平に向かって別の部分に体力が移動しているような感じだ。何と言え

いんだらう？ 本当に変な感じだな、不思議だ、としか言えない。

まあそんな事をしている間にあっさり手の平の皮は治っていた。

温めている飯はまだ出来ておらず、なんだか手持ち無沙汰になった気分だな。

双眼鏡を呼び出して覗いてみると生物の影すら存在しない。見ると延々と荒涼とした景色が続くばかりで本当に何も無い。多少小高い丘の様になっていてそれが、ガレ場となつて在ったりするが本当に何も無い。

しかしながらこういう場所でも緑のあるエリアという物は存在する様でかなり遠隔にだがオアシスの様なものがあるな。

もしかするとあの辺には生物がいるかもしれない。

今の所は崖を降り切つてそこを目指そう。あと気になると言えばあの一際所じやなくデカイ小山だな。いやもうあれは小山じゃなくて山だな。それも結構デカイ山だ。

今扱っている望遠鏡じゃ詳しく見る事が出来ないが、他の小山の様にガレ場の様な斜面では無くゴツゴツしては居るが何処か岩とは違う様な感じがするのは気のせいだろうか？

目下はオアシス付近とあのデカイ山を調べるか。

と、昼飯が出来たみたいだな。そうしたら腹ごしらえだな。



温めていた白米とスパイシーチキン、それと豚の角煮を温め袋の中から取り出し袋を開けて食べ始める。

うん、何とか美味いがエルフラントさんの作ってくれる食事程ではないとしか言えないな。

そのまま当然俺一人しかない訳だから話す相手も居なく、黙々と食べ進める。

一人で食べているから当然食べ終わるのは早い。

15分程で食べ終わり、30分程食休みしながら双眼鏡を覗き続ける。

そしたら昼寝だ。周りどころかこの裂け目一帯には生物はいないから昼寝をしても問題は無いだろう。

一旦腕時計を見てみると既に3時47分になっていた。

……よし、今日はこの穴をキャンプにしよう。

このまま昼寝をしてから降下するにしても、昼寝をしないで降下を続けるにしても降りている途中に太陽が完全に落ちてしまう。

あと2時間半もすれば暗くなり、3時間もすれば真つ暗闇だろう。

という事はその真つ暗闇の中の足元が覚束無い崖を降りて行くのは勘弁願いたい。

そう言う訳で崖を降りるのはここまでにしておこう。

なのでこの穴で今日はゆっくり休もう。だから穴の中に夜に備えてランプを呼び出

しておいて、あとは寝袋を呼び出しておく。

そして日が暮れるまでは双眼鏡を覗いて出来る限り情報を集めていた。そこでふと思ったのだ。

もし生物が居るのであれば赤外線望遠鏡、所謂サーモグラフィというやつで捉えられるんじゃないかと。

そう言う訳で夜になるまでは双眼鏡を覗いて夜になってから赤外線望遠鏡を呼び出し覗いてみる。ランプを手元に置いて覗いて電気を消す。

先ずはそれぞれのオアシス付近を覗いてみた。

うーん……どうにも動物や魔物、魔獣は居そうにないな……

最大倍率で覗いてみるが熱源は何処にもない。本当に何も無いのだ。

オアシスの周りに生えているのは随分と背丈が低い木ばかり。森に生えていた巨木が60mと言う大きさが恐らくあの木々は精々が10m程しか無く、あれじゃあ飛竜や翼竜、ましてや土竜なんかじゃ絶対に姿を隠せるような物ではない。

他のオアシスも覗いてみたがやはり何もいない。だからこの裂け目には本当に何の生物も居ないのだろう。

全体的に見渡してみたが何も無かった。

ただ、1つ分かったのが細い、本当に細い小川が1本流れている事だった。

他に何か大きな手掛かりがあるかもしれないと期待していたのだが……これ以上は何も得られそうもないな。

小川が流れているという事実が分かっただけ良しとしよう。

諦めて赤外線望遠鏡から顔を離して格納する。

ランプを点けて腕時計を見ると既に9時を過ぎていた。という事は5時間以上ずっと双眼鏡や赤外線望遠鏡を見て居た事になる。

その事実には驚きながらも、地図を取り出して昼間に調査をしようと決めたオアシスと山に印をつける。

魔力を流せば立体的にホログラムの様に浮かび上がる。流石に道案内機能は付いていないが、その印の方角を知らせる機能は付いていた。なので印をつけたオアシスや山の道中で迷子になるなんてハマをやらかさなくて済みそうだ。

距離は……一番近いオアシスが29km、か。

この裂け目全体はギリギリマップピングされていた。向こう側の崖の一番上から森に向かって2km地点までの、本当にギリギリのラインだ。

裂け目のマップピングがなされてなかったら本当に調査に梃子搦るところだった。

それらの作業を終え、ルートを確認し、身体を拭いて寝袋に入った。

するとかなり疲れていたのか簡単に眠る事が出来た。

朝、穴に差し込む光で目が覚める。

直ぐに起き上がり、顔を呼び出した水で洗い流し完全に目を覚ます。

そしてすぐに朝食の準備に取り掛かった。と言つても水を入れて温まるのを待つだけなのだが。昨日の内にやって置いたルート確認をもう一度行い、温まるのを待つ。

そして出来た朝食を食べる。

因みにメニューは中華丼。美味かった。

朝食を食べ終え、装備を身に着けて昨日同様崖を下つて行く。

4時間後、一番底に到着した。

このロープはそのままにしておこう。

帰る時に崖を上る必要があるから、回収してしまうと登れなくなってしまうからな。

そしてこのロープの位置を地図に書き込んでおく。  
後々どこだか分からなくなり探し回らなくても良い様に。

降りて切って周りを見ると、地面は岩のような感じでその上に砂が多少かかっている  
と言う感じだった。木々は一本も無く、こういう場所に生えていそうなサボテンや樹高  
の低い木もこの付近には見当たらない。

そう言う訳でハンヴィーを呼び出して跨り一番近いオアシスに向かって走り出す。

森の中とは違い、木なんて無いし普通に走り回れるからな。

30 km/h のスピードでオアシスに向かって進む。

途中、樹高の低い葉が無く枝ばかりの様な木はポツリポツリと見たがそれ以外は何も  
無かった。

ハンヴィーを走らせる事約1時間。

オアシスに到着した。そこには本当にオアシスというような感じの光景が広がって  
いた。生えている木はヤシの木とかでは無いが。

ハンヴィーを降りて歩いて探索する。特に何かあるという訳では無かった。本当に生物が俺以外居ないのだ。

それから2時間程調べたが此処には何か森の異変が分かる様な事に繋がる物は何も無かった。見落としが無い様に結構念入りに調べた筈なのだが……

何かを通った後も無く、獣道の様な物はあったがここ暫くの間一切使われた様子が無い。恐らく異変が起きた時から一切使われなくなったのだろう。雑草が生えてきているから見つけるのも一苦勞だった。

切り上げて他のオアシスにも行って見たが何処も同じような感じだった。

と言ってもレイの山を中心に60km程の範囲にあった5つだけしか見ていないが他にも同じような感じだろう。しかしながら2つ、見つけた物がある。

それがあったのは例の山の近くにあったオアシスだが、何かの巨大な足跡のような物があった。正確には足跡と何かを引きずったような跡だ。驚いた事にその足跡の大きさは半端者くらいデカく、直径が10mにもなるうかという大きさだった。そしてその足跡の間隔から見ると2足歩行だと思われるのだが詳しい事は分からない。

その引きずった跡と言うのもかなり太かった。もしこの2つを有する生物がいると

したら全長や体高と言った物がどれほどの大きさになるのかは分からないがかなりの大きさになる。それこそ土竜なんて目じやないぐらいに。最低でも土竜の倍の大きさだ。

しかも獣道のように使われたあとが暫く無い、という訳では無く定期的にここを往来しているようなのだ。

一度だけしか通っていないのなら足跡や尻尾の跡が綺麗すぎるし、何よりも足跡が余りにも不規則に散らばっている事だ。

一度通っただけなら行きと帰りの分だけしか残っていない筈なのに、全く同じ場所に足跡が点在するのは何度もここを往復していると言う事の何よりの証拠だ。

しかもこの足跡や尻尾の跡の主は全く同じ場所しか通っていないのだ。とするとこの足跡の主は複数個体では無く1個体だけの可能性が高い。足跡の大きさを計っても全て同じ大きさだった。ランダムに選んで計ったのにも関わらず、だ。

そして反対側のオアシスを調べてみたらそこには足跡も尻尾の跡も何も無い。他と変わらず荒れ果てた獣道があるだけ。これを考えると足跡の主は1つのオアシス以外には利用していない事になる。

その利用していると思われるオアシスは他と比べるとオアシス全体の大きさは他と大して変わらないのだが池の大きさが他のよりもずっと大きいのだ。普通ならばそれ

に比例してオアシス全体も大きくなっていいと思うのだがそれは何故なのか分からない。  
い。

取り敢えず分かった事を纏めると次のようになる。

「この裂け目に生物はいない」

「居るのは俺とまだ見ぬ巨大生物? だけ」

「巨大生物は複数個体では無く1個体のみだと思われる」

「巨大生物は1つのオアシスしか利用していない」

「そしてその巨大生物はまだ近辺に居る」

このぐらいだろうか

そして不安事項というか、懸念すべきなのは俺が調べようとしている山の方向に向かつてこの足跡と尻尾の跡は続いている事だ。

ただ山の方向、と言うだけなら問題は無いのだが（いや、あるにはあるがレベルが違



うのだ)、その伸びている方向がピッタリ、寸分違わず山に向かっているとなれば話は別だ。

これが何を意味してどう関係しているのか分からないがあこの山か、もしくはその方角に何かがあるとみて間違いない。そうなればやることは決まっている。

明日はあの山の調査をする。

本当は今すぐにも向かいたいのだが今日残された時間では足り無さそうだから明日にするのだ。だから残りの時間は他に何か無いか調べる事にする。

夜、俺は足跡や尻尾の跡があつたオアシスとは別のオアシスにテントを張っていた。

あのオアシスだと想定される巨大生物がやってきた時に敵だと認識されてしまえば俺に勝ち目は無い。だから離れた場所にテントを張つたのだ。

食事も摂つたし、池で身体を洗う事も出来た。

さあ、明日の山の調査に備えてもう今日は寝よう。

そしてテントの中で寝袋に包まり、俺は眠つた。

## 山の正体

山の調査をすると決めた翌朝。

直ぐに丘に向かう準備をする。食事を摂ってM4やM9と言った武器の確認と、テント等の物品を格納しハンヴィーを呼び出して走り出す。相変わらず荒涼とした光景ばかりで本当に何も無い。

ああ、そうそう。昨日の夜の事だが特に何か問題があったわけでは無く、極々平穏と言うか、寧ろ不気味過ぎるぐらい静かな夜だった。

本当に俺以外の生物は居ないのか虫の鳴き声も何も聞こえなかった。本当に無音、俺の息遣いや食事などの作業をする音しか聞こえなかった。

生物の息遣いが全く感じられない、というのはこう言う事なのだろうか？でも何処か視線を感じたと言うか、何かに見られているような感覚があったのだがあれは何なのだろうか？寂しすぎて俺が何も無いのに感じていただけなのかもしれない。

と、件の足跡などを見つけたオアシスに到着だ。

足跡と尻尾の跡を一応確認しておこう。そう思つて立ち寄つてみたのだ。するとどうだ？ 足跡が増えているじゃないか。

「おいおい、マジかよ……」

思わず声を上げてしまったがそれも仕方が無い。

と言うのも、足跡と尻尾の跡が増えているという事は昨日俺が此処を去つた後にこのオアシスにこの足跡と尻尾の跡の主がやってきたという事なのだ。

水辺に近い足跡の土も乾いていて来たのはかなり前になる。

足跡の向かう先はやはり同じ方向だ。あの山の方向に向かつて伸びている。

まあそれらを色々と調べてみたが足跡や尻尾の跡が増えたぐらいで特に変わつていないことは無い。本職の調査員じゃないから分からないが特段変わつていない所は無さそうだ。

「ん……？」

オアシスの中心にある水辺の水位が低くなつていないか？

いや、気のせいかな？……いや、実際低くなつていないな。どういふ事だ？

多分、足跡と尻尾の跡の主が飲んだのだろうか？

どういふ訳だか分からないがまあ飲んだという説が濃厚だろうな。

本当かどうかは分からないがその内調査を進めて行けば分かる事だろう。

オアシスから引き揚げて山に向かう。

ハンヴィーを走らせる事十数分。

近付い手来るにつれてどんどん大きさが際立つてくる。

だが実際に山、と言つてはいるがそこまで高いものでは無く、砂の山の真ん中から大きな一枚岩のような物が突き出ているような感じだ。

高さもそこまで高くは無い。100メートルあるかどうかと言つた所だ。それでも俺からすれば十分に見上げなければならぬ程の大きさなのだが。特にこの裂け目ではアレほど大きい山は無いので実際の高さよりも大きく感じられる。

そう言う訳岩の部分の真下の所に来た。

「いやはや、こんなにデカイ一枚岩なんて見た事が無いぞ……」

その岩はとても大きく、そしてとんでもないぐらい生命力に溢れている。パワーストーンか何かか？まあそこら辺はどうでも良い。

周囲を見て回ると、オアシスから続いている足跡と尻尾の跡が此処で途切れているのがやはり気になる。前日にあのオアシスからしか足跡と尻尾の跡が伸びていないという点が気になったがここに来てから余計におかしいと感じる様になった。

あと強いて言うならばここだけ砂地であり、そして気温が高いと思われる事ぐらいだろうか。

他の場所は砂と岩が混ざったような感じなのだが此処は本当に砂しかない。

気温が高いと言うよりは砂から発せられている熱の影響だ。砂を触ってみると熱くも無く、しかしながら低い訳では無い丁度良い温度だ。大体35〜40。前後と言った所だろうか。風呂の温度としては最高だな。

まあそんな事はどうでも良い。問題はこの岩だ。この岩、赤外線望遠鏡では反応しなかったのに熱を発しているのだ。一体全体、どうなっているんだ？

どうすればこんなにも巨大な岩が赤外線望遠鏡（サーモグラフィ）に発した熱を感じられずに居られるんだ？なんらかの魔法か？それともっと別の方法が？

触ってみた所、そこまで熱くは無いが砂よりも10。程高い50。ほどだ。素手で触れば多少火傷するかもしれないがグローブをして触れば問題は無い。

しかしどうする？この岩の正体を探ろうにも周りをグルグル歩くだけじゃ何も分からないし、只見上げているだけだ。

……登ってみるか？

幸い、足場となりそうなでっぱりや溝は沢山あるから登れそうだ。

あの12〜4 m程の場所にある突起にロープをかけて身体を登ればもつと楽に行け

そうだ。同じ様な突起はあちらこちらに点在しているからそれを伝って行けば……

よし、それじゃあ、登るとしよう。

裂け目に降りて来た時と長さは違うが同じロープを呼び出し、それを突起に引つ掛けるために思いつ切り投げる。

すると今回は一発で上手く行つた。本当は地面のどこかにその端を結んでおけるよな木などがあれば楽なんだが今回はそんなものは無い。

だから引つ掛ける為の鉤を取り付けて登ってみようと思う。

何度か強く引つ張ってみると外れない。

これなら行けそうだ、そう思いジャンプしながらロープに飛びついた。だが残念な事にその鉤は全体重をかけた瞬間に外れてしまい、一緒になって落下してしまった。思わず尻を打ち付けてしまい痛みで悶絶した。

「いつてて……まさか外れるとはな……」

そう呟きながら何度か試してみたが引つ掛ける為の溝が浅いのかどうにもうまくいかない。

仕方ない、別の手段を探そう。

再度登るための手段を模索する。

鉤では無理だった。こうなったら杭を打ち込んでそこにロープを固定しよう。最初からそうすればよかった。

少しの後悔と共に杭とハンマーを呼び出して杭を打ち込む。

カーン、カーン、カーンと周囲に音が響き渡る。

しかし随分と硬いなこの岩。全然刺さらないぞ。

そして暫くして漸く杭を打ち終わるときつきと同じ様にロープを投げて端を杭に無心で固定する。そして反対側から登り始める。足を壁に立て、腕でロープを引っ張りながら登り進める。

突起の所まで登り切ると、更に上にある突起に対して先程と同じ様にして登っている。

上に行けば行くほど岩の硬さが柔らかくなっていった。まあ砂岩みたいなものなのか？詳しい事は専門家じゃないから分からないが。

頂上付近に登ってきた時に、下に居た時よりも若干だがこの辺の気温とこの岩自体の温度が上がった事に気が付いた。試しに岩を触ってみる。岩の表面温度はだいたい55〜60。と言った感じだ。赤外線カメラや赤外線望遠鏡で見ても分からないので手で直接触るしかない。触ってみるとまあ例に漏れず熱かった。

しっかし本当にこの岩はどうなっているんだ？

何故熱を発しているのに熱感知センサーに映らない？

何故足跡と尻尾の跡がここまでしか続いていなく、ここで途切れている？

ウンウンと頭を捻るがどうも答えは出てこない。

すると、足元が少しばかり揺れた。

「おっ……っ」と

グラグラッ、こんな感じに揺れたのだがそれはすぐに収まり何事も無かったかのように再び平穏が訪れる。地震か。

さて、どうするべきか？

これ以上大きな地震が来た場合ここに居ては危ない。しかしながら起きるとは限らないしな……このまま調査を続けるべきか、それとも降りた方が良いのか。

しかし怪我をしてはどうもこうも無いからな。ロープと杭はそのままにしておいて一旦降りよう。

途中、何度か揺れた。回数が増えるたびに強くなっていき最後の方は本気で振り落とされるかと思った。



そして地面に降りてふう……と一息吐きながら岩をぺたぺたと触っていた時、再びグラとかなり強く揺れた。

ただし、岩だけが揺れた。

「は……？」

思わず声を出してしまいうぐらい驚愕だった。

だって岩は思いつきりグラグラとかなり揺れているのに何故か地面は一切全く揺れていないのだから、そんな事が起きれば俺以外の誰だって驚くに決まっている。

すると揺れ動いていた岩は何かゴゴゴゴゴゴ……！と言った感じに動き出した。

「おいおいおいおい?!?!? 本当にどうなってるんだよ!!!」

大慌てでその場を離れる。

何度か転びそうになりながらその場から離れると山はどんどん大きく動き始める。

ものの十数秒で山の全容が分かった。

これ山でも岩でも砂でもない、馬鹿デカイ生き物だ。

それもエルフの村で戦った土竜なんか小さく思えるぐらいのデカさだ。

全高は土竜の3倍以上、全長は4〜5倍以上。

四足歩行で全身を土竜以上の大きさの鱗で覆われているその姿は土竜なんかとは全く似ても似つかない。

すると同じく馬鹿デカイ顔をキョロキョロとあちこちに向けている。

何かを探しているのか？探しているとすれば俺だろうな。自身の鱗に杭を打ち込んで登りやがった俺を探しているんだろう。

M4やM9は手元にあるがこんな豆鉄砲じゃ牽制にすらならなさそうだ。まあそれでも無いよりはマシか？

M4のグリップを握り安全装置を解除、連射に切り替える。

構えたいが下手に敵意を向けるとどうなるか分からないしバレるかもしれない。

なんとかして逃げたいがこれ程デカイと遠くへ行けば行くほど寧ろ見つかる可能性が高くなる。足元でじっとしているのが吉だろう。そこまで首の可動範囲は広くない筈だ。ならば今いる所から動かずにじっとしていればいい。

と、そう思ったのだが、思っていたよりも首の長さで可動範囲が大きかったのだ。頭だけでなく首全体を動かしている。これは……バレるな。

今からじゃこいつの真後ろに回り込むことも出来ない。

足元に居た俺の存在に気が付いたこのデカイ何かは俺をぎろり、と大きな眼で見た。そして大口を開けて、喰われるか!?!と思いい効かないと分かっているM4を向けた瞬間、これまた予想外過ぎる出来事が起きた。

『ふむ、気のせいでは無かったか。さて、お前は何者だ?』  
「!?…………!?」

喋ったのだ。目の前にあるこのデカイ獯猛そのものと言つても良い様な口と牙を  
持っている存在が口を動かしながら。

……喋りやがった!?嘘だろ!?

余りにも驚きすぎて声が出ない。ど、どうすればいい!?俺は何と答えれば良いんだ!?  
『ふむ、驚いて答えるどころではなさそうだな……』

そう一人?一匹か。一匹納得し、器用にうんうんと頷いている。

いやそうじゃないだろ!?もつとこう、その、なんかあるだろ!?(錯乱中)

『もしかすると言葉が通じていない?いやしかし言語は変わっていない筈なのだがなあ  
……昼寝でもしようと思つて眠つたのが……どれくらい前の話だ?どれだけ時間が  
経っているのか分からんが数千年経っているとすれば、言語が変わつていてもおかしく  
は無いな。昼寝のつもりが休眠になつてしまつていたかもしれないとは……ならば尚  
更こやつに色々と聞かねばならんな』

何かこいつは一人で勝手にうむうむ言いながら納得しているが俺はそれどころじゃ  
ない。間抜けな声しか出てこない。

「あ…………え…………?は…………?」

『おい、しつかり気を保て』

そう言つて顔で突いて来る。

いや、随分と優しいなこいつ。自分の鱗に杭を打ち込んでよじ登つていたんだぞ？それをこんな呑気にふむふむと頷いているとはどういう事なんだ一体。心が広いのか大らかなのか能天気なのか……

普通なら既にパクリと一息で行かれていてももうおかしくないのだが、と全く別の事を考えている。

『おい、大丈夫か？驚きすぎて死んでいるのではあるまいな？』

そして尚も俺の身体を顔で突くが俺は衝撃の余りに未だに声が出ない。この状況で俺よりも早く立ち直つて言葉を発せられる人間が居るのならばお目にかかりたい。

言っちゃなんだがそれなりに修羅場を潜り抜けて来た自信があるが流石にこれは無理だな。

暫く思考停止をしていたり急に思考が戻つて色々と考えたりを繰り返して暫くして正気を取り戻した俺は答えた。

「……あなたは、誰ですか？」

『んお？なんだ言葉が通じるのか。いやはや、良かった良かった。それで、私の正体だったな』

何思わず敬語になってしまいうような、威厳というか、どこか畏まった態度を取ってしまふ様な雰囲気纏っている目の前の存在。

何処か嬉しそうにそう言うのと、身体の向きを変えて俺をしつかりと見た。

『私はお前達人間やエルフ、ドワーフが言う古龍と言う存在だ』

「古龍……？いや、聞いたことも無いな……」

俺がぼそりと言うと彼？彼女？は首を傾げながら不思議そうに言った。

『古龍を知らないとな？ふーむ、それは随分とおかしな事だな。どれほどの秘境で育つたのだ、お主は？』

「いえ、私は人里離れた秘境の生まれでも育ちでもありません」

『ふーむ……そうすると私が眠りに着いて起きるまでの間が随分と長かったのか？存在が忘れられるほどの年月となると1000年単位という事になるかもしれぬな。ま、その辺は置いておこう。さて、最初の質問だ。お前は何者だ？』

「私は、イチローと申します。先程は鱗に杭を打ち込んで攀じ登ってしまい申し訳ありませんでした」

『イチロー、と言うのか。何、鱗の事は気にするでない。痛くも痒くもなかったしな。まあ私の上で何やらやっているのになので気になって起きたのだ。それで、人間のお前が何故此処にいるのだ？態々来るほどの場所でもあるまい』

鱗に杭を打ち込んだ事に関しては何となく怒っていないらしい。何というか、心が広い。見た目に反して随分と大らかと言うか心が広い、器が大きいって感じだな。

ここに居る理由を聞かれたので正直に答える。そもそも隠す様な事では無いし教えでも問題は無い。

「それは数か月前、この森が発端と思われる大きな異変が発生しました。ゴブリンの変異種が大軍を引き連れ森から現れ、私の住む町を目指して進行して来たり、この森に生息する魔物や魔獣の生息域が大きく変化したり、この森にあるエルフの村が魔獣や魔物から襲撃を受けたりと」

『ほう。そんな事があつたのか。確かに此処最近翼竜や飛竜、土竜やデカミミズを見なくなつたのはそのせいか。しかしこんな所に森なんぞ無かつたと思うのだがなあ……それにこの辺りに人間の国なんて無かつた筈だしエルフの村の存在も全く知らん。聞いた事も見た事も無いぞ』

おうマジか。

という事はだ。この古龍の言っている事を信じるとすればこの龍はエルフの一族がこの森に逃げ込むよりも前から生きて居てロンバルティア王国が建国されるよりも前から存在し、そもそもこの森が存在するよりも前から生きているという事か。

いやいやいや。あんた何歳なんだよ？

「おかしなことを聞きますが、貴方は何歳なのでしょうか……?」

『ん? 私か? そうさなあ……年齢なぞ数えた事が無いな。そもそも我ら古龍は他の生物からすると寿命が永遠とも取れる程に長いからな。一々数えているようなマメな古龍は居らんだろうさ』

スケールデカすぎだろ。一々年齢数えなくなるほどに長生きと言うのが驚愕過ぎる。余りにも凄すぎて返事をしようにも生返事しか出なかった。

それと性別も気になる。見た目は完全に雄と言う感じなのだが声は女性っぽいからな。

「はあ……あ、それと性別は?」

『おお、言っていないなかったか? 私は雌だ。そう言えば名前も教えて居なかったな。名はレギンと言う。意味は『命を司る者』だ』

「レギンさん、ですね。分かりました。それにしても名前に意味があるんですか。凄いですね」

『まあ我らは名前一つにかなり大きな意味がある者が多い。と言うのも自身の能力から名前を付けることが多い。私は『命を司る者』という意味の通り、私は周りに生命の伊吹を与える。もしかするとこの森の発生原因は私の影響かもしれぬな。まあ寝ていたから全く記憶が無いんだがな! ははははは!』

何というか本当に随分と陽気と言うか愉快的な古龍様だな。

しかし、『命を司る者』か。周りに命の伊吹を与えるってなんだそれは。出鱈目にも程があるだろう。神様か何かだぞそれは。

しかも寝てたら周りがオール大森林だった、多分私の影響だな！ってこんだけ広大なオール大森林が育まれるほど寝ていたってどれだけの年数を寝て過ごしていたんだ？

「凄いですね。命を司るなんて」

『だろっ？！』

うーん、やっぱり随分とフレンドリーだな。あと顔が近い。めっちゃめっちゃ近い。しかもこれからも話す気満々なのかしつかり足を折りたたんで顎を地面に着けている。

まあ、別に良いんだけどさ。

一連の異変の原因に繋がる何かが分かるかもしれないし、もしそれが手に入れば早期解決が望めるかもしれない。

あれから暫く話していたのだが少し思った事がある。

確証は無いから分からないがもしかするとだ。少し考えたんだがレギンさんが目覚めた事によってこの森に異変が起きたんじゃないのか？



いや、この説は有り得ない話では無いのだ。

何故ならこうやって目の前にして話していると分かるがとんでもなく存在感とかそういうのが半端じゃない。

魔物や魔獣と言うのは野生動物以上に野生の感と言うのが鋭い。だからこそこれ程の存在が目覚めて動き出したらそりや大慌てになるし、自身よりも遥かに強い存在がそこに居るのなら襲われないためにその場から出来るだけ離れようとするのも当たり前だ。

『ん？どうかしたか？おかしな顔をしおって』

「あー、いえ、その、今回の一連の騒動の大元の原因が何となく分かったような気がしまして」

『ほう？その原因とやらはなんだ？』

「その、とても言い辛いんですけどレギンさんの目覚めが影響しているかもしれないです」

『私か？』

「レギンさんつて、目覚めたの何時頃の話ですか？」

『うーむ……何時頃だったか……多分、恐らく、十中八九、1年程前の事だな』

「1年前か……そうすると合わないな。一番最初が数か月前だし、と言うよりもレギン

さんが此処に居るのなら元々翼竜や飛竜、土竜は住み着かない筈……」

変だな。先に言った通り、そもそもの話だが翼竜や飛竜、土竜だったらそれに感づいてこんな所に住みつかない筈なのだ。まあレギンさんの気配を消す技術が俺の想定している物以上だった場合これは覆ってしまうが、レギンさんの話を信じるとすれば丸々1年以上此処でウロウロしていたのに何故その時点で逃げ出さなかったのか、という点が気になる。

とすると他に何か原因がある、という事なのだが。

完全に当たりだと思っていただけにおかしいな。

いや、そもそもレギンさんの時間の感覚が俺達人間とは全然違うから本当かどうかは確証が無いが少なくとも嘘を言っているような感じではないから信じて大丈夫だろう。だってこれだけデカイ古龍と言う存在が必死になつて、

「あれ？何時目覚めたんだっけ？半年前？1年前？何時だっけな……」

と思ひ出そうとしているのだからこれで寧ろ信じるなと言う方が少しばかり無理がある。

「レギンさんの主食って何ですか？」

『私か？デカイミミズみたいな奴だな。あとは土竜が主食だ。あいつ等は動きも遅いし簡単に狩れる。他にも翼竜や飛竜も食えなくは無いが空を飛んでいるから仕留められ

ない。殆ど食わん。私は過去に何度か食った事があるだけだ」

「人間やエルフは襲つて食べないという事ですか？」

『その通りだな。食べた事は無いが聞いた話じゃお前達人間やエルフ、ドワーフと言うのは雑食性だから旨くないらしい。そんな風に聞かされている物を態々食べる訳が無いだろう。それにお前達は小さいから幾ら食つても腹は膨れ無さそうだしな』

そう言う事か。まあ何というかうん。何て言えば良いのか分からないな。まあ確かに味云々は置いておくとしても小さいからいくら食べても腹が膨れないと言うのも納得だ。一番の例えは米だな。あれ一粒じや腹が膨れないどころか食べようとは思われない。

しかしながら茶碗一杯の米ならば話は別だ。

例えとして合っているのか分からないが俺が出来る一番の例えはこれだ。他の穀物に変換しても問題は無いが麦はパンに加工しなければ早々食べないしな。

『暫く前はデカイミミズも沢山居たし飛竜や翼竜も多く居たから食事には困らなかつたんだが最近は見無くなつてしまった。元々我ら古龍は長期間眠っている事もあつて数年間ぐらいならば一切食事を摂らなくても大丈夫なのだが何というか、精神的に空腹だ。ここ暫くの間は水しか飲んでいない』

「ああ、だからあのオアシスの池の貯水量が減っていたのか……」

『そう言う事だ。そう言えば……お前の言った様に数か月前からおかしな気配を感じるようになってな。その辺りからだな、デカミミズや飛竜や翼竜が居なくなつたのは。生物の一切の気配を感じなくなつたのもこの頃だ。なんだか一斉に逃げ出したと言う感じがしたぞ』

「その気配の正体は分かりますか？」

『いや、正確な事は分からん。が恐らく私と同じ古龍の一種だと言う事なら分かるぞ』  
「その気配に何か感じる事は？ こう、良い奴だ、とか悪い奴だとか」

一度、そう聞いてみるとレギンさんはふむ、と一度頷いて目を閉じた。何やら探っているようだが気配を探っているのだろう。

『私は気配などを感じるのが特別得意という訳では無い。だからかなり抽象的な事しか言えないがそれでもかまわないか？』

「ええ、何でもいいので今は情報が欲しい」

『よし。まあ結果を言ってしまうれば此奴は黒だな。上手く隠しているようだが内側にどろどろとしたものを隠し持っている』

「それが一連の元凶だと考えても良いという事ですか？」

『分からん。だが奴は特に理由も無く周りの生物を殺して回る様な古龍だろう。自分で言うのも変だが古龍と言う存在は聡い。いや、野生に生きる生物と言うのは総じて賢

い。人間の様に楽しむ為に他の生物を殺しはしない。生きていく為に必要なだけ。食事、子孫を残す、縄張りを維持する、と言ったようにそれで十分だ。だが稀に居るのだ、そう言った感情を持つてしまう者が。滅多にある事では無いがな。どのような要因かは分からんがそう言った感情に快樂や楽しい、嬉しい、と言う感情を抱いてしまう者もいる。恐らく奴はその類であろう』

「それに対処する事は可能ですか？」

『難しいだろうな。いや、ハッキリ言つてしまえば無理だな。力関係で言えば私は奴よりも劣っている』

レギンさん程の存在が難しい、無理だと言うのであればそれは本当なんだろう。しかし実力行使が出来ないとするとどうすればいいんだ？交渉するか？いや交渉は無理だろうな。殺しに楽しみや快樂を感じる様な奴に話をして意味は無いだろう。

「何か解決するための方法はあるのでしょうか？」

『さてな……私は奴の様に戦いが得意でない。私からすれば奴は戦闘特化だな。私の様に命を司ると言うように何かしらの能力があるわけでは無いがその分、戦闘に関してだけ言えばアレは抜き抜けている。力で劣っている我らがアレを力でどうしようとするのは愚策であろう。力で勝とうとするのであれば同等の実力を持つている奴を連れてくるしかあるまい』

そう言うふう、と一息ついたレギンさんは器用に前足で頭をポリポリと掻いた。なんか妙に人間臭い仕草をするもんなんだな。

「取り敢えず、ソイツが居る凡その方向や位置は分かりますか？一旦調べてみたいのですが」

『分かるには分かる。だが辞めておいた方が得策だと思うがな。我々は敏感だ。特に殺しに喜びを感じる奴なら五感が鋭くなつていて通常よりもずっと遠くから気配を感じるだろう。下手に近付けば狙われて美味しく頂かれるだけだ。言っておくがもし空を飛べる奴だとしたらとてもじゃないが逃げきれんぞ』

調べてみようと思つたのだがレギンさんに止められた。

『どうやら余程五感やらそう言うのが鋭いらしい。どれほどの距離からバレるのか正確な事は分からないがレギンさんが言つて警戒するほどの物だとする』

それに飛行が可能だとすると飛行速度はかなり速いらしい。

『どれぐらいの速度で追いかけて来ますか？最高速度は？』

『そうだな……音の速さは分かるか？』

「ええ、まあ」

『あれと同じか、それ以上だな。飛行が出来るとしてもピンキリだが、私ほどやそれ以上の巨体を浮かして飛ばすのだ。最低音の速さは出ると思つていた方が良い』

音速か。

そんなに早い速度を出す事が出来るのか……

参ったな、それじゃ疾風で対抗出来ない。

速度面もだが武装もレギンさんの鱗を見た感じ、20 m 弾じゃ無理そうだな。

「あの、レギンさんの鱗の硬さってどれほどですか？あの登った時は杭が刺さるぐらいの硬さだったのでもしかすると結構柔らかい？それとレギンさんは飛べるんですか？」

『私の鱗の硬さは分からんなあ……そもそも比較対象が土竜くらいしか分からん。土竜以上の硬さと言うのは確実だ。杭が刺さると言うのは私は鱗の上から岩やら泥やらを纏っているからだな。こうすると色んな連中からバレなくて済む。飛べるか否かという質問に関しては飛べない。そもそも翼など無いしな。見た通り四足歩行で動きは鈍い方だ。それでも土竜やデカミミズを捕まえて仕留める事ぐらいは余裕だ』

聞いただけでも凄いな……

正直な所、今現在俺が携行出来る武器じゃ全く歯が立たないのは確かだ。最もレギンさん相手に喧嘩を売る気は更々無い。

万が一その、騒ぎの元凶？の古龍を相手にするとなると音速以上の速度が出せる乗り物で尚且つ8.8 cm 砲弾を易々と弾く土竜の鱗以上の硬さを持つ鱗を貫通出来る程に攻撃力が高い武装を搭載出来なければならぬ。

レシプロ戦闘機では歯が立たない。追い付かれてパクリ、と行かれて終わりだ。

間違い無くジェット戦闘機の色が必要になる。武装は……空対空ミサイルは駄目だな。

理由は近接信管を装備しているから。

近接信管と言うのはまあ簡単に言えば直撃しなくても爆発してその破片と爆風などで被害を与える為のものだ。

時限信管と違う点は、時限信管は設定した時間で信管が起動して爆発する。だから時限信管の調整を少しでも失敗すると全く予想しない場所で爆発する事になる。

それに比べ、近接信管と言うのは信管そのものがレーダー波を出していて予め設定されている距離に航空機が入ると爆発するという物だ。

聞いた限りではとても便利に聞こえるだろう。

所が実際のところそうではない。まあ確かに航空機相手なら有効だろう。だが装甲を持つ相手に対しては全くの無力になってしまふ。と言うのも近接信管は直撃して爆発するのではなく目標に近付いて一定の距離で爆発する。

これでは装甲目標、特に硬い物への攻撃は効果が無い。

そして今回目標とするのは硬い鱗を持つ古龍だ。

そんな相手、しかも下手な戦艦なんかよりもずっと硬いだろう。



それを考えると対艦ミサイルの方が有効かもだろう。

まあ貫徹力云々は置いておくとしてもそれなりに打撃が与えられるのはそれこそ戦艦の主砲クラスでも無ければ無理だ。いや、戦艦の主砲弾程度の貫通力では無理かもしれない。

鱗の硬さは最低、戦艦クラスの重装甲を想定しておいた方が良い。

確か戦艦大和の一番分厚い部分の装甲厚は主砲正面の防盾といわれる部分で650mm。

戦艦大和の装甲は大和自身の主砲弾を弾くぐらいらしい。こんな厚さと硬さを誇る装甲を貫通する為には46cm砲を超至近距離で直撃させるしかない。

だが考えてみて欲しい。

そんな主砲を単体で呼び出せるはずも無いし、呼び出すとすると大和本体を丸々呼び出さなければならぬ。「等価交換」の短所である運用する兵器はその運用に必要な人員が揃っていないければ呼び出せない。

大和の最大乗員は3333名と何処からそんな人数を連れてくればいいのか。どうやっても集められない。もし集められたとしてもそれら全員の各種訓練を施さなければならぬのだが、先ず前提として俺がそれらすべての扱いが出来るようになってそれを教えなければならぬ。

全ての各種訓練を全て同時に覚えられる訳もなく。

1つ1つをバラバラに習熟してそのたびに教えて完璧に使いこなせるまでになるまでだ。基本的に最低限習熟するまでに最低限3か月ほど掛かる。完璧にするとなると半年以上は掛かるだろうか？まあある程度こなせる様になったら任せても良いのだが事故が起こる事を想定するとまあ半年は拘束されると想定しよう。

……何年掛かるんだ？という話になる。無理だ。どれだけ役割や部署、科があると思っているんだ？それら全部を半年ずつだとしても1年で2部署だけだ。3か月だとしても4部署。いや本当に無理がある。

それにもし扱えるとしても砲弾を命中させられるか？と言う事だが音速で飛ぶ目標に命中なんて期待できない。それどころか逆に一瞬で全員が殺される未来しか見えな  
い。

そう言う訳で対艦ミサイルを大量に叩き込んで無理矢理仕留めるしかない。

まあ対艦ミサイルが鱗を貫通する事が出来ればの話だが。

『しかしながらイチローよ、どうしてそこまで解決しようとしているのだ？』

「先程お話しした通り、かなり危険が迫っています。自惚れている訳ではありませんが私達がゴブリンの大軍を仕留めていなければロンバルティア王国も、エルフの村も滅びて居た事でしょう。それどころかロンバルティア王国だけでは無く周辺国家もゴブリ

ンの大軍に吞まれてそれこそ二度と人間やエルフ、ドワーフその他の種族はそれこそ男は殺され女は只の苗床として扱われて居た筈です。エルフの村も縄張り関係が大きく変わったことで大打撃を受け、死者も数多く出ています。その元凶が分かっているそれをなんとかして止められるのだしたら私は手を尽くして止めたい」

『それは偽善か？それとも只の蛮勇か？自己満足か？誰かに押し付けられたのか？』

「分かりません。偽善なのか、蛮勇なのか。ですが少なくとも蛮勇では無いと思つています。勝算が無ければ戦いなんて挑みませんし、何より俺が死ぬことで悲しむ人が居るから何としてでも生きて帰らなければならない」

『ふむ』

「それに自己満足だ、と言いましたがその通りです。事実私がロンバルティア王国国王からは森の調査をせよ、との命を受けているだけなのですから態々その元凶に殴り掛かる必要は無いでしょう。押し付けられたとも仰いましたが依頼主と依頼を受ける者、私の事ですがその両者の同意の上で今回の事は進んでいます。他者から見てもこれは押し付けでは無いでしょう？」

『ならばその国王がお前を騙しているのかもしれないぞ？』

「それは無いでしょう。まあ自分の他人を見る目はどうかは分かりませんが少なくとも国王はその様な事をする方では無かったと、記憶していますから。それにもし騙されて

いたとしたら気が付かなかった自分のせい。しつかりとやり返してどこか秘境のような所でも探して引き籠りますから」

ここまで問答を繰り返してレギンさんは俺の顔を、いや眼をジツ……つと見詰めた。1分か2分かか。それとももつと長くなのかは分からない。どちらとも一言も発さずに、見続ける。俺はレギンさんの目の力に圧倒され、レギンさんは俺のナニかを計ろうとしているのだろう。

その間、この付近にはレギンさんと俺しか居らず2人の呼吸音しか聞こえなかった。

そしてレギンさんが暫くぶりと感じられるほどの時間の後、口を開いた。

『お前の思いはよく分かった。好きにすると良い。だが私は手伝うことは出来ん。私が共に挑んだところで足手纏いにしかならん。私は大人しくここで見守る事にする』

「構いません。元々これは私が言い出した事ですし、他者にそれを押し付け手伝って貰おうという考えは更々ありませんから」

『納得してくれるのなら構わん。しかしイチローよ、戦うとなつたらどうやってやるのだ？行っておくが剣や弓程度では傷一つ付ける事は敵わんぞ？それに飛ばれでもしたら風圧だけで吹き飛んで死ぬぞ』

「考えはあります。まあ鱗に傷を確実に傷を付けられるか、といわれると五分五分かそれ由も私の方が分が悪いぐらいの可能性はあります。空を飛ぶという問題に関しては一応解決の目途は立っています」

さつきも言ったが勝算が無い戦いに挑むつもりはない。

まあそれでも現時点では殆ど希望的観測に傾いている。

『そうなのか？ 私には到底そんな事が出来るとは思えんがな』

「確かに鱗をどうにかしないと内部に攻撃を加えられません。ですが可能性はありません。空を飛ぶ、速度が音よりも早いという点に関しては完全に掛けてしかありません」

鱗を貫通して内部にダメージを与えられるか、という質問に関しては正直な話、空対艦ミサイルの性能次第だ。幾ら破壊力があっても鱗を貫通出来なければ意味は無い。どちらに転ぶかは分からないが恐らくだがこの問題に関しては何とかなるんじゃないか、と思っている。

『……まさかお前も空を飛ぶなどと言い出すわけではあるまいな？』

「そのまさかですよ。ただ出せる速度にも上限がありますし、相手が俺よりも遅い速度である事に掛けるしかありません。機動性に関しては完全にこちらが負けていますから。速度で負けていたら振り切る事も出来ませんし」

問題はこっつちだ。

先ず前提として疾風で戦った翼竜はホバリングが可能で起動性能に関して言えば翼竜が圧倒的に上だった。勝っていたのは速度と攻撃力だがこの2つのどちらかが欠けていたら間違い無く今ここに俺は居ない。

そして元凶の古龍の話だが、未知数な点が多すぎる。

まず機動性に関して言えば古龍が上だろう。翼竜以上の機動性があると見て間違いない。それにレギンさんと同等、もしくはそれ以上の知性があるとすればより厄介だ。

頼みの綱は速度だが、音速飛行できる戦闘機、例を挙げるならばF-35『ライトニング』、F-22『ラプター』があるがこの2機種に空対艦ミサイルを何発も積んで高機動戦闘を行えるかどうかには疑問がある。

速度だけ見ればSR-71『ブラックバード』がマツハ3.2を發揮できるが戦闘機が行うような機動は確実に無理だろう。

求められるのは最高速度が音速を超えていて、尚且つ多数の空対艦ミサイルを搭載可能、更に万が一の時に戦闘機動もこなせるという三要素がなければならぬ。

まあこれは後々考える事にしよう。今考えたらキリが無い。

レギンさんは俺の話聞いてとても驚いている。

『なんと?!人間の扱う魔法はそこまで進化したのか……いやはやこれは本当に寝すぎた

かもしれん』

「いえ、人間全員が使える訳ではありませんし、魔法でもありません。もしかすると訓練すれば使えるようになるかもしれませんが現状、それを扱えるのは私だけです」

『ふーむ。固有魔法の持ち主か、はたまたそれに準ずる能力の持ち主か。まさか進化した鳥人間ではあるまい』

鳥人間？……ああ、ハーピイの事か？彼らは飛べるそうだからまあ名前が出て来てもおかしくは無いか。

ハーピイ、翼人族はロンバルティア王国にも少なからず住んでいるらしいが基本は山岳地帯などの高地に住んでいるから滅多に見ることは無いらしい。俺も見た事が無い。

どこかで聞いた話ではイリオル大山脈の尾根付近のどこかに住んでいるらしい。

それからレギンさんに色々と質問されながらこちらも質問をしたりした。

「レギンさん、以前、とつても数日前なのですがこの裂け目の底に降りる前に生物が発する熱を感じる事の出来る道具を使いました。勿論何処にも生物はいない。なのにレギンさんは居た。確かにレギンさんを見ましたがどうしてかその時に反応が無かったです。もし宜しければ理由を教えてください」

『ふむ、それは恐らく私の張った結界によるものだな』

「結界？それはなんですか？」

『まあ結界にも多数の種類があるが基本は魔法に分類される。その時に私が張った結界は気配を消す結界と熱を遮断する結界だ。と言うのも翼竜に始まり飛竜、土竜と言った竜種は基本的にだが目が悪い代わりに熱を感じ取って獲物を探したり危険から逃げたりする。その点古龍は他の生物よりも体温が高い。だからそのまま駄々洩れにしておくと狩りが出来んのだ。だからだな』

あれか？要は蛇や蜥蜴と同じ感じだろうか？

で、レギンさんは獲物に感づかれない様に自身を結界で隠したという事か。

「でも獲物は一匹もいないですよ？」

『いやな？もしかすると馬鹿な奴が来ないか、と黙っていても。ああ、言っておくがお前を食べる気は更々無いぞ』

「分かってますよ」

サーモグラフィに映らなかつた理由が分かった。

こうして色々話をした。実に一週間ぶりに誰かと会話したので俺も随分と話してしまつた。

まあレギンさんは誰かと話すのは下手をすると数千年ぶりとか言っていた。



改めてスケールの違いを思い知った。

あとはレギンさん、妙に人間臭いというか何とか言うか。

初対面の俺にやたらとフレンドリーな気もしたがどうやら先ほど言ったように久しぶりに誰かと話せて嬉しかったらしい。だからついつい長話になってしまったんだそう。

結局俺達は日が落ちてからも話続け、結局就寝したのは日を跨いでからだった。

明日は本格的に元凶である古龍の討伐に向けて色々と考えなければならぬ。出来れば討伐と言う手段以外で解決することが望ましいがそれでも準備を進めなければならぬ。

そう言えば昨夜の視線の正体はレギンさんだったのか、と聞くのを忘れていた。まあどちらにしろ今気にする様な事では無いから別に構わないのだから。